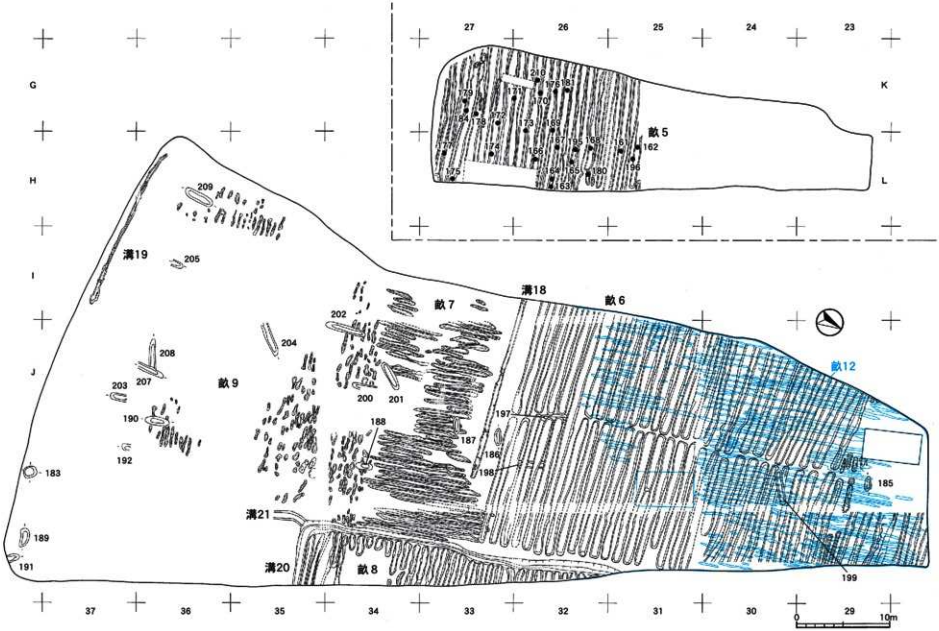


第123図　中央部　古代～近世　遺構配置図(3)

第４節　出土土器

中央部の出土遺物点数は，狩俣遺跡全体の約３割にあたる1,878個であり，南部調査区の次に多い。しかし，南部には縄文時代の出土遺物がほとんどなく，古代遺物の小破片が含まれることから，縄文時代に関しては本遺跡の中心となっている。

全域が現在畑地として使われていたことから，上部の削平やボラ抜き，大規模な天地返しなどの耕地整理が行われ，大部分が表土（耕作土）直下に　層が堆積している状態であった。大規模な天地返しは概ね　ｂ層まで達し，縄文時代前期までの遺物包含層は消失している状態であった。縄文時代早期の遺物包含層である　，　層は良好に残されており，土器や石器が中央部調査区のほぼ全域で出土している。

出土遺物は，縄文時代早期と晩期が主体で前期・後期の土器もわずかにみられた。中央部の南側では，削平を受けずに　～　層が残っている部分も多く，古代の遺物も多く出土した。

その他に古墳時代，中世，近世の遺物も少量であるが出土している。

１　縄文時代（第124～144図183～475）

縄文時代の土器は，本遺跡で分類した17類中16類が出土している。

⑴　縄文時代早期（第124～134図183～353）

縄文時代早期の土器は，　～Ⅻ類が出土した。

Ⅰ類土器（第124～127図183～263）

183～263は　類土器で，全て円筒形を呈している。　ａ類（183～227）と　ｂ類（228～252）に細分できる。

ａ類は総じて，口縁部外面を貝腹縁あるいはヘラ状工具で連続して刻み，端部は波状を呈しながら尖り気味に立ち上がり，189のように押圧する例もある。

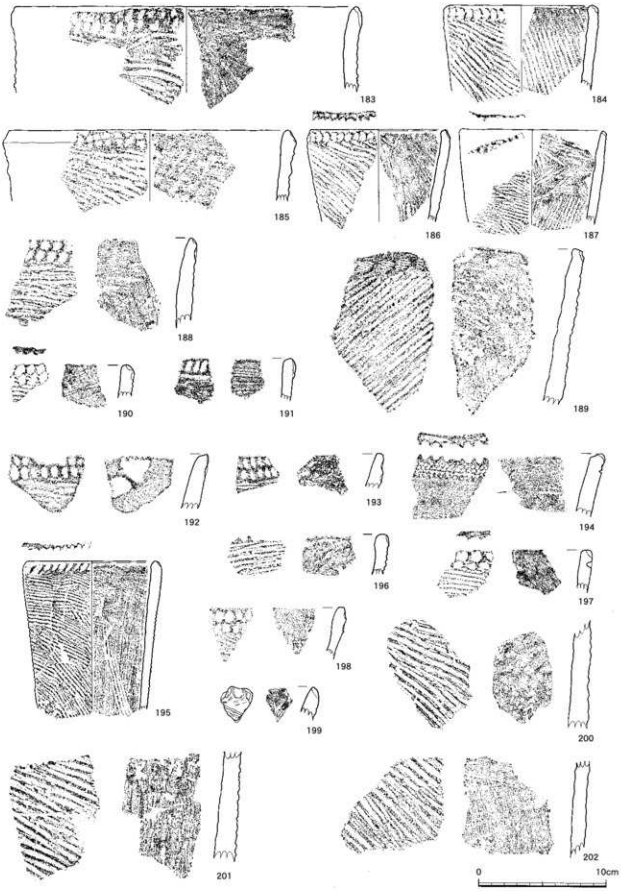
183の復元口径は27.0㎝で，口縁端部はヘラ状工具で上下２段に刻まれ，胴部は粗い条痕に仕上げている。なお188も同様な特徴が認められる。

184～187は貝殻腹縁で刻まれ，184で11.4㎝，185で22.0㎝，186で10.8㎝，187で11.2㎝の口径が復元できる。189は二枚貝の殻頂部を浅く連続して押圧している。なお，他の土器の器面調整が右下がりの条痕仕上げであるのに対し，本例は左下がり仕上げの個性が抽出できる。

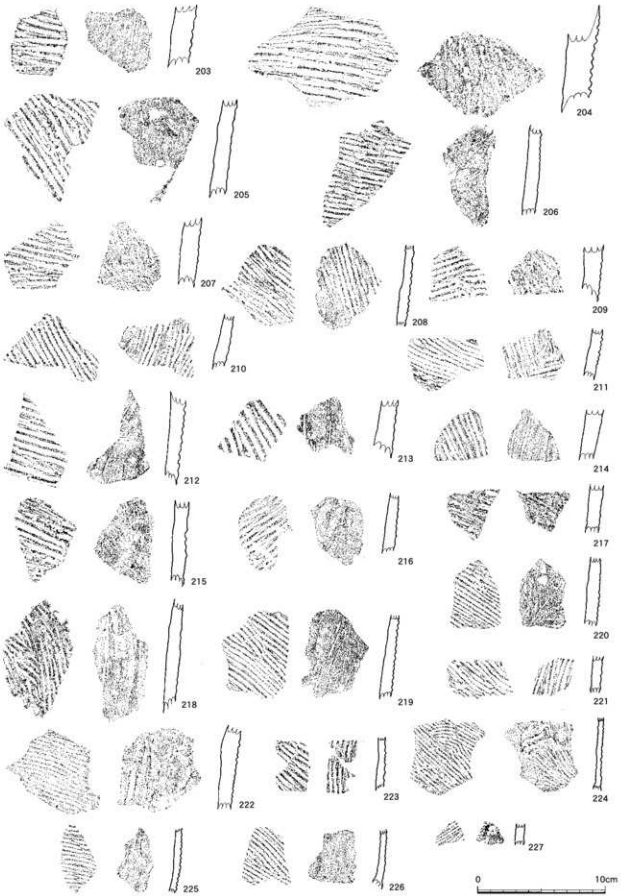
190は貝殻腹縁による二段の刺突文を平行に交互に面しながら，191～193，195，196ではヘラ状工具を用いている。194は口縁端部（口唇部外面）をヘラ状工具で深く刻み，その直下に横位の貝殻腹縁刺突文を３列施し，器面は丁寧にナデで仕上げている。195の復元口径は10.2㎝で，器面は筋間の小さい貝殻による条痕仕上げが見られる。胴部200～227は条痕仕上げで，内面は条痕仕上げとヘラ削りが拮抗する。

ｂ類は，口縁部外面をヘラ状工具で連続して刻み（刺突文），基本的に口唇部は平坦を形成し，228，231等ではその平坦面が浅く刻まれる。また，器面は横位の条痕仕上げが一般的となる。復元口縁は228で径17.0㎝，229で12.6㎝，230で11.6㎝，231で10.4㎝。228では特徴的な沈線文が見られる。なお，229，230，232では，刺突文の下位に平行する貝殻腹縁刺突文が施される。233～252の胴部はいずれも横位の貝殻条痕で仕上げている。

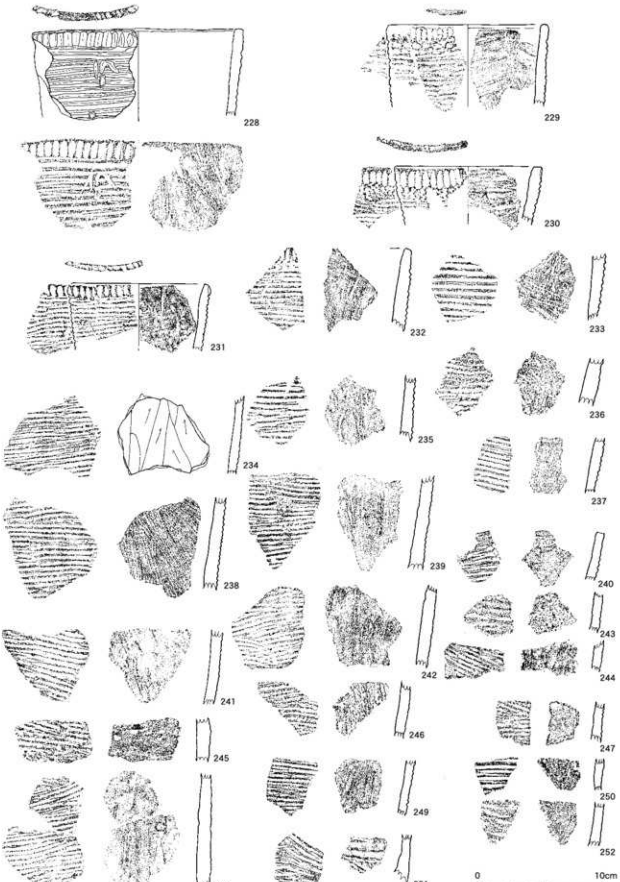
255～263は　類土器の底部であるが，ａ類とｂ類の区分は困難である。255，259の接地面は薄く，



第124図　中央部　縄文時代早期の土器（Ⅰａ類①）



第125図　中央部　縄文時代早期の土器（Ⅰａ類②）



第126図　中央部　縄文時代早期の土器（Ｉｂ類）

257，258では厚い。258では内外面全てを条痕で仕上げ，259では内面はナデ，外面は条痕で仕上げている。

256，257の内面は指頭ナデで仕上げ，256には穿孔が施される。

Ⅱ類土器（第128図264〜271）

264〜271が　類土器で，角筒形土器を一括している。

264，265は山形を呈する角筒の頂部で，口縁部外面に縦位の貝殻腹縁刺突文を規則的に施し，胴部は横位の条痕地文上に斜位の沈線文及び貝殻刺突文が施される。

267は角筒形土器の接合部の頂部に貝殻刺突文，268，269は波状沈線文が界線状に施文される。

Ⅲ類土器（第128図272）

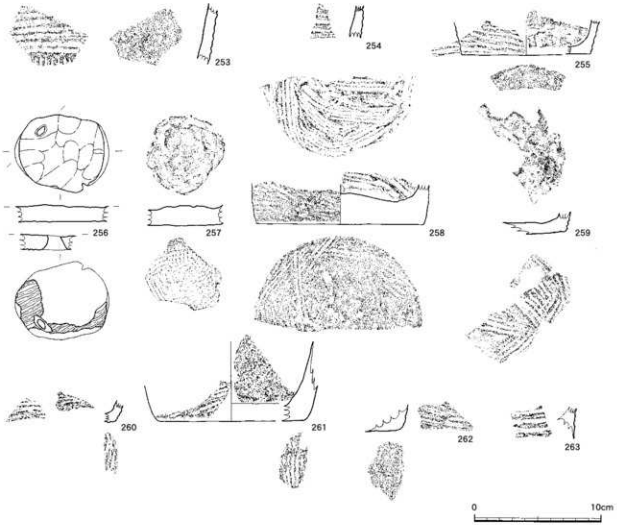
272の1点だけである。胴部に連続する貝殻刺突文を施すものである。

Ⅳ類土器（第128図273，274）

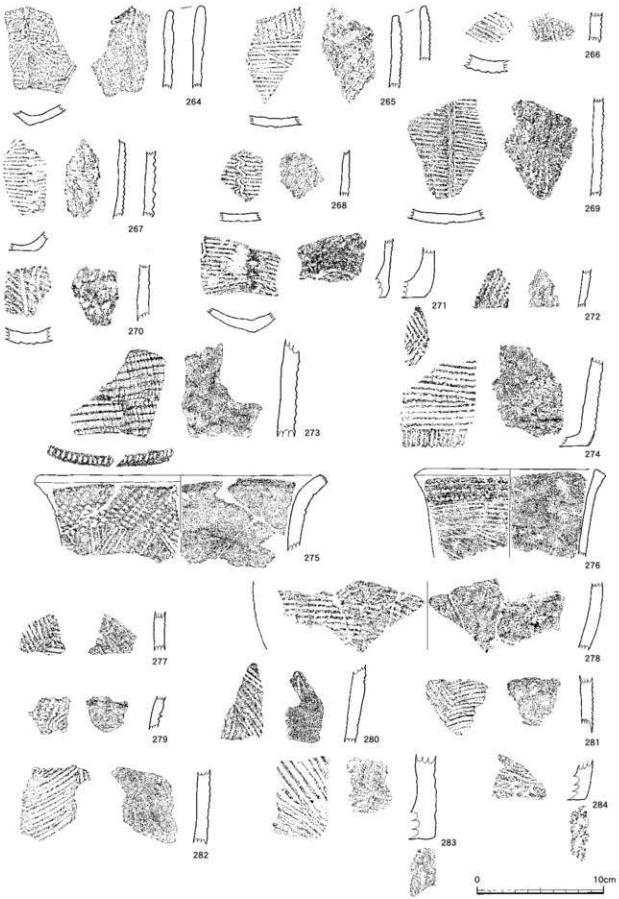
273と274の2点である。いずれも胴部に横位の貝殻押引文を施す。274は底部で下位に縦位の沈線文を施す。

Ⅴ類土器（第128図275〜284）

275〜284は　類土器である。275は復元口縁径23 2㎝を測る。口縁部は外反し口唇部には刻目が



第127図　中央部　縄文時代早期の土器（Ⅰ類）



第128図　中央部　縄文時代早期の土期（Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ，Ⅴ類）

見られる。口縁部には斜位の貝殻刺突文，胴部には綾杉状の貝殻条痕文を施す。

276は口縁部の外反が弱いものである。口縁部には横位の貝殻刺突文，胴部には上位は横位，その下は斜位の貝殻条痕文を施す。

277は口縁部に近い部位で斜位の貝殻刺突文を施す。278は横位の貝殻条痕文，279～282は綾杉状の貝殻条痕文を施す。

283，284は底部で，いずれも斜位の貝殻条痕文を施すものである。

Ⅵ類土器（第129図285～302）

285～302が該当する。　類土器の最大の特徴は器壁が厚く，口縁部上位が内弯する形状で且つ，口唇部が平坦面を形成し，底部も分厚く頑丈に作られていることである。口縁部形状の特徴は285，286で，口唇部の特徴は285，287で，底部は302等で見ることができる。

285の復元口径は22.2㎝で，口縁部下位から胴部上位に3列の貝殻刺突文を，それらの下位には縦位の貝殻腹縁刺突文を横方向に連続して施し，押し引き文様に施文される。

286の胴部には，貝殻腹縁刺突文を横位に移動しながら鋸歯状の刺突文を構成している。

287は鋸歯状を重ね綾杉文を，298もそれに類している。292～300の胴部には横及び斜位の貝殻腹縁刺突文が直線的に施される。

Ⅶ類土器（第129図303～305）

303～305は　類土器である。

303は口縁部で横位の貝殻条痕文が施されている。305は横位及び縦位の貝殻条痕文が施される。

Ⅷ類土器（第129図306）

306の1点のみである。細かいヘラ状工具による斜格子状の文様が施される。底部近くであるが，型式の判明しないものである。

Ⅸ類土器（第130，131図307～338）

307～338は　類土器である。

307～326の押型文を施す　a類と，327～338の押型文と貝殻条痕文の2種類の文様を施す　b類に分けられる。

307は内弯する口縁部で山形押型文を施す。308，309は口縁部が外反するもので，内面に山形押型文を施すが，外面はナデ調整である。

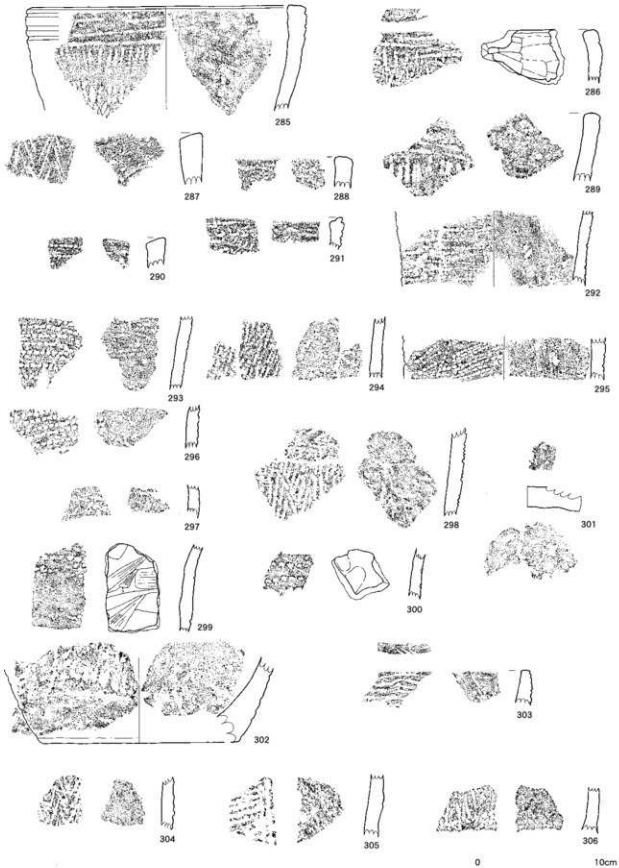
310～314は外面に山形押型文を施す。315～323は外面に楕円押型文を施すものであるが，315，316，320は細い楕円押型文で，317～319，321，323は大きめの楕円押型文である。

324～326はいわゆる「イチゴ」と呼ばれる押型文土器である，松の木等のような突起物を持つ枝を回転施文したものと考えられている。

327～338は同一個体と思われるものである。口縁部はあまり外反せず，胴部も膨らまない器形で，底部は平底である。口縁部から胴部中位までは貝殻条痕文，中位から底部までは山形押型文と2種類の文様を施す特異なものである。底部は網代底である。

Ⅹ類土器（第132～134図339，340）

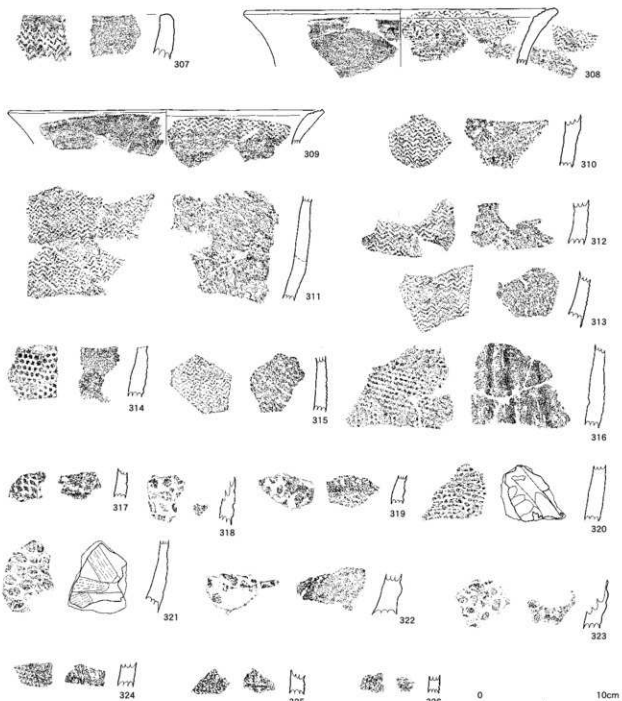
339は　類土器である。底部径4.8㎝，口縁部径22.6㎝，器高21.0㎝を測る。底部はやや小さく，わずかに上げ底を呈する。胴部は膨らみ頸部でしまり，口縁部は大きく外反する。外面には縄文が



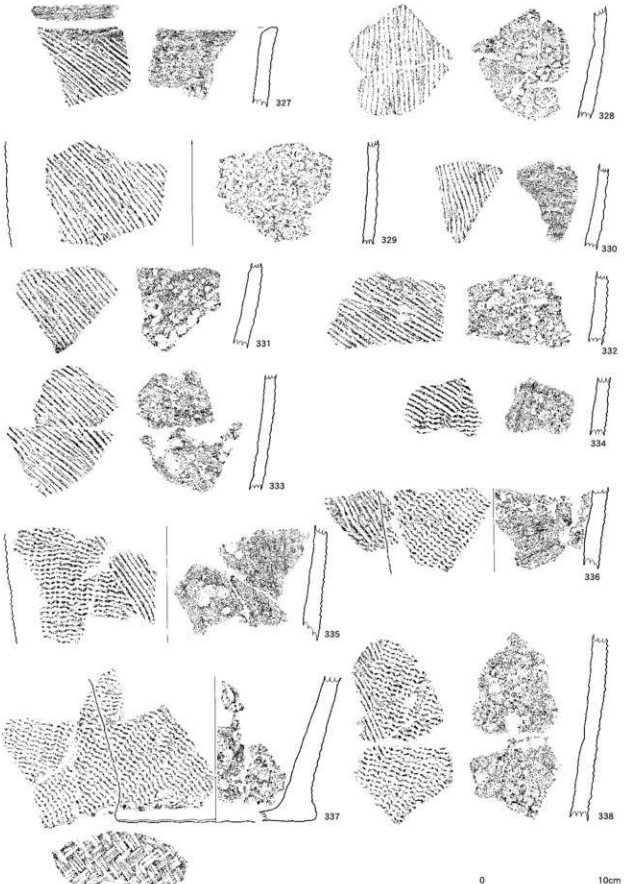
第129図　中央部　縄文時代早期の土器（Ⅵ，Ⅶ，Ⅷ類）

施文され，縄文はＲＬの原体を棒に巻きつけてから，回転施文したものと考えられる。
頸部から口縁部にかけては縦位の縄文を施した後，幅１㎝の磨消を1.6㎝間隔に施してある。胴部は横位，下部は縦位に施文した後ナデ調整が行われているが，明瞭ではない。また，口唇部にも縄文が施され，上面観は楕円形を呈する。

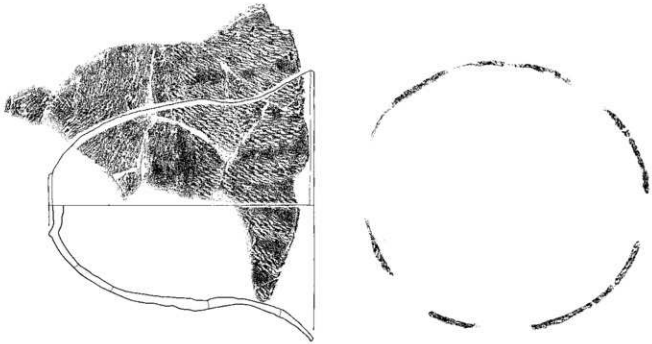
340はわずかに外反する口縁部で，外面には縦位，内面には横位の貝殻条痕文が施される。

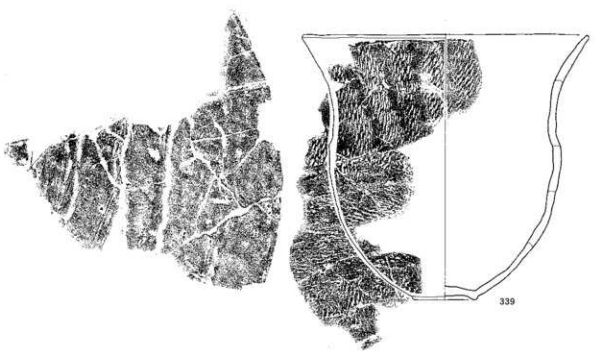


第130図　中央部　縄文時代早期の土器（Ⅸａ類）

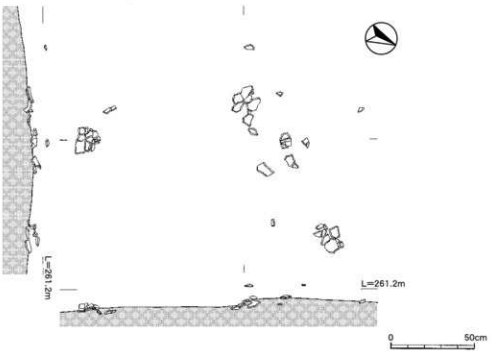


第131図　中央部　縄文時代早期の土器（Ⅸｂ類）





第132図　中央部　縄文時代早期の土器（X類）



第133図　中央部　縄文土器出土状況図（Ⅹ類，No.339）

Ⅺ類土器（第134図341，342）

341，342の２点が該当する。

341は頸部屈曲部から口縁部へかけての資料で，外反しながらそのまま口縁部へ直線的に続くと思われる。屈曲部に断面三角形の刻目突帯を１条巡らし上位には短沈線文と連点刺突文が見られる。

342はいわゆる口縁部片で，341の上位に相当すると思われる。器面は内外面共に丁寧にナデた後に，施文が認められる。

Ⅻ類土器（第134図343～348）

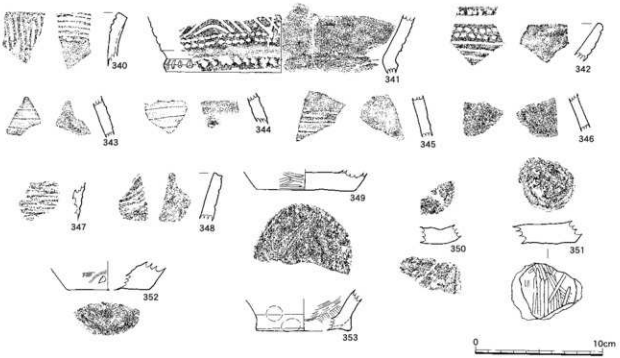
343～348を一括したが，347と348については疑問も残す。

343～346は壺型土器の可能性が高く，特に343と344の２点は直線的に内傾する頸部と思われ，刻目を有する微隆起線文が確認できる。なお，347では浅い貝殻条痕，348の口縁部資料には撚糸文が確認できる。

349～353はⅪ類ないしはⅫ類土器の底部と思われる。

⑵　縄文時代前期（第135図354，355）

縄文時代前期の土器は　類が出土し，　類は確認されなかった。



第134図　中央部　縄文時代早期の土器（X，XI，XII類）

XIII類土器（第135図354，355）

354，355の２点が　類土器である。

354は胴部にみみず腫状の突帯を巡らし胴部内外面は貝殻条痕による調整が施される。

355は内外面にも貝殻条痕が施されるもので，口唇部に刻目が見られる。

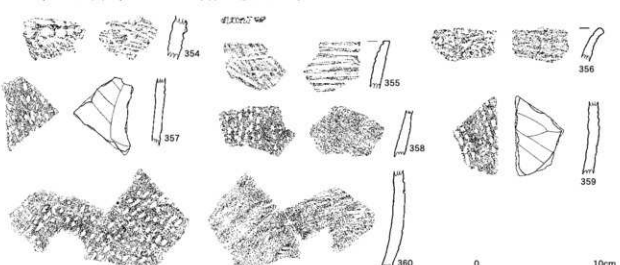
⑶　縄文時代後期（第135，136図356〜375）

縄文時代後期の土器は，　，　類が出土した。

XV類土器（第135図356〜360）

356〜360は　類土器で，胴部に貝殻復縁によるものと思われる連点文が施されるものである。

356，360は縦位，357〜359は斜位に施される。



第135図　中央部　縄文時代前期，後期の土器（XIII，XV類）

Ⅻ類土器（第136図361～375）

361～375は　類土器である。沈線文を主体とするもので，やや太めの沈線文を施すもの（361～364）と細目の沈線文を施すもの（365～373）に分けられる。365は山形を呈する口縁部であるが内面にも沈線文が施される。374，375は胴部で貝殻条痕のみ観察される。

⑷　縄文時代晩期（第137～144図376～475）

縄文時代晩期の土器は，376～475を一括して　類である。

この　類土器は深鉢形土器（　類Ａ），浅鉢形土器（　類Ｂ），鉢形土器（　類Ｃ）の３器種に区分できる。また，深鉢形土器は口縁部の刻目突帯の有無により　類Ａ－ａ（刻目突帯無し），　類Ａ－ｂ（刻目突帯有り）に細分している。鉢形土器も底部（接地面）の違いから　類Ｃ－ａ（ヘラ削りないしはナデ仕上げ），　類Ｃ－ｂ（編布を圧痕する），　類Ｃ－ｃ（網目を圧痕する）に細分して表示した。

ⅩⅢ類Ａ－ａ土器（第137図376～395）

376～395が該当し，器面調整は条痕仕上げが一般的となる。

口縁部資料が少ないことから細分には課題も残るが，376は無刻目突帯を口縁部直下に１条巡らしている。

378は口唇部に径１㎜程度の刺突文と同一施文具によると思われる沈線文を施すものである。

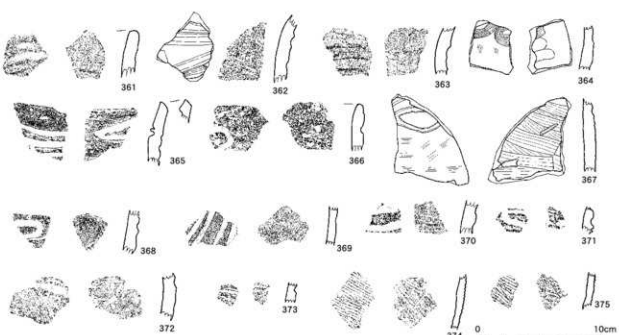
379は屈曲の状況から肩部，380～392は胴部で，382，385，387～392は胴部の屈曲部に相当する。

底部は393～395で，395の径は11．2㎝でいわゆる円盤貼り付け手法が認められる。388，391の２点については，最考の必要もある。

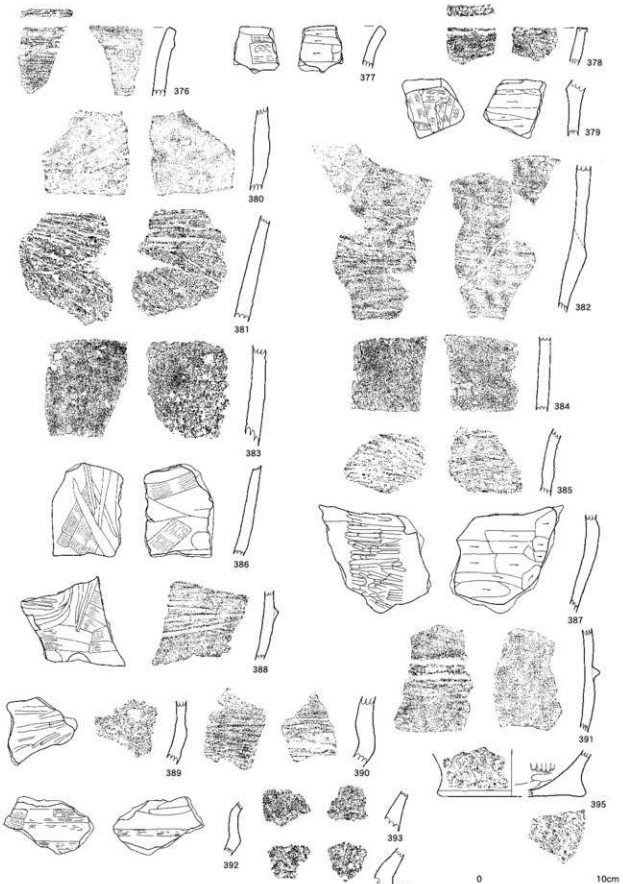
ⅩⅢ類Ａ－ｂ土器（第138図396～407）

396～407を一括して取り扱った。

396の復元口径は21．6㎝で，口縁部直下と胴部上位に断面三角形の突帯を１条貼り付けている。



第136図　中央部　縄文時代後期の土器（ⅩⅡ類）



第137図　中央部　縄文時代晩期の土器（XⅢA－a類）

口縁部突帯の直下に両面方向から穿孔を試みているが，貫通していない。

398の復元口縁は31.2㎝で，内外面の条痕仕上げは顕著である。口唇部外面，突帯ともにヘラ状工具で刻まれる。

399～405は口縁部もしくは口縁部直下に刻目突帯を廻らすものである。402は口縁部に刻目を施すものである。

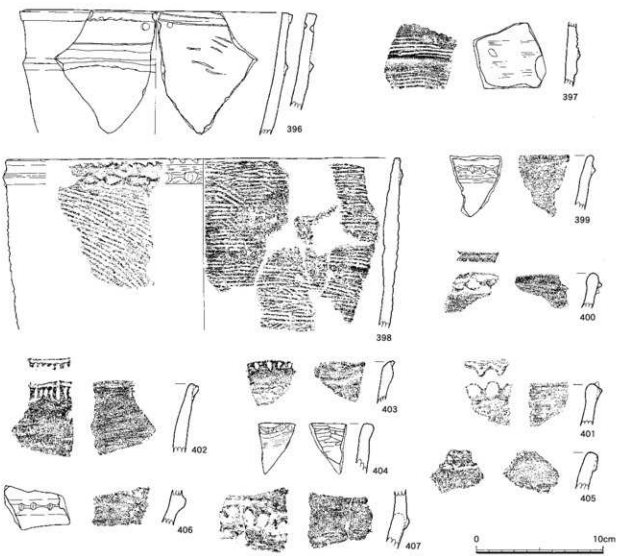
405は刻目を有しない突帯である。406，407は胴部の屈曲部に刻目突帯を廻らすものである。

Ⅻ類B土器（第139図408～410）

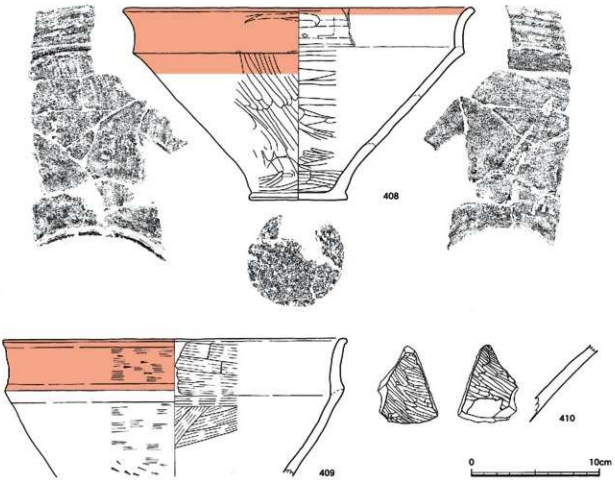
408～410の3点が該当する。

408の復元口径は28.0㎝，底部径7.6㎝，器高15.2㎝である。底部は安定した円盤状の貼り付け手法が見られ，底部から頸部の屈曲面までは外に開きながら直線的に立ち上がり，くの字状に明瞭に屈曲し口縁部に至る。器面は丁寧にヘラで磨かれ，口縁部の一部には赤色顔料の塗布された痕跡が残る。

409の復元口径は27.4㎝で，内外面の調整はヘラや工具によるナデ調整と408とは異なるが，全体



第138図　中央部　縄文時代晩期の土器（ⅩⅡA－b類）



第139図　中央部　縄文時代晩期の土器（XⅦB類）

的形状は類似するといえる。また，口縁部付近には赤色顔料の塗布の痕跡も確認できる。

XⅦ類C－a土器（第140～142図411～450）

411～450が該当する。C－b類が編布，C－c類が網目を圧痕するのに対し，圧痕の痕跡が認められないものを一括して取り扱っている。

411は44.2㎝の口径が復元できる大型の鉢で，洗面器状の形状を呈している。底部（接地面）は平底と見られる。外面はヘラや工具でナデて仕上げているが，内面は工具等でナデた後ナデ調整を重ね，水漏れ防止を図っている。

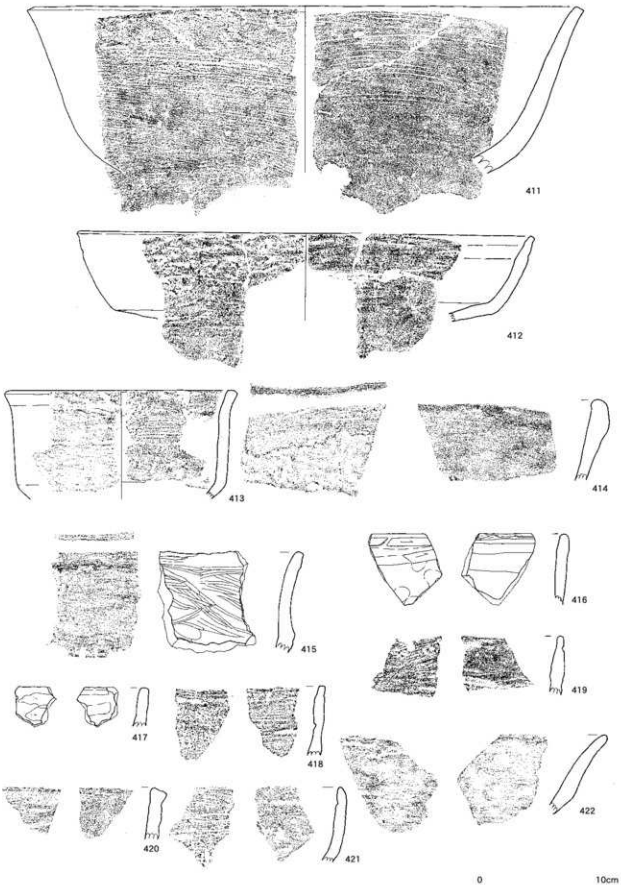
412の復元口径は36.2㎝で，器高は浅く，底部はヘラ削りで仕上げている。内面の仕上げは，411と同一である。

413の復元口径は18.4㎝で，底部上位からほぼ垂直に立ち上がる。

414は口縁部が肥厚する。415は口縁部が外反する。416～420は口縁部が直行するものである。421は口縁部がわずかに内弯する。422は口縁部が外反する。

423～450は胴部及び底部である。

442～450は底部である。底部がやや丸みを帯びるもの（444～446）と平坦なもの（442，443，447，450）に分けられる。444の底部にはわずかではあるが組織痕の痕跡が認められる。



第140図　中央部　縄文時代晩期の土器（Ⅷ C － a 類①）

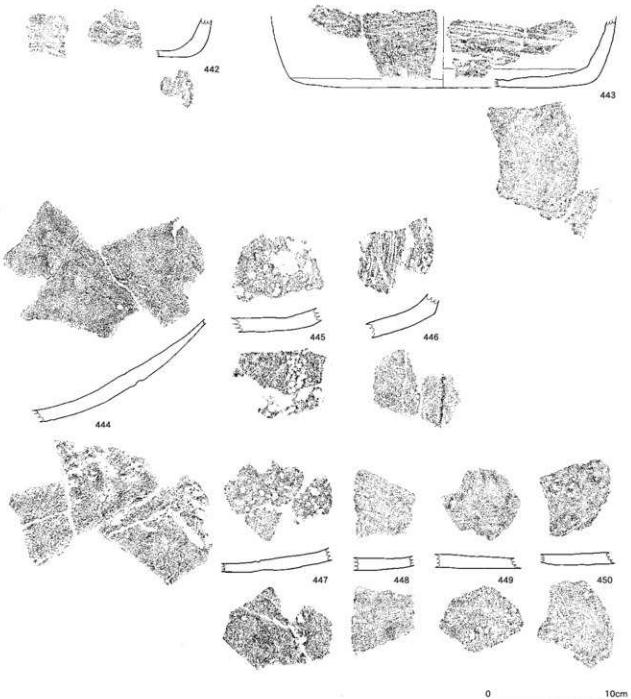
第141図　中央部　縄文時代晩期の土器（XⅢC－a類②）

Ⅻ類Ｃ－ｂ土器（第143図451～467）

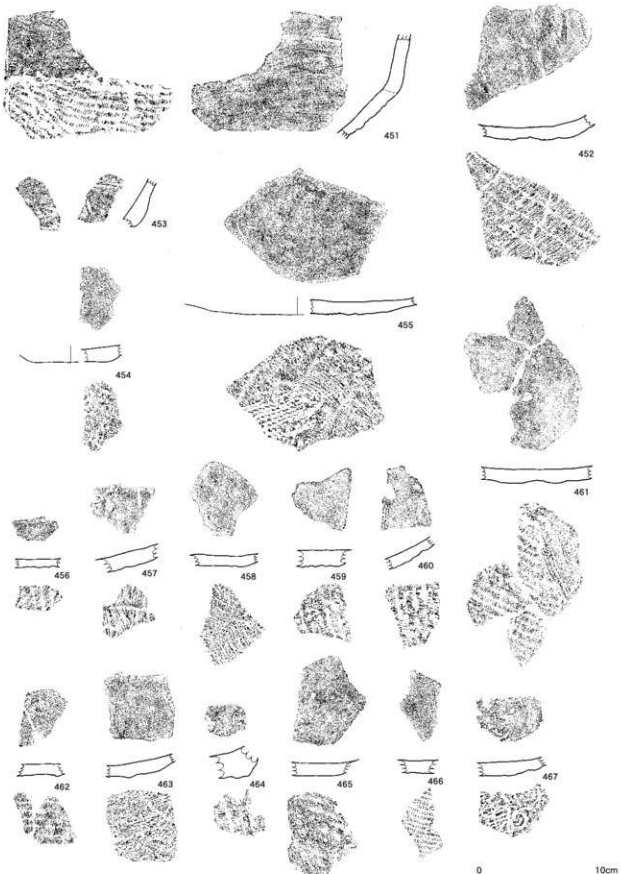
接地面に編布を圧痕した底部片，451～467を一括して取り扱っている。なお，口縁部まで観察できる資料が残されていないことから，先の　類Ｃ－ａ土器が本類の上部形状に該当すると判断する。

451は胴部下位の屈曲部から接地面に，経糸間隔0 5㎝，緯糸は１㎝幅に７本で構成する編布が残される。

452は経糸間隔1 5㎝，緯糸は１㎝幅に７本，273は経糸間隔3 .7㎝，緯糸は１㎝に７本の編布に網



第142図　中央部　縄文時代晩期の土器（ⅩⅢＣ－ａ類③）



第143図　中央部　縄文時代晩期の土器（XⅡC－b類）

目圧痕が重なる。

456は経糸間隔0.7㎝，緯糸は1㎝幅に8本，457，458は経糸間隔は不明，緯糸は1㎝幅に7本，459は経糸間隔0.6㎝，緯糸は1㎝に7本，460は経糸間隔が0.7㎝，緯糸は1㎝幅に7本，462は不明瞭であるが経糸間隔が0.7㎝，緯糸は1㎝幅に8本，463は経糸間隔4㎝，緯糸は1㎝幅に8本，464は経糸間隔が0.9㎝，緯糸は1㎝幅に9本，466は経糸間隔0.3㎝，緯糸は1㎝幅に7本，467は経糸間隔1㎝，緯糸は1㎝幅に4本と太い。一方，内面調整は入念に行われている。

Ⅻ類C－c土器（第144図468～474）

接地面に網目を圧痕した底部片468～474を一括して取り扱っている。なお，C－b類同様先の類C－a土器が本類の上部形状に該当すると判断する。

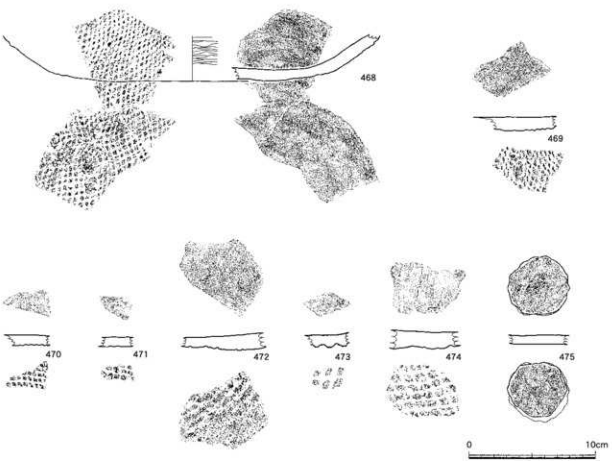
468～470は同一個体の可能性が高いもので，長さ0.7㎝，幅0.3㎝の網目圧痕が残される。

472は長さ1㎝，幅0.5㎝，291は長さ1.1㎝，幅0.8㎝の明瞭な圧痕が観察できる。

474は長さ1㎝，幅0.8㎝で，いずれの資料も内面はヘラ状工具で入念に磨かれ，いわゆる半粗半精製土器である。

円盤形土製加工品（第144図475）

475は土器片を円盤状に打ち欠いたもので，メンコ形土製品とも呼称されるものである。径4.7㎝のほぼ円形を呈しているが周縁部の打ち欠きは荒いものである。文様等が無く時期の判定に迷うものであるが，胎土・焼成から縄文時代晩期と捉えられよう。



第144図　中央部　縄文時代晩期の土器（ⅩⅡC－c類）

2　古墳時代（第145図476～484）

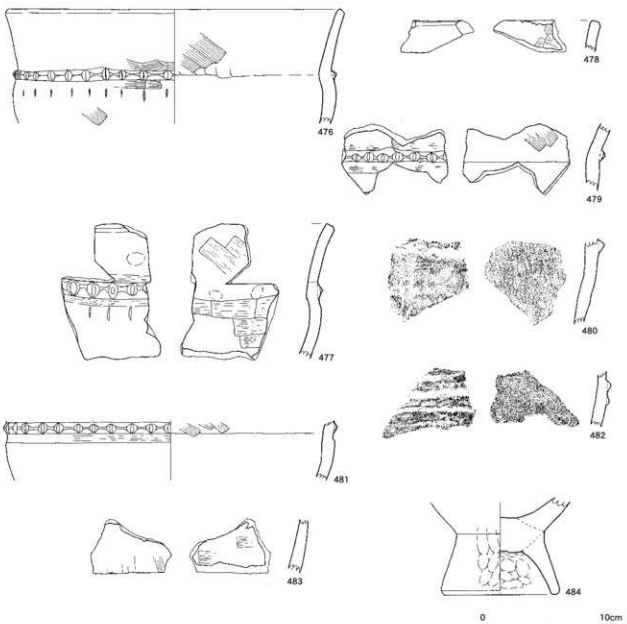
476～484は古墳時代の土器で，いずれも甕傾土器である。

476は，復元口縁径26.8㎝を測る。胴部はわずかに張り口縁部は外反するものである。頸部には刻目突帯を巡らし，内外面共にハケ目が認められる。

477も476と同様の器形である。刻目突帯の刻目が胴部に及んでいるが突帯直下は横ナデにより消されている。内面は工具ナデである。

479～482は，刻目突帯を巡らす胴部である。481は，復元頸部径13.0㎝を測る。482は，2条の突帯を巡らす。

484は底部である。底部径9.0㎝を測るもので中空の脚台である。指頭圧痕が認められる。



第145図　中央部　古墳時代の土器

3　古代

古代の遺物は遺物包含層である　層から主に出土しており，一部のものは下部の　層においても認められた。出土した遺物は土師器，須恵器，焼塩土器，土製品として紡錘車があげられる。

⑴　土師器（第146〜150図485〜574）

坏（第146図485〜499）出土した坏は，口縁部や体部の形状により以下のように分類できる。

類　体部が底部から直線的に開くもので，口縁部が直線的なものと外反するものに分かれる。

類　体部が底部からやや丸みを持ちながら立ち上がるもので，口縁部が直線的なものと外反するものに分かれる。

Ⅰ類（第146図485〜489）

485〜489は体部が直線的に開くものである。489はやや上げ底気味の底部をもつ。

Ⅱ類（第146図490〜499）

490〜499は体部がやや丸みを持ちながら立ち上がるものである。490は体部外面にロクロ目が凹凸となって残るが，内面はきれいにナデ消されている。493は底部から立ち上がる外面にロクロ目が筋状に残る。497は上げ底気味の底部をもち，ヘラ切りによる切り離し痕が残る。

皿（第146図500）

500は小皿である。口径は7.3㎝で，器高は2㎝に満たない。体部は底部から直線的に立ち上がり，口縁部の断面は鋭角な三角形を呈する。

椀（第146図501，502）出土した椀は，以下のように分類できる。

類　直線的に開く体部をもち，底面径が約10㎝程度の大きめのもので，短い高台が直立するもの（　－ａ類），高台が外側へ開くもの（　－ｂ類），高台欠損後再利用しているもの（　－ｃ類）に分けられる。

類　直線的に開く体部をもち，底面径が約７㎝程度のもので，短い高台が直立するもの（　－ａ類），高台が外側へ開くもの（　－ｂ類），高台欠損後再利用しているもの（　－ｃ類）に分けられる。

類　体部が底部からやや丸みを持ちながら立ち上がるもの。

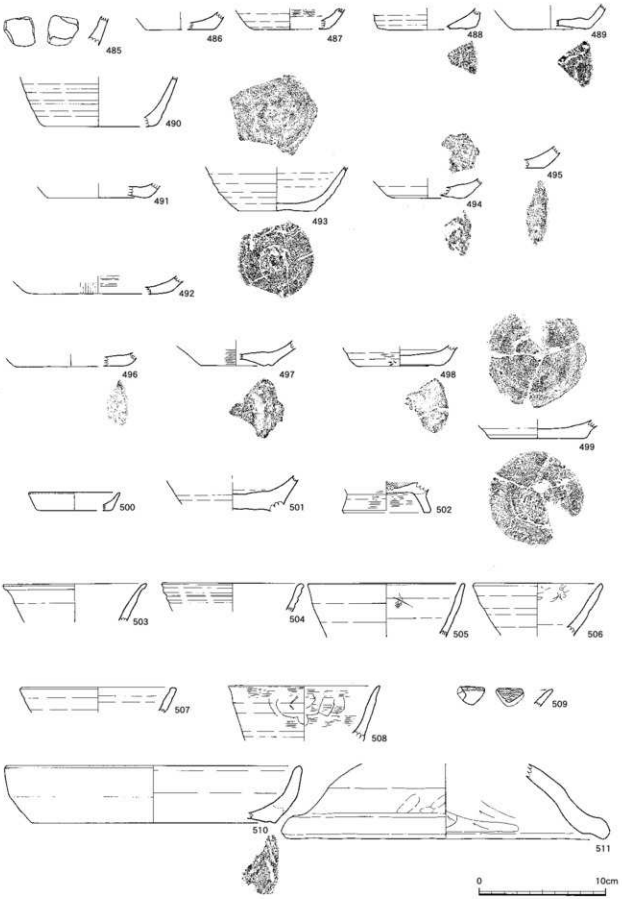
501は　－ｃ類で，高台欠損後，砥石等の道具を用いて欠損部分を粗く研磨調整を施し再利用したものである。502は，内黒土師器の椀である。上位が欠損のため全体形は不明である。ややハの字状に広がる高台をもち，接地面に平坦面をもつ。

坏〜椀（第146図503〜509）

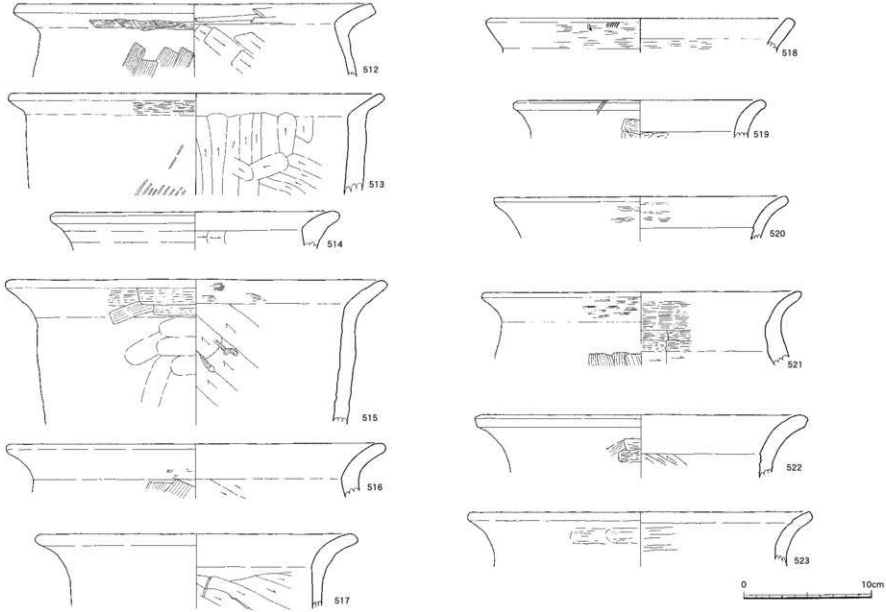
503〜509は坏または椀の口縁部である。胴部より下位が欠損しているため，全体形が不明であり土師器の坏または椀の口縁部〜胴部としてまとめて掲載する。503は口縁部がやや外反するもので，口縁部に段をもつ。504は外面にロクロ目が凹凸として残る。505・506は内面に爪のようなものでつけたような跡がみられる。509は内黒土師器である。内面には丁寧なミガキ調整痕が残る。

盤（第146図510）

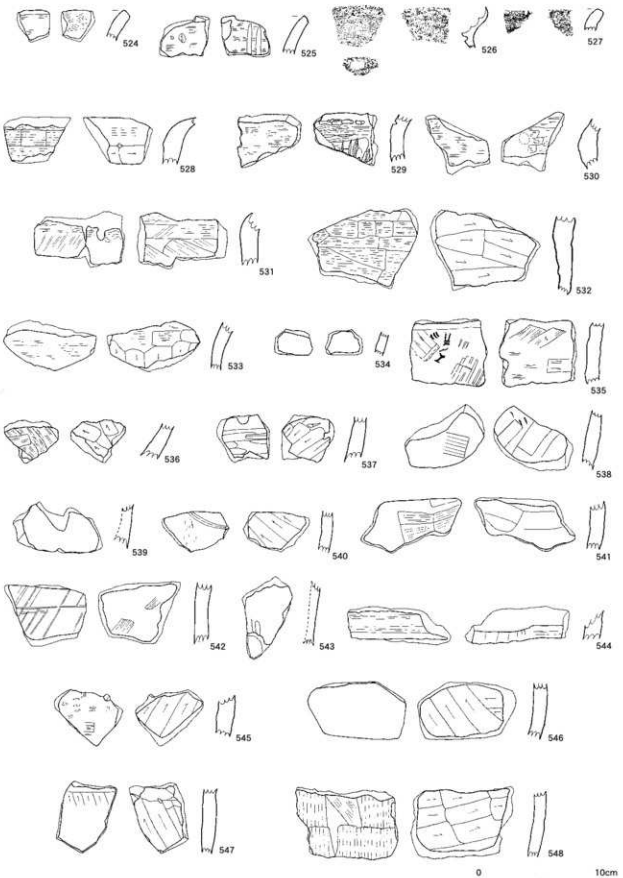
510は底径が19.4㎝の盤である。底部はやや上げ底気味で，ヘラ切りによる切り離し痕が残る。体部は底部との境目からやや屈曲し，そこから直線的に立ち上がる。口縁部は丸く仕上げている。



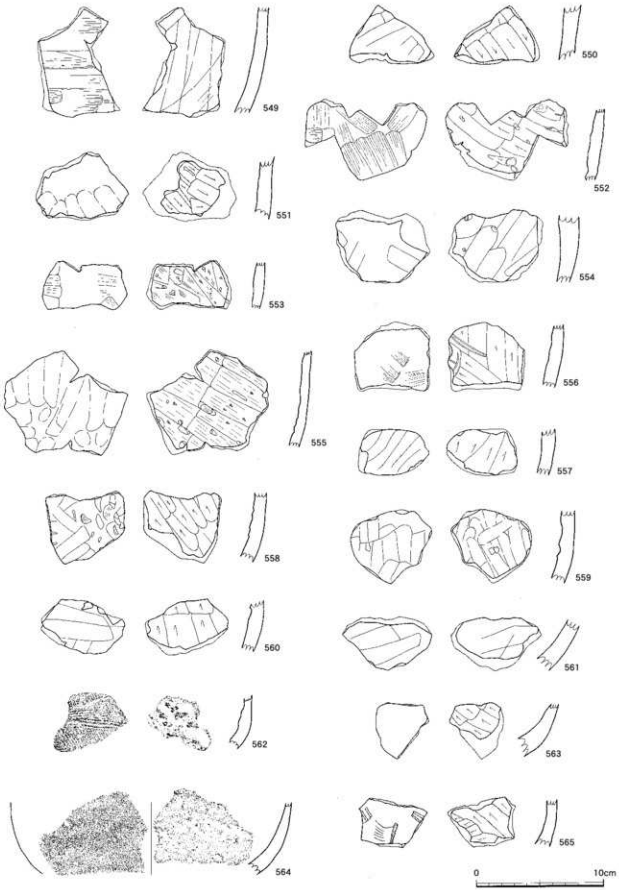
第146図　中央部　古代の土器(1)



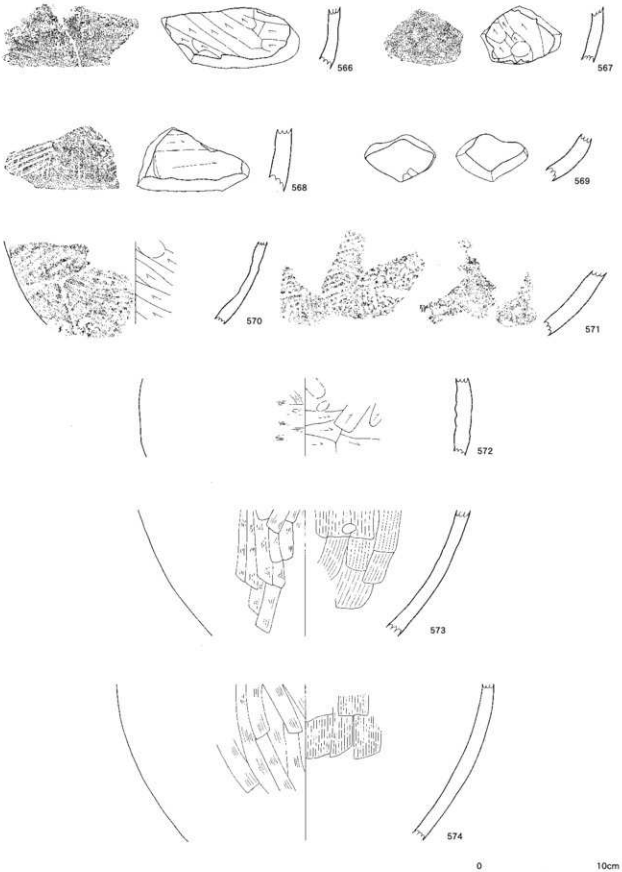
第147図　中央部　古代の土器(2)



第148図　中央部　古代の土器(3)



第149図　中央部　古代の土器(4)



第150図　中央部　古代の土器(5)

蓋（第146図511）

511は口径約26㎝の土師器の蓋である。天井部欠損のため全体形は不明であるが，体部下位は厚く仕上げ，天井部に向かって器壁が若干薄くなるように仕上げている。くの字状に外反する境目の外面にはナデ仕上げ時の指頭圧痕が明瞭に残る。

甕（第147図512～574）出土した甕は，口縁部の形態によって以下のように分類できる。

類　口縁部が逆「Ｌ」字状に大きく外反するもの。

類　口縁部がくの字状に外反するもの。

Ⅰ類（第147図512）

512は口縁部が逆「Ｌ」字状に外反する　類の甕である。330は頸部に比べ口唇部が厚くなっており，口縁部には丁寧な調整の跡がみられる。内面はケズリ調整である。

Ⅱ類（第147図513～523）

513～523は口縁部がくの字状に外反する　類の甕である。513～516は口縁部と頸部に明瞭な稜をもつものである。513は口縁部のハケ目調整痕が明瞭に残り，内面のケズリ調整も丁寧である。515は外面に指頭圧痕が残り，口縁部の内面にはハケ目調整痕が残る。517から523は口縁部が緩やかに外反し，頸部との間に稜をもたないものである。518は口縁部を内面外面ともに丁寧なハケ目調整が残る。521は頸部が厚くしっかりした作りである。522は厚めの口唇部を丸く仕上げている。

その他（第148～150図524～574）

小破片であったり，口縁部が残存していないため　類・　類に分類できなかったものをその他としてまとめて掲載する。524～534は口縁部から頸部にかけての小破片である。535～574は胴部から底部付近にかけての小破片だと思われる。

⑵　須恵器（第151図575～587）

坏（第151図575）

575は体部が底部からやや丸みを持ちながら立ち上がるものである。底部にはヘラ切りによる切り離し痕が明瞭に残っている。

埦（第151図576）

576は体部が直線的に開くものである。上位が欠損のため全体形は不明である。ややハの字状に広がる高台をもち，接地面に平坦面をもつ。底部の内側には工具痕と思われるものが残る。

高坏（第151図577）

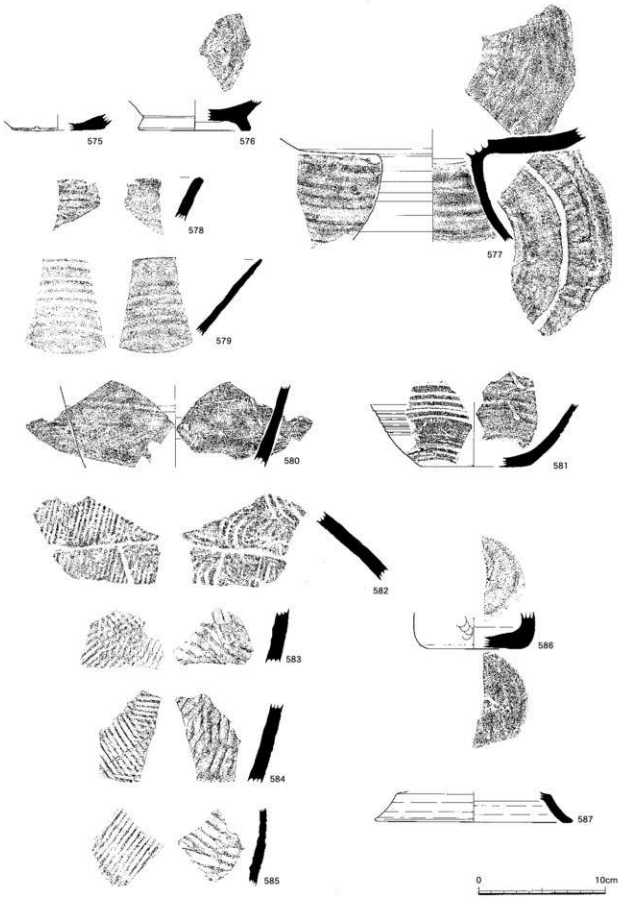
577は高坏の脚部と坏部を接合したものである。脚部も坏部も欠損しているため全体形は不明である。脚部はハの字状に外反しており，外面は丁寧なナデ調整がみられる。坏部は平坦面があり，口縁部は欠損しているが，大型の高坏として取り扱った。

坏～埦（第151図578）

578は埦または坏の口縁部である。胴部より下位が欠損しているため，全体形は不明である。口縁部がやや外反しているが，ほぼ直線的に外傾する。口唇部は丸く仕上げている。

鉢（第151図579～581）

579は鉢の口縁部で，口縁部はほぼ直線的に開いている。内面・外面とも丁寧なナデ調整が施されている。580は鉢の胴部である。胎土がやや粗く，内面には指頭圧痕が観察される。581は鉢の胴



第151図　中央部　古代の土器(6)

部から底部にかけての破片である。表面には櫛掻文がみられる。器形は，底部からやや膨らみながら立ち上がる形をしている。

甕（第151図582～585）

582～585は甕の破片である。582は，頸部から肩部にかけての破片である。外面は平行線状のタタキが施され，内面は青海波文の当て具痕がみられる。また，全体に磨滅が見られるので，二次利用された可能性もある。583～585は胴部中央から下胴部にかけての破片である。外面には平行線状のタタキが施され，内面には平行線状の当て具痕がみられる。

壺（第151図586）

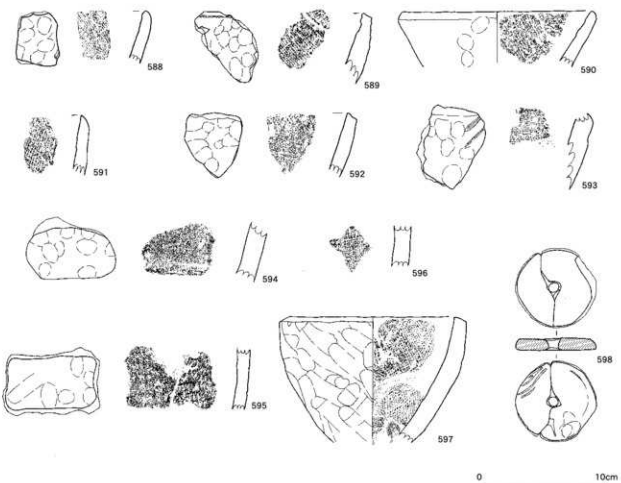
586は底部の形からしか判断できないが，おそらくは体部が砲弾形を呈し，頸部にかけてすぼまる壺ではないかと思われる。ただし，瓶の可能性もある。

蓋（第151図587）

587は蓋で，天井部は欠損しているため全体形は不明である。器形としては，端部にかけてゆるやかに外反している。外面にはロクロ目が筋状に残るが，非常に丁寧な作りである。

(3) 焼塩土器（第152図588～597）

588～597は焼塩土器である。出土区はⅠ-46～48区を中心としている。いずれも，胎土中に小石を含む砂粒が多量に混ざり，外面に指圧痕の多いナデ調整が施し表面が凸凹しているなど粗雑な作



第152図　中央部　古代の土器(7)

りである。焼成が弱く軟質であり，色調は赤橙色である。内面全体に細かい目を持つ布圧痕が明瞭に残る。器壁が厚く，先細りの口縁部を呈し，口縁部のみのため全体形は不明であるが，やや開き気味の直線的な口縁部を持つ鉢型を呈すると考えられる。

(4) 紡錘車（第152図598）

598は紡錘車で，Ⅰ-48区で出土した。土師器の胴部を取り除き，平たい円盤状をした底面の中心に孔を穿っている。底部に回転ヘラ切りによる切り離し痕が認められる。縁部をていねいに削り取り，円盤状に作り上げている。平坦面を磨り潰しながら調整し，表面の凸凹をある程度消している。

4 中世～近世

狩俣遺跡では，天地返し等で包含層が削平されている所が多かったため，中世～近世の遺物量は少なかった。しかも小破片が多く，図化するのが難しかった。計9点を図化した。

(1) 龍泉窯系青磁（第153図599～601）

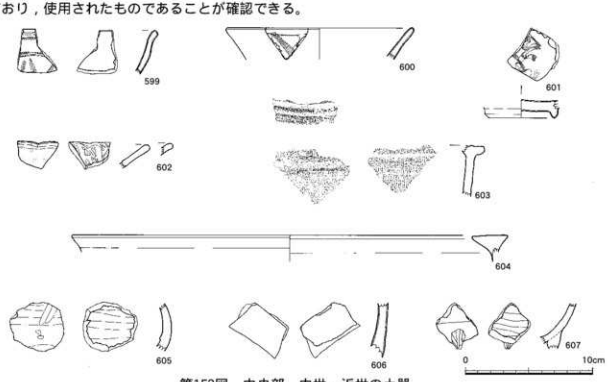
599～601は龍泉窯系の青磁である。599は碗の口縁部の破片である。口縁端部は丸く，緩やかに外反し，外面には連弁文がみられる。600は碗の口縁部の破片である。口縁部は直線的に立ち上がり，外面には鎬連弁文がみられる。601は碗の底部で，高台外面まで施釉を行い，高台内は無釉である。

(2) 陶器（第153図602）

602は稜花皿である。口縁部は直線的に開いている。北部九州系のものと思われる。

(3) 薩摩焼（第153図603～607）

603は擂り鉢の口縁部である。口唇部の釉はふきとられている。604は甕の口縁部で，口唇部の釉はふきとられ，貝目が残る。605は甕の胴部である。その形状から，メンコとして転用した可能性がある。606は甕の胴部である。607は土瓶の底部である。外底面は露胎する。脚部には煤が付着しており，使用されたものであることが確認できる。



第153図 中央部 中世～近世の土器

第16表　中央部　土器観察表(1)

検図番号	レイアウト番号	出土区	層	種類	器種	部位	口径	底径	器高	文様・調整 外面	文様・調整 内面	色調 外面	色調 内面	胎土 長石	胎土 石英	胎土 角閃	胎土 雲母	胎土 砂粒	胎土 その他	分類	備考
124	183	23T		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部一段部	22.0	-	-	貝殻条痕文 口唇部刻目	ナデ	灰褐	褐						赤色粒	a	
	184	23T		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部一段部	11.4	-	-	貝殻条痕文 口唇部刻目	貝殻条痕文	にぶい黄橙	にぶい黄橙						赤色粒	a	
	185	23T		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部一段部	22.0	-	-	貝殻条痕文 口唇部刻目	ナデ	灰黄褐	にぶい黄橙						赤色粒 チタン鉄鉱	a	
	186	23T		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部一段部	10.8	-	-	貝殻条痕文 口唇部刻目	条痕	灰黄褐	にぶい黄橙						赤色粒 カンラン石	a	
	187	22T		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部一段部	11.2	-	-	貝殻条痕文 口唇部刻目 条痕	ナデ	にぶい灰褐	橙							a	
	188	23T		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	-	-	-	貝殻条痕文 口唇部刻目	ナデ	灰黄褐	にぶい黄橙						赤色粒 チタン鉄鉱	a	
	189	23T		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	-	-	-	貝殻条痕文 口唇部刻目	ナデ	褐	にぶい褐						赤色粒 チタン鉄鉱	a	
	190	23T		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	-	-	-	貝殻条痕文 口唇部刻目	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						赤色粒	a	
	191	-	表採	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	-	-	-	貝殻条痕文	条痕	にぶい褐	にぶい褐							a	
	192	23T		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	-	-	-	貝殻条痕文 口唇部刻目	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						赤色粒	a	
	193	23T		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	橙	褐灰						赤色粒 チタン鉄鉱	a	
	194	23T		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	-	-	-	貝殻条痕文 口唇部刻目	ナデ	にぶい黄橙	灰黄褐							a	
	195	22T		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部一段部	10.2	-	-	貝殻条痕文 条痕	ナデ	橙	橙						チタン鉄鉱	a	
	196	23T		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	-	-	-	貝殻条痕文 口唇部刻目	ナデ	黒褐	にぶい黄橙						赤色粒 チタン鉄鉱	a	
	197	23T		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	-	-	-	貝殻条痕文 口唇部刻目	ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙							a	
	198	23T		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						赤色粒 カンラン石	a	
	199	23T		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	-	-	-	条痕	ナデ	褐灰	橙						赤色粒 チタン鉄鉱	a	住居跡
	200	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	にぶい赤褐	橙						赤色粒 チタン鉄鉱	a	
	201	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	にぶい褐	にぶい褐						赤色粒 チタン鉄鉱	a	
	202	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	褐	にぶい褐						チタン鉄鉱	a	
125	203	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	橙	灰褐						赤色粒	a	住居跡
	204	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	橙	にぶい褐						赤色粒 カンラン石	a	住居跡
	205	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	橙	橙						赤色粒 チタン鉄鉱	a	
	206	I-35		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	条痕	ナデ	にぶい褐	にぶい黄橙							a	
	207	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい褐						赤色粒	a	
	208	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	条痕	ナデ	にぶい橙	にぶい褐						赤色粒 チタン鉄鉱	a	
	209	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	橙	赤褐						赤色粒	a	
	210	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文	貝殻条痕文	橙	にぶい橙						赤色粒	a	
	211	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	条痕	条痕	褐	にぶい褐							a	
	212	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	にぶい褐	にぶい褐						赤色粒 チタン鉄鉱	a	
	213	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	条痕	ナデ	褐	灰褐						赤色粒	a	
	214	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	にぶい褐	橙						赤色粒	a	住居跡
	215	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	褐	褐						赤色粒	a	
	216	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙	黄褐						赤色粒 チタン鉄鉱	a	
	217	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文	貝殻条痕文	にぶい褐	橙						赤色粒	a	
	218	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙							a	
	219	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	条痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						チタン鉄鉱	a	
	220	G-42		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	条痕文	ナデ	にぶい橙	灰黄褐						赤色粒 チタン鉄鉱	a	
	221	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	条痕	条痕	灰褐	にぶい褐							a	
	222	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	条痕	ナデ	褐灰	にぶい褐						赤色粒	a	
	223	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	条痕	条痕	にぶい黄橙	にぶい褐						赤色粒 チタン鉄鉱	a	
	224	22T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	条痕	条痕	にぶい黒	灰褐						チタン鉄鉱	a	
	225	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	にぶい黒	褐							a	
	226	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	にぶい褐	褐灰						赤色粒 チタン鉄鉱	a	住居跡
	227	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	条痕	ナデ	灰褐	にぶい灰褐							a	土坑2
126	228	23T		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部一段部	17.0	-	-	口唇部刻目 条痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						チタン鉄鉱	b	
	229	23T		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部一段部	12.6	-	-	横刻	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙						赤色粒	b	
	230	23T		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	11.6	-	-	貝殻条痕文	ナデ	にぶい褐	褐						赤色粒 カンラン石	b	
	231	23T		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	10.4	-	-	貝殻条痕文	ナデ	黄褐	暗褐							b	
	232	23T		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部一段部	-	-	-	条痕	ナデ	にぶい褐	にぶい橙							b	
	233	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	にぶい褐	にぶい褐						赤色粒 チタン鉄鉱	b	
	234	K-41		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	条痕文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙							b	
	235	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	条痕	ナデ	にぶい褐	にぶい褐						赤色粒 カンラン石	b	
	236	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	にぶい橙	にぶい褐						赤色粒 チタン鉄鉱	b	
	237	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	にぶい褐	にぶい黄橙							b	住居跡
	238	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	褐	にぶい褐						赤色粒	b	
	239	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	条痕	ナデ	にぶい褐	にぶい褐						赤色粒	b	
	240	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	褐	褐灰							b	
	241	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	条痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						チタン鉄鉱	b	
	242	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	橙	灰褐							b	

第17表　中央部　土器観察表(2)

挿図番号	レイアウト番号	出土区	層	種類	器種	部位	口径	底径	器高	文様・調整 外面	文様・調整 内面	色調 外面	色調 内面	胎土 長石	胎土 石英	胎土 角閃	胎土 雲母	胎土 砂粒	胎土 その他	分類	備考
126	243	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	橙	褐							b	
	244	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	条痕	ナデ	灰黄褐	にぶい橙						赤色粒	b	
	245	L-35		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	条痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄褐						小石	b	
	246	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	にぶい橙	灰褐						赤色粒	b	
	247	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	灰褐	灰褐						赤色粒	b	
	248	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	条痕	ナデ	橙	にぶい橙							b	
	249	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	条痕	ナデ	にぶい橙	にぶい橙							b	
	250	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	にぶい橙	橙						カンラン石	b	
	251	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙							b	
	252	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	褐	褐						カンラン石	b	
127	253	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	にぶい橙	にぶい橙						赤色粒		
	254	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	条痕	ナデ	橙	褐灰						赤色粒 チタン鉄鉱		住居跡
	255	23T		縄文土器（早期）	深鉢	底部	-	10.0	-	条痕	ナデ	にぶい橙	橙								
	256	23T		縄文土器（早期）	深鉢	底部	-	-	-	条痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙								底部に穿孔
	257	22T		縄文土器（早期）	深鉢	底部	-	-	-	条痕	ナデ	にぶい赤橙	橙						赤色粒 チタン鉄鉱		
	258	23T		縄文土器（早期）	深鉢	底部	-	13.2	-	貝殻条痕文	ナデ	橙	橙						チタン鉄鉱		
	259	23T		縄文土器（早期）	深鉢	底部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	にぶい橙	橙						赤色粒 チタン鉄鉱		
	260	23T		縄文土器（早期）	深鉢	底部	-	-	-	条痕	ナデ	橙	橙						チタン		住居跡
	261	23T		縄文土器（早期）	深鉢	底部	-	11.6	-	条痕	ナデ	にぶい橙	にぶい橙						赤色粒 チタン鉄鉱		土坑3
	262	23T		縄文土器（早期）	深鉢	底部	-	-	-	条痕	ナデ	にぶい橙	にぶい橙								住居跡
	263	23T		縄文土器（早期）	深鉢	底部	-	-	-	条痕	ナデ	にぶい橙	灰褐						赤色粒		土坑5
128	264	23T		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部～胴部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	にぶい橙	にぶい橙								
	265	23T		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部～胴部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	灰褐	にぶい橙						赤色粒		
	266	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙	灰黄褐								
	267	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	橙	橙						赤色粒		
	268	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	橙	橙						赤色粒 チタン鉄鉱		
	269	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	条痕	ナデ	橙	橙						赤色粒 チタン鉄鉱		
	270	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	橙	暗褐						赤色粒 チタン鉄鉱		
	271	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部～底部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙								
	272	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	条痕 沈線	条痕	にぶい橙	にぶい橙								
	273	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	橙	にぶい橙						赤色粒 チタン鉄鉱		
	274	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部～底部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	橙	にぶい橙						赤色粒		
	275	23T		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部～胴部	23.2	-	-	貝殻条痕文 口縁部刻目	橙	橙	にぶい橙						赤色粒 チタン鉄鉱		
	276	23T		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部～胴部	15.2	-	-	貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄	黄橙								
	277	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙						赤色粒		
	278	L-35		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	条痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						小石		
	279	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						赤色粒		
	280	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	にぶい橙	にぶい橙						赤色粒		
	281	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						チタン鉄鉱		
	282	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	条痕	灰黄褐	にぶい橙							赤色粒 チタン鉄鉱		
	283	23T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部～底部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	橙	橙						赤色粒		
	284	23T		縄文土器（早期）	深鉢	底部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	橙	橙						赤色粒 チタン鉄鉱		
129	285	J-31		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部～胴部	22.2	-	-	貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙								
	286	K-43		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	-	-	-	刺突文	ナデ	橙	にぶい黄橙								
	287	H-39		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	-	-	-	刺突文	ナデ	灰黄	灰黄						赤色粒		
	288	J-31		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						小石		
	289	J-31		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部～胴部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						赤色粒 小石		
	290	I-38	b	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	-	-	-	貝殻押型文	ナデ	にぶい橙	にぶい橙						赤色粒 小石		
	291	K-43		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	にぶい橙	にぶい橙				密				
	292	K-43		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	刺突文	ナデ	橙	にぶい赤橙								
	293	J-31		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	刺突文	ナデ	にぶい橙	黒橙						赤色粒		
	294	G-48		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						カンラン石		集石20号
	295	K-43		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	刺突文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙								
	296	J-31		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	刺突文	条痕	にぶい橙	黒橙								
	297	J-31		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	キザミ目 条痕	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙								
	298	G-48		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	橙	橙								集石20号
	299	L-31		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	刺突文	ナデ	にぶい橙	にぶい橙						チタン鉄鉱 小石		
	300	L-31	b	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	刺突文	ナデ	にぶい橙	にぶい橙						小石		
	301	J・K-31		縄文土器（早期）	深鉢	底部	-	-	-	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙						小石		
	302	K-31		縄文土器（早期）	深鉢	胴部～底部	-	15.4	-	条痕	ナデ	明橙	にぶい橙						赤色粒 小石		

第18表　中央部　土器観察表(3)

挿図番号	レイアウト番号	出土区	層	種類	器種	部位	口径	底径	器高	文様・調整 外面	文様・調整 内面	色調 外面	色調 内面	胎土 長石	胎土 石英	胎土 角閃	胎土 雲母	胎土 砂粒	胎土 その他	分類	備考
129	303	I-35		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	-	-	-	条痕	ナデ	にぶい橙	黄橙						小石		
	304	H-45		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	沈線	ナデ	にぶい橙	黒褐								
	305	I-35		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	条痕	ケズリ　ナデ	明赤褐	にぶい赤褐						赤色粒 小石		
	306	H-46		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	条痕	ナデ	橙	灰褐					密	チタン鉄鉱		
130	307	I-35		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	-	-	-	押型文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙							a	
	308	K-37 38		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	24 9	-	-	ナデ	押型文	にぶい黄橙	にぶい黄橙						赤色粒 小石	a	
	309	K-37 38		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	25 0	-	-	ナデ	押型文	にぶい黄橙	にぶい黄橙							a	
	310	K-38		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	山形押型文	ナデ	にぶい橙	灰黄褐						赤色粒 小石	a	
	311	K-37 38		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	山形押型文	ナデ	褐	にぶい黄橙						赤色粒・小石 チタン鉄鉱	a	
	312	K-38		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	山形押型文	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙							a	
	313	K-37		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	山形押型文	ナデ	にぶい橙	褐						赤色粒 小石	a	
	314	J-32		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	押型文	ナデ	にぶい橙	灰黄褐						赤色粒	a	
	315	K-38		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	山形押型文	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙						小石	a	
	316	H-39		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	押型文	ナデ	にぶい黄橙	黒褐							a	
	317	J-37		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	押型文	ナデ	にぶい橙	にぶい橙						赤色粒 小石	a	
	318	H-39		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	押型文	ナデ	黒褐	黒褐						赤色粒 小石	a	
	319	H-39		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	押型文	ケズリ	にぶい橙	にぶい橙						赤色粒	a	
	320	J-45		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	押型文	ナデ	にぶい橙	褐							a	
	321	I-39 J-38		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	押型文	ナデ	にぶい橙	褐灰						赤色粒	a	
	322	I-39		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	押型文	ナデ	褐灰	にぶい橙						赤色粒 小石	a	
	323	H-39		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	押型文	ナデ	褐	褐						赤色粒 小石	a	
	324	L-35		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙	灰黄褐							a	集石8号
	325	L-35		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文 ナデ	ナデ	褐	黒褐							a	
	326	I-39		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文	ナデ	灰黄褐	黒褐							a	
131	327	J-33		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部一胴部	-	-	-	条痕	ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						赤色粒・小石 チタン鉄鉱	b	
	328	J-32		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	条痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						赤色粒 小石	b	
	329	J-31		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	条痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						赤色粒 小石	b	
	330	J-32		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	条痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						赤色粒 小石	b	
	331	J-32		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	条痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						赤色粒・小石 チタン鉄鉱	b	
	332	J-33		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	条痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						赤色粒・小石 チタン鉄鉱	b	
	333	J-30 J-33		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	条痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						小石	b	
	334	J-32		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	条痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						小石	b	
	335	J-32		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	条痕 押型文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						小石	b	
	336	J-31 32		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	山形押型文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						赤色粒 小石	b	
	337	J-32		縄文土器（早期）	深鉢	胴部一底部	-	15 8	-	山形押型文	条痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙						小石	b	緡代底
	338	J-32 33		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	条痕 押型文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						チタン鉄鉱 小石	b	
132	339	H-51		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部一底部	22 6	4 8	21 0	撫糸文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						赤色粒		
134	340	K-33		縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	-	-	-	条痕	条痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙						チタン鉄鉱		
	341	G-44	a	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文 押引文，沈線	ナデ	橙	橙							XI	
	342	H-43	a	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	-	-	-	押引連続文 沈線	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙							XI	
	343	24T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	ミミズバレ ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙						小石	XII	
	344	24T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	ミミズバレ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙						小石	XII	一括
	345	24T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	ミミズバレ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						小石	XII	一括
	346	24T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	ミミズバレ	ナデ	にぶい橙	橙						小石	XII	一括
	347	12T		縄文土器（早期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文	剥離	明赤褐	-							XII	住居跡
	348	L-42		縄文土器（早期）	浅鉢	口縁部	-	-	-	圧痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい赤褐							XII	
	349	K-42		縄文土器（早期）	深鉢	底部	-	7 8	-	押型文 ナデ	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐							XI→XII	
	350	J-45		縄文土器（早期）	深鉢	底部	-	-	-	ナデ	ナデ	にぶい橙	橙							XI→XII	
	351	L-26	b	縄文土器（早期）	浅鉢	底部	-	-	-	工具ナデ	ミガキ	にぶい橙	褐灰						赤色粒 チタン鉄鉱	XI→XII	
	352	I-42		縄文土器（早期）	深鉢	底部	-	6 4	-	ナデ	ナデ	橙	黒褐							XI→XII	
	353	I-35		縄文土器（早期）	浅鉢	底部	-	7 4	-	ナデ	工具ナデ	にぶい橙	明褐						チタン鉄鉱	XI→XII	
135	354	J-31	b	縄文土器（後期）	深鉢	胴部	-	-	-	張付突帯 条痕　ナデ	条痕	褐	褐						小石		
	355	-	表採	縄文土器（後期）	深鉢	口縁部	-	-	-	条痕 口唇部刻目	工具ナデ	黒褐	黒褐								
	356	I-49		縄文土器（後期）	深鉢	胴部	-	-	-	押型文	ナデ	黒褐	にぶい黄橙								
	357	I-49	b	縄文土器（後期）	深鉢	胴部	-	-	-	押型文	ナデ	黄橙	黒褐								
	358	I-49	b	縄文土器（後期）	深鉢	胴部	-	-	-	押型文	ナデ	にぶい黄橙	黒褐						チタン鉄鉱		
	359	H-49		縄文土器（後期）	深鉢	胴部	-	-	-	押型文	工具ナデ	黒褐	灰黄褐						チタン鉄鉱		
	360	H-49 I-49		縄文土器（後期）	深鉢	胴部	-	-	-	押型文	工具ナデ	にぶい黄橙	黒褐								
136	361	K-31		縄文土器（後期）	深鉢	胴部	-	-	-	ナデ 沈線	ナデ	橙	橙						赤色粒 小石		
	362	H-52	a	縄文土器（後期）	深鉢	胴部	-	-	-	ナデ 沈線	ナデ	赤褐	赤褐						赤色粒		

第19表　中央部　土器観察表(4)

挿図番号	レイアウト番号	出土区	層	種類	器種	部位	口径	底径	器高	文様・調整 外面	文様・調整 内面	色調 外面	色調 内面	胎土 長石	胎土 石英	胎土 角閃	胎土 雲母	胎土 砂粒	胎土 その他	分類	備考
136	363	J-46	b	縄文土器（後期）	深鉢	胴部	-	-	-	ナデ 沈線	ナデ	明赤褐	にぶい赤褐						赤色粒 小石		
	364	K-31		縄文土器（後期）	深鉢	胴部	-	-	-	ナデ 沈線	ナデ	にぶい黄橙	橙						赤色粒		
	365	K-26	b	縄文土器（後期）	深鉢	口縁部	-	-	-	ナデ 沈線	ナデ	橙	にぶい橙						赤色粒		
	366	H-36	b	縄文土器（後期）	深鉢	口縁部	-	-	-	ナデ 沈線	ナデ	褐	にぶい橙						雲母少混		
	367	H-36	b	縄文土器（後期）	深鉢	胴部	-	-	-	ナデ 沈線	ナデ	橙	にぶい黄橙								
	368	K-35	b	縄文土器（後期）	深鉢	胴部	-	-	-	ナデ 沈線	ナデ	橙	橙						赤色粒 小石		
	369	K-35	b	縄文土器（後期）	深鉢	胴部	-	-	-	ナデ 沈線	ナデ	にぶい橙	にぶい橙						赤色粒 小石		
	370	K-31	b	縄文土器（後期）	深鉢	胴部	-	-	-	ナデ 沈線	ナデ	橙	橙						赤色粒 小石		
	371	L-33	b	縄文土器（後期）	深鉢	胴部	-	-	-	ナデ 沈線	ナデ	明赤褐	明赤褐						赤色粒		
	372	K-31		縄文土器（後期）	深鉢	胴部	-	-	-	ナデ 沈線	ナデ	にぶい橙	にぶい橙						赤色粒 小石		
	373	K-32		縄文土器（後期）	深鉢	胴部	-	-	-	ナデ 沈線	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐								
	374	H-38	b	縄文土器（後期）	深鉢	胴部	-	-	-	条痕	ケズリ	黒褐	にぶい橙								
	375	I-38		縄文土器（後期）	深鉢	胴部	-	-	-	条痕	ケズリ	黒褐	褐						赤色粒 小石		
137	376	-	表採	縄文土器（後期）	浅鉢	口縁部～胴部	-	-	-	ヘラ状ナデ	ヘラ状ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙							A-a	
	377	H-43	表採	縄文土器（後期）	鉢	口縁部	-	-	-	ナデ	工具ナデ	褐灰	褐						赤色粒	A-a	一括
	378	-	表採	縄文土器（後期）	深鉢	口縁部	-	-	-	ナデ 口唇部連点文	ナデ	黒褐	黒褐						チタン鉄鉱	A-a	
	379	H-43	表採	縄文土器（後期）	鉢	胴部	-	-	-	工具ナデ	工具ナデ	灰褐	にぶい褐						赤色粒 チタン鉄鉱	A-a	一括
	380	-	表採	縄文土器（後期）	浅鉢	胴部	-	-	-	工具ナデ	ナデ　ミガキ	橙	にぶい黄橙						赤色粒 チタン鉄鉱	A-a	
	381	J-32	b	縄文土器（後期）	浅鉢	胴部	-	-	-	ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい褐							A-a	
	382	-	表採	縄文土器（後期）	浅鉢	胴部	-	-	-	工具ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						赤色粒 チタン鉄鉱	A-a	
	383	24T	b	縄文土器（後期）	浅鉢	胴部	-	-	-	丁寧なナデ	ナデ	にぶい黄橙	灰黄褐						赤色粒・小石 チタン鉄鉱	A-a	
	384	K-30		縄文土器（後期）	浅鉢	胴部	-	-	-	ナデ	工具ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙							A-a	スス付着
	385	-	表採	縄文土器（後期）	浅鉢	胴部	-	-	-	条痕	ナデ	にぶい黄橙	黒褐							A-a	
	386	24T	b	縄文土器（後期）	浅鉢	胴部	-	-	-	ハケメ　ミガキ	ケズリ　ナデ	にぶい褐	にぶい褐						赤色粒 小石	A-a	
	387	23T	-	縄文土器（後期）	浅鉢	胴部	-	-	-	ナデ ミガキ	ナデ	褐	褐						赤色粒	A-a	表土一括
	388	-	表採	縄文土器（後期）	浅鉢	胴部	-	-	-	張付突帯 ナデ　ミガキ	条痕　ナデ ミガキ	にぶい黄橙	黄褐							A-a	
	389	23T	-	縄文土器（後期）	浅鉢	胴部	-	-	-	ナデ ミガキ	ナデ	明赤褐	明赤褐						チタン鉄鉱	A-a	表土一括
	390	23T	-	縄文土器（後期）	浅鉢	胴部	-	-	-	ナデ	ナデ	にぶい赤褐	明赤褐							A-a	表土一括
	391	-	表採	縄文土器（後期）	浅鉢	胴部	-	-	-	張付突帯 ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙							A-a	
	392	L-34	b	縄文土器（後期）	浅鉢	胴部	-	-	-	ナデ	ナデ	橙	にぶい黄橙							A-a	
	393	L-26	b	縄文土器（後期）	浅鉢	胴部	-	-	-	ナデ	ナデ	赤褐	黒褐						小石	A-a	
	394	K-26	b	縄文土器（後期）	浅鉢	胴部～底部	-	-	-	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						チタン鉄鉱	A-a	
	395	23T		縄文土器（後期）	浅鉢	胴部～底部	-	11.2	-	ナデ 圧痕	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐							A-a	表土一括
138	396	24T	b	縄文土器（後期）	浅鉢	口縁部～胴部	31.6	-	-	張付突帯2条 板ナデ　ナデ	ナデ	にぶい黄橙	黒褐						チタン鉄鉱 小石	A-b	補修孔
	397	L-19	b	縄文土器（後期）	浅鉢	胴部	-	-	-	工具ナデ 張付突帯	板ナデ　ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						赤色粒 小石	A-b	
	398	I-33 I-35	b	縄文土器（後期）	浅鉢	口縁部～胴部	31.2	-	-	条痕	口縁部 貝殻条痕文 口縁 張付突帯	にぶい黄橙	黄褐						小石	A-b	
	399	-	表採	縄文土器（後期）	浅鉢	口縁部～胴部	-	-	-	張付突帯	ナデ	黒褐	にぶい黄橙							A-b	
	400	-	表採	縄文土器（後期）	浅鉢	口縁部～胴部	-	-	-	張付突帯 ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙							A-b	
	401	-	表採	縄文土器（後期）	浅鉢	口縁部	-	-	-	ナデ 張付刻目突帯	ハケメ　ナデ	黒褐	灰黄褐						赤色粒	A-b	
	402	-	表採	縄文土器（後期）	浅鉢	底部	-	-	-	ナデ 口唇部刻目	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐						赤色粒	A-b	
	403	-	表採	縄文土器（後期）	浅鉢	胴部	-	-	-	口唇部刻目	ナデ	にぶい黄橙	橙			密				A-b	
	404	-	表採	縄文土器（後期）	浅鉢	口縁部	-	-	-	張付突帯 ナデ	ミガキ	にぶい黄橙	褐灰							A-b	
	405	-	表採	縄文土器（後期）	浅鉢	胴部	-	-	-	張付突帯 ナデ	ナデ	黒褐	褐							A-b	
	406	-	表採	縄文土器（後期）	浅鉢	胴部	-	-	-	ナデ 張付突帯	ナデ	にぶい褐	にぶい黄橙							A-b	
	407	-	表採	縄文土器（後期）	鉢	胴部	-	-	-	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	橙						チタン鉄鉱	A-b	
139	408	J-31	b	縄文土器（後期）	浅鉢	口縁部～底部	28.0	7.6	15.2	工具ナデ	丁寧なナデ ミガキ	浅黄橙	浅黄橙						赤色粒	B	赤色顔料
	409	J-31	b	縄文土器（後期）	浅鉢	口縁部～胴部	27.4	-	-	ナデ	ナデ	にぶい褐	褐						赤色粒	B	赤色顔料
	410	K-30		縄文土器（後期）	浅鉢	胴部	-	-	-	ミガキ	ミガキ	褐灰	にぶい黄橙						カンラン石	B	
140	411	J-37	b	縄文土器（後期）	浅鉢	口縁部～胴部	44.2	-	-	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	黄橙							C-a	
	412	J-31		縄文土器（後期）	浅鉢	口縁部～胴部	36.2	-	-	工具ナデ	ナデ 指圧痕	灰褐	浅黄							C-a	スス付着
	413	K-L-30	b	縄文土器（後期）	浅鉢	口縁部～胴部	18.4	-	-	工具ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙							C-a	スス付着
	414	J-30	b	縄文土器（後期）	浅鉢	口縁部～胴部	-	-	-	工具ナデ	丁寧なナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						チタン鉄鉱	C-a	
	415	K-32	b	縄文土器（後期）	浅鉢	口縁部～胴部	-	-	-	工具ナデ	ミガキ	黒褐	褐							C-a	
	416	K-36	a	縄文土器（後期）	深鉢	口縁部～胴部	-	-	-	指圧痕 粗ナデ	ナデ	褐	褐						赤色粒 チタン鉄鉱	C-a	
	417	H-36	b	縄文土器（後期）	浅鉢	口縁部～胴部	-	-	-	ヘラナデ	ヘラナデ	にぶい赤褐	褐灰						赤色粒	C-a	
	418	L-30		縄文土器（後期）	浅鉢	口縁部～胴部	-	-	-	工具ナデ　ナデ	ナデ	黒褐	にぶい黄橙							C-a	
	419	J-2		縄文土器（後期）	浅鉢	口縁部～胴部	-	-	-	工具ナデ　ナデ	ナデ	にぶい黄橙	浅黄橙							C-a	
	420	24T	-	縄文土器（後期）	浅鉢	口縁部～胴部	-	-	-	張付突帯 ヨコナデ	ナデ	褐灰	にぶい黄橙						赤色粒 小石	C-a	
	421	K-32	b	縄文土器（後期）	浅鉢	口縁部～胴部	-	-	-	工具ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙							C-a	スス付着
	422	-	表採	縄文土器（後期）	浅鉢	口縁部～胴部	-	-	-	ヘラ状ナデ	ヘラ状ナデ	灰黄褐	にぶい黄橙							C-a	

第20表　中央部　土器観察表(5)

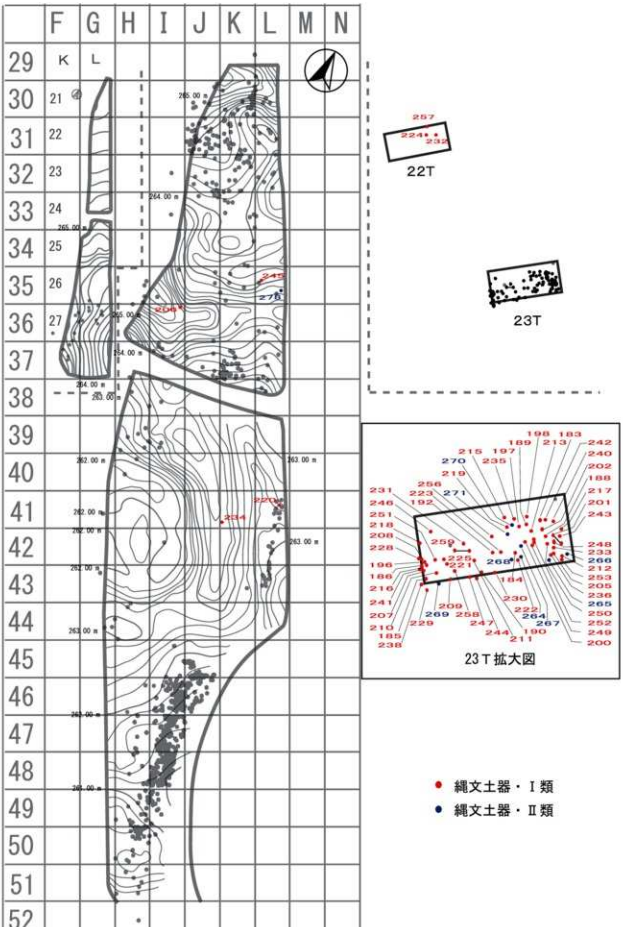
陣図番号	レイアウト番号	出土区	層	種類	器種	部位	口径	底径	器高	文様・調整 外面	文様・調整 内面	色調 外面	色調 内面	胎土 長石	胎土 石英	胎土 角閃	胎土 雲母	胎土 砂粒	胎土 その他	分類	備考
141	423	24T	b	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部	-	-	-	ナデ	ナデ	明褐	黒褐							C-a	
	424	L-26		縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部	-	-	-	ミガキ	ナデ	明赤褐	橙							C-a	
	425	L-31		縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部	-	-	-	ナデ	丁寧ナデ 指圧痕	にぶい黄橙	灰黄褐						チタン鉄鉱	C-a	
	426	L-26	b	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部	-	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						小石	C-a	
	427	L-26	b	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部	-	-	-	ナデ 指圧痕	ヨコナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						赤色粒・小石 チタン鉄鉱	C-a	
	428	-	表採	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部	-	-	-	工具ナデ	ナデ ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						赤色粒 チタン鉄鉱	C-a	
	429	L-26	b	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部	-	-	-	板ナデ ナデ	ナデ	にぶい赤橙	黒褐						赤色粒	C-a	
	430	L-26		縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部	-	-	-	ナデ ミガキ	ナデ	赤橙	黒褐							C-a	
	431	K-31		縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部	-	-	-	工具ナデ	工具ナデ	黒褐	にぶい黄橙							C-a	
	432	22T		縄文土器（晩期）	深鉢	胴部	-	-	-	条痕	ナデ	褐	にぶい赤褐							C-a	一括
	433	K-30		縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部	-	-	-	工具ナデ	丁寧なナデ	にぶい橙	にぶい橙						赤色粒 チタン鉄鉱	C-a	
	434	L-26	b	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部	-	-	-	ナデ	ナデ	赤褐	にぶい赤褐							C-a	スス付着
	435	H-36	a	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部	-	-	-	ナデ	工具ナデ	明赤褐	褐灰							C-a	
	436	K-34	b	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部	-	-	-	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙							C-a	
	437	J-32		縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部	-	-	-	工具ナデ ナデ	ナデ	にぶい黄	にぶい黄						チタン鉄鉱	C-a	
	438	K-30	b	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部	-	-	-	工具ナデ	ナデ ミガキ	にぶい黄橙	黒褐							C-a	スス付着
	439	J-31	b	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部	-	-	-	工具ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙							C-a	スス付着
	440	K-30	b	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部	-	-	-	工具ナデ	工具ナデ	にぶい黄橙	灰黄褐							C-a	スス付着
	441	K-32	b	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部	-	-	-	ナデ	ナデ	にぶい橙	灰黄褐						赤色粒 チタン鉄鉱	C-a	
142	442	K-30		縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	-	-	-	工具ナデ	ナデ ミガキ	にぶい黄橙	黒褐							C-a	スス付着
	443	J-K-31 L-32	b	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部一底部	-	24.0	-	工具ナデ ナデ	工具ナデ ナデ	浅黄	浅黄							C-a	スス付着
	444	J-K-31 K-36		縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部	-	-	-	圧痕	丁寧ナデ ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙							C-a	
	445	J-31	b	縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	-	-	-	ナデ	ナデ	にぶい橙	浅黄橙						赤色粒	C-a	
	446	L-31 J-34	b	縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	-	-	-	ナデ	工具ナデ ナデ	にぶい黄	にぶい黄							C-a	
	447	L-31	b	縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	-	-	-	ナデ	ナデ	にぶい黄	にぶい黄							C-a	
	448	K-32		縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	-	-	-	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	灰黄褐							C-a	
	449	J-31		縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	-	-	-	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙							C-a	
	450	J-32		縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	-	-	-	ナデ	ナデ	浅黄	浅黄							C-a	
143	451	-	表採	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部	-	-	-	布圧痕 ナデ	ナデ ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙							C-b	
	452	K-30	b	縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	-	-	-	圧痕	ミガキ	にぶい黄橙	黒褐							C-b	
	453	L-43	b	縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	-	-	-	工具ナデ	ヨコナデ	黒褐	明褐							C-b	
	454	J-31		縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	-	6.6	-	圧痕	丁寧なナデ	にぶい黄橙	浅黄橙						シソ種石	C-b	
	455	K-32		縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	-	-	-	組織痕	ミガキ	にぶい黄橙	黒褐							C-b	
	456	24T	b	縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	-	-	-	圧痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						チタン鉄鉱	C-b	
	457	-	表採	縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	-	-	-	ナデ 布圧痕	ミガキ	橙	黒褐						チタン鉄鉱	C-b	
	458	J-31		縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	-	-	-	圧痕	ミガキ	にぶい橙	黒褐							C-b	
	459	J-30	b	縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	-	-	-	圧痕	丁寧なナデ	浅黄橙	淡黄						チタン鉄鉱	C-b	
	460	-	表採	縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	-	-	-	布圧痕	ミガキ	にぶい黄橙	黒褐							C-b	
	461	K-31	b	縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	-	-	-	圧痕	ミガキ	にぶい黄橙	黒褐						チタン鉄鉱	C-b	
	462	J-30	b	縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	-	-	-	圧痕	丁寧なナデ	褐灰	浅黄橙						チタン鉄鉱	C-b	
	463	J-31		縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	-	-	-	圧痕	ミガキ	にぶい橙	黒褐							C-b	
	464	-	表採	縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	-	-	-	布圧痕	ナデ	橙	褐灰						赤色粒 チタン鉄鉱	C-b	
	465	K-30	b	縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	-	-	-	圧痕	ミガキ	浅黄橙	浅黄橙						カンラン石	C-b	
	466	-	表採	縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	-	-	-	布圧痕	ナデ	にぶい黄橙	灰黄褐							C-b	
	467	-	表採	縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	-	-	-	布圧痕	ナデ	にぶい橙	にぶい橙							C-b	
144	468	J-K-31	b	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部一底部	-	18.6	-	組織痕	ミガキ	明褐	黒褐							C-c	
	469	J-32		縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	-	-	-	組織痕	ミガキ	褐	黒褐							C-c	
	470	K-31		縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	-	-	-	組織痕	ミガキ	にぶい橙	黒褐							C-c	
	471	J-31		縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	-	-	-	組織痕	ミガキ	にぶい黄橙	黒褐							C-c	
	472	J-30	b	縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	-	-	-	圧痕	ミガキ	にぶい黄橙	灰黄							C-c	
	473	L-37	a	縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	-	-	-	組織痕	ミガキ	にぶい橙	黒褐							C-c	
	474	-	表採	縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	-	-	-	布圧痕	ナデ	橙	にぶい褐						赤色粒	C-c	
	475	L-30	b	縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	-	-	-	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	灰黄褐								円盤形土製品
145	476	J-K-37	b	古墳土器	鉢	口縁部一胴部	36.8	-	-	ハケメ ナデ 刻目突帯	ハケメ ナデ	にぶい橙	橙						赤色粒 カンラン石		スス付着
	477	J-37	b	古墳土器	鉢	口縁部一胴部	-	-	-	ハケメ ナデ 刻目突帯	ハケメ ナデ	にぶい橙	橙						輝石 赤色粒		
	478	J-37	b	古墳土器	鉢	口縁部	-	-	-	ナデ	ハケメ ナデ	橙	橙						カンラン石		
	479	J-37 38	b	古墳土器	鉢	胴部	-	-	-	ハケメ ナデ 刻目突帯	ハケメ ナデ	橙	橙								
	480		表採	古墳土器	鉢	胴部	-	-	-	張付突帯	ナデ	にぶい黄橙	褐灰						チタン鉄鉱		
	481	J-31 K-35	b	古墳土器	鉢	胴部	-	-	-	ハケメ ナデ 刻目突帯	ハケメ ナデ	にぶい赤橙	橙						赤色粒		
	482	-	表採	古墳土器	鉢	胴部	-	-	-	張付突帯	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙								スス付着

第21表　中央部　土器観察表(6)

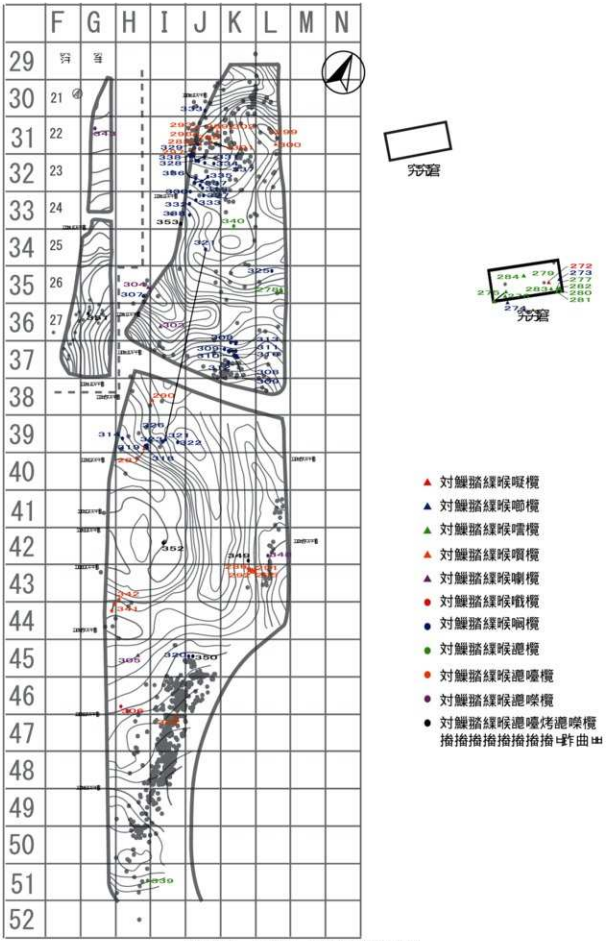
挿図番号	レイアウト番号	出土区	層	種類	器種	部位	口径	底径	器高	文様・調整 外面	文様・調整 内面	色調 外面	色調 内面	胎土 長石	胎土 石英	胎土 角閃	胎土 雲母	胎土 砂粒	胎土 その他	分類	備考
145	483	K-37	b	古墳土器	甕	胴部	-	-	-	ハケメ　ナデ	ハケメ　ナデ	にぶい赤橙	橙						赤色粒		スス付着
	484	K-38 a,b	a	古墳土器	甕	底部	-	9.0	-	高台　指圧痕　ナデ	ナデ	橙	橙						赤色粒		
146	485	I-46		土師器	坩	胴部	-	-	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙					密			焼土1
	486	I-37	b	土師器	坩	胴部～底部	-	5.4	-	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	橙					密			
	487	L-41	a	土師器	坩	胴部～底部	-	6.0	-	ナデ	ナデ	橙	橙					密	赤色粒		
	488	J-46	a	土師器	坩	胴部～底部	-	7.8	-	ヨコナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙					密			
	489	I-48		土師器	坩	胴部～底部	-	6.2	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙					密	赤色粒		
	490	H-50	b	土師器	坩	胴部～底部	-	9.0	-	ヨコナデ	ナデ	橙	橙					密			
	491	I-49	表採	土師器	坩	胴部～底部	-	8.2	-	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙					密			
	492	I-48	b	土師器	坩	胴部～底部	-	11.6	-	ハケメ　ナデ	ナデ	橙	橙						赤色粒 チタン鉄鉱		
	493	I-48	b	土師器	坩	胴部～底部	-	6.2	-	ヨコナデ	ハケメ　ナデ	にぶい橙	にぶい橙					密	赤色粒		
	494	I-49	-	土師器	坩	底部	-	6.4	-	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙					密			
	495	I-49	b	土師器	坩	底部	-	-	-	ナデ	ケズリ　ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙						赤色粒		
	496	L-41	a	土師器	坩	底部	-	9.0	-	ナデ	ナデ	橙	橙					密	赤色粒		
	497	I-40	b	土師器	坩	胴部～底部	-	5.8	-	ナデ	ナデ	橙	にぶい橙					密			一括
	498	L-43	b	土師器	坩	底部	-	7.0	-	ナデ	摩滅	浅黄橙	浅黄橙					密			
	499	I-J-46	表採 J,I	土師器	坩	底部	-	7.4	-	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙					密			
	500	K-34	a	土師器	鉢	口縁部～底部	7.3	5.9	1.5	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙					密			
	501	I-48	b	土師器	坩	胴部～底部				ナデ	丁寧なナデ	橙	橙					密	赤色粒		
	502	I-48	b	土師器	鉢	底部	-	7.0	-	ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	橙	黒褐					密			
	503	H-43	表採	土師器	甕～坩	口縁部～胴部	11.3	-	-	ヨコナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙					密	赤色粒 カンラン石		表土一括
	504	I-50	b	土師器	甕～坩	口縁部～胴部	11.2	-	-	ヨコナデ	ナデ	橙	にぶい橙					密	赤色粒		
	505	L-43	a	土師器	甕～坩	口縁部～胴部	12.4	-	-	ヨコナデ	ナデ 工具痕	浅黄橙	浅黄橙						赤色粒		
	506	L-43	b	土師器	甕～坩	口縁部～胴部	10.3	-	-	ヨコナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙					密	赤色粒		
	507	L-43	b	土師器	甕～坩	口縁部	12.4	-	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙					密	赤色粒		
	508	L-43	b	土師器	甕～坩	口縁部～胴部	12.0	-	-	ヨコナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙					密	赤色粒		
	509	I-32	b	土師器	甕～坩	口縁部～内黒	-	-	-	ナデ	ミガキ	にぶい黄橙	黒褐								
	510	H-52	a	土師器	鉢	口縁部～底部	23.6	19.4	5.5	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙					密	赤色粒		
	511	I-47	a b	土師器	甕	胴部～底部	26.0	-	-	指圧痕　ナデ	ヨコナデ ケズリ	橙	橙								
147	512	I-48	b	土師器	甕	口縁部～胴部	28.0	-	-	ナデ	工具ナデ ケズリ	明赤褐	にぶい赤褐						赤色粒 チタン鉄鉱		
	513	I-48	b	土師器	甕	口縁部～胴部	39.0	-	-	ハケメ　ナデ 板ナデ	ケズリ 指圧痕	にぶい橙	にぶい黄橙						赤色粒 チタン鉄鉱		
	514	I-47	b	土師器	甕	口縁部	23.0	-	-	ヨコナデ	ナデ ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						赤色粒 カンラン石		
	515	I-47	b	土師器	甕	口縁部～胴部	30.4	-	-	ハケメ　ナデ	工具ナデ ケズリ 指圧痕	橙	橙						赤色粒		
	516	L-44	b	土師器	甕	口縁部	30.0	-	-	ヨコナデ	ヘラケズリ ナデ	橙	にぶい橙						赤色粒		
	517	I-47	b	土師器	甕	口縁部～胴部	25.6	-	-	ヨコナデ　ナデ	ヨコナデ　ナデ ケズリ	灰褐	にぶい橙						赤色粒		土坑150
	518	I-48	-	土師器	甕	口縁部	24.4	-	-	ヨコナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙						赤色粒		溝25
	519	J-46	b	土師器	甕	口縁部	20.0	-	-	ヨコナデ	工具ナデ　ナデ	にぶい橙	にぶい橙						輝石		
	520	I-48	b	土師器	甕	口縁部	23.0	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	橙	橙						赤色粒 チタン鉄鉱		
	521	J-46	a b	土師器	甕	口縁部	25.3	-	-	板ナデ ハケメ　ナデ	ヨコナデ ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						輝石		
	522	I-48	b	土師器	甕	口縁部	26.4	-	-	ヨコナデ	ヘラケズリ	にぶい橙	にぶい橙						赤色粒 カンラン石		
	523	I-48	b	土師器	甕	口縁部	27.4	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	橙	橙						赤色粒		
148	524	I-48	-	土師器	甕	口縁部	-	-	-	ナデ	ナデ	橙	橙						赤色粒 カンラン石		溝26
	525	I-47	-	土師器	甕	口縁部	-	-	-	ハケメ　ナデ	ハケメ　ナデ	橙	橙						赤色粒		一括
	526	I-47 46	b	土師器	甕	口縁部	-	-	-	ナデ	剥離	橙	橙								溝16
	527	H-48	b	土師器	甕	口縁部	-	-	-	ナデ	ナデ	明赤褐	明赤褐								土坑155
	528	I-47	b	土師器	甕	頸部	-	-	-	ヨコナデ	ハケメ　ナデ ケズリ	橙	橙						赤色粒		
	529	I-47	a	土師器	甕	頸部	-	-	-	ヨコナデ	ハケメ　ナデ 工具ナデ	橙	橙						赤色粒 チタン鉄鉱		
	530	H-49	a	土師器	甕	頸部	-	-	-	ハケメ　ナデ	ヨコナデ ケズリ	橙	橙						赤色粒		
	531	J-46	a b	土師器	甕	頸部	-	-	-	ハケメ　ナデ	ナデ ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						チタン鉄鉱 カンラン石		
	532	J-46	b	土師器	甕	胴部	-	-	-	ハケメ　ナデ	ケズリ	にぶい橙	明褐								
	533	J-46	a	土師器	甕	頸部	-	-	-	ハケメ　ナデ	ヨコナデ ケズリ	橙	赤褐						赤色粒 カンラン石		
	534	H-48	b	土師器	甕	胴部	-	-	-	丁寧なナデ	ケズリ　ナデ	黒褐	にぶい赤褐						チタン鉄鉱		土坑155
	535	I-48	b	土師器	甕	胴部	-	-	-	タタキ	ヘラケズリ	橙	橙						赤色粒		
	536	I-47	b	土師器	甕	胴部	-	-	-	ハケメ　ナデ	ケズリ　ナデ	にぶい橙	灰黄褐						赤色粒		土坑150
	537	I-47	b	土師器	甕	胴部	-	-	-	ハケメ　ナデ	ケズリ　ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐						赤色粒		土坑150
	538	I-48	b	土師器	甕	胴部	-	-	-	板ナデ　ナデ	ケズリ　ナデ	浅黄橙	浅黄橙						赤色粒		
	539	L-33 34	-	土師器	甕	胴部	-	-	-	ナデ	磨耗	橙	橙						赤色粒		畝間一括
	540	I-47 46	b	土師器	甕	胴部	-	-	-	ナデ	ナデ	明赤褐	にぶい橙								溝16
	541	I-48	b	土師器	甕	胴部	-	-	-	ハケメ　ナデ	ケズリ　ナデ	橙	橙						赤色粒		
	542	I-48	b	土師器	甕	胴部	-	-	-	タタキ　ナデ	ケズリ　ナデ	浅黄橙	浅黄橙						赤色粒 チタン鉄鉱		
	543	L-33 34	-	土師器	甕	胴部	-	-	-	工具ナデ	ナデ	橙	橙						赤色粒		畝間一括
	544	I-48	b	土師器	甕	頸部	-	-	-	ナデ	ヨコナデ ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙								

第22表　中央部　土器観察表(7)

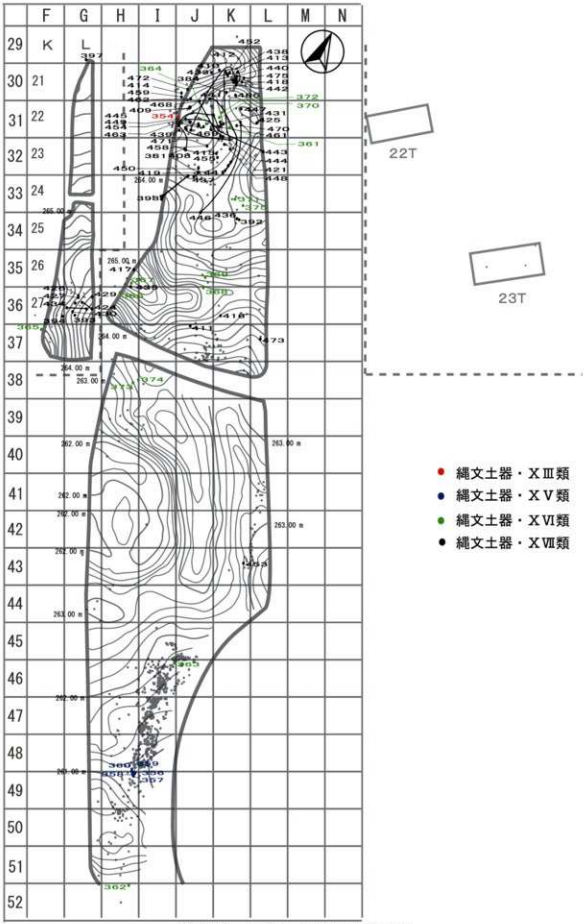
挿図番号	レイアウト番号	出土区	層	種類	器種	部位	口径	底径	器高	文様・調整 外面	文様・調整 内面	色調 外面	色調 内面	胎土 長石	胎土 石英	胎土 角閃	胎土 雲母	胎土 砂粒	胎土 その他	分類	備考
148	545	I-47 ab	b	土師器	甕	胴部	-	-	-	ナデ	ナデ	明赤褐	明赤褐								溝16
	546	I-47	b	土師器	甕	胴部	-	-	-	ナデ	ケズリ	明赤褐	明赤褐						赤色粒 チタン鉄鉱		
	547	H-36	b	土師器	甕	胴部	-	-	-	工具ナデ　ナデ	ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						赤色粒		
	548	I-47	a	土師器	甕	胴部	-	-	-	ハケメ　ナデ	ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						赤色粒 チタン鉄鉱		
149	549	J-46	a	土師器	甕	胴部	-	-	-	ハケメ　ナデ	ケズリ	橙	橙								
	550	J-46	a	土師器	甕	胴部	-	-	-	ナデ	ケズリ	にぶい赤褐	にぶい赤褐								
	551	I-48	b	土師器	甕	胴部	-	-	-	ナデ 指圧痕	ケズリ ナデ	暗赤褐	にぶい赤褐						カンラン石		
	552	I-48	b	土師器	甕	胴部	-	-	-	ハケメ　ナデ	ケズリ	にぶい橙	にぶい橙						赤色粒		
	553	I-48	b	土師器	甕	胴部	-	-	-	ナデ	ケズリ　ナデ	にぶい赤橙	橙						赤色粒		
	554	J-46		土師器	甕	胴部	-	-	-	ハケメ　ナデ	ナデ　指圧痕 ケズリ	橙	橙						赤色粒		
	555	I-48	b	土師器	甕	胴部	-	-	-	ハケメ　ナデ 指圧痕	ケズリ	明赤褐	明赤褐						カンラン石 輝石		
	556	I-48		土師器	甕	胴部	-	-	-	ハケメ　ナデ	ケズリ　ヘラケズリ	橙	にぶい黄橙						赤色粒 チタン鉄鉱		
	557	I-48	b	土師器	甕	胴部	-	-	-	丁寧なナデ	ケズリ　ヨコナデ	にぶい橙	にぶい橙						赤色粒		
	558	H-43	表採	土師器	甕	胴部	-	-	-	ハケメ　ナデ	ケズリ　ヘラケズリ	明赤褐	橙						赤色粒		一括
	559	H-43	表採	土師器	甕	胴部	-	-	-	ハケメ　ナデ	ケズリ　ナデ	褐	明赤褐								一括
	560	I-46	表採	土師器	甕	胴部	-	-	-	ハケメ　ナデ	ケズリ　ナデ	橙	橙								
	561	I-48	b	土師器	甕	胴部	-	-	-	ハケメ　ナデ	ケズリ　ナデ	褐	橙						赤色粒		
	562	I-48	b	土師器	甕	胴部	-	-	-	工具ナデ　ナデ	ケズリ	にぶい橙	褐						赤色粒 チタン鉄鉱		
	563	I-48	b	土師器	甕	胴部	-	-	-	ナデ	ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						赤色粒		
	564	I-48	b	土師器	甕	胴部	-	-	-	ナデ	ケズリ　ナデ	にぶい赤橙	にぶい赤橙						赤色粒 チタン鉄鉱		
	565	I-47	b	土師器	鉢	胴部	-	-	-	ナデ	工具ナデ	にぶい橙	にぶい橙						赤色粒		
150	566	I-47	b	土師器	甕	胴部	-	-	-	ハケメ　ナデ	ケズリ　ナデ	橙	にぶい橙						赤色粒 カンラン石		
	567	I-47	b	土師器	甕	胴部	-	-	-	ハケメ　ナデ	ケズリ　ナデ 指圧痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙						チタン鉄鉱		土坑150
	568	I-46	b	土師器	甕	胴部	-	-	-	ハケメ　ナデ 指圧	ヨコナデ	橙	にぶい黄橙						赤色粒 チタン鉄鉱		
	569	H-43	表採	土師器	甕	胴部	-	-	-	ナデ	ナデ	橙	橙						赤色粒		一括
	570	I-49	b	土師器	甕	胴部	-	-	-	タタキ	ヘラケズリ ナデ	浅黄橙	浅黄橙						赤色粒		
	571	J-46	b	土師器	甕	胴部～底部	-	-	-	タタキ	ケズリ　ナデ	橙	にぶい橙								
	572	I-47 ab	a b	土師器	甕	胴部	-	-	-	ハケメ　ナデ	ケズリ	橙	橙						赤色粒		
	573	K-32 J-32	b	土師器	甕	胴部	-	-	-	ナデ	ケズリ	橙	橙						赤色粒		
	574	J-X-32 K-32	b	土師器	甕	胴部	-	-	-	ナデ	ケズリ	橙	赤褐						赤色粒		
151	575	I-48	表採	須恵器	坏	底部	-	7.2	-	ナデ	ナデ	灰黄	灰黄				密				表採
	576	I-48		須恵器	甕	胴部～底部	-	8.9	-	ヨコナデ ハケ目	ヨコナデ	灰黄	灰黄				密				工具痕あり
	577	H-50	b	須恵器	高坏	坏一脚部 柱部	-	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	黄灰	黄灰				密				
	578	I-46	表採	須恵器	坏一脚	坏一脚部～脚部	-	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙				密				
	579	I-48	b	須恵器	鉢	坏一脚部～脚部	-	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙	橙灰黄				密				
	580	J-46	b	須恵器	鉢	胴部～底部	-	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ　指圧痕	灰黄	灰黄				密				
	581	I-47	a	須恵器	鉢	胴部～底部	-	8.8	-	ヨコナデ 櫛目	ヨコナデ	灰黄	灰黄				密				一括
	582	I-47	b	須恵器	甕	胴部	-	-	-	平行文 タタキ	同心円 当て具痕	浅黄	浅黄				密		赤色粒		
	583	H-49	b	須恵器	甕	胴部	-	-	-	格子目 タタキ	平行文 当て具痕	灰黄	灰黄				密				
	584	J-46	b	須恵器	甕	胴部	-	-	-	平行文 当て具痕	平行文 当て具痕	暗褐	灰黄				密				
	585	H-49	b	須恵器	甕	胴部	-	-	-	平行文 当て具痕	平行文 当て具痕	にぶい橙	灰黄				密				
	586	I-48	表採	須恵器	壺	底部	-	8.0	-	ナデ 指圧痕	ヨコナデ	褐	褐				密				
	587	I-49	-	須恵器	蓋	口縁部	15.6	-	-	ヨコナデ	擬轆	にぶい橙	灰黄				密				溝25
152	588	I-48	b	土師器	焼塩土器	口縁部～胴部	-	-	-	ナデ 指圧痕	圧痕	橙	橙						チタン鉄鉱		
	589	I-46	b	土師器	焼塩土器	口縁部～胴部	-	-	-	ナデ 指圧痕	押型文	黄橙	黄橙								
	590	I-47	a	土師器	焼塩土器	口縁部～胴部	15.0	-	-	ナデ 指圧痕	圧痕	橙	橙								
	591	I-47	a	土師器	焼塩土器	口縁部～胴部	-	-	-	ナデ 指圧痕	圧痕	橙	橙								
	592	I-46	b	土師器	焼塩土器	口縁部～胴部	-	-	-	ナデ 指圧痕	圧痕	橙	橙						赤色粒		
	593	J-46	a	土師器	焼塩土器	口縁部～胴部	-	-	-	ナデ　指圧痕又 ヒモ	圧痕	橙	橙						赤色粒		
	594	I-47	a	土師器	焼塩土器	胴部	-	-	-	ナデ 指圧痕	圧痕	浅黄橙	浅黄橙						赤色粒		
	595	I-47	a	土師器	焼塩土器	胴部	-	-	-	ナデ 指圧痕	ナデ	黄橙	黄橙								
	596	I-50	表採	土師器	焼塩土器	口縁部	-	-	-	横ナデ	布圧痕	橙	橙								
	597	H-50	b	土師器	焼塩土器	口縁部～胴部	13.0	-	-	ナデ 指圧痕	圧痕	橙	橙								
	598	I-48	b	土師器	紡錘車		-	-	-	ナデ 指圧痕	ナデ 指圧痕	浅黄橙	浅黄橙						赤色粒		紡錘車
153	599	I-J-64 65		瀬戸瀬戸系 陶磁	碗	口縁部～胴部	-	-	-	明緑灰釉	明緑灰釉	灰オリーブ	灰オリーブ				密				横注線 片彫濃花文
	600	I-48	b	瀬戸瀬戸系 陶磁	碗	口縁部～胴部	-	-	-	明緑灰釉	明緑灰釉	灰オリーブ	灰オリーブ				密				連弁文
	601	I-49	b	瀬戸瀬戸系 陶磁	鉢	底部	-	5.2	-	青釉	草花文	灰オリーブ	灰オリーブ				密				高台内平天 釉剥ぎ
	602	H-52	a	陶器	秘花瓶	口縁部～胴部	-	-	-	鉄釉	鉄釉	暗褐	暗褐				密				
	603	J-46	a	陶器	徳利	口縁部～胴部	-	-	-	ヨコナデ 釉タレ	ヨコナデ 鉄釉、横目	暗褐	暗褐								口縁部釉剥ぎ
	604	K-L-26 27	-	陶器	碗	口縁部	34.4	-	-	鉄釉	鉄釉	灰褐	黒褐				密				口縁部釉剥ぎ
	605	K-L-25～27	-	陶器	碗	胴部	-	-	-	ナデ	ヨコナデ	黒褐	黒褐				密		赤色粒		
	606	H-51	表採	陶器	碗	胴部	-	-	-	鉄釉	鉄釉	暗緑灰オリーブ	灰オリーブ								
	607	H-51	表採	陶器	土瓶	脚	-	-	-	鉄釉	鉄釉 ケズリ	暗褐	暗褐								スス付着



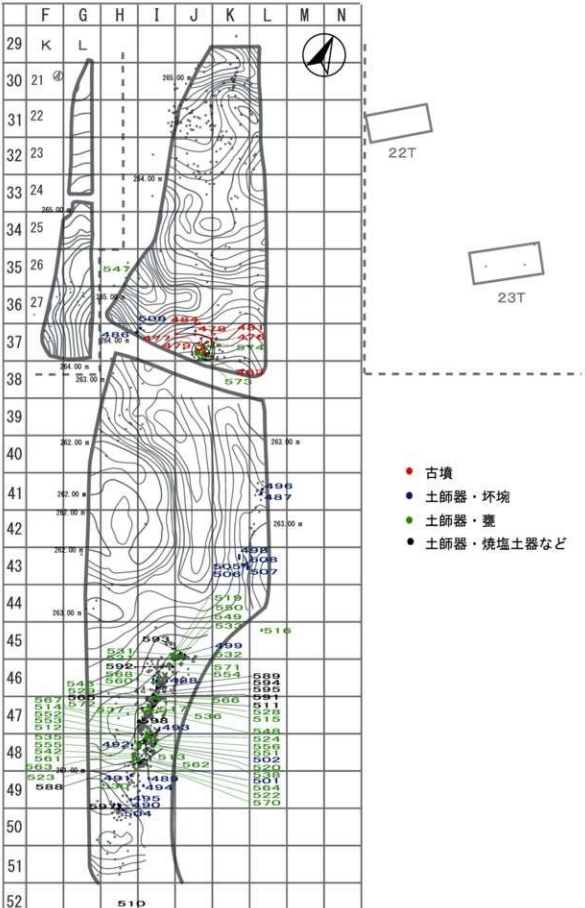
第154図　中央部　遺物出土状況図(1)



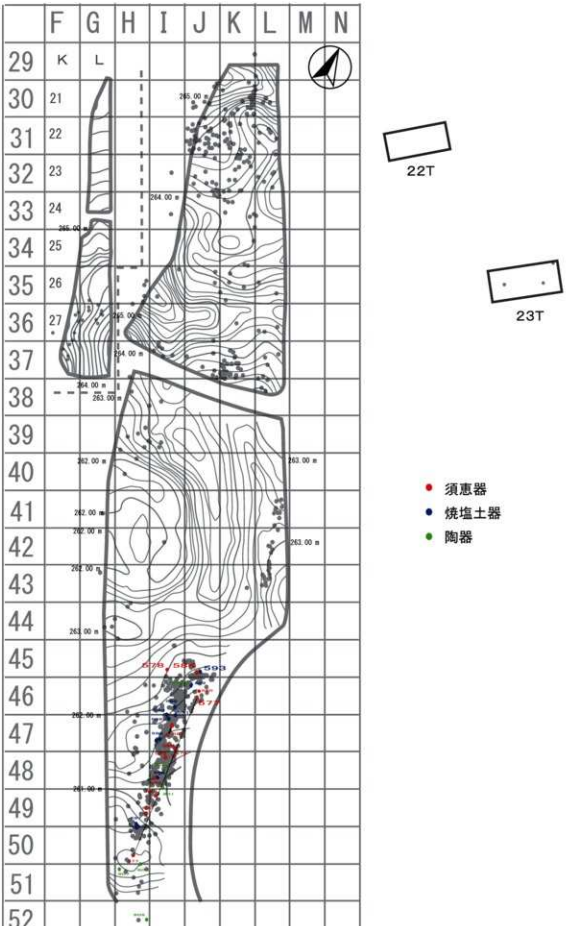
第155図　中央部　遺物出土状況図(2)



第156図　中央部　遺物出土状況図(3)



第157図　中央部　遺物出土状況図(4)



第158図　中央部　遺物出土状況図(5)

第５節　出土石器

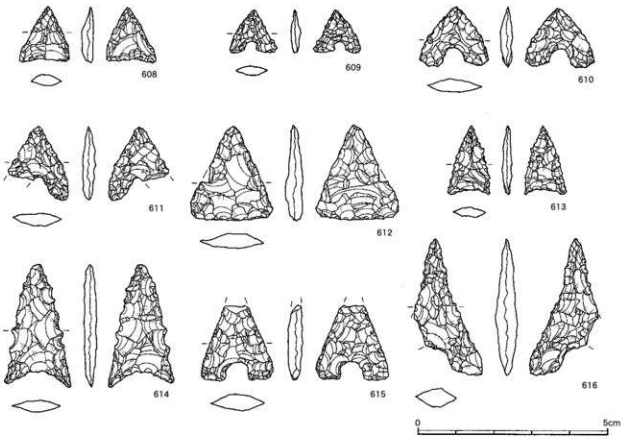
１　縄文時代早期

縄文時代早期の石器は，打製石鏃，スクレイパー，剥片，磨製石斧，打製石斧，磨器，磨石，石皿などが出土した。いずれも縄文時代早期の包含層である　，　，　層から出土したものである。石材としては，黒曜石，安山岩，チャート，玉髄，頁岩，砂岩，泥岩，凝灰岩，花崗岩，流紋岩などがみられた。80点を図化している。

⑴　打製石鏃（第159図608～616）

608～612は全体の形状が正三角形状（長幅比＝１３：１未満とした）を呈するものである。608は基部に抉りがわずかに見られるが，612は抉りが見られない。609～611は基部に抉りの見られるもので，明確に脚部が作出されている。608は，裏面に素材剥離面を多く残す。

613～616は全体の形状が二等辺三角形（長幅比1３：１以上とした）を呈するものである。613，614は基部に抉りが見られるもので，側縁部は鋸歯状に仕上げられている。615は基部に深い抉りがあり，明確に脚部が作出されるものである。616は一部に欠損があるが，基部に深い抉りが見られると判断できる。また，側縁部は内弯しており，鋸歯状に仕上げられている。



第159図　中央部　縄文時代早期の石器(1)

⑵　スクレイパー（第160図617～624，第161図625～629）

中央部のスクレイパーは，22トレンチと23トレンチからのみ出土している。石材は安山岩が多く，頁岩，チャートもみられる。スクレイパーと判断した13点全てを図化した。

617～625は安山岩製のスクレイパーである。いずれも，扁平な安山岩素材に刃部形成と判断する小剥離痕がみられる。

626は頁岩製のスクレイパーである。下部に裏面からの剥離痕が多くみられる。

627～629はチャート製のスクレイパーで，安山岩製のものに比べると小型である。627は灰色に黒い斑紋が入るチャートを用いており，縁辺の一部に簡単な刃部形成を施している。628は下部に両面から刃部形成をしている。左側の部分は欠損したとみられる。629は縁辺の一部に微細な剥離をほどこしている。

⑶　微細剥離痕剥片（第162図630）

630はチャートの微細剥離痕剥片である。下部に片側からの剥離痕がみられる。

⑷　磨製石斧（第162図631）

631は安山岩製の磨製石斧である。剥落した部分が多いが，製作時には全体を丁寧に研磨し，形を整えていたものと思われる。刃部だけが完全に残存していることから，刃部だけは研磨を繰り返していた可能性もある。

⑸　刃部磨製石斧（第162図632～634）

632～634は刃部磨製石斧である。632は頁岩製で，周辺を打ちかいて形を整え，刃部周辺のみを磨いている。633はホルンフェルス製で，その大部分を欠損しているが，刃部は丁寧に研磨されている。また，刃部には使用痕と考えられる微細な刃こぼれが観察される。634は，頁岩製で破損が激しい。刃部及び上部に丁寧な研磨がみられる。

⑹　打製石斧（第163図635）

635は，頁岩製の打製石斧である。あまり装着部の抉りがはっきりせず，いわゆる短冊形状をしている。側縁部には表面からの剥離が施されており，表裏とも自然面を若干残している。

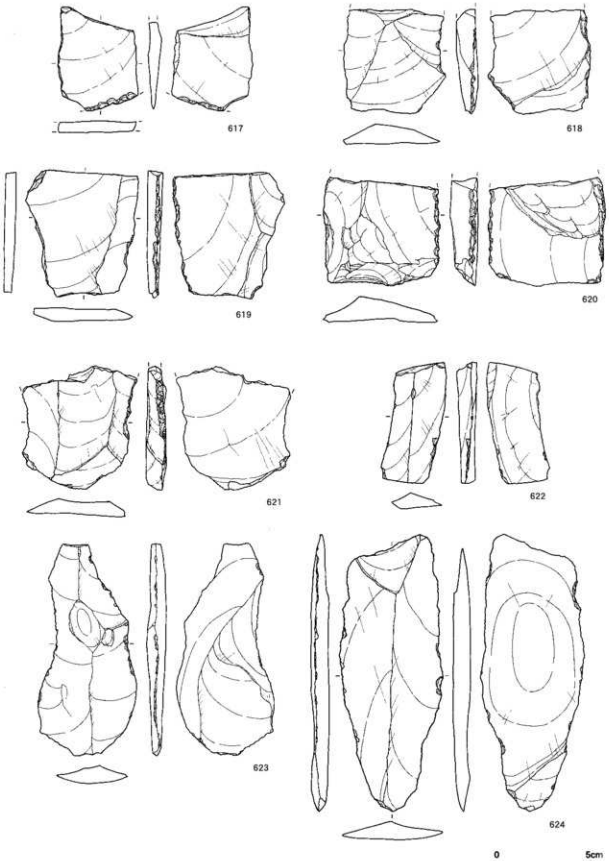
⑺　礫器（第163図636，637）

636，637はいずれも安山岩製の礫器である。636は扁平な礫を用いて周囲に加工を施している。刃部は両面からの剥離によって作出されている。左側は欠損しているが，右側には若干の抉りが認められるので，棒状のものに装着して使用されたことも推定される。

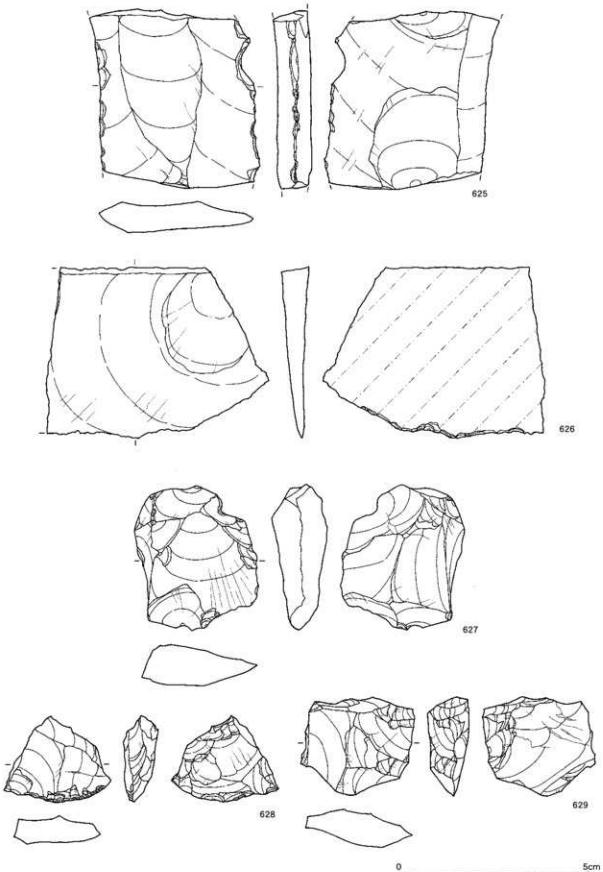
637は，やや厚みのある礫の下部に，表面から剥離によって刃部を作出している。集石17号の中から出土しており，何らかの理由で欠損したのち，集石を構成する礫として再利用されたものと思われる。

⑻　磨石・敲石（第164～167図638～672）

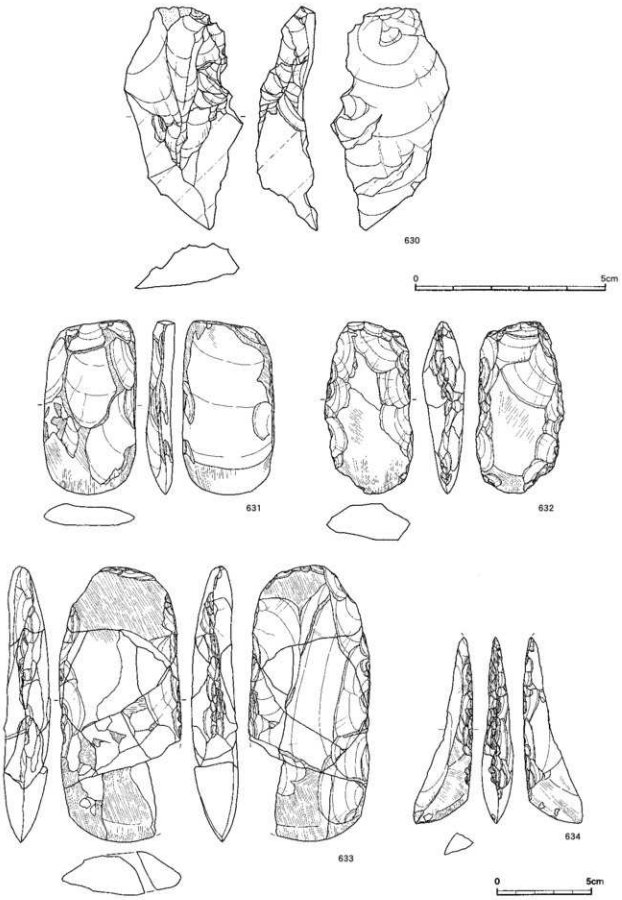
磨面や敲石痕が認められるものを，磨石・敲石として一括して取り扱い，形態等から３類に大別した。石材は安山岩が大部分を占めるが，凝灰岩，砂岩，花崗岩，泥岩，流紋岩もみられる。35点図化した。



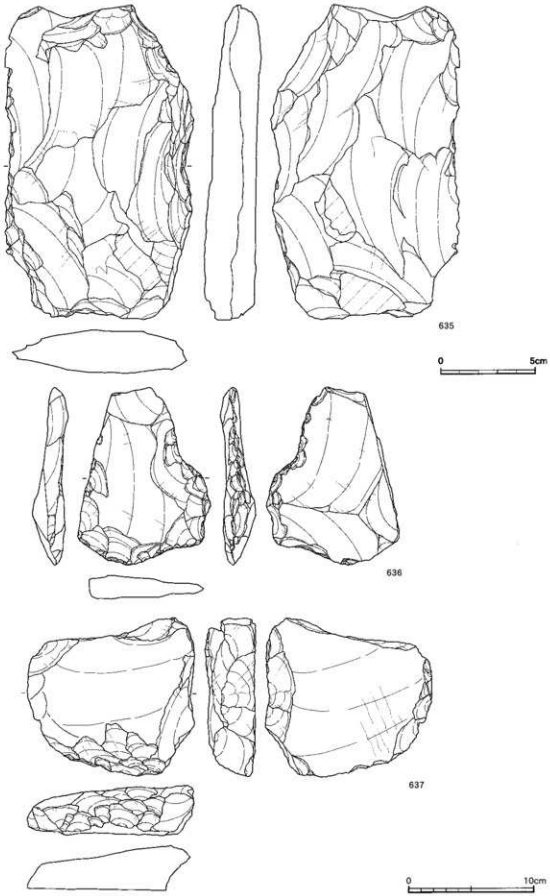
第160図　中央部　縄文時代早期の石器(2)



第161図　中央部　縄文時代早期の石器(3)



第162図　中央部　縄文時代早期の石器(4)



第163図　中央部　縄文時代早期の石器(5)

Ⅰ類（第164，165図638～655）

表・裏面に磨面がみられ，敲打痕があまりみられない。

638～641は最大長が５㎝程度あるいは，それに満たない小型の磨石である。647と649の磨面には，わずかに敲打痕と思われるものもある。650と651の周縁部には，わずかに敲打痕がみられる。652～655は大型の磨石の破片と思われる。653や655は，表裏両面ともに磨面が認められる。

Ⅱ類（第166，167図656～670）

表・裏面に磨面のほかに，敲打痕がみられるもの。

656～661は，表・裏面にも端部・周縁部にも敲打痕がみられる。656は表裏両面に敲打痕がみられる。660，661は，表・裏面の敲打痕も周縁部の敲打痕も顕著である。

662～670は，敲打痕が主に端部・周縁部に集中しているものである。663は，裏表両面ともに磨面が顕著で，周縁部のすべてに敲打痕がみられる。664は大型の磨石で，集石の礫を構成していた。裏面の磨面が顕著で，端部には敲打痕がみられる。666～670は裏面に磨面がみられ，周縁部の敲打痕が顕著である。

Ⅲ類（第167図671，672）

表・裏面に，敲打による凹みがみられるもの。

671，672は，敲打痕が集中して凹石となったものである。671は表裏両面に敲打による凹みがみられる。672は裏面の凹みが顕著である。また表面は磨面として利用され，使用により球面が平面に変形している。

⑼　石皿（第168～170図673～685）

673～685は石皿である。長径が30㎝を超えるものから10㎝程度のものまで，大小あわせて13点ある。石材は安山岩が多いが，砂岩・泥岩・花崗岩もみられる。

673は両面を使用しており，裏面には敲打痕が集中してみられる。

674～676は片面に磨面がみられる。

677は表の磨面が顕著で，裏面には多数の敲打痕がみられる。

678は花崗岩製の石皿で風化が激しいが，わずかに磨面が残っている部分もある。

680は両面を使用しており，磨面が顕著である。

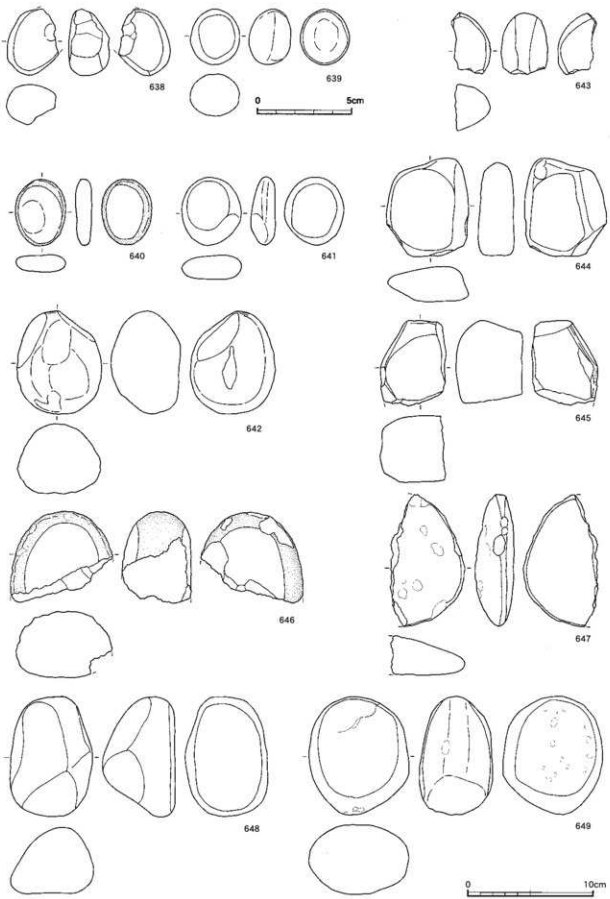
681は表面に敲打によってできた凹みがみられる。

683は風化により一部欠損しているが，使用頻度が高かったためにレンズ状に凹んだものと思われる。

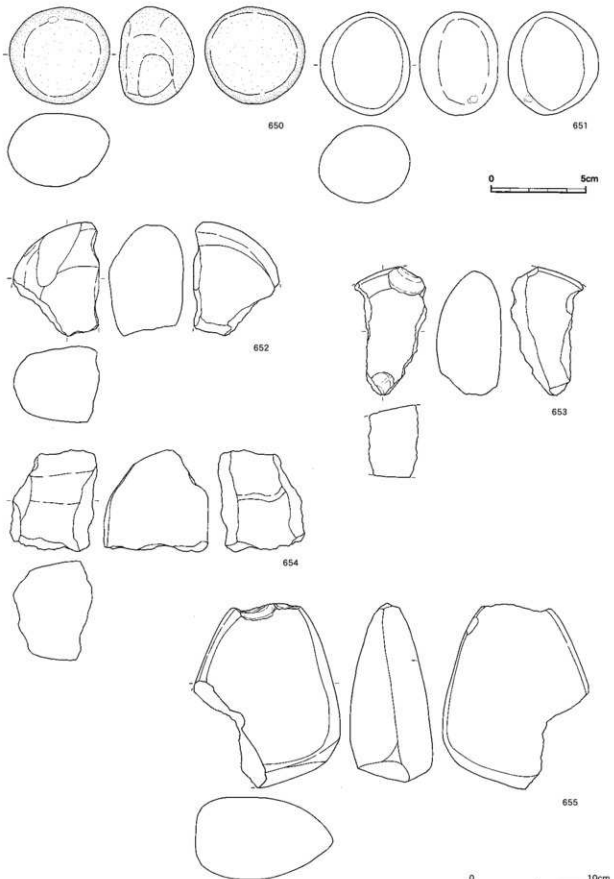
684と685は最大長が25㎝を超える大型の石皿である。684は表裏両面に，磨面と敲打痕がみられる。また，敲打による凹みもみられる。685は表面に磨面がみられ，敲打によるわずかな凹みが表裏両面にみられた。

⑽　軽石製品（第170図686，687）

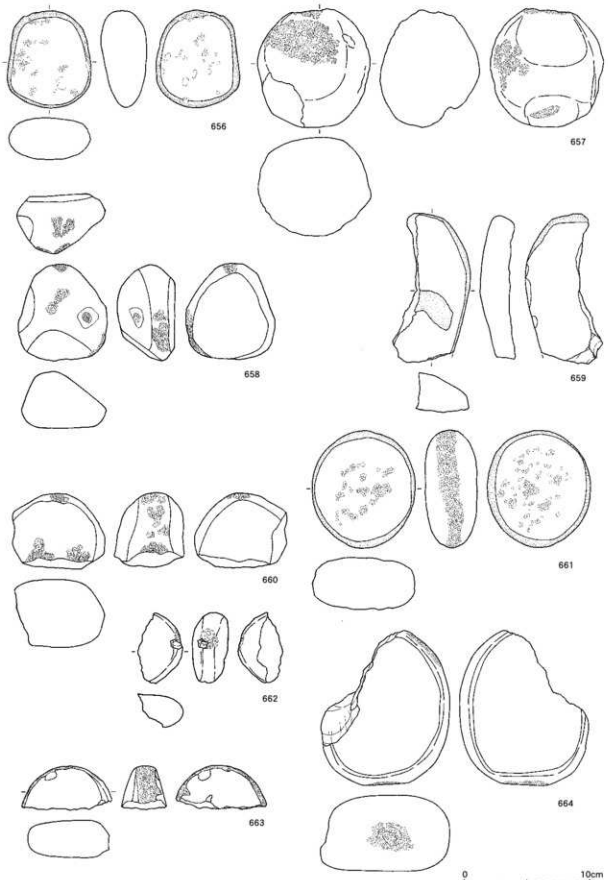
686，687は，いずれも23トレンチの縄文時代早期の包含層から出土している。用途については不明だが，しっかりと面取りがしてあることから，意図的に加工したものと判断した。



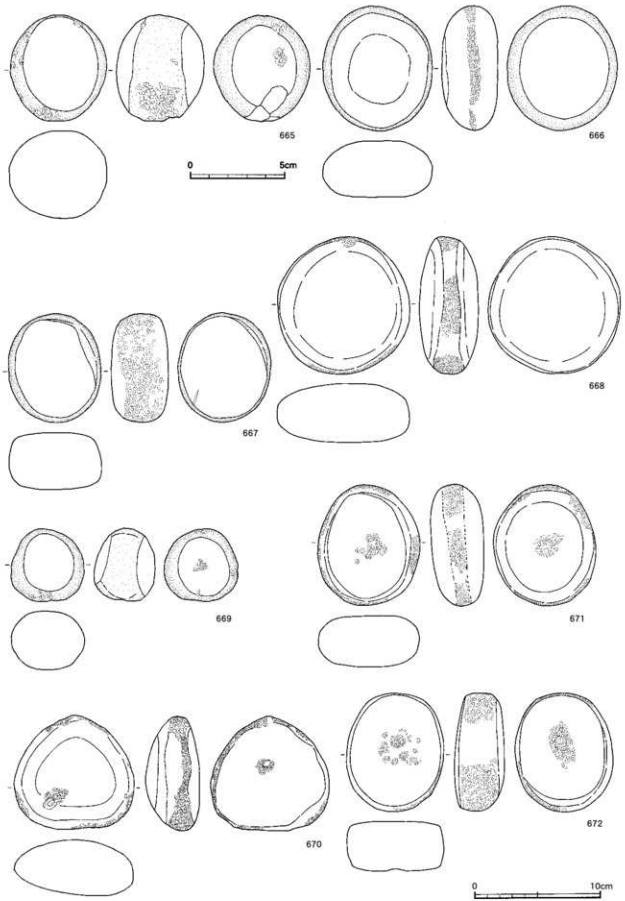
第164図　中央部　縄文時代早期の石器(6)



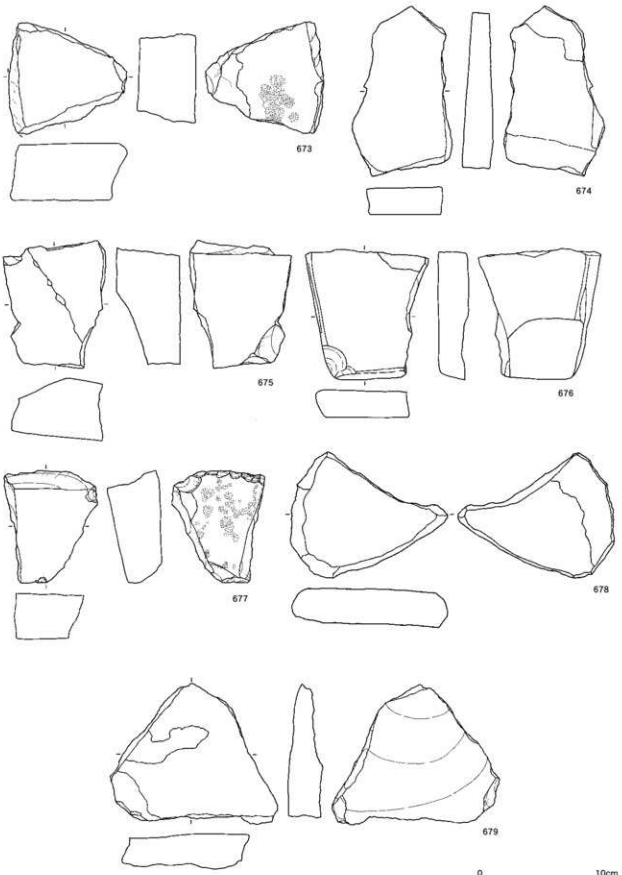
第165図　中央部　縄文時代早期の石器(7)



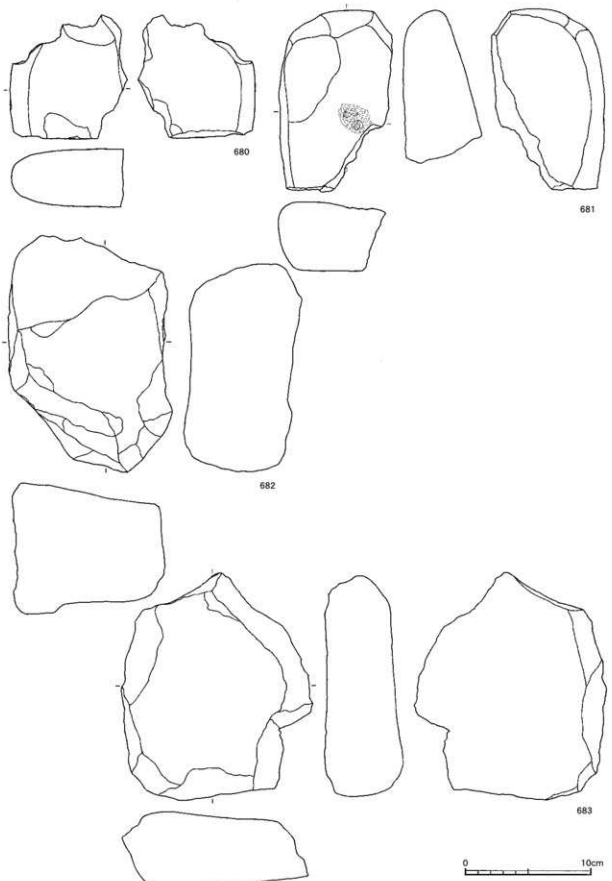
第166図　中央部　縄文時代早期の石器(8)



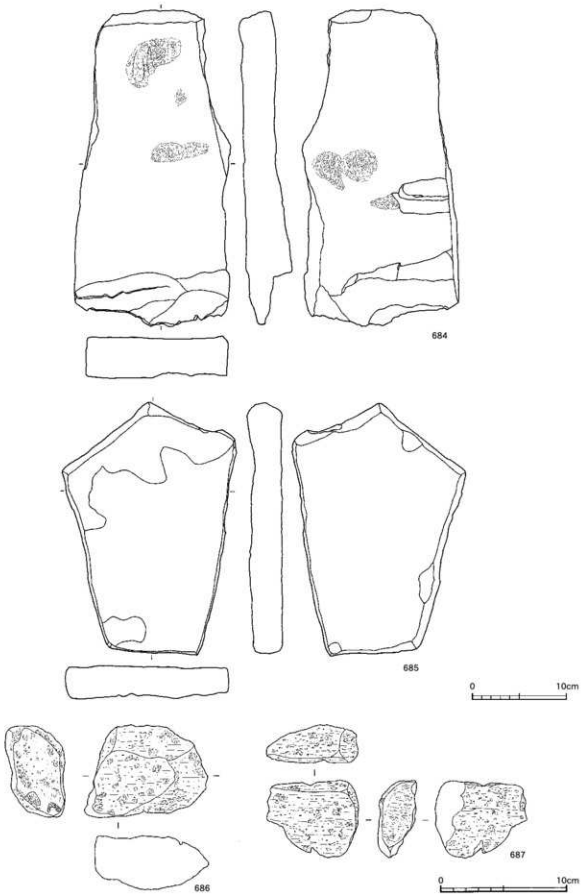
第167図　中央部　縄文時代早期の石器(9)



第168図　中央部　縄文時代早期の石器(10)



第169図　中央部　縄文時代早期の石器(11)



第170図　中央部　縄文時代早期の石器(12)

2　縄文時代晩期

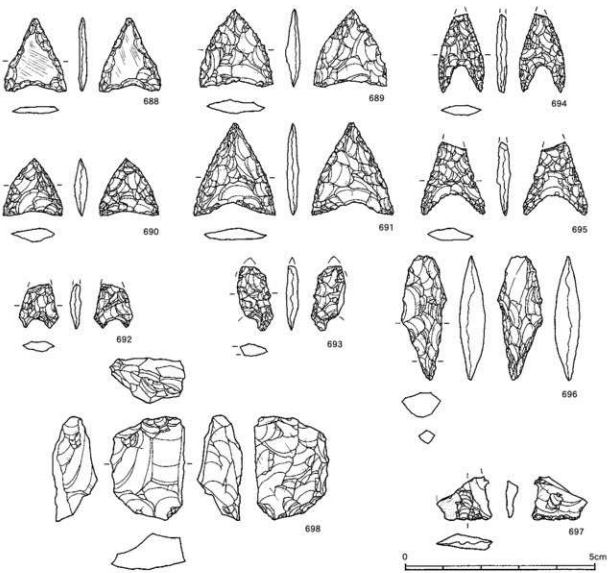
縄文時代晩期の石器は，打製石鏃，石錐，楔形石器，磨製石斧，礫器，磨石が出土した。いずれも縄文時代晩期の包含層である　〃　層から出土したものである。一部，表採の遺物もあるが，出土した場所の，周辺の包含層の撹乱の状況から縄文時代晩期の遺物と判断した。石材としては，黒曜石，安山岩，チャート，玉髄，頁岩，砂岩，泥岩，凝灰岩，花崗岩，流紋岩などがみられた。

⑴　打製石鏃（第171図688～695）

688～691は全体の形状が正三角形状（長幅比＝1：3：1未満とした）を呈するものである。いずれも基部の抉りは小さい。692～695は全体の形状が二等辺三角形（長幅比1：3：1以上とした）を呈するものである。692は上部が欠損しているが，両面から丁寧な剥離で整形してある。693は左側が欠損しているが，抉りを入れ脚部を作出していることがわかる。694，695はいずれも，先端部が欠損しているが，基部に深い抉りがあり，明確に脚部が作出されているものである。

⑵　石錐（第171図696）

696は頁岩製の石錐である。表裏両面に両側縁から丁寧に整形している。はっきりとした摩滅は



第171図　中央部　縄文時代晩期の石器⑴

みることができない。

⑶　楔形石器（第171図697，698）

697は黒曜石製で，薄い剥片素材を利用している。上部は欠損しているが，下端には使用痕がみられることから楔形石器と判断した。698はチャート製で，厚手の剥片を使用し上端と下端に使用痕が認められ，楔形石器特有の剥離痕がみられる。

⑷　磨製石斧（第172図699）

699は小型の磨製石斧である。刃部と表裏面を丁寧な研磨で仕上げている。石材は安山岩で，最大長９㎝，最大幅4 9㎝という小型のものである。基部にわずかながら抉りがみられることから，棒状のものに装着して使用されたことも推定される。

⑸　礫器（第172図700）

700は扁平な礫を用いて周囲に加工を施し，刃部は両側からの剥離によって作出されている。石材は安山岩である。

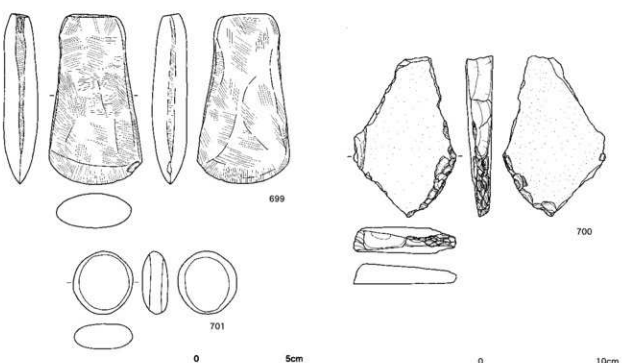
⑹　磨石（第172図701）

701は泥岩製で，最大長が3 3㎝の小型の磨石である。裏面に磨面がみられる。

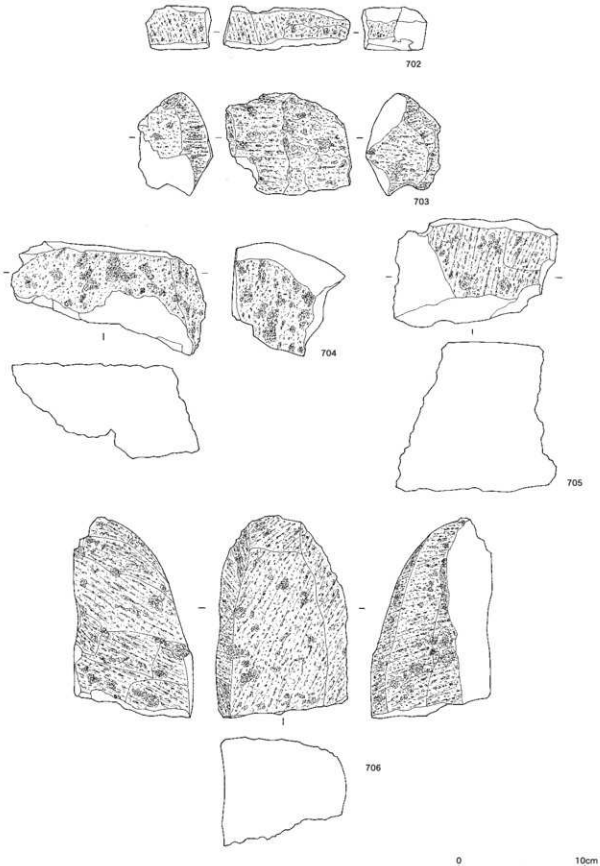
３　古代

⑴　軽石製品（第172，173図702～707）

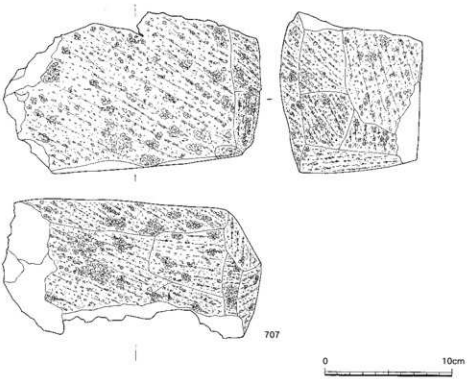
古代の石器は軽石製品のみが出土した。はっきりと用途が分かるものはないが，いずれも丁寧に面取りがしてあることから，軽石製品と判断した。熱を受けていると思われるものもあり，炉などを組む石材として利用された可能性も指摘できる。



第172図　中央部　縄文時代晩期の石器⑵



第173図　中央部　古代の石器(1)



第174図　中央部　古代の石器(2)

第23表　中央部　石器観察表(1)

掃図番号	レイアウト番号	器　種	出土区・層		石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
159	608	石鏃	K-27		黒曜石	1.5	1.3	0.3	0.43	
	609	石鏃	K-35		黒曜石	1.1	1.2	0.25	0.17	
	610	石鏃	H-52		チャート	1.5	1.8	0.3	0.77	
	611	石鏃	G-44		黒曜石	1.9	1.6	0.3	0.70	
	612	石鏃	H-39		玉髄	2.5	2.2	0.3	1.83	一括
	613	石鏃	H-41		チャート	1.8	1.1	0.2	0.39	
	614	石鏃	H-40		チャート	3.2	1.8	0.3	1.63	
	615	石鏃	L-42		チャート	2	1.9	0.4	1.49	
	616	石鏃	I-35		チャート	3.6	1.7	0.4	2.03	
160	617	スクレイパー	23T		安山岩	5.5	4.2	0.5	20.45	
	618	スクレイパー	23T		安山岩	5.5	5.4	1	36.06	
	619	スクレイパー	23T		安山岩	6.7	6	0.8	37.91	
	620	スクレイパー	23T		安山岩	5.8	6	1.4	58.58	
	621	スクレイパー	23T		安山岩	6.6	6	1.1	42.94	
	622	スクレイパー	23T		安山岩	6.4	3.3	0.9	19.16	
	623	スクレイパー	23T		安山岩	11.2	5.2	1	40.33	
	624	スクレイパー	23T		安山岩	14.6	5.5	0.8	71.11	
161	625	スクレイパー	23T		安山岩	4.7	4.5	0.7	22.07	
	626	スクレイパー	23T		頁岩	4.5	5.9		21.17	
	627	スクレイパー	23T		チャート	3.8	3.3	1.1	17.33	
	628	スクレイパー	22T		チャート	2.2	2.8	0.7	5.03	
	629	スクレイパー	23T		チャート	2.6	3	1	8.62	
162	630	微細剥離痕剥片	23T		チャート	5.9	3.1	1.2	19.78	
	631	磨製石斧	23T		安山岩	9.2	4.8	1.1	94.01	
	632	刃部磨製石斧	K-34		頁岩	9.1	4.7	2	106.61	
	633	刃部磨製石斧	23T		頁岩	14.5	6.4	2.2	250.67	
	634	刃部磨製石斧	23T		ホルンフェルス	9.9	3.1	1.2	28.54	
163	635	打製石斧	I-42		頁岩	16.55	9.95	3	518.18	
	636	礫器	K-45		安山岩	14	10.5	1.9	316.88	
	637	礫器	H-51	-	安山岩	12.5	13.2	4	839.16	集石24号

第24表　中央部　石器観察表(2)

挿図番号	レイアウト番号	器　種	出土区・層		石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
164	638	磨石	23T		安山岩	3.5	2.7	2.1	26.07	
	639	磨石	K-44		砂岩	2.9	2.6	2.2	23.76	
	640	磨石	33T	表採	砂岩	5.2	3.9	1.4	28.00	一括
	641	磨石	J-41		安山岩	5.85	4.65	1.8	70.30	
	642	磨石	H-51	-	凝灰岩	8.1	6.7	5.5	384.74	集石24号
	643	磨石	H-38	b	花崗岩	4.8	3	3.7	58.00	
	644	磨石	G-48	上面	安山岩	7.7	6.4	2.8	224.46	集石21号
	645	磨石	L-38		安山岩	6.7	5.15	5.2	319.24	
	646	磨石	H-38		凝灰岩	7.2	8.05	5.2	323.00	
	647	磨石	J-36		凝灰岩	10.4	5.85	3.1	211.56	
	648	磨石	K-32		安山岩	9.4	6.5	5.2	484.80	
	649	磨石	H-52		凝灰岩	9.3	7.9	5.5	483.48	
165	650	磨石	H-50		安山岩	5.1	5.3	3.9	150.04	
	651	磨石	H-39		安山岩	5.45	4.8	4.1	153.04	
	652	磨石	J-43		安山岩	8.9	6.7	6	423.08	
	653	磨石	23T		安山岩	10.5	5.6	5.7	365.99	
	654	磨石	L-24		安山岩	8.9	7.5	7	522.56	
	655	磨石	H-51		安山岩	14.5	11.6	6.4	1275.06	集石24号
166	656	磨石	I-35		安山岩	7.6	6.6	3.3	231.00	
	657	磨石	H-51	-	凝灰岩	9.2	8.9	7.7	829.79	集石24号
	658	磨石	H-15	—	安山岩	7.5	7	4.5	305.00	集石24号
	659	磨石	G-48	上面	安山岩	11.8	6.1	3	241.06	集石21号
	660	磨石	L-23		花崗岩	6	7.3	5.5	310.00	集石7号
	661	磨石	K-45		安山岩	9.25	8.1	4.1	481.27	
	662	磨石	J-31		安山岩	5.6	3.6	2.9	50.00	
	663	磨石	J-33		流紋岩	3.5	7.1	3	100.80	
	664	磨石	H-51	-	安山岩	12.2	10.2	6	1071.53	集石24号
167	665	磨石	I-39		安山岩	5.6	5.1	4.6	187.47	
	666	磨石	K-45		安山岩	9.8	8.65	4.4	554.10	
	667	磨石	J-32		安山岩	8.6	7.3	4.5	464.47	
	668	磨石	H-42		泥岩	10.75	10.5	4.6	731.04	
	669	磨石	23T		花崗岩	5.7	5.8	4.6	196.35	
	670	磨石	L-44		安山岩	9	9.4	4.3	465.00	集石19号
	671	磨石	H-51		砂岩	9.5	8.1	4.2	444.78	
	672	磨石	H-51		泥岩	9.3	7.7	3.9	444.51	
168	673	石皿	23T		安山岩	8.8	9.35	4.5	591.02	
	674	石皿	J-45		安山岩	13.4	7.9	2.2	397.48	
	675	石皿	J-46		安山岩	10.1	8.1	4.9	618.27	
	676	石皿	H-49		泥岩	10.3	9.7	2.2	354.07	
	677	石皿	K-29		安山岩	8.9	7.3	3.6	347.88	
	678	石皿	J，K-45		花崗岩	12.2	9.9	2.8	423.50	磨一括
	679	石皿	I-35		泥岩	11.1	13.2	2.8	499.12	
169	680	石皿	L-36		砂岩	9.8	8.8	4.6	546.50	
	681	石皿	H-51		安山岩	12	8.5	6.1	1041.00	
	682	石皿	G-46	b	安山岩	16.3	12	11.4	3000.00	一括
	683	石皿	H-51		花崗岩	17.3	14.7	6.2	2240.50	
170	684	石皿	I-42		安山岩	33	15.3	4.3	4000.00	
	685	石皿	J-46		安山岩	26.5	17.2	3.5	2000.00	
	686	軽石製品	23T	-	-	9.8	7.3	4.3	52.10	土坑2
	687	軽石製品	23T	-	-	7.3	6	3	22.79	土坑6
171	688	石鏃	L-27		ホルンフェルス	2	1.6	0.2	0.71	
	689	石鏃	J-37	a	頁岩	2.1	1.9	0.4	1.27	
	690	石鏃	J-31	表採	安山岩	1.5	1.6	0.3	0.64	一括
	691	石鏃	K-31	b	安山岩	2.5	2.1	0.4	1.24	
	692	石鏃	22T	表採	黒曜石	1.2	1	0.3	0.26	一括
	693	石鏃	22T	表採	黒曜石	1.7	0.9	0.3	0.47	一括
	694	石鏃	L-31		チャート	2.1	1.2	0.3	0.64	
	695	石鏃	L-44	b	チャート	1.9	1.7	0.3	0.75	
	696	石錐	J-31	b	頁岩	3.3	1.2	0.6	2.18	
	697	楔形石器	K-34	b	黒曜石	1.4	1.1	0.3	0.36	
	698	楔形石器	22T		チャート	2.8	1.9	1	6.94	落ち込み一括
172	699	磨製石斧	K-26		安山岩	9	4.9	1.8	118.58	
	700	磨器	J-46	b	安山岩	12.6	8.1	1.6	233.64	
	701	磨石	22T	表採	泥岩	3.3	3.1	1.3	20.72	
173	702	軽石製品	I-46	カクラン	-	10	3.5	5.1	56.40	
	703	軽石製品	J-46	a	-	8	10	5.9	141.80	
	704	軽石製品	H，I-49	b	-	14.7	9	7.4	259.00	
	705	軽石製品	J-16	b	-	11.7	12.6	8.5	489.00	
	706	軽石製品	J-16	a	-	15.9	10	8.5	565.50	
174	707	軽石製品	J-46	b	-	20.4	12.6	11.2	992.00	

第６節　金属製品（第175図708～714）

708～714は金属製品である。708以外の709～714については　ｂ層出土で，古墳時代～古代までの時期と想定することができる。Ｋ，Ｌ－26，27区に集中が見られ，周辺の包含層遺物の出土状況から古代の遺物の可能性が高い。これらを一括して金属製品として取り扱った。

煙管（第175図708）

708は煙管の雁首部分である。円筒状に延びる胴部とややすぼまりながら締まる首部から垂直に上位へ開く火皿部分が鐶付けされている。青銅製で火皿口径は10㎜である。火皿と首部の間に補強帯が無く，首部の湾曲が弱く直線的であることから19世紀以降のものである。

刀子（第175図709，710）

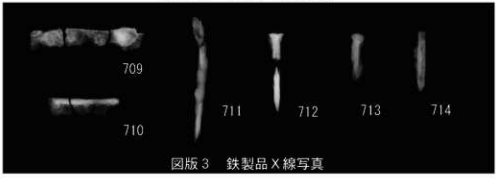
709，710は鉄製の刀子であり，どちらも両端が欠損した身部のみの出土であり全長は不明である。709には一部木質が付着し錆と一体化している。鞘の可能性も考えられる。（図版２）

釘（第175図711～714）

711～714は鉄釘と思われるもので，直線的なものであるが欠損品が多く全体形は不明である。

図版２　No.709木片付着痕拡大写真

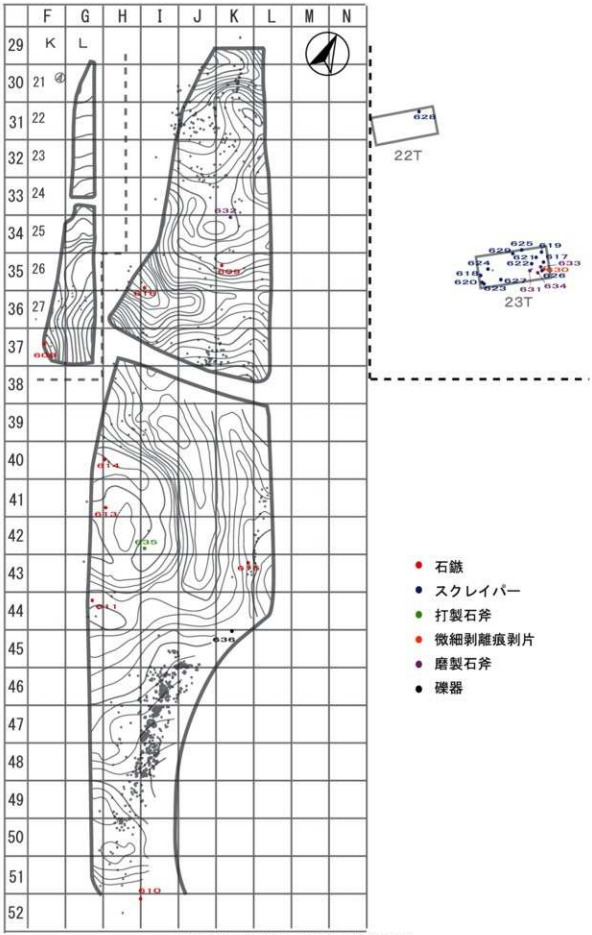
第175図　中央部　金属製品



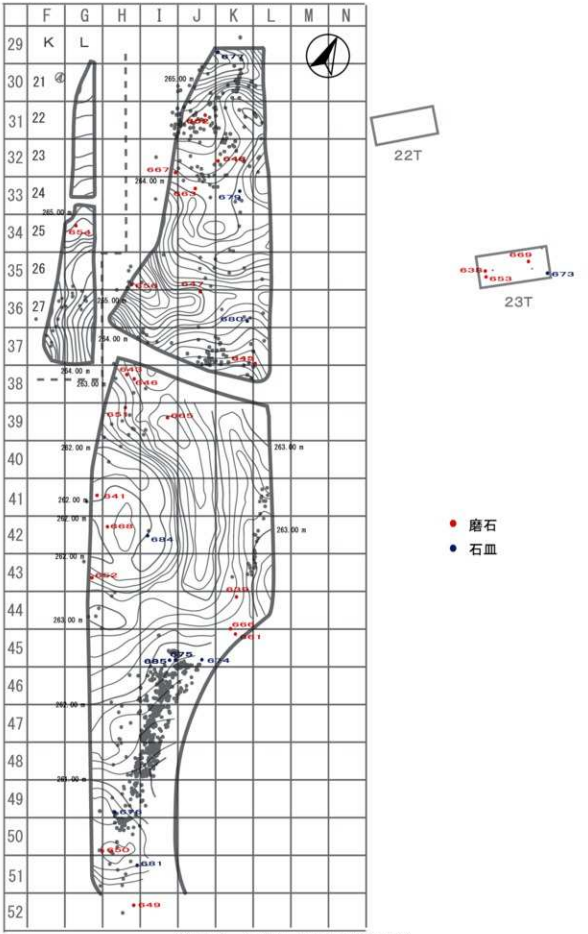
図版３　鉄製品Ｘ線写真

第25表　中央部　金属製品観察表

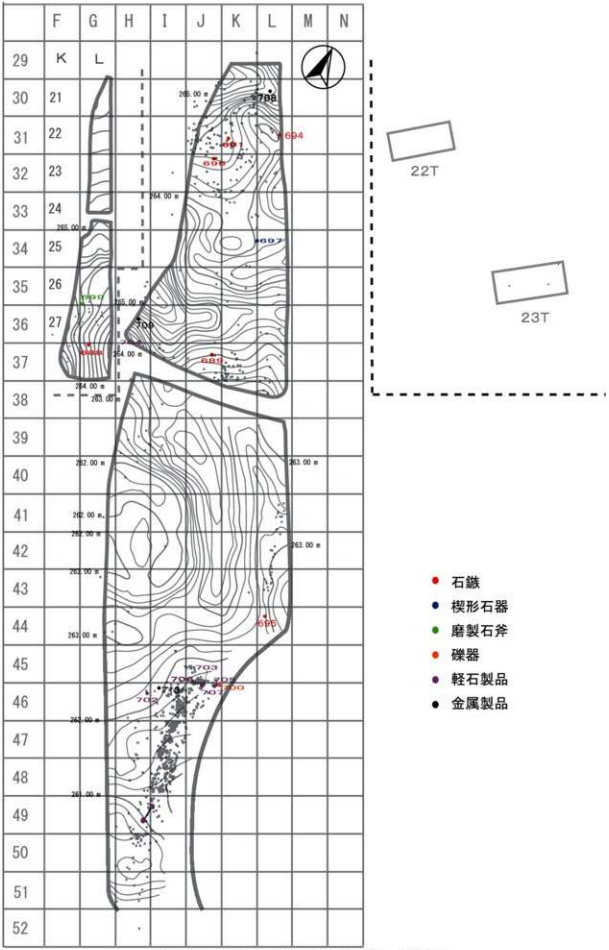
挿図番号	レイアウト番号	器種	出土区	層	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	備考	注記番号
175	708	煙管	L-30		4.0	1.1	1.1	7.0		1582
	709	刀子？	H-36	b	(6.8)	1.5	0.8	7.0	接合	4975
	710	刀子？	K，L-26，27	-	(4.4)	(1.3)	(0.6)	(5.5)		-
	711	釘	K，L-26，27	-	(8.0)	1.0	1.0	7.5	接合	鉄間
	712	釘	K，L-26，27	-	(4.6)	(0.9)	(0.7)	4.5	接合	鉄間
	713	釘	I-46	-	(2.9)	0.9	0.8	2.0		表採
	714	釘？	K，L-26，27	-	(3.7)	0.7	0.6	3.0		-



第176図　中央部　石器出土状況図(1)



第177図　中央部　石器出土状況図(2)



第178図　中央部　石器出土状況図(3)，金属製品

第Ⅵ章　南部の調査

第１節　調査の概要（第179図）

南部の本調査は，Ｇ～Ｈ－53～66区を平成18年10月～平成19年３月に中央部調査区と並行しながら行った。

南部調査区は，中央部調査区の南側部分に相当する。この南側部分は，緩やかに傾斜しながら谷を形成し，特に谷の東側は深く切り込まれ，高低差は20mに達する。なお，谷を隔てた台地には，高古塚遺跡が立地している。

調査区の面積は4,600㎡で，南北約200m，東西の幅が約25mの細長い長方形を呈した調査区である。調査以前は，平坦地は畑地，傾斜地は杉の人工林であった。

平成17年度の調査では，南部調査区に計13ヶ所の確認トレンチを設定し，遺構や遺物包含層の残存状況を確認し，その結果，Ｇ～Ｈ－53～66区では，一部消滅している部分もあったが，ほぼ全面で畝状遺構が確認された。そこで，Ｇ～Ｈ－53～55区，Ｇ～Ｈ－56～59区，Ｇ～Ｈ－60～66区の順に本調査を実施し，畝状遺構の把握を目指し調査を進めた。畝状遺構の残存状況把握後，古代の遺構・遺物の調査を引き続き実施した。

なお，67区以南は耕地面積の拡大を目的とした開墾や，近年の畑地整備事業に伴う土地改良により大規模な削平が行われ，遺構・遺物は残されていなかった。

南部の検出遺構は，古代～中世の掘立柱建物跡，土坑，畝状遺構，中世の畝状遺構，土坑，近世の畝状遺構などである。

出土遺物は，縄文時代後～晩期の土器や石鏃，石匙などの石器が数点出土した。

古代では，土師器，須恵器が出土し，特に，内黒土師器，墨書土器，外朱土器，線刻土器，焼塩土器等の存在は注目される。

また，中～近世の陶磁器も出土している。

第２節　南部の層位（第180，181図）

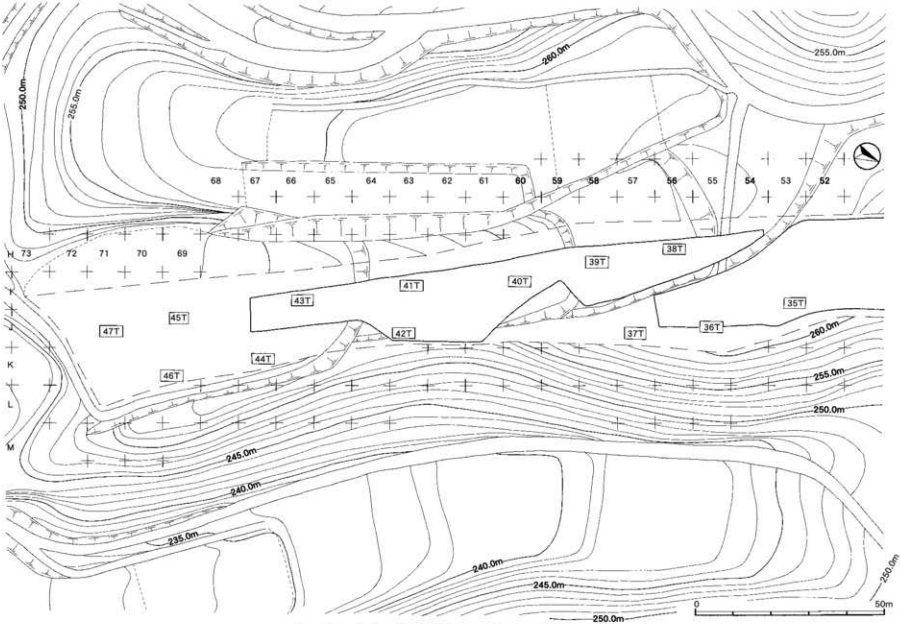
現地形は，流入土が自然に作られた堰により平坦面を段々に形成しているが，下層へ行くに従い全体的に谷に接する東側が高く，低い西側へ大きく傾斜していることが判明した。

53～55区では，表土層が削平され耕作土直下は　～　層となっていた。また，西側は遺物包含層が良好に残されていたが，東側は傾斜が厳しく上層が削平される傾向が見られた。

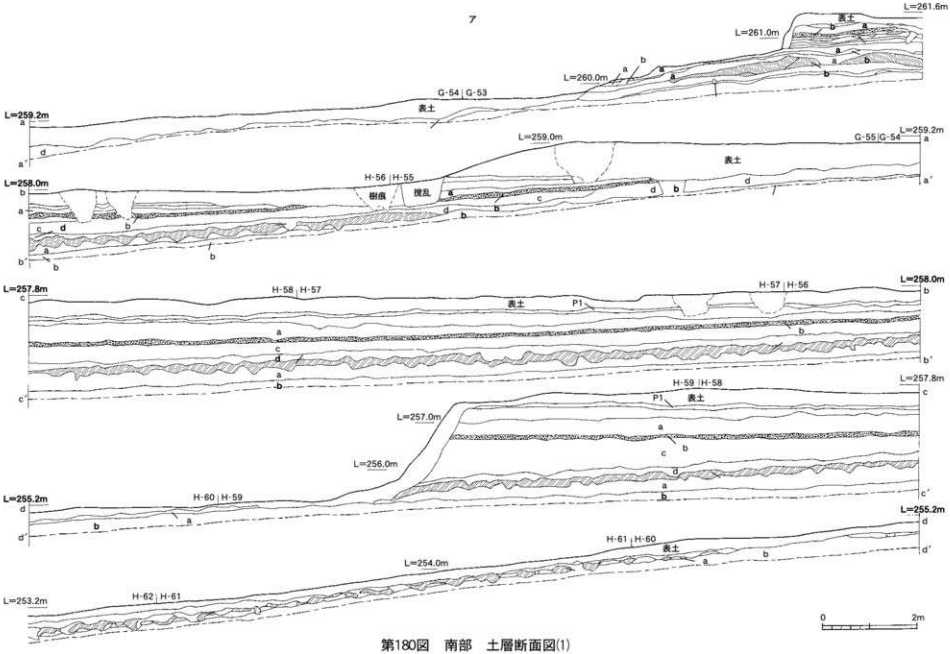
56～60区でも同じように，西側は遺物包含層が良好に残されていたが，東側は傾斜が厳しく上層が削平される傾向が見られた。西側には　層の文明ボラ層が良好に残されていたが，上位の安永ボラ層を含む自然堆積土が厚く堆積していた。耕作土直下には，桜島の大正火山灰（1914年）も確認され，Ｐ１～Ｐ３までが実見でき貴重な資料となった。

61～64区では，西側が基本層位を保ち厚く堆積しているのに対して，東側は切り立った崖状を呈し，シラスが露出していた。

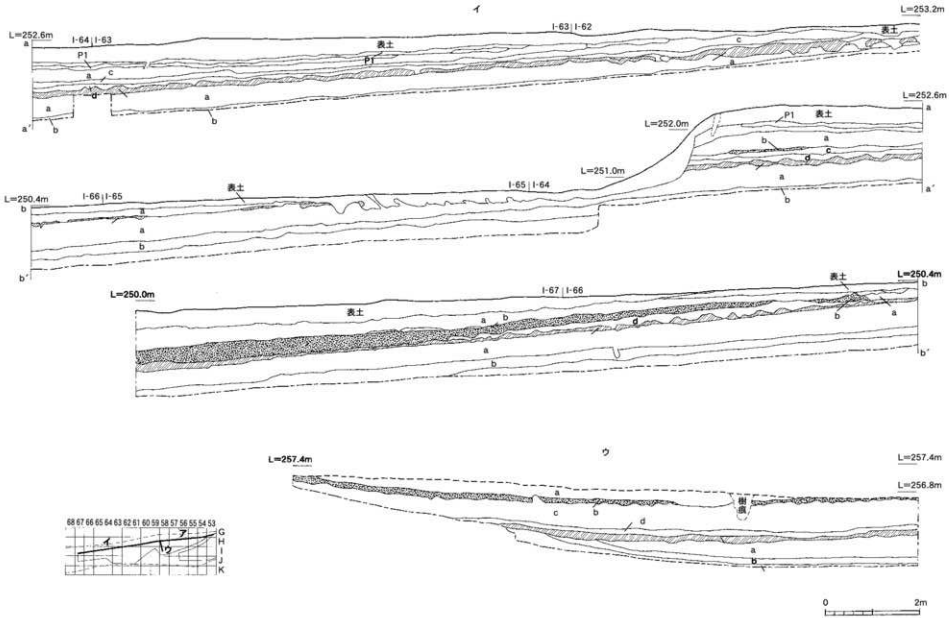
65区以南は，東西方向の傾斜に加えて南側への傾斜も大きくなり，谷へと落ち込んでいた。



第179図　南部　調査範囲図及びトレンチ配置図



第180図　南部　土層断面図(1)



第181図　南部　土層断面図(2)

第３節　検出遺構

南部の検出遺構は以下の通りである。

縄文時代の調査は，台地の縁辺部に当たる部分でのみ調査を行い，土坑が４基検出された。

古代〜中世の遺構は，　層上面で掘立柱建物跡２棟，畝状遺構１群，土坑12基が検出された。

中世〜近世の遺構は，　ａ層上面で畝状遺構６群，土坑14基が検出された。この中には，　ｃ層上面で検出された近世の畝状遺構１群も含んでいる。

斜面の多い中で，わずかな平坦面に掘立柱建物跡や畝状遺構，土坑等が設けられていた。

１　縄文時代（第182，196図）

縄文時代の遺構は土坑が４基検出された。

⑴　土坑（第182，196図）

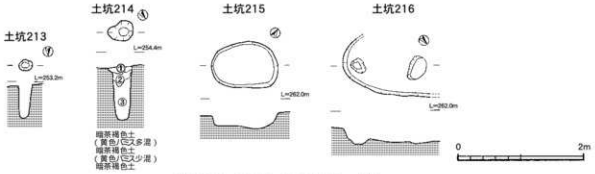
縄文時代の土坑は，　層で検出された中〜晩期の　類の土坑（土坑213，214）と，　層上面で検出された早期の　類の土坑（土坑215，216）に分けられる。

土坑214（第182図）

Ｉ－59区の　層上面で，土坑213から約３ｍ離れて検出された。平面形は一部凹んだ円形を呈し，長径40㎝，短径32㎝，検出面からの深さは84㎝である。底面は丸みを持ったＵ字状を呈している。埋土は御池火山灰を含む暗茶褐色土で砂質が強い。

土坑216（第182図）

Ｊ－55区の　層上面で検出された。土坑215の北側約３ｍで土坑216が検出され，一部が調査区外へ延びる。検出された平面径は長径が154㎝，短径が70㎝であり，楕円形になるものと思われる。検出面からの深さは22㎝で，底面は不定形で内弯しながら立ち上がる。どちらからも埋土中から遺物は出土しなかった。



第182図　南部　縄文時代　土坑

２　古代〜中世（第183〜189図）

古代〜中世の遺構は，　層上面で掘立柱建物跡が２棟，土坑11基，畝状遺構１群が検出された。埋土は　ｂ層が主体であり，遺構内遺物がほとんど見られないが，中世末の可能性を残すことから古代〜中世の遺構として取り扱った。

⑵　掘立柱建物跡（第183，184，187図）

古代〜中世の掘立柱建物跡は２棟検出された。建物規模は４号がやや大きく，主軸の方向が異なり重なるようにして検出された。

掘立柱建物跡４号（第183図）

Ⅰ，Ｊ－61，62区で，　層上面にて検出された。建物の規模は２間　３間，10個のピットからなり，主軸は略南北方向である。桁行の平均は約4 5m，梁行の平均は約2 4mであり，柱間寸法の平均は桁行柱間が1 9m，梁行柱間が1 6mでありほぼ等間隔である。北東側がやや張り出しているが，ほぼ長方形を呈しており，床面積はおよそ10 8㎡である。建物内に赤化するような焼土跡は見られなかったが，南側には炭化物の集中域が認められた。

ピットはほぼ円形を呈し，平均して径35　32 8㎝，深さ26㎝でありほぼ同規模であるが，Ｐ１が比較的深い。柱の径は，残存部分がなく，柱痕跡も見あたらないことから不明であるが，ピット底径よりわずかに小さくなるものと思われ，廃棄時に抜き取られた可能性も考えられる。ピット中の埋土は，古代の遺物包含層である　ｂ層の暗褐色土であり，上位に黄色パミスや炭化物が混ざるものがあった。埋土中より出土遺物は確認されなかった。

北側のピット底面のレベルが，南側よりやや高くなっている。遺構検出面も北側が高く南側に向かって緩やかに傾斜していることから，地形に合わせて建てられたと推測される。しかし，建てられた当時は平坦であり，南部調査区全体の地形が長い年月の間に変動したとも考えられるので，上部構造が残っていない現在では一概に断定は出来ない。

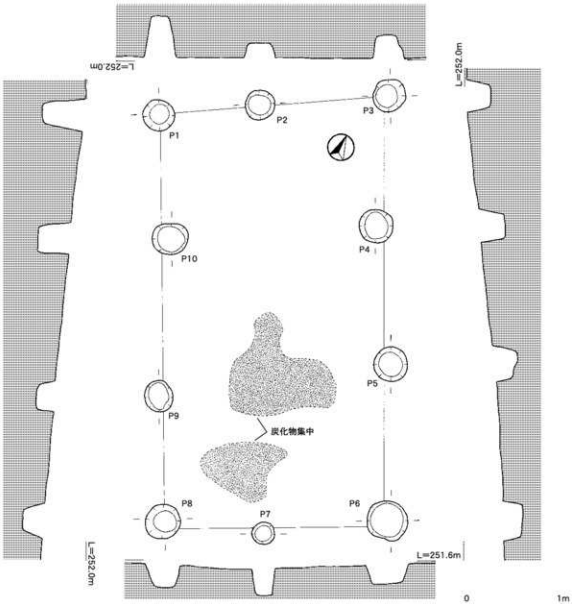
掘立柱建物跡５号（第184図）

Ⅰ，Ｊ－61，62区で，掘立柱建物跡４号と重なるようにして検出された。検出面は同じく　層上面である。建物の規模は２間　３間，10個のピットからなり，主軸は略東西方向である。桁行の平均は約2 3m，梁行の平均は約3 6mであり，柱間寸法の平均は桁行柱間が1 6m，梁行柱間が1 5mであるが，梁行柱間Ｐ１－Ｐ２，Ｐ６－Ｐ７間が約3 5mであり，その他の梁行柱間の平均1 4mと比べて広い。建物の上部構造は現在では分からないが，構造上必要な柱間であったと推測される。平面形は，Ｐ５がやや内に入り込んでいるが，ほぼ長方形を呈しており，床面積はおよそ6 .1㎡である。建物内に焼土跡は見られなかったが，西側に炭化物の集中域が認められた。掘立柱建物跡４号と同様，地形に沿って検出されており，西側がやや高くなっている。

ピットは，平均して径38 4　35 2㎝，深さ29㎝のほぼ円形を呈しているが，長径32㎝と小さめのＰ８から，長径44㎝とやや大きめのＰ２，Ｐ９まであり一定ではない。深さも14～50㎝と幅があり，上部構造に合わせた深さではないかと考えられる。柱の径は，残存部分がなく不明であるが，Ｐ７の床面に柱痕跡ではないかと思われる凹みがあり，Ｐ７については柱径が12㎝前後ではないかと推定される。しかし，掘立柱建物跡４号と比べるとピットの並びや形状に規則性が薄く，簡易的な建物であったと思われるので，他の柱が同規模の大きさであったとは考えにくい。廃棄時に抜き取られた可能性も考えると，ピット底径よりわずかに小さくなるものと思われる。ピット中の埋土は，ほとんどが古代の遺物包含層である　ｂ層の暗褐色土の単一であり，上位に炭化物が混ざるものがいくつか見られた。埋土中より出土遺物は確認されなかった。

掘立柱建物跡４号と５号は，主軸の向きが異なる同規模の建物が重なるようにして検出されているので，前後関係は不明であるが，わずかな時間差により建て替えられた可能性がある。

なお，掘立柱建物跡４号の建物規模，ピット形状などは第26表に，掘立柱建物跡５号の建物規模，ピット形状などは第27表に示した。



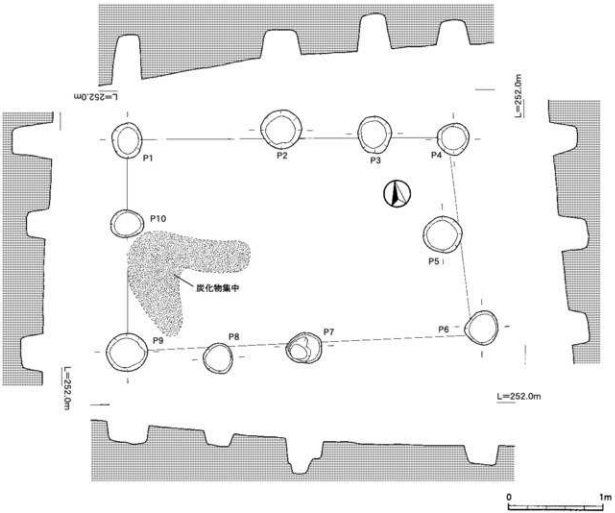
第183図　南部　古代～中世　掘立柱建物跡４号

第26表　南部　掘立柱建物跡４号計測表

主軸方向	桁行(m)	梁行(m)	桁行柱間(m)	梁行柱間(m)
南北	P1 - P8	P1 - P3	P1 - P10	P1 - P2
N-25°-W	4.34	2.42	1.34	1.08
	P2 - P7	P4 - P10	P9 - P10	P2 - P3
	4.56	2.18	1.70	1.36
	P3 - P6	P5 - P9	P8 - P9	P4 - P10
	4.52	2.50	1.34	2.18
		P6 - P8	P2 - P7	P5 - P9
		2.38	4.56	2.48
			P3 - P4	P7 - P8
			1.38	1.08
			P4 - P5	P6 - P7
			1.46	1.32
			P5 - P6	
			1.68	

ピットNo.	P1	P2	P3	P4	P5
長径(cm)	34	32	34	36	36
短径(cm)	32	30	30	36	36
深さ(cm)	44	16	24	26	24

ピットNo.	P6	P7	P8	P9	P10
長径(cm)	44	24	38	34	38
短径(cm)	42	22	36	30	34
深さ(cm)	20	28	24	18	32



第184図　南部　古代～中世　掘立柱建物跡５号

第27表　南部　掘立柱建物跡５号計測表

主軸方向	桁行(m)	梁行(m)	桁行柱間(m)	梁行柱間(m)
南北 N-79°-E	P1-P9 2.26	P1-P4 3.48	P1-P10 0.90	P1-P2 1.64
	P2-P8 2.52	P5-P10 3.34	P9-P10 1.36	P2-P3 1.00
	P3-P7 2.40	P6-P9 3.78	P2-P8 2.52	P3-P4 0.84
	P4-P6 2.02		P3-P7 2.38	P5-P10 3.36
			P4-P5 1.04	P6-P7 1.88
			P5-P6 1.04	P7-P8 0.92
				P8-P9 0.98

ピットNo.	P1	P2	P3	P4	P5
長径(cm)	38	44	40	34	42
短径(cm)	32	42	36	34	40
深さ(cm)	50	28	38	28	28

ピットNo.	P6	P7	P8	P9	P10
長径(cm)	36	38	32	44	36
短径(cm)	34	32	32	40	30
深さ(cm)	20	36	14	24	22

⑶　畝状遺構（第185，187図）

古代～中世の畝状遺構は，掘立柱建物跡に近接して１群検出された。

畝状遺構13（第185図）

Ⅰ－62～64区にかけて，畝状遺構の一群が検出された。　層上面で検出され，黄褐色土を掘り込む形で畝間が残存し，略東西方向を基調とした畝間の列が並んでいる。畝間の列は西側の調査区境まで延びており，調査区外へと広がると見られ全体像は不明である。東側については，北側の数条がグリッドベルト付近まで達しているが，ベルトより東側（Ｊ－62区）では見られないことから，その付近で途絶えていると思われる。また，南側へ下るにしたがって掘り込み始める地点が西側へと寄っている。Ⅰ－63区付近から東側に急激な地層の隆起が見られるので，地形に合わせて耕作可能な平坦面を利用していたと考えられる。

畝間は，平均して幅50㎝前後，検出面からの深さが５㎝前後を基本とする小溝状を呈す。底面に平坦面を持ち，緩やかに立ち上がる。また，北側半分と南側半分ごとのまとまりが見られる。底面には多くの凹凸があり乱れているが，明確な土掘り具痕は判別できなかった。

北側の14条は，畝間の中心間の長さが70～80㎝前後のものが多いが，最小約60㎝，最大約130㎝とばらつきが見られる。途中から方向が北寄りに曲りながら蛇行している。

南側の16条は，畝間の中心間の長さが50～70㎝前後のものが多く，ほぼ等間隔で掘られている。方向は略東西方向で，直線的に並んでいるが東端はそろっていない。

畝部分は流されたと思われ，凸部が見あたらず，高さ，幅等は不明である。

埋土のほとんどは　ｂ層の暗褐色土であるが，上位には細粒な黄色パミスがわずかに混在しており，黄褐色土の小ブロックも混じる部分も認められるので，畝の盛り土や北側の斜面から土砂の流れ込みが推測される。

⑷　土坑（第186，187図）

古代～中世の土坑は，計12基がⅠ，Ｊ－61～64区の　層上面で検出された。埋土は主に　ｂ層の黒褐色土が中心である。形状の特徴から径30～40㎝，深さが30㎝前後の小型の円形を呈するもの（　類，土坑217～220）と，径が約１ｍ，検出面からの深さが15㎝前後のもの（　類，土坑221～228）の２つに大きく分かれる。

土坑217～220（第186図）

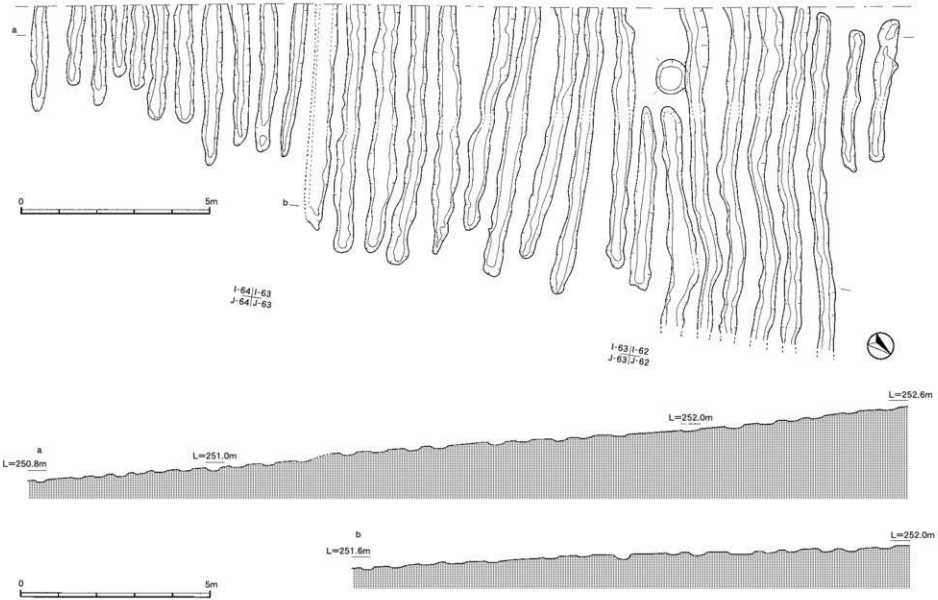
Ⅰ－62区で検出された。掘立柱建物跡に関連するピットであると考えられるが，使用目的が明確にできなかったため，ここでは土坑として取り上げた。平面形はほぼ円を呈し，４基の平均は長径33 5㎝，短径31㎝，検出面からの深さは29 5㎝である。埋土は，　ｂ層が主体である。

土坑221（第186図）

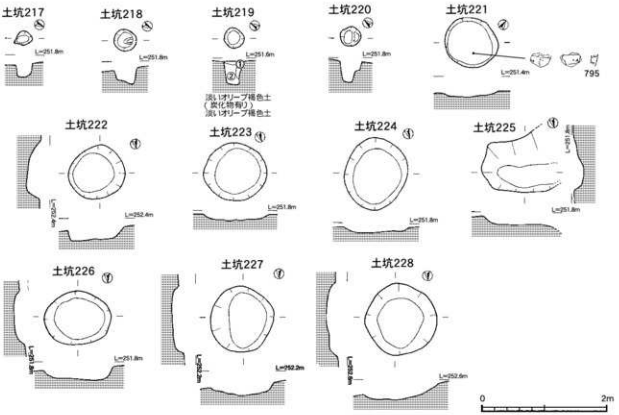
畝状遺構13の南側で畝間の東端に隣接するように検出された。断面形状は円形を呈し，断面形は薄いレンズ状を呈している。埋土中より土器片が１点出土し，図化した。（第201図795）

土坑222（第186図）

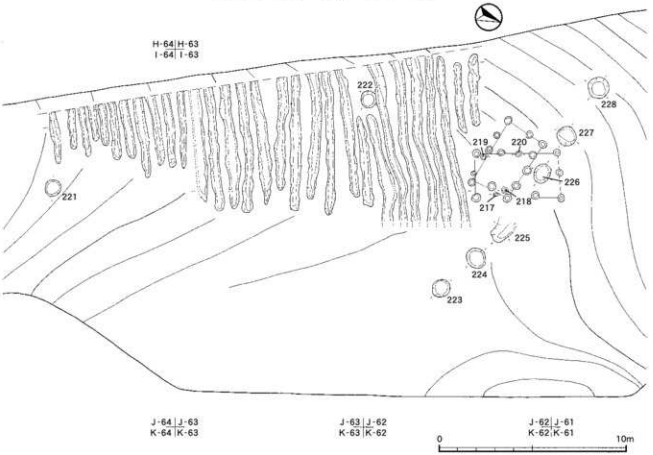
Ⅰ－63区　層上面で検出された。畝状遺構13のやや北よりの遺構内から検出された。畝間との切り合いは見られず，土坑周辺のみ畝間が消失している。形状はほぼ円形を呈し，断面形状は薄い逆台形を呈している。土坑221，222ともに，畝状遺構13と近接し，ほぼ同時期で重なりも見られない



第185図　南部　古代～中世　畝状遺構13



第186図　南部　古代～中世　土坑



第187図　南部　古代～中世　遺構配置図

ことから，耕作に関連のある土坑の可能性が考えられる。

土坑223～228（第186図）

Ⅰ，Ｊ－61，62区から検出された。土坑は，Ｎ－69　－Ｗを軸とする直線上に，やや膨らみを持ちながら６基並んでおり，土坑間の距離が平均して約２ｍとほぼ等間隔であった。土坑225は，全体的に樹痕による攪乱を受けており，正確な形状を把握することができなかったが，平面形や深さ，底面の形状など他の５基とほぼ同規模の土坑であったと思われる。土坑223，224，226～228は，平面形が円形を呈し，平均して110　98㎝である。検出面からの深さは13㎝で，底面は薄いレンズ状を呈している。埋土は黒褐色土が主体であるが，黄褐色土や炭化物を含むものも見られた。

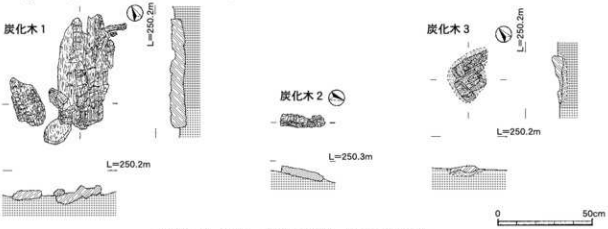
掘立柱建物跡と隣接して土坑や畝状遺構が検出されたことから，わずかな平坦地を利用して耕作地を確保し，建物を建て替えや土坑を掘り直しながらある一定期間生活を営んでいたと思われる。

⑸　炭化木（第188，189図）

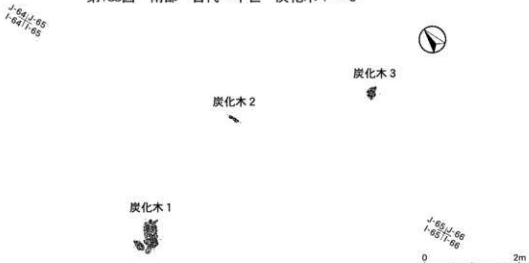
古代～中世のものと思われる炭化した木片が，近接して３ヶ所確認された。

炭化木１～３（第188図）

Ⅰ，Ｊ－65区の　層上面で，炭化木の集中が見られた。概ね３ヶ所に分かれており，炭化した木片がしっかりと残っていた。緩やかに南へ下る斜面に，約３ｍ間隔で張付くようにして出土し，それぞれの出土レベルは250ｍ弱とほぼ同じである。炭化木１の^{14}C年代測定を行ったところ，１202　27（yrBP），歴年代で780～869ＡＤ，平安時代前期前半という結果が出ている。



第188図　南部　古代～中世　炭化木１～３



第189図　南部　古代～中世　炭化木出土状況

3　中世～近世（第190～196図）

中世～近世の遺構は，畝状遺構６群，土坑13基が検出された。ほとんどが　ａ層の黒色土が掘り込まれたもので，埋土は　層文明ポラが主体であり，黒褐色土に黄色パミスや白色パミスが混ざるものも見られる。土坑内より遺構内遺物が確認されたが，小破片のため判別が難しく流れ込みの可能性も考えられるので，中世～近世の遺構として取り扱った。また，安永ポラを埋土とする近世の畝状遺構も含まれる。

⑴　畝状遺構（第190～194図）

中世～近世の畝状遺構は，埋土が文明ポラを主体の５群と安永ポラを主体の１群の計６群である。

畝状遺構14（第190図）

Ｇ～Ｉ－53～55区の　ａ層上面にて，　層（文明ポラ）を埋土の主体とする細長い楕円状を呈した畝状遺構が検出された。中央部の台地上の縁辺部に位置する畝状遺構11の南側約10m離れて検出されている。北西－南東方向に延びる楕円形を呈した畝間が，南側へ下る地形に合わせて階段状に整然と並んでいる。検出面の勾配はやや急であり，検出面の幅はわずか５～10mであるのに対して高低差は約１mもある。北側の畝状遺構11との間は現代の畑面，南側は通路として使われ大きく削平されており，通路と畑の境目にある土手として残った部分のみ検出できたと考える。畝間の形状は平均して幅16.4㎝，深さ19㎝，断面形状は浅い皿状を呈するなど似ているが，長さは統一されておらず，0.7～2.9mと多種である。しかし，東西両端が揃っている部分も多く確認され，畝間の中心間が約50㎝とほぼ同じであることから，方向や間隔，幅や深さなどを考えて作られたと思われる。

畝状遺構11－Ｃ群と畝状遺構14は同一のもので，つながっていた可能性が高い。

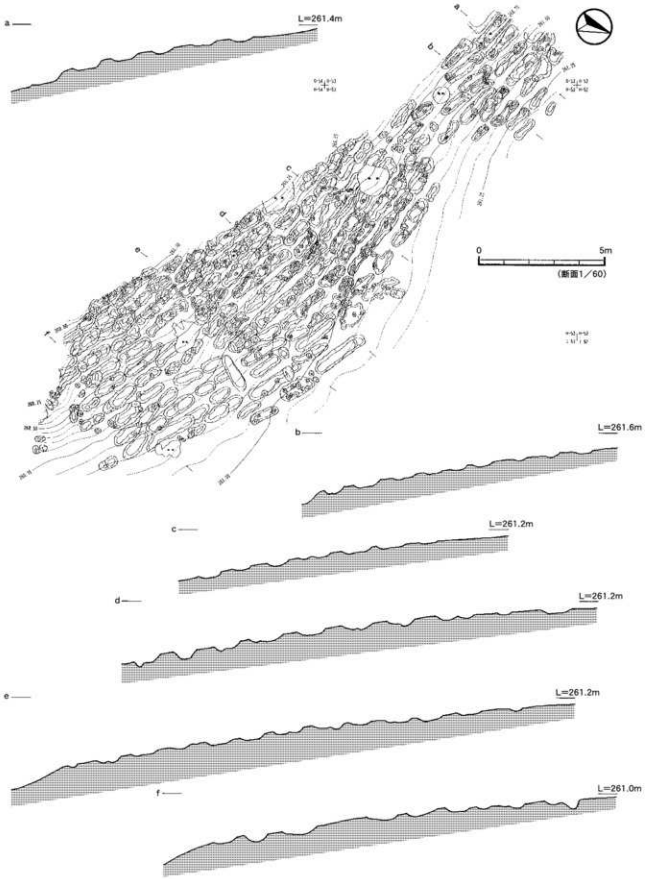
畝状遺構15（第191図）

Ａ～Ｅ－55～59区の　ａ層上面，畝状遺構14から20mほど南へ下る斜面の西側から，調査区境の壁に沿ってほぼ全域に畝状遺構が検出された。　層の黒色土を掘り込む形で畝間が残存し，東北東－西南西方向を基調とした楕円形を呈する畝間の列が，斜面を下る階段状に規則的に整然と並んでいた。畝間は谷部の斜面で検出された畝状遺構１と形状が似ており，長さ0.2～3.5m，幅20～30㎝，深さ約12㎝を基本とする楕円形である。断面形態は皿状を呈し，並びや畝間の規模などが乱れ気味であった畝状遺構１に比べて，同規模の畝間が両端を揃えて鱗状に南へ下るように配置されている。畝間の列は全部で10列確認され，東端の列の畝は下るに従ってやや中心部に向きを変えるなど微調整しながら作られている。

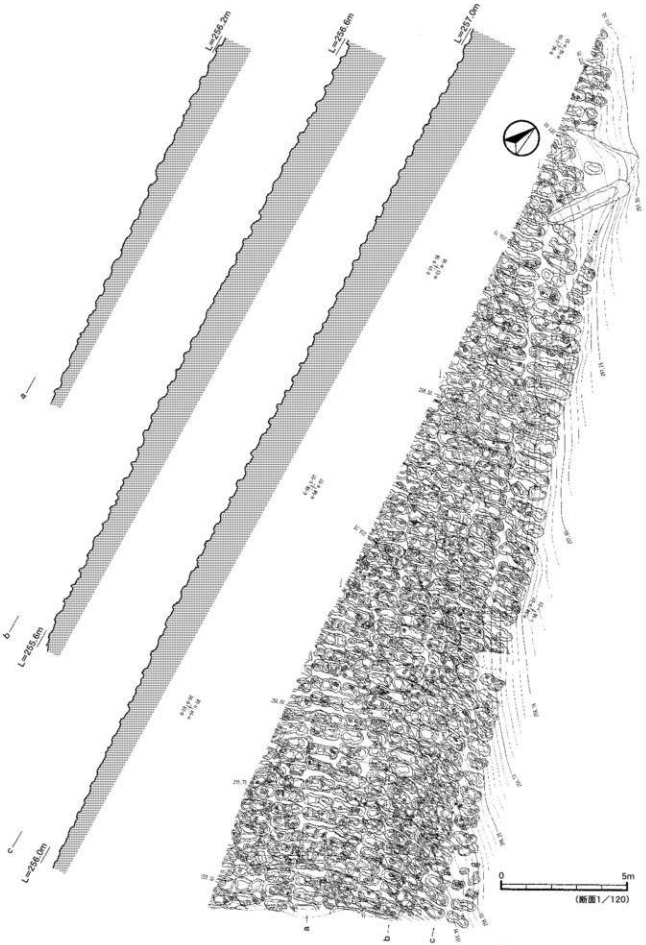
Ｊ区側は急勾配であり崖状に上がっているので検出されず，南側は削平により消失している。西側の調査区外にも広範囲に渡り広がっていると推定される。北側の畝状遺構14とはレベル差もあり形状も異なることから一連のものである可能性は薄い。埋土のほとんどは文明ポラであるが，一次堆積物と思われるものは少なく，二次堆積物や細粒な黒色土がブロック状に混在したり，小規模な堆積を繰り返し交互に堆積したりしている。底面に凸凹を持つものが多く，掘られた跡が残るものもあり農耕具痕を想定させるものも含まれる。

畝状遺構16（第192図）

Ｉ～Ｊ－61～62区の畝状遺構15から約10mほど南へ下る緩斜面の　ａ層上面で，　層を埋土の主体とする細長い楕円状を呈した畝状遺構が検出された。畝状遺構15と同様に，東北東－西南西方向



第190図　南部　中世　畝状遺構14



第191図　南部　中世　畝状遺構15

を基調とした楕円形を呈する畝間の列が，斜面を下る階段状に規則的に整然と並んでいた。しかし，斜面が緩やかになり始めると畝間の列ごとに基軸が動き始め，地形に合わせて下るように調整しながら作られている。列ごとの両端はしっかりと揃っており，整然と並んだ畝間の列が13列確認できた。畝間の中心間は約50㎝とほぼ同じであるが，畝間の形状については変化があり，傾斜の急な北側部分は長さ約1 2m，幅58㎝，深さ12㎝の楕円形を呈するのに対して，傾斜の緩やかな南側部分は，長さ約2 8m，幅50㎝，深さ23㎝の細長い小溝状の楕円形に変化していく。特に平坦面に近いⅠ-62区では，畝間の全長も長くなり，列の間隔も広くなる傾向にある。逆に東側の谷へと向かい傾斜が再び急になるJ-62区当たりでは，畝間の長さも短くなり列の間隔も狭くなる。この傾向の顕著な形が，近接する畝状遺構17へと移行していくと推測される。

畝間の断面形状は浅い皿状であり底面に凸凹を持つ不定型なものが多い。埋土は文明ポラが主体であり，一次堆積物と，二次堆積物や細粒な黒色土がブロック状に混在している。微高地である北側では検出されず，東西の調査区外へ同形状の畝間が広がっていると思われる。

畝状遺構17（第193図）

Ⅰ〜J-63〜64区の　a層上面に，畝状遺構16の南側に隣接して検出された。略東西方向に直線的に延びる小溝状の畝間が22条規則的に並んでいる。急激に上る東側では見られず，畝間の東端は地形に合わせてほぼ揃っている。西側は調査区外へと延びており，南側は削平され消失している。畝の凸部は見あたらず，文明ポラを含む堆積物により押し潰されたと思われる。畝間の形状は，長さ約10m，幅50㎝，深さ25㎝で断面形状は浅い皿状を呈する。畝間の中心間は50㎝でほぼ同じ間隔である。埋土は南部斜面の他の畝状遺構と同じで文明ポラが主体であり，小規模な堆積を繰り返し一次堆積物と二次堆積物や細粒な黒色土が混在している。畝状遺構16とは重なりは見られないが接しており，埋土も同じであることからほぼ同時期のものである。検出面がわずかに南側へ傾斜しているがほぼ平坦面であり，斜面と平地の耕作方法の違いを一度に実見できる貴重な資料である。

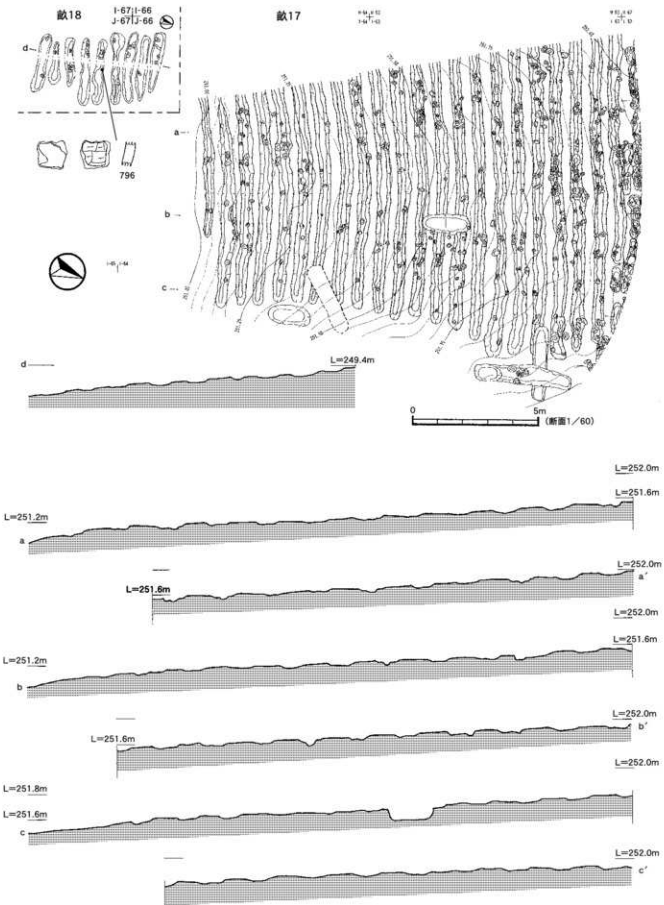
畝状遺構18（第193図）

Ⅰ-66，67区の　a層上面に，　層（文明ポラ）を埋土の主体とする細長い楕円状を呈した畝状遺構の一群が検出された。ほとんどが消失しておりわずか9条であるが，略東西方向に延びる細長い楕円形を呈する畝間が，規則的に並んでいる。検出された畝間の平均値は，全長約2 7m，幅50㎝前後，深さ約7 2㎝である。底面のみの検出であるので全長は不確定である。埋土は文明ポラを多く含む黒色土であり，細粒な黒色土がブロック状に混在している。畝状遺構17から20m以上南側へ離れており，レベル的にも約25㎝下っているため関連性は不明であるが，ほぼ同時期である。

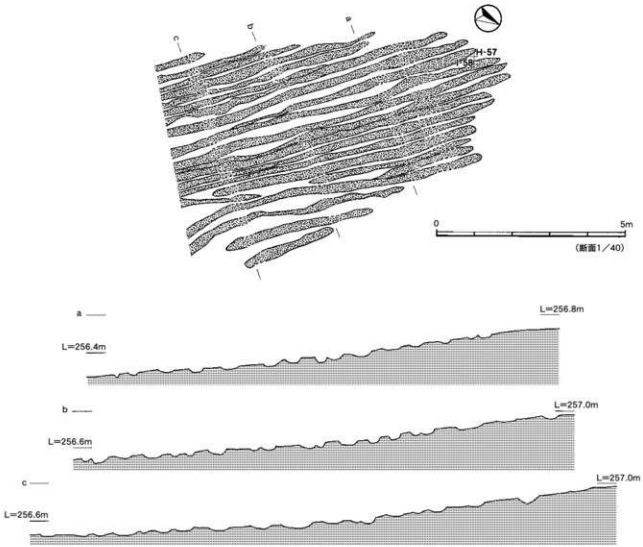
畝状遺構19（第194図）

H〜Ⅰ-58区の畝状遺構15の直上にて，安永ポラを埋土の主体とする細長い畝状遺構が検出された。畝状遺構15が大雨などで斜面を流れ下る堆積物により埋まり，自然堆積を繰り返した後で形成された平坦面に作られたもので，略南北方向へ直線的に延びる畝間が筋状に確認される。畝の凸部は見られず，畝間のみの検出である。検出された畝間の平均値は，長さ約5 m，幅30㎝前後，深さ約25㎝である。畝間の中心間は不安定であり70〜110㎝である。部分的な検出のため全体像は不明であるが，台地部でも同時期の畝状遺構が見つかっており，台地部だけでなく谷部全体でも生産活動が行われていたと推測される。埋土は安永ポラを主体としているため，近世の畝状遺構である。

第192図　南部　中世　畝状遺構16



第193図　南部　中世　畝状遺構17，18



第194図　南部　近世　畝状遺構19

⑵　土坑（第195，196図）

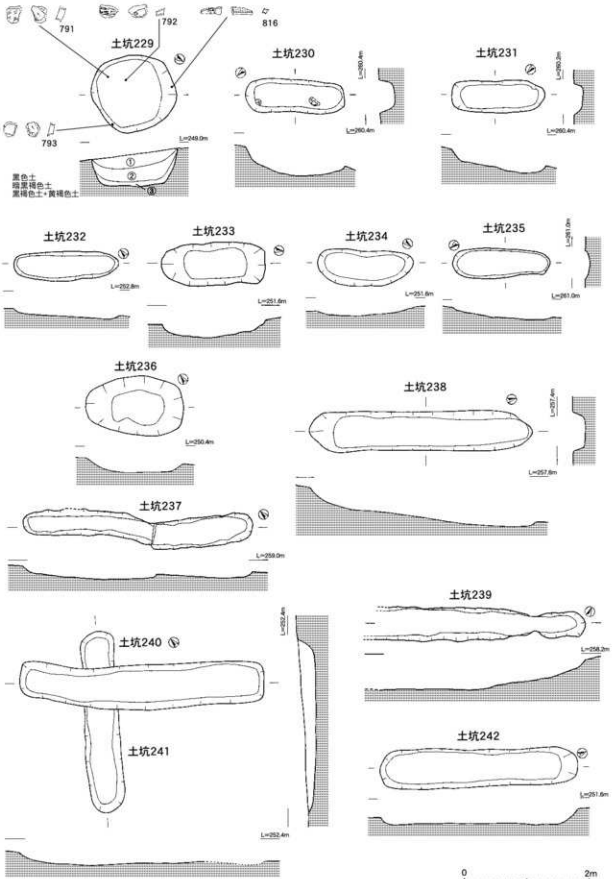
中世～近世の土坑は，　層で検出された土坑229～242の14基である。１ｍを越える円形を呈するもの（　類，土坑229），楕円形を呈するもの（　類，土坑230～242）に分けられる。さらに　類の土坑は，１ｍ50㎝前後のもの（土坑230～236），全長が３ｍを越える大型のもの（土坑237～242）に分けることができる。　類の規模は平均して土坑230～236が157　58㎝，深さ15㎝，土坑237～242が3 2　0 .6m，深さ23㎝である。埋土は白色パミスを含む黒褐色土が主体である。

土坑229（第195図）

Ｊ－65区の　層上面で検出された。白色パミスを含む黒褐色土が主体である。平面形状は径約１3mの円形を呈し，深さは52㎝である。埋土中より土器片が４点出土したが，ローリングを受けたものが多く，流れ込みの可能性もある。（第201図791，792，793，第203図816）

土坑230，231（第195図）

Ｉ－56区の　層上面で検出された。断面形状はレンズ状を呈し，埋土は多量の白色パミスである。台地の縁辺部に当たり，耕作のためボラ抜きを行った後で集めて埋めたと思われる。



第195図　南部　中世～近世　土坑

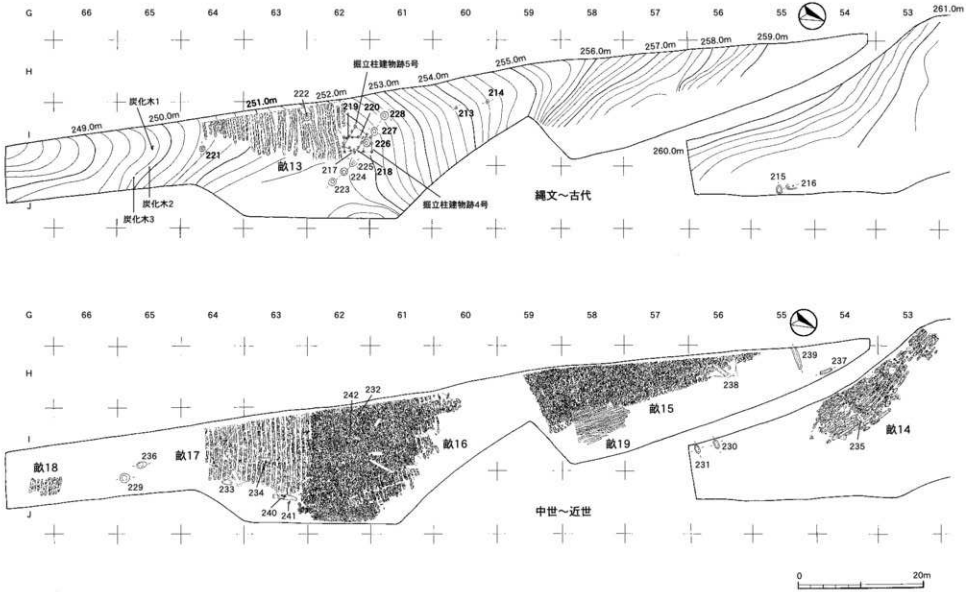
第28表　南部　土坑計測表

土坑番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
213	21	19	53
214	40	32	84
215	104	73	24
216	154	70	22
217	29	23	21
218	37	35	25
219	34	33	37
220	34	33	35
221	85	79	7
222	88	86	16
223	102	90	7
224	116	102	9
225	110	88	15
226	106	84	19
227	105	100	14

土坑番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
228	115	114	16
229	166	120	52
230	158	51	32
231	148	49	15
232	166	47	8
233	164	70	22
234	152	54	8
235	155	46	6
236	154	94	18
237	208	42	16
238	354	60	21
239	326	52	40
240	388	120	15
241	289	54	23
242	313	58	22

第29表　狩俣遺跡　畝状遺構計測表

遺構名		調査区	グリッド	検出面	地形	検出面積(㎡)	列方向	畝間				
								方向	幅(cm)	長さ(m)	深さ(cm)	中心間(cm)
畝1		2T	A，B・5，6	a	斜面	50	N・17・W	E・W	11～32	1～2.3	2～5	10～38
畝2		谷部	A～E・19～25	a	斜面	800	N・S	N・82・W	30～90	0.5～2.1	10～24	45～70
畝3		北部	F，G・6～8	a	斜面	118	N・35・W	N・51・E	20～50	0.4～4.8	10～20	30～40
畝4	A	北部	G～J・5～8	～	平地	400	N・55・W	N・27・E	10～60	1.0～9.5	10～50	10～20
	B	北部	H～K・5～7	～	平地	350	N・46・E	N・55・W	20～90	2.0～5.5	10～70	10～50
	C	北部	I～K・8～10	～	平地	250	N・23・E	N・55・W	10～70	0.6～14.0	10～16	40～70
畝5		中央部	K，L・25～27		平地	300	N・16・W	N・71・E	20～50	0.5～7.0	10～20	40～50
畝6		中央部	I～L・28～33	～	平地	960	N・10・W	E・W	30～80	0.7～7.0	10～50	50～110
畝7		中央部	I～K・33～34	a～b	平地	300	N・76・E	N・22・W	20～40	0.6～6.4	4～12	20～75
畝8		中央部	K，L・31～35		平地	130	N・53・W	N・75・E	20～40	0.6～2.1	4～10	30～50
畝9	A	中央部	I～L・34，35	a	平地	350	N・33・W	N・71・E	20～60	0.2～2.6	3～15	40～60
	B	中央部	H・35，36	～	平地	40	N・21・W	N・69・E	30～50	0.3～2.4	5～16	40～90
	C	中央部	K・36，37	～	平地	30	N・24・W	N・69・E	20～50	0.4～2.6	4～10	40～60
畝10	A	中央部	L・42～44	a	平地	21	N・10・W	N・84・W	40～80	0.9～1.2	20～72	80～130
	B	中央部	L・40～42		平地	57	E・W	N・80・W	20～84	0.4～3.3	5～18	80～130
	C	中央部	L・41，42	a	平地	25	N・88・W	N・4・E	20～64	3.2～9.4	16～80	48～72
畝11	A	中央部	H・49	a	平地	48	N・70・E	N・33・W	30～50	0.3～5.4	10～40	50～60
	B	中央部	G，H・50，51	a	平地	42	N・50・W	N・41・E	40～50	0.3～3.4	10～30	50～70
	C	中央部	G，H・50～52	a	斜面	130	N・24・E	N・71・W	20～50	0.2～3.2	10～20	40～80
畝12		中央部	I～L・28～32	c	平地	100	N・59・E	N・20・W	10～30	0.1～8.2	10～30	10～40
畝13		南部	H，I・62～64	a	平地	135	N・32・W	N・53・E	20～70	1.9～8.9	10～22	20～100
畝14		南部	H，I・53，54	a	斜面	160	N・36・E	N・59・W	13～63	0.1～1.2	13～25	20～50
畝15		南部	H，I・55～59	a	斜面	228	N・45・E	N・55・W	20～30	0.2～3.5	10～20	20～40
畝16		南部	I，J・60～62	a	斜面	380	N・43・W	N・56・E	30～80	0.3～2.2	10～30	40～70
畝17		南部	I，J・62～65	a	平地	190	N・21・W	N・72・E	30～70	5.5～12.5	10～30	60～80
畝18		南部	I，J・66，67	a	斜面	18	N・13・W	N・65・E	30～60	1.7～2.9	10～20	40～60
畝19		南部	H，I・58	c	斜面	52	N・38・E	N・49・W	20～40	1.4～9.1	10～40	70～110



第196図　南部　遺構配置図

第４節　出土土器

南部の出土遺物点数は合計4,004個であり，総点数の半数以上に当たる。53〜63区までの出土遺物が143点であるのに対して，64〜67区のわずか450㎡と狭い調査区から3,861点が出土している。遺物のほとんどは古代の包含層である　層出土の土器片であり，小破片が多く摩耗も見られることから，北側の台地から堆積物と同時に流れ込んできたものであると想定される。ほとんどが坏や埦，甕など日常生活に使用するものであることから，古代の中心地が台地上に存在したと思われる。古代以外の遺物は，縄文時代前期，後期，晩期，中世，近世の遺物が出土しているが，点数的には少量であり，小破片が多いので，流れ込んできた遺物の可能性が高い。

なお，図化したものについては，第210，211図に出土分布を示した。

１　縄文時代（第197図715〜731）

南部の縄文土器は計17点であり，全て図化した。

715は　類土器の胴部である。沈線文を横位に施している。716〜720は　類土器の胴部である。716は横位に，717は横位と縦位に，718，719は波状に平行する２条の凹線文を施し，その間に貝殻刺突が連点状に入る。同一個体の可能性もある。721〜731は　類の土器である。721〜726は深鉢形土器で，　Ａ－ａタイプである。721，722は胴部中位より広がり，724は外反する。728〜731は鉢形土器の底部であり728〜730は　Ｃ－ｂタイプの編布が，731は　Ｃ－ｃタイプの編目状の組織痕が認められる。729，730は底部端のため組織痕が乱れている。731は幅0.4㎝の掘の深い編目圧痕文である。

２　古代（第198〜206図732〜899）

古代の土器は，土師器，須恵器，焼塩土器などが出土しており出土量の大部分を占める。しかし，小破片のものが多く，図化できたものはわずかである。内訳は土師器坏，埦類1,497点中102点，土師器甕類5,096点中25点，須恵器22点全て，焼塩土器304点中19点である。

⑴　土師器（第198〜204図732〜858）

土師器は坏，埦，皿などの食器類，甕などの煮炊具類が最も多く，墨書土器などの特殊な土器も数点出土した。これより各器種別に掲載するが，坏，埦，甕については第　章第４節「中央部の出土土器」での分類に基づいた。また，内黒土師器についてはまとめて掲載した。

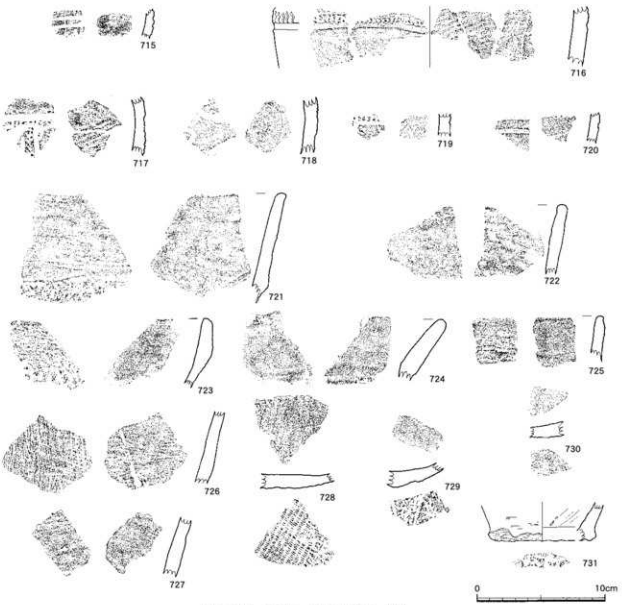
坏（第198図732〜752）

Ⅰ類（第198図732〜743）

732〜734は体部が直線的に開くものである。732は体部外面にロクロ目が凸凹となって残るが，内面はハケメ調整後きれいにナデ消されている。丁寧な作りである。733は円盤状の厚い底部を持つもので，焼成が良く硬質である。734はやや上げ底気味の底部を持ち，底部の角を丸く仕上げている。

735〜738は口縁部がやや外反するものである。735は体部の器壁のやや厚いがっしりした作りである。破損後土器片を転用されており一部黒色化している。736は底部と体部の境に段を持つ。737は底部外面にヘラ調整痕が残るもので，全体器形が歪んでいる。738は円盤状の底部から立ち上がる外面にロクロ目が筋状に残る。

739〜743は　類の底部であるが，上位が欠損のため全体形は不明である。全てヘラ切り離し後にナデ調整を施し丁寧に仕上げているが，740はヘラ切り離し痕が明瞭に残る。



第197図　南部　縄文時代の土器

Ⅱ類（第198図744～752）

744～752は，体部がやや丸みを持ちながら立ち上がるものである。744は底部からやや膨らみを持ちながら開き直線的な口縁部を持つもので，焼成も良く丁寧な仕上がりである。745，746は丸みの体部が開き，口縁部がわずかに外反するものである。745は焼成が良く赤橙色を呈している。747～752は　類の底部であるが，上位が欠損のため全体形は不明である。747は底部と胴部の間がわずかに凹んでいる。全てヘラ切り離し後に丁寧なナデ調整を施し仕上げているが，750～752はナデ調整が不十分であり工具痕が残る。

埦（第199図753～765）

Ⅰ類（第199図753～756）

753～756は，大きめの円盤状を呈した底部を持つもので，　－ａ～　－ｃに分けられる。

Ⅰ－ａ類（第199図753）

753は，ほぼ直立した短めの断面三角形を呈した高台を持つ。底面にナデ調整痕が渦巻き状に残る。

Ⅰ－ｂ類（第199図754，755）

754，755は短めの高台が外側へ開くもので，体部との境目に凹みが巡る。胎土が粗く，浅黄橙色をした粘土の小塊や小石などが混ざる。上位欠損のため全体形は不明であるが，大型椀と思われる。

Ⅰ－ｃ類（第199図756）

756は高台欠損後，砥石等の道具を用いて欠損部分を粗く研磨調整を施し再利用したものである。底面にナデ調整による段が残り内外面ともにナデ調整を施す。精製された胎土は浅黄橙色を呈する。

Ⅱ類（第199図757～762）

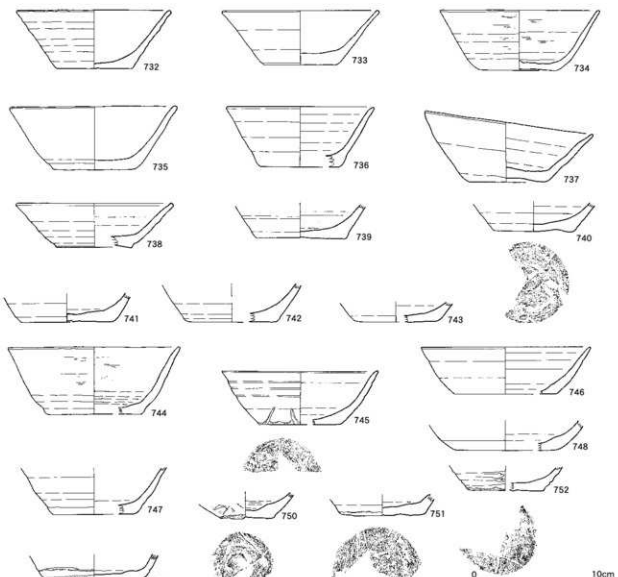
757～762は，やや小さめの底部を持ち直線状に開くもので，　－ａ～　－ｃに分けられる。

Ⅱ－ａ類（第199図757）

757は，ほぼ直立した短めの高台を持つもので高台断面は方形を呈し，接地面に平坦面を持つ。

Ⅱ－ｂ類（第199図758，759）

758，759は，短めの高台が外側へ開くもので，体部との境目に凹みが廻り段を持つ。胎土が粗く，



第198図　南部　古代の土器(1)

浅黄橙色をした粘土の小塊や小石などが混ざるが，ナデ調整が施されている。

Ⅱ－ｃ類（第199図760～762）

760～762は，高台欠損後再利用したものである。760は欠損部をケズリ調整後ナデ調整が施されている。焼成が良く外面は赤橙色を呈し硬質である。761は高台部分が剥離している部分が認められる。

Ⅲ類（第199図763～765）

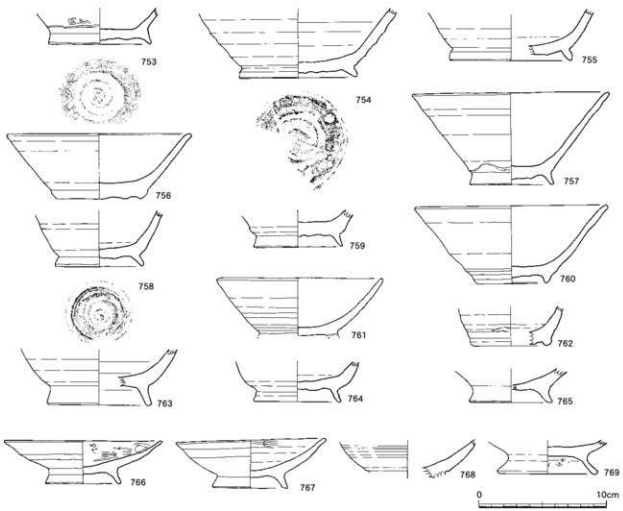
763～765は，底部からやや丸みを持ちながら立ち上がるもので，短めの高台は外側に開く。763の高台は，高さ1 4㎝，径約８㎝であるが，764 ,765は高さ0 9㎝，径が約７㎝とやや小さめである。

高台付皿（第199図766～769）

766～769は高台付皿である。皿部は比較的上方へ広がるため深さ２～３㎝程度と深くなる。高台部は高さ約１㎝と短いもので外側に開く。766の体部は丸みを持って広がり口縁部がわずかに反る。767は766とほぼ同じ体部形状で，高台接地面に平坦面を持つ。769は高台が「ハ」の字状に開く。

坏～椀（第200図770～790）

770～790は，坏または椀の口縁部である。胴部より下位が欠損しているため全体形が不明であり，土師器の坏または椀の口縁部ー胴部としてまとめて掲載する。770～780は直線的に開く口縁部である。口縁部断面は鋭角な三角形を呈するものが多いが，779はやや丸みを持つ。内外面とも器面調



第199図　南部　古代の土器(2)

整は横ナデ調整であるが，外面に調整痕が残るものもある。781〜784は，直線的に開き口縁部でわずかに反るものである。782，783は焼成が良好で硬い。785〜788は，やや膨らみを持つ体部中位から端へ向かって外反するものである。胎土に砂や小石が多く混ざる。786は口縁部に一部歪みが認められる。口縁径が15㎝を越えるものが多いことから，大埦または鉢の可能性も考えられる。

甕（第201，202図791〜815）

791〜796は，遺構内より出土した甕の胴部片である。胴部片のため　，　類の判別はできなかった。小破片のため全体形は不明であるが，外面はハケ目後ナデ調整，内面はケズリ調整を施す。

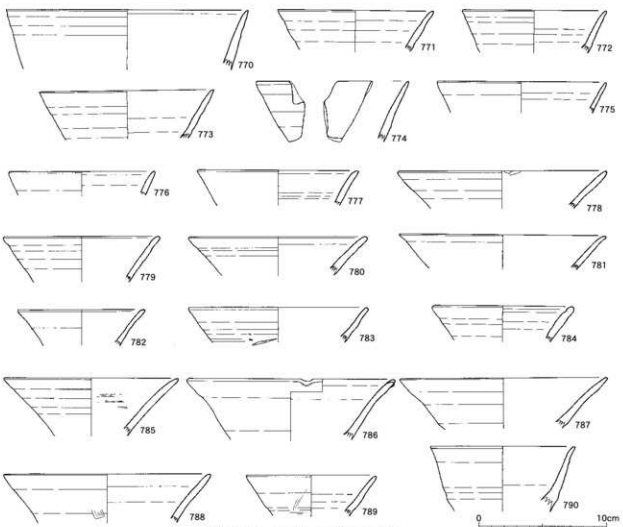
Ⅰ類（第201図797〜799）

797〜799は，口径30㎝前後と大型で，口縁部が逆「Ｌ」字状に大きく外反する　類の甕である。

797は，Ⅰ，Ｊ-65〜67区の　層で集中して出土した。口径が約30㎝と大型のもので，胴部下位は球状に丸く，上部は直線的に立ち上がり，口縁部で大きく外反する。体部の外面中位に煤が広く付着している。図では推定ラインを用いているが，一部欠損のため器高は不明である。798，799は口縁部全体に横ナデ調整が施され，口唇部を丸く仕上げている。

Ⅱ類（第201，202図800〜814）

800〜814は口縁部がくの字状に外反する　類の甕である。口径30㎝前後の大型のもの（800〜809）



第200図　南部　古代の土器(3)

と，20㎝程度の小型のもの（810〜814）がある。大部分が外面はハケ目，内面はケズリ調整である。

800は摩滅が激しく不明瞭である。801は口縁部のハケ目調整痕が明瞭に残る。802は頸部外面にナデ調整痕が凸凹状に残り稜線が乱れている。804は直線的な体部から斜め上方へ丸みを持ちながら外反するもので，外面に指頭圧痕が見られる。805は頸部が厚くしっかりした作りである。806，807は厚めの口唇部を丸く仕上げている。808，809はやや短めの口縁部を持ち，内面に工具による調整痕が残る。

810は短めの口縁部が直線的に開くもので，内面のケズリ調整痕が明瞭に残り境目に稜を持つ。811は表面にナデ調整による凸凹が見られる。812はやや膨らみのある体部が頸部で締まり，短めの口縁部が直線的に開くもので，口縁部の断面形は三角形を呈している。813，814は，やや膨らみのある体部上位が内傾し頸部で締まり，口縁部が反りながら開くものである。内面のケズリ痕はナデ消されている部分が多く，焼成が良く橙色を呈している。

蓋（第202図815）

815は口径約30㎝の土師器の蓋である。天井部欠損のため全体形は不明であるが，体部下位は厚く仕上げ，天井部へ向かって器壁が薄くなるように仕上げている。くの字状に外反する境目外面には指頭圧痕が明瞭に残る。体部との境目から口縁端部までの外面に煤が付着している。

内黒土師器（第203図816〜843）

816は遺構内遺物であるが，小破片であるため器種は不明である。摩滅しているため明確ではないが，調整はナデ調整で外面に小さな傷が複数残る。

817，818は，底部から直線的に開く　類の坏である。817は，復元口径19 2㎝，底径7 9㎝，器高6 8㎝の大型の坏で，底部からの立ち上がりに角を持ち直線的に開き中位から緩やかに反る。

819はやや小さめの高台から直線的に開く　- a 類の埦である。直立した短めの高台は接地面に平坦面を持つ。820〜822は直線的に開く口縁部である。821の外面には炭素吸着による黒斑が見られる。823〜829は，直線的に開き口縁部でわずかに外反するものでる。823は内面のミガキ調整痕が明瞭に残る。825は口縁端部へ向かって器壁が先細る。下位欠損のため，器種は特定できない。

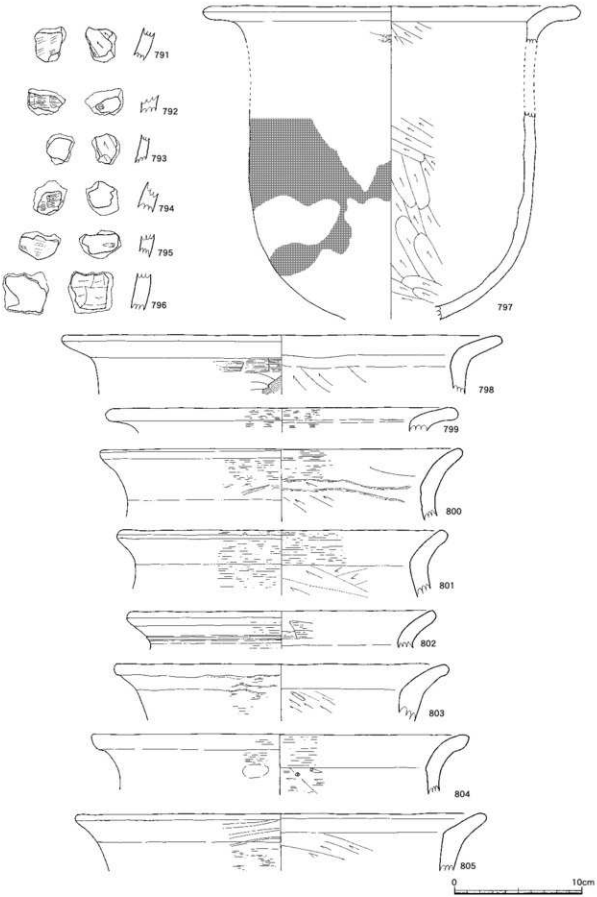
830，831は，短い高台が直立する底部である。831の底面に工具による調整痕が残る。832〜836は高台が外側へ開く底部である。832は高台断面が方形を呈し接地面を持つ。833，834は摩耗しており内面が灰白色を呈す。835，836は膨らみを持つ体部で高台は「八」の字状に開く。837，838は高台欠損部にケズリ調整を行った再利用痕のある底部である。837は直線的に，838は丸みを持って立ち上がる。839〜842は，高台が剥離し欠損している底部である。全てに高台と体部との接合痕が認められる。843は鉢型を呈したものであるが，破片が部分的であり別器種の可能性も考えられる。

外朱土器（第204図844〜847）

844〜847は，外面にのみ赤色顔料が施された土師器である。844〜846は埦の体部外面に赤色顔料が施されたもので，844，845は顔料の剥落が著しい。845は高台内面に凹みが廻る。846は顔料が器面より一部剥離している。847は坏または皿の体部外面に赤色顔料が施されたもので底面では確認されない。844〜846は，出土地点も隣接し器形も似ていることから同一個体の可能性もある。

内朱土器（第204図848）

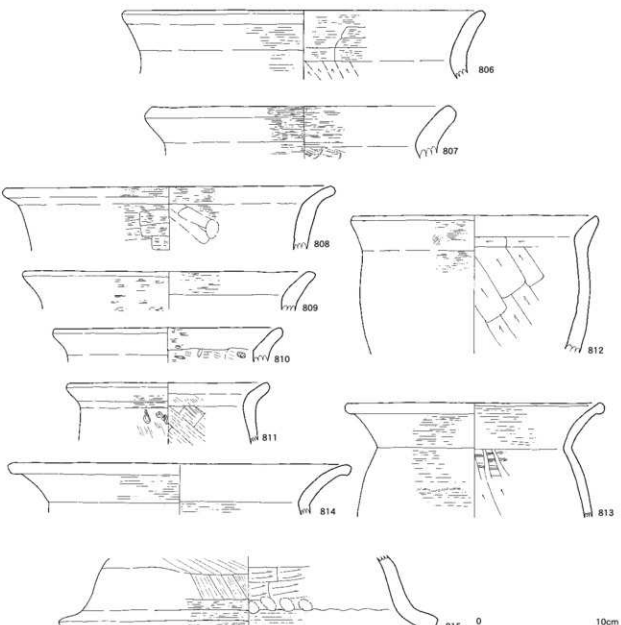
848は，坏または皿の内面に赤色顔料が施されたものであるが，顔料の剥落が著しい。



第201図　南部　古代の土器(4)

墨書土器（第204図849～855）

849～855は，墨書土器である。胴部片のため不明なものも多く，確実に判読できるのは849～851の３点である。849は，底径6.4cmの平坦面を持つ坏の底面に二文字が墨書されていた。ヘラ切り離し痕が明瞭に残る底面に，一文字目は「福」，二文字目は判読が難しく敢えて読めば「笑」または「安」と読める。850は，短めの高台が外側に開き，膨らみを持つ体部が立ち上がる内黒土師器の埦の底部外面に「廣」と墨書されていた。「廣」の墨書は，霧島市溝辺町の山神遺跡などで出土例がある。851は，底面と体部の境をヘラ切り調整で丸く仕上げた坏の体部外面に，倒立で「山」と墨書されたものである。「山」の県内での出土例は，南さつま市金峰町の白樫野遺跡や鹿屋市輝北町の神殿遺跡など多数発見されている。852は土師器の体部外面にヘラ書の墨書が確認できるが，詳細は不明である。853～855も文字の一部の可能性もあるが，判別は困難である。



第202図　南部　古代の土器(5)

墨書土器の出土地点はⅠ－64～67区に集中しており，台地部からの流れ込みの可能性が高い地点である。また，本遺跡全体で８点中４点が内黒土師器に墨書されており，書かれる率が非常に高い。

線刻土器（第204図856，857）

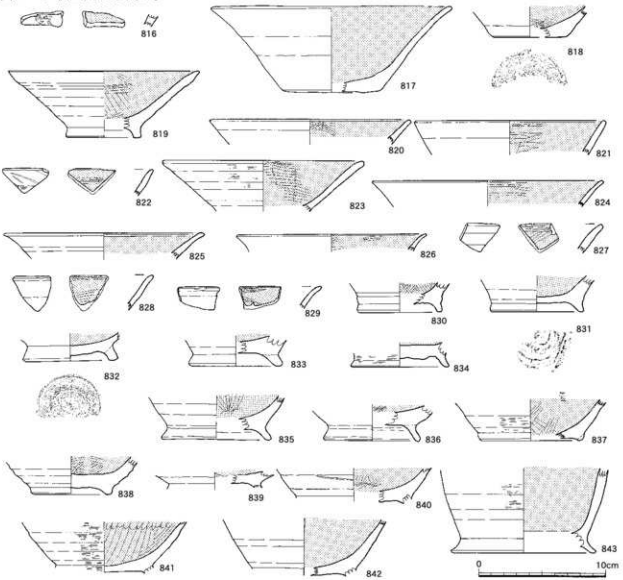
856は，横ナデ調整痕が明瞭に残る坏の体部外面に，鋭利な工具によって描かれた線刻土器である。857は体部外面にヘラ状工具による無数の線刻が確認できるが，詳細は不明である。

円盤型土師器（第204図858）

858は，円盤型を呈した内黒土師器の埦の底部の転用品である。内外側面ともに砥石で研磨調整され，きれいな円盤を作り上げている。使用目的は不明であるが，紡錘車の製作途中の可能性が高い。

⑵　須恵器（第205図859～880）

859～861は坏である。859，860は，ヘラ切り離しの底部から直線的に開くもので，底面と体部の境目に角を持つ。その後のヘラケズリ調整は見られない。859の口縁部は直線的で口縁端部を丸く仕上げている。体部外面下位にヘラ状工具痕が交差して「　」記号のように残る。861はヘラ切り離しの底部からやや膨らみを持って立ち上がるもので，底面と体部の境目を丸く仕上げている。底面にヘラ状工具痕が残る。



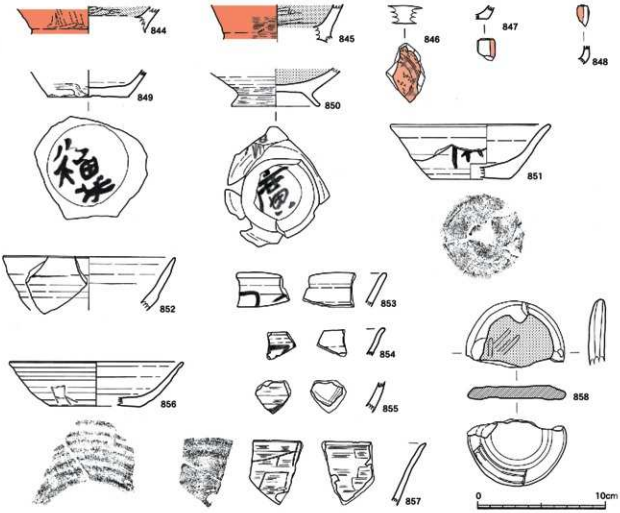
第203図　南部　古代の土器⑹

862は外側に広がる短い高台を持ち，直線的に立ち上がる埦の底部である。胎土がやや粗めで，砂粒が多く含まれる。外側に広がり断面方形を呈する高台の接地面は平坦面である。

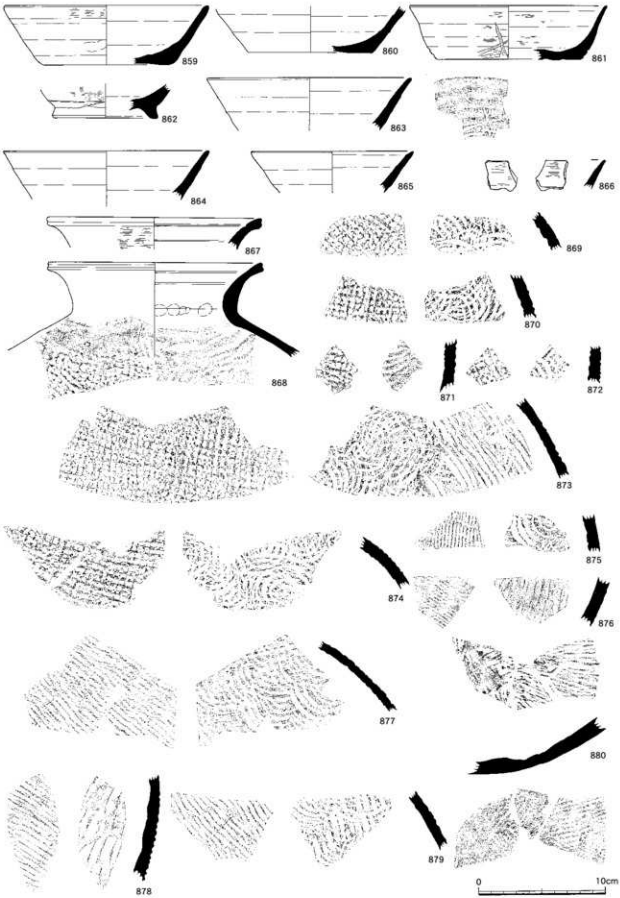
863～866は体部下位が欠損のため詳細は不明であるが，坏または埦の口縁部と思われる。863，864は，直線的に開く口縁部を持つものである。863は体部内面にハケメ調整痕が筋状に残るが，864は摩滅が著しく判別が難しい。865，866は，体部が直線的に開き口縁部付近でわずかに外反するものである。どちらも焼成が良好で灰黄色を呈し，口縁端部へ向かって器壁が先細りする。

甕（第205図867～880）

867～880は甕である。867，868は甕の口縁部である。膨らみのある胴部が内傾しながら頸部で締まり，わずかに外反するもので，平坦面のある口唇部はわずかに凹む。体部外面には格子目タタキ，内面には同心円当て具痕が見られる。869～879は甕の胴部片である。869～874は，体部外面には格子目タタキ，内面には同心円当て具痕が見られるもので，灰オリーブ色を呈し，膨らみのある胴部の肩部から胴部中位にかけての土器片である。867～874はⅠ-66，67区から集中して出土しており，焼成，胎土などから同一個体の可能性がある。875は外面に平行タタキ痕が残るもので，876～879は，赤褐色を呈する赤焼きの酸化炎焼成である。外面は平行タタキ，内面は同心円または平行当て具である。880は丸みのある底部であり，接地面に当たる部分は器壁が薄く外面が摩耗している。内面にワラ状の植物を束ねて調整を行ったと思われる筋状の調整痕が認められる。



第204図　南部　古代の土器(7)

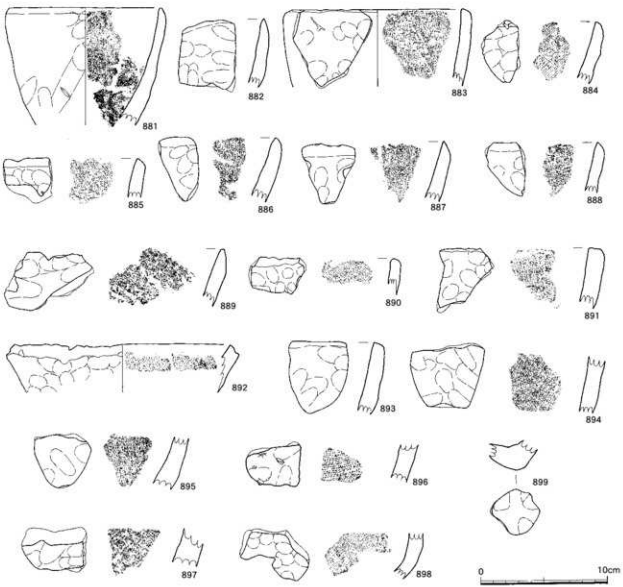


第205図　南部　古代の土器(8)

焼塩土器（第206図881～899）

881～899は南部調査区から出土した焼塩土器である。Ⅰ-65～67区を中心に小破片も含め計203個出土した。いずれも焼成が弱く軟質であり，色調は橙～赤橙色である。口縁部や体部のみの出土のため全体形状は不明であるが，丸みのある底部からやや開き気味に立ち上がり，直線的な口縁部を持つ鉢形を呈すると考えられる。口縁部は先細りであり，外面にはナデ調整による指頭圧痕が多数認められるなど粗雑な作りである。内面には，全体に目の細かい布圧痕が明瞭に残る。

881，882は内弯気味に伸びる口縁部の先端が先細り尖っているものである。881の胎土内に径1.4㎝の小石が含まれる。883～889は直線的な口縁部の外面が端部で内傾し尖っているものである。890～893は直線的な口縁部の断面が方形を呈するもので，口唇部に平坦面を有する。889は焼成が良好であり，火熱を受けた胴部が一部硬化し黒色に変色している。894～898は胴部片であり，口縁部形状は不明である。899は鉢形を呈する焼塩土器の丸みを帯びた底部である。



第206図　南部　古代の土器(9)

3　中世～近世（第207図900～920）

中世～近世の土器は，南部調査区全体から出土しているが，点数は多くない。小破片のものが多く図化できたものは，中世の青磁，瓦質土器，近世の陶質磁器，染付，陶器などわずかである。内訳は，磁器系のもの72点中３点，陶器系のもの47点中18点の計21点である。

⑴　青磁（第207図900）

900は体部中位で屈曲しわずかに外反する皿の口縁部である。口縁部の形状は花びら状の稜花口縁を呈すると思われる。暗オリーブ色の釉が全面に施される。

⑵　瓦質土器（第207図901，902）

901，902は瓦質土器である。901は胴部片であるが外面の摩滅が著しく，内面はヘラミガキである。902は底部であり，内外面とも丁寧なヘラミガキ調整が施される。灰白色の胎土中に砂が多く含まれる。底面近くの体部外面に，ヘラ書きによる沈線が２条巡る。

⑶　磁器（第207図903～905）

陶胎磁器（第207図903）

903は，青灰色を呈した胎土を持つ磁器碗の口縁部である。緩やかに膨らみを持つ体部外面に草花文と沈線が２条施される。透明釉が施された口縁端部は丸く仕上げられている。

染付（第207図904，905）

904は胴部上位が欠損しているため全体形状は不明であるが，口径が４～５㎝と思われる小碗の底部である。底面内部に平坦面を持ち，底部から胴部へかけて圏線が２条巡る。内側に狭まる短めの高台は断面三角形を呈し，尖った接地面は釉剥ぎ痕が残る。高台内面に砂粒が熔着している。905は圏線が１条巡る底部内面見込みに，草花文が描かれた皿である。碁笥底状に中央が凹む底面に断面三角形の短い高台が貼り付けられ，畳付は釉剥ぎを施す。上部形状は不明である。

⑷　陶器（第207図906～920）

906～920は陶器であり，ほとんどが薩摩焼であり苗代川窯で作られたもので，埦，皿などの食器，鉢，擂鉢，鍋などの調理具，甕，土瓶，瓶などの貯蔵具である。これより器種別に取り上げる。

埦（第207図906）

906は，底部見込みに蛇の目釉剥ぎを持つ埦の底部である。削り出しによって作られた短めの高台は直立し，断面が方形を呈す。全面に黄緑色の釉が施されているが，体部外面下位は無釉である。

皿（第207図907，908）

907は，鍵状に口縁端部が反る備前焼の皿である。精製された灰白色の胎土に透明釉を施す。908は，灯明皿として利用されたと考えられる坏皿である。体部外面下位は無釉である。

鉢（第207図909，910）

909，910は胎土が赤橙色を呈した鉢である。909は口唇部が内側に張り出し大きく外反するもので，口唇部上面に平坦面を持つ。910は底面であり，側面は施釉があるが底面は無釉である。

擂鉢（第207図911，912）

911，912は内面に櫛目が密に施された擂鉢である。911は口縁部が逆Ｌ字状に開くもので，口唇部上面に平坦面を持つ。912は胴部片であり，内面に櫛目，外面に釉垂れが認められる。

鍋（第207図913）

913は，中央部に碁笥底状の凹みを持つ鍋の底部である。火熱を受け表面が黒色化している。

甕（第207図914）

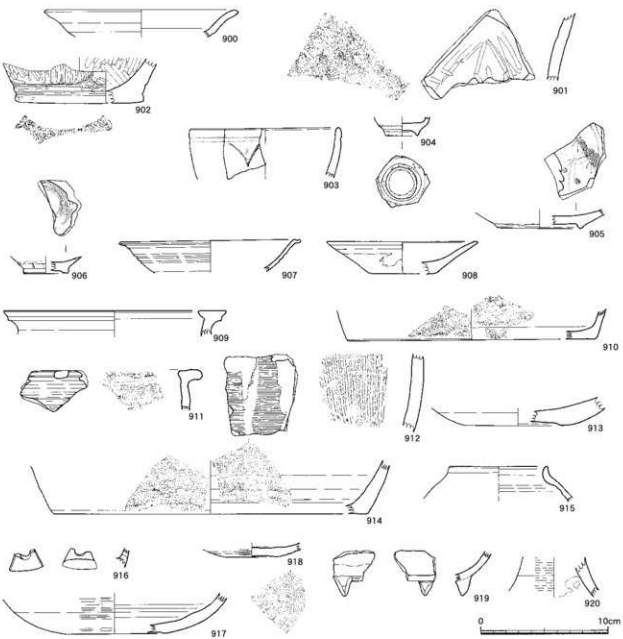
914は器壁の厚い甕の底部である。底径は24.8㎝で，部分的な出土のため上部形状は不明である。

土瓶（第207図915～919）

915～919は土瓶の土器片である。915は口縁部，916は土瓶の耳，917，918は底部，919は脚部であり，同一個体の可能性がある。915は全体に鉄釉を施した口縁部であり，口唇部は施釉後削り落としている。916は釉溜りが見られ，飴色状に発色している。917，918は，内面に鉄釉が施され，外面は無釉である。外面に無釉のロクロ目が筋状に残る。919は内面と外面下位は無釉であり，断面三角形を呈した短めの脚は，火熱を受け先端が黒色化している。

瓶（第207図920）

920は膨らみのある体部が緩やかにすぼまる瓶の頸部である。内面に釉垂れが認められる。



第207図　南部　中世～近世の土器

第30表　南部　土器観察表(1)

挿図番号	レイアウト番号	出土区	層	種類	器種	部位	口径	底径	器高	文様・調整 外面	文様・調整 内面	色調 外面	色調 内面	胎土 長石	胎土 石英	胎土 角閃	胎土 雲母	胎土 砂粒	胎土 その他	分類	備考
198	715	I-66	a	縄文土器（晩期）	深鉢	胴部	-	-	-	ナデ 沈線	ナデ	にぶい橙	黒褐								
	716	I-60	a	縄文土器（晩期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻刺突文 沈線 ナデ	ナデ	明褐	明黄褐								
	717	I-60	b	縄文土器（晩期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻刺突文 沈線 ナデ	ナデ	明褐	明黄褐								
	718	I-60	b	縄文土器（晩期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻刺突文 沈線 ナデ	ナデ	明褐	にぶい橙								
	719	I-62	b	縄文土器（晩期）	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻刺突文 沈線 ナデ	ナデ	明褐	にぶい橙								
	720	I-63	b	縄文土器（晩期）	深鉢	胴部	-	-	-	ナデ 沈線	ナデ	にぶい橙	にぶい橙								
	721	I-56	a	縄文土器（晩期）	深鉢	口縁部～胴部	-	-	-	圧痕 ヘラ状条痕	ミガキ ヘラナデ	橙	橙灰						赤色粒 チタン鉄鉱	A-a	
	722	H-57	b	縄文土器（晩期）	深鉢	口縁部～胴部	-	-	-	ヘラ状条痕	ミガキ ナデ	にぶい橙	にぶい橙							A-a	
197	723	I-64	b	縄文土器（晩期）	深鉢	口縁部～胴部	-	-	-	圧痕 ヘラ状条痕	ヘラナデ	にぶい橙	にぶい橙						チタン鉄鉱	A-a	
	724	H-56	b	縄文土器（晩期）	深鉢	口縁部～胴部	-	-	-	ナデ	ナデ ハケメ	橙	橙							A-a	
	725	J-57	a	縄文土器（晩期）	深鉢	口縁部～胴部	-	-	-	ヘラ状条痕 沈線	ヘラナデ	にぶい橙	灰褐							A-a	
	726	H-53	-	縄文土器（晩期）	深鉢	胴部	-	-	-	ヘラ状条痕 沈線	ヘラナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						赤色粒	A-a	
	727	H-57	b	縄文土器（晩期）	深鉢	胴部	-	-	-	ヘラ状条痕 ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙								
	728	I-53	a	縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	-	-	-	布圧痕	ミガキ ヘラナデ	にぶい黄橙	灰黄褐						赤色粒	C-b	
	729	H-57	b	縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	-	-	-	布圧痕	ナデ	橙	橙灰							C-b	
	730	H-57	b	縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	-	-	-	布圧痕	ナデ	にぶい橙	灰褐							C-b	
	731	I-62	b	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部～底部	-	7.4	-	ヨコナデ 圧痕 指圧痕	ナデ	にぶい橙	にぶい橙							C-c	
198	732	I-65 66	b	土師器	坏	口縁部～底部	12.0	6.0	4.6	ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	橙	橙					密	赤色粒		
	733	I-64	a b	土師器	坏	口縁部～底部	12.5	5.0	4.3	ハケメ ナデ	ハケメ ナデ	橙	橙					密	赤色粒		
	734	I-64	a b	土師器	坏	口縁部～底部	12.6	6.0	4.7	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	浅黄橙	浅黄橙					密	赤色粒		
	735	I-62 65 66	b	土師器	坏	口縁部～底部	13.2	6.0	5.0	工具痕 ナデ ハケメ	ハケメ ナデ	橙	浅黄橙					密	赤色粒		
	736	I-64	b	土師器	坏	口縁部～底部	11.6	6.4	4.8	ヨコナデ	ハケメ ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						赤色粒		
	737	I-J-67	a b	土師器	坏	口縁部～底部	13.3	6.0	5.7	ヨコナデ ヘラ切り	ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙					密			
	738	I-47	-	土師器	坏	口縁部～底部	12.4	5.8	3.5	ヨコナデ	ナデ	橙	橙						赤色粒		一括
	739	J-66	b	土師器	坏	口縁部～底部	-	7.0	-	ナデ ヘラ切り	ナデ ハケメ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						赤色粒		
	740	I-65 66	a b	土師器	坏	胴部～底部	-	6.4	-	回転ヘラ切り ヨコナデ	ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙								
	741	I-67	b	土師器	坏	胴部～底部	-	7.4	-	ナデ ヘラ切り	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙					密			
	742	I-65 66	b	土師器	坏	胴部～底部	-	6.6	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙					密			
	743	J-67	b	土師器	坏	底部	-	6.4	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙					密			
	744	I-67 J-65	a b	土師器	坏	口縁部～底部	13.6	7.4	5.3	ナデ ヘラ切り	ナデ	浅黄橙	黄橙					密	赤色粒		
	745	I-66 67	b	土師器	坏	口縁部～底部	12.4	6.4	4.2	ヨコナデ	ナデ	赤橙色	赤橙色						赤色粒		
	746	I-67	b	土師器	坏	口縁部～底部	13.4	8.0	3.8	ナデ	ナデ	浅黄	浅黄					密			
	747	I-65 67	b	土師器	坏	胴部～底部	-	6.6	-	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						赤色粒		
	748	I-66	b	土師器	坏	胴部～底部	-	8.2	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙						赤色粒 カンラン石		
	749	I-63	a b	土師器	坏	胴部～底部	-	6.2	-	ヘラ切り ナデ 工具痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙								
	750	H-58	b	土師器	坏	胴部～底部	-	4.2	-	回転ヘラ切り ナデ ハケメ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙								
	751	I-67	b	土師器	坏	底部	-	6.8	-	ヘラ切り ナデ 工具痕	ナデ	にぶい橙	にぶい橙						赤色粒		
	752	I-67 J-64	b	土師器	坏	胴部～底部	-	6.0	-	ナデ	ナデ	にぶい橙	浅黄橙					密	赤色粒		
199	753	I-64	b	土師器	坏	胴部～底部	-	8.0	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙						赤色粒		
	754	I-64 65	a b	土師器	坏	胴部～底部	-	9.2	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙						赤色粒		
	755	I-67	b	土師器	坏	胴部～底部	-	9.6	-	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙						赤色粒		
	756	I-64 J-63	b	土師器	坏（内朱）	口縁部～底部	14.6	6.6	5.2	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙						赤色粒		
	757	I-64 65	a b	土師器	坏	口縁部～底部	15.4	6.4	7.2	ヨコナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙						赤色粒		
	758	I-66 J-65	b	土師器	坏	胴部～底部	-	6.8	-	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙						赤色粒		
	759	I-64 65	b	土師器	坏	胴部～底部	-	7.0	-	ナデ ハケメ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙						赤色粒		
	760	I-65 J-64 65	a b	土師器	坏	口縁部～底部	15.2	5.2	6.1	ハケメ ヨコナデ	ヨコナデ	赤橙色	赤橙色					密	赤色粒		
	761	I-62 64	a b	土師器	坏	口縁部～底部	13.2	-	-	ヨコナデ	ナデ 圧ガキ	浅黄橙	浅黄橙					密	赤色粒		高台欠損
	762	I-67	b	土師器	坏	胴部～底部	-	6.0	-	ヨコナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						赤色粒 チタン鉄鉱		
	763	I-65	a b	土師器	坏	胴部～底部	-	8.0	-	ナデ	ナデ 摩滅	浅黄橙	浅黄橙								
	764	I-J-66	a b	土師器	坏	胴部～底部	-	6.8	-	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙						赤色粒 チタン鉄鉱		
	765	I-67	b	土師器	坏	胴部～底部	-	6.5	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙								
	766	I-67	b	土師器	高台付皿	口縁部～底部	12.5	5.8	3.4	ヨコナデ ミガキ	ヨコナデ ナデ	浅黄橙	浅黄橙					密	赤色粒		
	767	I-J-67	b	土師器	高台付皿	口縁部～底部	12.0	5.9	4.0	ヨコナデ ナデ	ナデ	橙	浅黄橙					密	赤色粒		
	768	J-64～66	b	土師器	高台付皿	胴部～底部	-	-	-	丁寧なナデ	ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙								高台欠損
	769	I-66	b	土師器	高台付皿	胴部～底部	-	7.6	-	丁寧なナデ	ナデ	橙	橙								

第31表　南部　土器観察表(2)

挿図番号	レイアウト番号	出土区	層	種類	器種	部位	口径	底径	器高	文様・調整 外面	文様・調整 内面	色調 外面	色調 内面	胎土 長石	胎土 石英	胎土 角閃	胎土 雲母	胎土 砂粒	胎土 その他	分類	備考
200	770	I-64	b	土師器	坏一括	□縁部一部欠	19.0	-	-	ヨコナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙								
	771	I-66	b	土師器	坏一括	□縁部一部欠	12.4	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	橙	橙					密	赤色粒		
	772	J66 67	a b	土師器	坏一括	□縁部一部欠	11.2	-	-	ヨコナデ ハケメ	ヨコナデ ハケメ	にぶい橙	にぶい橙								
	773	I-65	b	土師器	坏一括	□縁部一部欠	13.6	-	-	摩滅	ナデ	浅黄橙	浅黄橙						赤色粒		
	774	I-67	b	土師器	坏一括	□縁部一部欠	-	-	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙						赤色粒 チタン鉄鉱		
	775	I-67	b	土師器	坏一括	□縁部	13.2	-	-	ナデ	ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙						チタン鉄鉱		
	776	I-65	b	土師器	坏一括	□縁部一部欠	11.4	-	-	ヨコナデ	ハケメ ヨコナデ	にぶい橙	にぶい橙					密			
	777	I-64	b	土師器	坏一括	□縁部	12.6	-	-	ナデ	ヨコナデ	にぶい橙	にぶい橙						チタン鉄鉱		
	778	I-65	b	土師器	坏一括	□縁部一部欠	16.4	-	-	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						赤色粒		
	779	I-64	b	土師器	坏一括	□縁部一部欠	12.4	-	-	ナデ ハケメ	ナデ ハケメ	にぶい橙	にぶい橙						赤色粒		
	780	I-66	b	土師器	坏一括	□縁部一部欠	14.0	-	-	丁寧なナデ	ナデ	橙	橙					密	赤色粒		
	781	I-64	b	土師器	坏一括	□縁部一部欠	16.4	-	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙						赤色粒		
	782	I-65	b	土師器	坏一括	□縁部一部欠	9.8	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ ハケメ	にぶい橙	にぶい橙					密			一括
	783	I-67	b	土師器	坏一括	□縁部一部欠	14.2	-	-	丁寧なナデ	ヨコナデ	にぶい橙	にぶい橙								
	784	I-67	a	土師器	坏一括	□縁部一部欠	11.2	-	-	ヨコナデ 工具痕	ヨコナデ	橙	橙						赤色粒		
	785	I-65	b	土師器	坏一括	□縁部一部欠	13.6	-	-	ナデ ハケメ	ヨコナデ ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						赤色粒		
	786	I-64	b	土師器	坏一括	□縁部一部欠	16.6	-	-	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙								
	787	I-66 67	b	土師器	坏一括	□縁部一部欠	16.4	-	-	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙								
	788	I-65	b	土師器	坏一括	□縁部一部欠	16.2	-	-	ナデ ハケメ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙						赤色粒		
	789	I-J-67	b	土師器	坏一括	□縁部一部欠	10.2	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙								
	790	H-59	b	土師器	坏一括	□縁部一部欠	11.4	-	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙								
201	791	J-65		土師器	甕	胴部	-	-	-	ナデ	ケズリ	にぶい橙	にぶい赤褐								土坑229
	792	J-65		土師器	甕	胴部	-	-	-	ナデ ハケメ	ナデ	にぶい赤褐	にぶい橙								土坑229
	793	J-65		土師器	甕	胴部	-	-	-	ナデ	ケズリ	にぶい橙	明赤褐								土坑229
	794	J-65		土師器	甕	胴部	-	-	-	ナデ	ケズリ ナデ	橙	橙						赤色粒		
	795	I-64	b	土師器	甕	胴部	-	-	-	ナデ	ケズリ	にぶい橙	黒褐								土坑221
	796	J-67		土師器	甕	胴部	-	-	-	ナデ	ケズリ	褐灰	にぶい赤褐								鉄18
	797	I-65 67 J-66 67		土師器	甕	□縁部一部欠	30.0	-	-	ナデ	ナデ ヘラケズリ	暗褐	橙								スス付着
	798	I-67	b	土師器	甕	□縁部	35.0	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ ケズリ	にぶい橙	橙								
	799	I-64 65	a b	土師器	甕	□縁部	28.0	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙	にぶい橙						赤色粒 チタン鉄鉱		
	800	I-67	b	土師器	甕	□縁部一部欠	28.8	-	-	ナデ	ヨコナデ ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙								
	801	I-64 66	a b	土師器	甕	□縁部	26.2	-	-	ヨコナデ ハケメ	ヨコナデ ハケメ，ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						赤色粒		
	802	I-67	b	土師器	甕	□縁部	24.6	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	橙	橙								
	803	I-64	b	土師器	甕	□縁部一部欠	26.6	-	-	ヨコナデ ハケメ	ヨコナデ ケズリ	橙	にぶい橙								
	804	I-64	a b	土師器	甕	□縁部一部欠	30.0	-	-	ヨコナデ 指圧痕	ヨコナデ ケズリ	にぶい橙	にぶい橙						チタン鉄鉱		
	805	I-65	b	土師器	甕	□縁部	32.6	-	-	ヨコナデ ハケメ	ヨコナデ ケズリ	橙	橙								
202	806	J-67	b	土師器	甕	□縁部一部欠	28.8	-	-	ヨコナデ ハケメ	ヨコナデ ケズリ	にぶい橙	にぶい橙								
	807	I-65	b	土師器	甕	□縁部	24.6	-	-	ヨコナデ ハケメ	ハケメ ヨコナデ	橙	橙						赤色粒 チタン鉄鉱		
	808	I-64	a b	土師器	甕	□縁部一部欠	26.4	-	-	ハケメ ナデ	ナデ 指圧痕	にぶい橙	橙								
	809	I-64	b	土師器	甕	□縁部	23.2	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙	橙						赤色粒 チタン鉄鉱		
	810	I-64 66	b	土師器	甕	□縁部	18.2	-	-	ヨコナデ	ナデ ケズリ	にぶい橙	にぶい橙								
	811	I-65	b	土師器	甕	□縁部一部欠	16.2	-	-	ヨコナデ ナデ	ナデ ケズリ	にぶい橙	にぶい橙						カンラン石		
	812	H-60	b	土師器	甕	□縁部一部欠	19.6	-	-	ヨコナデ ナデ	ナデ ケズリ	橙	にぶい黄橙						赤色粒		
	813	I-J-L 67	a b	土師器	甕	□縁部一部欠	20.6	-	-	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ハケメ，ミガキ	橙	橙								
	814	I-J 64 67	a b	土師器	甕	□縁部	27.2	-	-	ハケメ ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	橙	橙						赤色粒		一括
	815	I-65	a b	土師器	甕	□縁部一部欠	30.0	-	-	ハケメ ヨコナデ	指圧痕，ナデ ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						チタン鉄鉱		スス付着
203	816	J-65		土師器	坏 (内黒)	胴部	-	-	-	ナデ ハケメ	ナデ	にぶい黄橙	褐灰					密			土坑229
	817	I-J 62~67	a b	土師器	坏 (内黒)	口縁部一底部	19.2	7.9	6.8	ヨコナデ ナデ	ミガキ	浅黄橙	黒褐					密			
	818	I-66 67	b	土師器	坏 (内黒)	口縁部一底部	-	5.6	-	ナデ	ミガキ	にぶい橙	黒褐								
	819	I-65 66	a b	土師器	坏 (内黒)	口縁部一底部	15.2	5.8	5.3	ヨコナデ	ミガキ	にぶい黄橙	黒褐						チタン鉄鉱		
	820	I-67		土師器	坏 (内黒)	□縁部	16.0	-	-	ヨコナデ	ミガキ	にぶい褐	黒褐								
	821	I-67	b	土師器	坏 (内黒)	□縁部	15.2	-	-	ナデ	ミガキ	にぶい黄橙	黒褐						チタン鉄鉱		黒斑あり
	822	I-64	b	土師器	坏 (内黒)	□縁部	-	-	-	ナデ	ミガキ	にぶい黄橙	黒褐								
	823	I-64 65	b	土師器	坏 (内黒)	□縁部一部欠	16.0	-	-	ヨコナデ	ミガキ	浅黄	黒褐								

第32表　南部　土器観察表(3)

挿図番号	レイアウト番号	出土区	層	種類	器種	部位	口径	底径	器高	文様・調整 外面	文様・調整 内面	色調 外面	色調 内面	胎土 長石	胎土 石英	胎土 角閃	胎土 雲母	胎土 砂粒	胎土 その他	分類	備考
203	824	I-64	a	土師器	坩(内黒)	口縁部	18.3	-	-	ナデ	ミガキ	にぶい黄橙	黒褐						チタン鉄鉱		
	825	I-67	a	土師器	坩(内黒)	口縁部	16.0	-	-	ナデ	ミガキ	にぶい黄橙	黒褐								
	826	I-65	b	土師器	坩(内黒)	口縁部	14.8	-	-	ナデ	ミガキ	にぶい黄橙	黒褐								
	827	I-64	b	土師器	坩(内黒)	口縁部	-	-	-	ナデ	ミガキ	にぶい黄橙	黒褐								
	828	J-65	b	土師器	坩(内黒)	口縁部	-	-	-	ナデ	ミガキ	にぶい黄橙	黒褐				密				
	829	I-67	b	土師器	坩(内黒)	口縁部	-	-	-	ナデ	ミガキ	にぶい黄橙	黒褐								
	830	I-66	b	土師器	坩(内黒)	底部	-	6.6	-	ナデ	ミガキ	にぶい黄橙	褐灰								
	831	I-65 66	b	土師器	坩(内黒)	胴部～底部	-	7.2	-	ナデ	ミガキ	にぶい黄橙	褐灰						チタン鉄鉱		
	832	I-65	b	土師器	坩(内黒)	底部	-	7.6	-	ナデ ハケメ	ミガキ	にぶい黄橙	黒褐								
	833	I-64	b	土師器	坩(内黒)	底部	-	7.5	-	ナデ	ナデ	浅黄	浅黄								
	834	I-65	b	土師器	坩(内黒)	底部	-	7.6	-	ナデ	ミガキ	にぶい橙	褐灰								
	835	I-62	b	土師器	坩(内黒)	胴部～底部	-	8.8	-	ナデ 工具痕	ミガキ	にぶい黄橙	黒褐								
	836	I-65～67	b	土師器	坩(内黒)	底部	-	7.6	-	ナデ	ミガキ	にぶい橙	黒褐								
	837	I-67	a	土師器	坩(内黒)	胴部～底部	-	8.0	-	ヨコナデ ヘラ切り	ミガキ	橙	黒褐								
	838	I-65 66	b	土師器	坩(内黒)	胴部～底部	-	6.4	-	ナデ	ミガキ	にぶい黄橙	褐灰						赤色粒		
	839	J-65	b	土師器	坩(内黒)	底部	-	-	-	ナデ	ミガキ	にぶい黄橙	黒褐								高台欠損
	840	I-67	b	土師器	坩(内黒)	胴部～底部	-	-	-	ナデ	ミガキ	にぶい橙	黒褐						チタン鉄鉱		高台欠損
	841	I-J-67	b	土師器	坩(内黒)	胴部～底部	-	-	-	ヨコナデ	ミガキ	にぶい橙	黒褐						赤色粒		高台欠損
	842	I-67	b	土師器	坩(内黒)	胴部～底部	-	-	-	ヨコナデ	ミガキ	にぶい橙	黒褐								高台欠損
	843	J-65	b	土師器	坩(内黒)	胴部～底部	-	11.6	-	ナデ	ミガキ	にぶい黄橙	褐灰				密				
204	844	I-65	b	土師器	甕(隆帯)	胴部	-	-	-	ナデ	ミガキ	にぶい橙	黒褐								
	845	I-64	b	土師器	甕(隆帯)	胴部	-	-	-	ナデ	ミガキ	にぶい橙	黒褐								
	846	I-65	b	土師器	甕(隆帯)	底部	-	-	-	ナデ	ミガキ	にぶい橙	黒褐								一括
	847	-	表採	土師器	坩(外朱)	底部	-	-	-	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						赤色粒		
	848	I-65	b	土師器	坩(外朱)	胴部	-	-	-	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙								一括
	849	I-66	b	土師器	坩(黒斑)	口縁部～底部	-	6.4	-	ヨコナデ 回転ヘラ切り	ナデ ハケメ	橙	橙						赤色粒		「福笑？」
	850	I-64 65	a b	土師器	鉢(口縁隆帯)	胴部～底部	-	7.0	-	ヨコナデ	ミガキ	橙	黒褐				密				「鷹」
	851	I-63 J-64-67	b	土師器	坩(黒斑)	口縁部～底部	12.6	6.2	4.3	回転ヘラ切り ヨコナデ ハケメ	ナデ	橙	橙								「用？」
	852	I-65	b	土師器	坩(黒斑)	口縁部～胴部	13.6	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙								「一？」
	853	I-65	b	土師器	坩(黒斑)	口縁部～胴部	-	-	-	ヨコナデ	ナデ	橙	橙								「？」
	854	I-64	b	土師器	坩(黒斑)	口縁部～胴部	-	-	-	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙						赤色粒		「？」
	855	I-64	b	土師器	坩(内黒)	胴部	-	-	-	ナデ	ミガキ	にぶい黄橙	褐灰								「？」一括
	856	I-65	b	土師器	坩	口縁部～底部	13.6	7.2	-	ヨコナデ 刻目	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙								
	857	I-66	b	土師器	坩	口縁部～胴部	-	-	-	ヨコナデ 工具痕	ナデ	にぶい橙	にぶい橙						赤色粒		
	858	I-65	a b	土師器	坩(内黒)	底部	-	8.0	-	ナデ	ミガキ	にぶい黄橙	褐灰								メンコ状
205	859	I-64	a b	須恵器	坏	口縁部～底部	16.0	9.8	4.7	ヨコナデ ヘラケズリ	ヨコナデ	灰黄	灰黄								
	860	I-64	b	須恵器	坏	底部	-	9.8	-	ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄	灰黄								
	861	I-64～66	b	須恵器	坏	口縁部～底部	15.6	11.2	4.2	ヨコナデ ヘラケズリ	ヨコナデ	灰黄	灰黄						チタン鉄鉱		
	862	I-67	b	須恵器	坏	胴部～底部	-	8.2	-	ヨコナデ	ナデ	黄灰	黄灰								
	863	J-67	a	須恵器	坏一坏	口縁部～胴部	16.2	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄	灰黄								
	864	I-64	a b	須恵器	坏一坏	口縁部～胴部	16.0	-	-	摩滅	摩滅	灰黄	灰黄								
	865	I-64	b	須恵器	坏一坏	口縁部～胴部	12.6	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄	灰黄								
	866	I-65	a	須恵器	坏一坏	口縁部	-	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	黄灰	黄灰						チタン鉄鉱		
	867	I-67	b	須恵器	甕	口縁部	16.8	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	灰	灰 オリーブ				密				
	868	I-61 63 J-67	b	須恵器	甕	口縁部～胴	16.8	-	-	ヨコナデ 格子目タタキ	ヨコナデ 同心円当て具痕	灰	灰						赤色粒		
	869	I-66	b	須恵器	甕	胴部	-	-	-	格子目 ナデ	同心円 平行	灰 オリーブ									
	870	J-67	b	須恵器	甕	胴部	-	-	-	格子目 ナデ	同心円 タタキ痕	灰 オリーブ	灰						赤色粒		
	871	I-67	b	須恵器	甕	胴部	-	-	-	格子目	同心円 ナデ	灰 オリーブ	灰								
	872	I-67	b	須恵器	甕	胴部	-	-	-	格子目	同心円	灰	灰								
	873	J-J-66 67	b	須恵器	甕	胴部	-	-	-	格子目	同心円 平行当て具痕	灰	灰						赤色粒		
	874	I-J-67	b	須恵器	甕	胴部	-	-	-	格子目	同心円	灰 オリーブ	灰						赤色粒		
	875	I-66	b	須恵器	甕	胴部	-	-	-	平行タタキ	同心円	灰	灰								
	876	I-63	a	須恵器	甕	胴部	-	-	-	平行 ナデ	平行 ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙								
	877	I-64～66	a b	須恵器	甕	胴部	-	-	-	平行 ナデ	同心円	にぶい黄橙	褐灰				密				
	878	I-64 65	a	須恵器	甕	胴部	-	-	-	平行	平行	橙	明灰黄				密				
	879	I-64	b	須恵器	甕	胴部	-	-	-	平行	同心円	橙	明灰黄				密				
	880	I-67	b	須恵器	甕	底部	-	-	-	平行タタキ ナデ	棒状工具痕	灰黄	灰黄				密		赤色粒 チタン鉄鉱		焼成不良

第33表　南部　土器観察表(4)

挿図番号	レイアウト番号	出土区	層	種類	器種	部位	口径	底径	器高	文様・調整 外面	文様・調整 内面	色調 外面	色調 内面	胎土 長石	胎土 石英	胎土 角閃	胎土 雲母	胎土 砂粒	胎土 その他	分類	備考
206	881	I-67	a b	土師器	焼成土器	口縁部	12.0	-	-	指圧痕	ナデ	橙	橙								
	882	I-67	b	土師器	焼成土器	口縁部	-	-	-	指圧痕	ナデ	橙	橙						赤色粒		
	883	I-66	b	土師器	焼成土器	口縁部一胴部	13.6	-	-	ナデ 指圧痕	布圧痕	橙	橙						赤色粒		
	884	I-J-64~67	b	土師器	焼成土器	口縁部一胴部	-	-	-	ナデ 指圧痕	布圧痕	橙	橙						赤色粒		一括
	885	I-65	b	土師器	焼成土器	口縁部一胴部	-	-	-	ナデ 指圧痕	布圧痕	明黄褐	明黄褐					密	赤色粒		
	886	I-67	b	土師器	焼成土器	口縁部	-	-	-	指圧痕	布圧痕	橙	橙						赤色粒		
	887	I-67	b	土師器	焼成土器	口縁部	-	-	-	指圧痕	布圧痕	橙	橙								
	888	I-65	b	土師器	焼成土器	口縁部	-	-	-	指圧痕	布圧痕	橙	橙								
	889	I-65	b	土師器	焼成土器	口縁部	-	-	-	指圧痕	布圧痕	橙	橙								
	890	I-66	b	土師器	焼成土器	口縁部一胴部	-	-	-	ナデ 指圧痕	布圧痕	橙	橙								
	891	I-65	b	土師器	焼成土器	口縁部一胴部	-	-	-	ナデ 指圧痕	布圧痕	橙	橙						赤色粒		自然釉付着
	892	I-65	b	土師器	焼成土器	口縁部一胴部	17.0	-	-	ナデ 指圧痕	布圧痕	橙	橙						赤色粒		一括
	893	I-67	b	土師器	焼成土器	口縁部	-	-	-	指圧痕	ナデ	橙	橙								
	894	I-66	b	土師器	焼成土器	胴部	-	-	-	指圧痕	布圧痕	橙	橙								
	895	I-65	-	土師器	焼成土器	胴部	-	-	-	指圧痕	布圧痕	橙	橙								
	896	I-65	a	土師器	焼成土器	胴部	-	-	-	ナデ 指圧痕	圧痕	にぶい橙	にぶい橙								
	897	I-67	a	土師器	焼成土器	胴部	-	-	-	指圧痕	布圧痕	橙	橙								
	898	J-67	b	土師器	焼成土器	胴部	-	-	-	ナデ 指圧痕	布圧痕	橙	橙						赤色粒		
	899	H-50	b	土師器	焼成土器	底部	-	-	-	指圧痕	ナデ	橙	橙								
207	900	H-53	-	青磁	皿	口縁部一胴部	15.4	-	-	透明釉	透明釉	暗オリーブ	暗オリーブ					密			花弁型稜花口縁
	901	H-52 I-56	a	瓦質土器	鉢	胴部	-	-	-	擂目	三方ヤキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙								
	902	J-57	b	瓦質土器	鉢	胴部一底部	-	10.2	-	三方ヤキ 流釉	三方ヤキ	黒褐	黒褐								
	903	I-57	-	陶胎磁器	碗	口縁部一胴部	11.8	-	-	透明釉	透明釉	灰	灰					密			草花文 沈線 カクラン 露目釉剥ぎ 無釉
	904	-	-	磁器	碗	胴部一底部	-	2.4	-	草花文 灰釉	灰釉	灰白色	灰白色					密			底釉足取り跡 無釉
	905	中上段	表採	磁器	皿	胴部一底部	-	6.4	-	透明釉	草花文	灰白	灰白					密			
	906	-	表採	陶器	鉢	胴部一底部	-	3.4	-	透明釉	透明釉 蛇ノ目釉剥ぎ	暗褐	暗褐								胴部下位以下無釉
	907	I-57	c	陶器	皿	口縁部一胴部	14.2	-	-	透明釉	透明釉	灰黄	灰黄					密			一括
	908	-	-	陶器	皿	口縁部一底部	12.0	5.4	2.6	鉄釉	鉄釉	灰黄褐	灰オリーブ					密			胴部中位以下無釉 一括
	909	-	-	陶器	鉢	口縁部	17.6	-	-	鉄釉 口唇部釉剥ぎ	鉄釉	暗灰オリーブ	暗灰オリーブ					密			一括
	910	-	表採	陶器	鉢	胴部一底部	-	19.4	-	鉄釉	鉄釉	暗褐	褐								底面無釉
	911	I-J-67	-	陶器	擂鉢	口縁部	-	-	-	外面一段 鉄釉	単位櫛目	褐	にぶい褐					密			口唇部釉剥ぎ 一括
	912	-	表採	陶器	擂鉢	胴部	-	-	-	鉄釉たれ	単位櫛目	オリーブ褐	暗褐								
	913	-	表採	陶器	鍋	底部	-	6.6	-	ナデ	ナデ	褐灰	灰褐								一括
	914	I-63	b	陶器	甕	胴部一底部	-	24.8	-	鉄釉	鉄釉	黄灰	黄灰								底面に目跡
	915	-	-	陶器	土瓶	口縁部	7.6	-	-	鉄釉	鉄釉	灰オリーブ	灰オリーブ								一括
	916	-	-	陶器	土瓶	耳	-	-	-	透明釉	透明釉	暗褐	暗褐					密			一括
	917	-	-	陶器	土瓶	底部	-	7.8	-	無釉	透明釉	灰黄褐	灰オリーブ					密			一括
	918	H-58	b	陶器	土瓶	底部	-	4.0	-	外面腰部以外無釉 鼎脚五形	鉄釉	にぶい黄褐	灰黄褐								
	919	-	-	陶器	土瓶	鼎脚	-	-	-	鉄釉	鉄釉	暗褐	暗褐					密			胴部下位以下無釉 脚付き 一括
	920	I-67	b	陶器	瓶	頸部	-	-	-	鉄釉	鉄釉	暗オリーブ褐	暗灰黄					密			

第５節　出土石器

南部では，石鏃が２点，石匙１点，磨製石斧１点，磨石２点，軽石製品３点の計９点が出土しており，出土点数は少ない。軽石製品を除く石器は縄文時代のものと思われるが，前述の通り縄文時代の調査は部分的であるので台地部からの流れ込みの可能性が考えられる。それぞれの出土区，石材，計測値などは，第34表に示した。

１　石鏃（第208図921，922）

921は正三角形型の石鏃で，浅めの抉りにより作り出された脚は長さが異なる。石材は蛋白咳である。側面は細かい連続した剥離が施され，鋸歯状を呈する。922は，黒耀石を利用したもので，抉りの深い両脚部の先端は欠損しているが長身鏃である。

２　石匙（第208図923）

923はチャート製の石匙である。薄い剥片を利用し側面に抉りを入れて摘み部を作り出し，直線的な刃部も連続する細かい剥離を施す。両面中央に自然面が残る。

３　磨製石斧（第208図924）

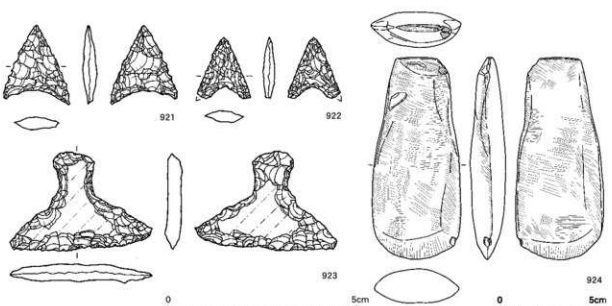
924は砂岩製の磨製石斧である。扁平な自然石を細く敲打し，刃部，基部を作り出した後，全身に丁寧な研磨を施す。刃部は両刃状に削られ鋭く尖っており，残存状況も良好である。基部の側面はわずかに面取りを施している。横断面の形状は，厚みのあるレンズ状を呈する。

４　磨石（第209図925，926）

925は磨石である。円形の安山岩を使用したもので，正面上部，左側面，左側面下部，裏面に摩耗面が認められ，用途によって面を使い分けていたと思われる。また，下面，右側縁に敲打痕が残ることから，両機能を備えた磨石である。926は，正面，裏面に広く摩耗面が残るもので，正面磨り面は中央がやや凹んでいる。安山岩を使用している。

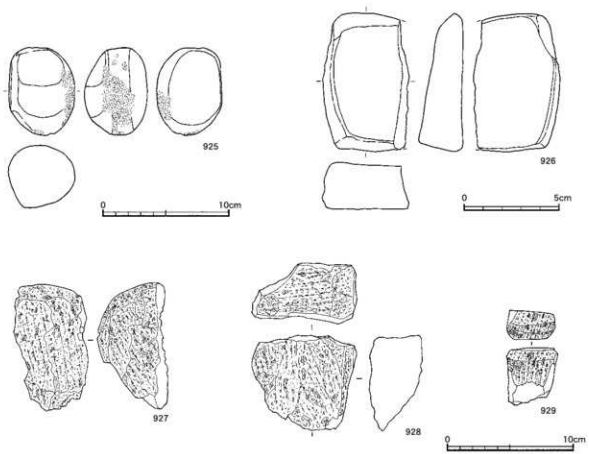
５　軽石製品（第209図927～929）

軽石は石の特性上破損品が多く，南部調査区では破損品を含め計336点出土している。



第208図　南部　縄文時代の石器(1)

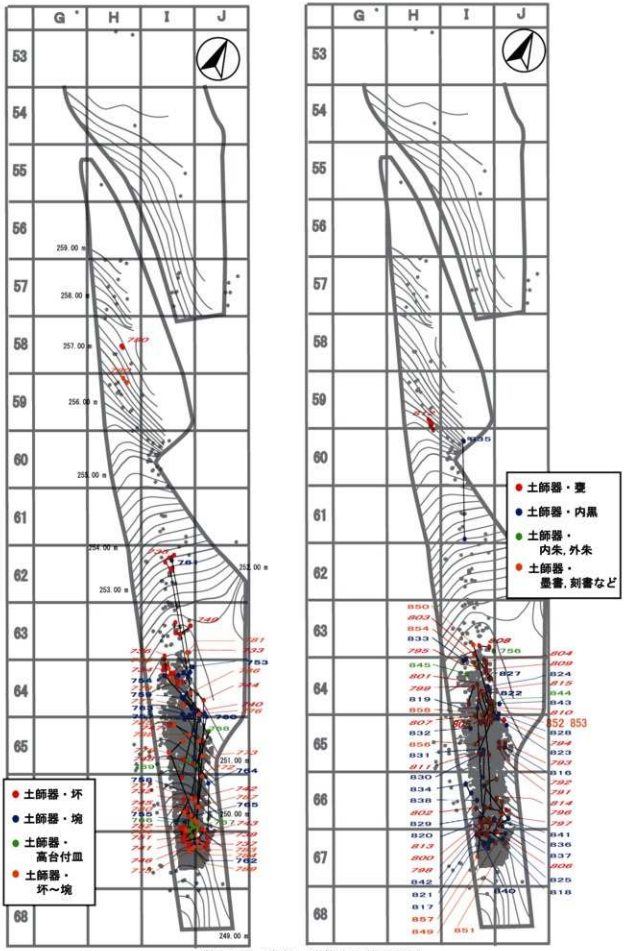
927〜929は，明らかに人為的な加工を施したと思われる軽石製品である。927は上面を平坦に加工し，上面から側面へかけて丸くなるように加工を施している。上面は研磨され滑らかである。刃物状工具の使用痕が残る。上面は火熱を受け赤化している。破損品であるため全体形状は不明である。928は，正面に面取りされた部分が残り，一部赤橙色に変色している。929は，角面柱状に加工された軽石の角の部分に当たると思われ，上面，側面が平坦に加工され，角部分は数回の削り調整後砥石等で研磨を施し丸く仕上げている。上面に工具痕が残り，加工面は全て火熱を受けた事による赤化が見られる。



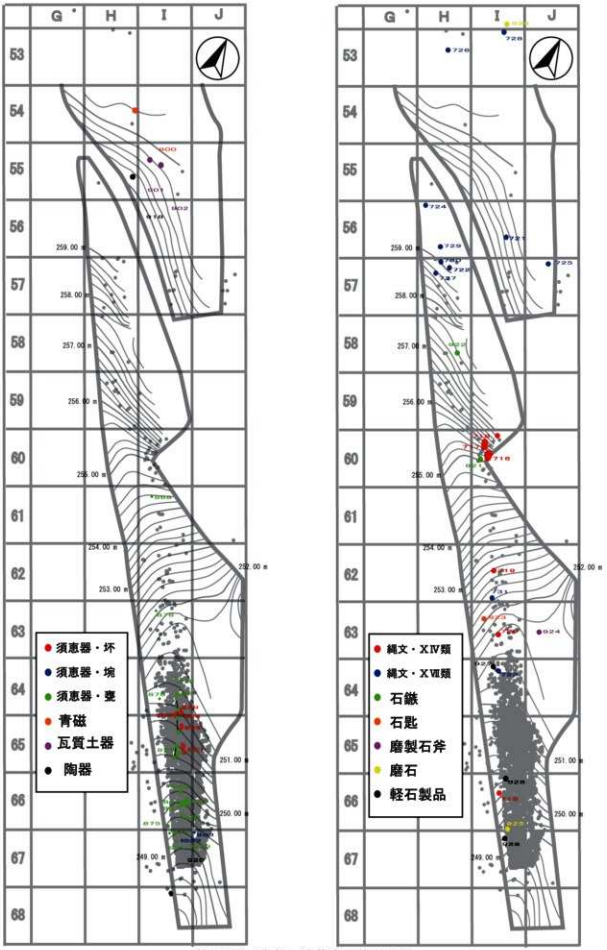
第209図　南部　縄文時代の石器(2)，古代の石器

第34表　南部　石器観察表

挿図番号	レイアウト番号	器種	出土区・層		石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
208	921	石鏃	51T	a	玉髄	2.1	1.8	0.3	0.83	
	922	石鏃	H-58	b	黒曜石	1.6	1.4	0.2	0.45	
	923	石匙	I-63	b	チャート	2.6	3.8	0.5	3.36	
	924	磨製石斧	J-63		安山岩	10.7	4.7	1.8	135.11	
209	925	磨石	I-67	a	安山岩	6.9	5.2	4.9	251.47	
	926	磨石	46T	a	安山岩	7.3	4.6	2.5	171.21	
	927	軽石製品	I-64	b	-	9.9	5.7	5.5	78.60	
	928	軽石製品	I-66	b	-	7.5	8.2	4.8	82.70	
	929	軽石製品	I-67	b	-	4.5	3.9	2.4	14.60	



第210図　南部　遺物出土状況図(1)



第211図　南部　遺物出土状況図(2)

第Ⅶ章　科学分析

第１節　放射性炭素年代測定

１　㈱加速器分析研究所測定結果１（平成18年度実施）

遺跡の位置と測定対象試料

狩俣遺跡は，鹿児島県曽於市大隅町大谷2154（北緯131　36　06　，東経130　56　06　）に位置する。測定対象試料は，G･８区土坑48号から出土した炭化物（　１：IAAA-62436），I･42区集石14号から出土した炭化物（　２：IAAA-62437），H･39区集石13号から出土した炭化物（３：IAAA-62438），合計３点である。

化学処理工程

１）メス・ピンセットを使い，根・土等の表面的な不純物を取り除く。

２）AAA（Acid Alkali Acid）処理。酸処理，アルカリ処理，酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では１Nの塩酸（80　）を用いて数時間処理する。その後超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001～１Nの水酸化ナトリウム水溶液（80　）を用いて数時間処理する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では１Nの塩酸（80　）を用いて数時間処理した後，超純水で中性になるまで希釈し，90℃で乾燥する。

３）試料を酸化銅１ｇと共に石英管に詰め，真空下で封じ切り，500℃で30分，850℃で２時間加熱する。

４）液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し，真空ラインで二酸化炭素（CO_2）を精製する。

５）精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（還元）し，グラファイトを作製する。

６）グラファイトを内径１㎜のカソードにハンドプレス機で詰め，それをホイールにはめ込み，加速器に装着し測定する。

測定方法

測定機器は，３MVタンデム加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。134個の試料が装填できる。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx　）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また，加速器により^{13}C/^{12}Cの測定も同時に行う。

算出方法

１）年代値の算出には，Libbyの半減期5568年を使用した。

２）BP年代値は，過去において大気中の炭素14濃度が一定であったと仮定して測定された，1950年を基準年として遡る放射性炭素年代である。

3）付記した誤差は，次のように算出した。

複数回の測定値について，^{2}検定を行い測定値が１つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い，みなせない場合には標準誤差を用いる。

4） ^{13}Cの値は，通常は質量分析計を用いて測定するが，AMS測定の場合に同時に測定される^{13}Cの値を用いることもある。

^{13}C補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は，いずれも基準値からのずれを千分偏差（　；パーミル）で表した。

$\delta^{14}C=[(^{14}A_S-^{14}A_R)/^{14}A_R]\times 1000$ (1)　$\delta^{13}C=[(^{13}A_S-^{13}A_{PDB})/^{13}A_{PDB}]\times 1000$ (2)

ここで，　$^{14}A_S$：試料炭素の^{14}C濃度：$(^{14}C/^{12}C)_S$または$(^{14}C/^{13}C)_S$

$^{14}A_R$：標準現代炭素の^{14}C濃度：$(^{14}C/^{12}C)_R$または$(^{14}C/^{13}C)_R$

^{13}Cは，質量分析計を用いて試料炭素の^{13}C濃度（$^{13}A_S=^{13}C/^{12}C$）を測定し，PDB（白亜紀のベレムナイト（矢石）類の化石）の値を基準として，それからのずれを計算した。但し，加速器により測定中に同時に$^{13}C/^{12}C$を測定し，標準試料の測定値との比較から算出した　^{13}Cを用いることもある。この場合には表中に〔加速器〕と注記する。

また，　^{14}Cは，試料炭素が　$^{13}C=-25.0$（　）であるとしたときの^{14}C濃度（$^{14}A_N$）に換算した上で計算した値である。(1)式の^{14}C濃度を，　^{13}Cの測定値をもとに次式のように換算する。

$^{14}A_N=^{14}A_S\times(0.975/(1+\delta^{13}C/1000))^2$　（$^{14}A_S$として$^{14}C/^{12}C$を使用するとき）　または

$=^{14}A_S\times(0.975/(1+\delta^{13}C/1000))$　（$^{14}A_S$として$^{14}C/^{13}C$を使用するとき）

$\Delta^{14}C=[(^{14}A_N-^{14}A_R)/^{14}A_R]\times 1000$　(‰)

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については，海洋中の放射性炭素濃度が大気の炭酸ガス中の濃度と異なるため，同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合，同位体補正をしない　^{14}Cに相当するBP年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

^{14}C濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として，pMC（percent Modern Carbon）がよく使われており，　^{14}Cとの関係は次のようになる。

$\Delta^{14}C=(pMC/100-1)\times 1000$ (‰)　　$pMC=\Delta^{14}C/10+100$ (%)

国際的な取り決めにより，この　^{14}CあるいはpMCにより，放射性炭素年代（Conventional Radiocarbon Age;yrBP）が次のように計算される。

$T=-8033\times\ln[(\Delta^{14}C/1000)+1]=-8033\times\ln(pMC/100)$

5）^{14}C年代値と誤差は，１桁目を四捨五入して10年単位で表示される。

6）較正暦年代の計算では，IntCal04データベース（Reimer et al 2004）を用い，OxCalv 3.10較正プログラム（Bronk Ransey1995　Bronk Ransey 2001 Bronk Ramsey，van der Plicht and Weninger2001）を使用した。

測定結果

G・8区土坑48号出土炭化物（　1：IAAA-62436）が2900　30yrBP，I-42区集石14号出土炭化物（　2：IAAA-62437）が7260　40yrBP，H-39区集石13号出土炭化物（　3：IAAA-

62438）が8230　50yrBPの^{14}C年代である。暦年較正年代（1　=68.2%）は，　1が1130BC〜1010BCであり，縄文時代後期末から晩期初頭，　2が6210BC〜6130BC（42.4%）・6110BC〜6060BC（25.8%）であり，縄文時代早期中葉，　3が7340BC〜7170BCであり，縄文時代早期前葉から中葉にかけての年代である。化学処理および測定内容に問題は無く，妥当な年代と考えられる。

参考文献

Stuiver，M and Polash，H.A.（1977）Discussion：Reporting of ^{14}C data．*Radiocarbon*，19：355-363

Bronk Ramsey C.（1995）Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy：the OxCal Program，*Radiocarbon*，37（2）425-430

Bronk Ramsey C.（2001）Development of the Radiocarbon Program OxCal，*Radiocarbon*，43（2A）355-363

Bronk Ramsey C.，J．van der Plicht and B．Weninger（2001）Wiggle Matching radiocarbon dates，*Radiocarbon*，43（2A）381-389

Reimer et al.（2004）IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration，0-26cal kyr BP．*Radiocarbon* 46，1029-1058

第35表　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果(1)

7/44 사 ㅁㅁ 昭 ㅈㅈ	捐	鰯	사ㅁ飲熾搖敬要友孚孜籃褐犒儡	
ㅎㅎㅎㅎㅎㅎㅎㅎㅎㅎㅎㅎ	捐鰯艤牢膰聯B烨B俞瘧壁垛鵰鳴繕苦稟嘘苦擄　ㅌㅌㅌBB		쌔ㄹㄹ$_{B}$ ㅅㅁ炎 $_{B}$ㅁㅁ炊　烨	ㅍㅍㅍ午文　ㅎㅎ
	B　　哩琾暎擢B B		伐^{ㅁㅁ}炎咱炊炎碎晤繰炊烨	ㅋㅋㅋㅋㅋㅋㅋㅋㅋㅋㅋㅋ
	捐鰯展陣BB烨B　友祛咨B		壹^{ㅁㅁ}炎咱炊	炯
	捐鰯寵 ㅂ嶄遥炊B烨B陷 ㅌ		ㅁ山炎怀炊	炯
	ㅂ積娜 ㅂ	伐^{ㅁㅁ}炎B孜抔佛叻擷B	伐^{ㅁㅁ}炎咱炊BB	炯B
			B ㅁ山炎怀炊B	炯B
			ㅅㅁ炎 $_{B}$ㅁㅁ炊B	炯B
ㅎㅎㅎㅎㅎㅎㅎㅎㅎㅎㅎㅎ	捐鰯艤牢膰聯B烨B俞瘧壁垛鵰鳴繕苦稟嘘苦擄　ㅌㅌㅌBB		쌔ㄹㄹ$_{B}$ ㅅㅁ炎 $_{B}$ㅁㅁ炊　烨	ㅍㅍㅍ午文　ㅎㅎ
	B　　哩琾暎擢B B		伐^{ㅁㅁ}炎咱炊炎碎晤繰炊烨	ㅋㅋㅋㅋㅋㅋㅋㅋㅋㅋㅋㅋ
	捐鰯展陣BB烨B　友祛咨B		壹^{ㅁㅁ}炎咱炊	炯
	捐鰯寵 ㅂ嶄遥炊B烨B陷 ㅌ		ㅁ山炎怀炊	炯
	ㅂ積娜 ㅂ	伐^{ㅁㅁ}炎B孜抔佛叻擷B	伐^{ㅁㅁ}炎咱炊BB	炯B
			B ㅁ山炎怀炊B	炯B
			ㅅㅁ炎 $_{B}$ㅁㅁ炊B	烨B
ㅎㅎㅎㅎㅎㅎㅎㅎㅎㅎㅎㅎ	捐鰯艤牢膰聯B烨B俞瘧壁垛鵰鳴繕苦稟嘘苦擄　ㅌㅌㅌBB		쌔ㄹㄹ$_{B}$ ㅅㅁ炎 $_{B}$ㅁㅁ炊　烨	ㅍㅍㅍ午文　ㅎㅎ
	B　　哩琾暎擢B B		伐^{ㅁㅁ}炎咱炊炎碎晤繰炊烨	ㅋㅋㅋㅋㅋㅋㅋㅋㅋㅋㅋㅋ
	捐鰯展陣BB烨B　友祛咨B		壹^{ㅁㅁ}炎咱炊	炯
	捐鰯寵 ㅂ嶄遥炊B烨B陷 ㅌ		ㅁ山炎怀炊	炯
	ㅂ積娜 ㅂ	伐^{ㅁㅁ}炎B孜抔佛叻擷B	伐^{ㅁㅁ}炎咱炊BB	炯B
			B ㅁ山炎怀炊B	炯B
			ㅅㅁ炎 $_{B}$ㅁㅁ炊B	烨B

積邨撐鰯烟鬱跂方傴嚆跂熕

[illegible]	捐鰯噺邃B	[illegible]
[illegible]	嚆[illegible]	[illegible]
[illegible]	嚆[illegible]	[illegible]
[illegible]	嚆[illegible]	[illegible]

ここに記載するLibby Age（年代値）と誤差は下１桁を丸めない値です。

2 ㈱加速器分析研究所測定結果２（平成20年度実施）

測定対象試料

狩俣遺跡は，鹿児島県曽於市大隅町（北緯31　37　40　，東経130　56　35　）に所在する。測定対象試料は，確認調査８トレンチから出土した土器の付着炭化物（　3：IAAA-80770）である。

測定の意義　　土器の年代を明らかにしたい。

化学処理工程

⑴　メス・ピンセットを使い，根・土等の表面的な不純物を取り除く。

⑵　酸処理，アルカリ処理，酸処理（AAA：Acid Alkali Acid）により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では１Nの塩酸（80　）を用いて数時間処理する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では１Nの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。なお，AAA処理において，アルカリ濃度が１N未満の場合，表中にAaAと記載する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では１Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後，超純水で中性になるまで希釈し，90℃で乾燥する。希釈の際には，遠心分離機を使用する。

⑶　試料を酸化銅と共に石英管に詰め，真空下で封じ切り，500℃で30分，850℃で２時間加熱する。

⑷　液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し，真空ラインで二酸化炭素（CO_2）を精製する。

⑸　精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し，グラファイトを作製する。

⑹　グラファイトを内径１㎜のカソードに詰め，それをホイールにはめ込み，加速器に装着する。

測定方法

測定機器は，加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置を使用する。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx　）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

算出方法

⑴　年代値の算出には，Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polash 1977）。

⑵　^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は，過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され，1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。この値は，^{13}Cによって補正された値である。^{14}C年代と誤差は，1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また，^{14}C年代の誤差（　1　）は，試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68 2%であることを意味する。

⑶　^{13}Cは，試料炭素の^{13}C濃度（^{13}C／^{12}C）を測定し，基準試料からのずれを示した値である。同位体比は，いずれも基準値からのずれを千分偏差(　　)で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により^{13}C／^{12}Cを測定した場合には表中に(ＡＭＳ)と注記する。

⑷　pMC（percent Modern Carbon）は，標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。

⑸　暦年較正年代とは，年代が既知の試料の^{14}C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ，過去の^{14}C濃度変化などを補正し，実年代に近づけた値である。暦年較正年代は，^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり，1標準偏差（1　=68 2%）あるいは2標準偏差（2　=95 4%）で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は，下一桁を四捨五入しない^{14}C年代値である。なお，較正曲線および較正プログラムは，データの蓄積によって更新される。また，プログラムの種類によっても結果が異なるため，年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは，暦年較正年代の計算に，IntCal04データベース（Reimer et al 2004）を用い，OxCalv4 0較正プログラム（Bronk Ransey 1995 Bronk Ransey 2001 Bronk Ramsey，van der Plicht and Weninger 2001）を使用した。

測定結果

土器付着炭化物の^{14}C年代は2480　30yrBPである。試料の炭素含有率は53 2%であり，十分な値である。化学処理および測定内容にも問題は無く，妥当な年代と考えられる。

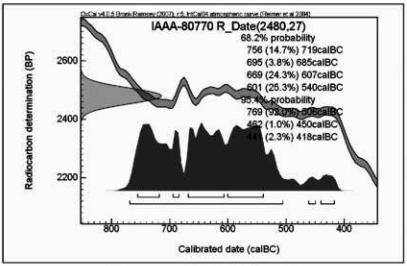
第36表　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果⑵

剛長嘶窪	捐鯣羅	艤卑膊嚇	捐鯣 展陣	眦嘶 塢㊀	豬^{13}C (瑾) (AMS)	豬^{13}C 扚佛示視	
						Libby Age 穆rBP檜	pMC (%)
IAAA-80770	瓘3		友祜咨	AaA	**-21.57 ± 0.30**	**2,480 ± 30**	**73.43 ± 0.25**

[　2351]

剛長嘶窪熕	豬^{13}C 扚佛祢祥鶇		轎訣方佛喝 (yrBP)	1σ 轎訣熕姙矮	2σ 轎訣熕姙矮
	Age (yrBP)	pMC燁鬱檜			
IAAA-80770	2,420 ± 30	73.95 ± 0.24	2,480 ± 27	756BC - 719BC (14.7%) 695BC - 685BC (3.8%) 669BC - 607BC (24.3%) 601BC - 540BC (25.3%)	769BC - 506BC (92.0%) 462BC - 450BC (1.0%) 441BC - 418BC (2.3%)

［参考値］



第212図　暦年正年代データ(1)

参考文献

Stuiver M . and Polash H .A . 1977 Discussion : Reporting of ^{14}C data , *Radiocarbon* 19 , 355-363

Bronk Ramsey C . 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy : the OxCal Program , *Radiocarbon* 37(2) , 425-430

Bronk Ramsey C . 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal , *Radiocarbon* 43(2A) , 355-363

Bronk Ramsey C ., van der Plicht J . and Weninger B . 2001 Wiggle Matching radiocarbon dates , Radiocarbon 43(2A) , 381-389

Reimer , P J . et al . 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration , 0-26cal kyr BP , *Radiocarbon* 46 , 1029-1058

3　㈱加速器分析研究所測定結果３（平成20年度実施）

測定対象試料

狩俣遺跡は，鹿児島県曽於市大隅町（北緯31　37　40　，東経130　56　35　）に所在する。測定対象試料は，G-７区の畝跡から出土した炭化物（　１：IAAA-80831）と　ｂ層から出土した炭化物（　２：IAAA-80832）である。　１は直径１㎝程の炭化物片を測定試料に選定した。　２は２　５㎝程の木炭であったため，その年輪の最外部から採取した。

測定の意義　畝や層位の年代を明らかにしたい。

化学処理工程

⑴　メス・ピンセットを使い，根・土等の表面的な不純物を取り除く。

⑵　酸処理，アルカリ処理，酸処理（AAA：Acid Alkali Acid）により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では１Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では１Nの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用い

て数時間処理する。なお，AAA処理において，アルカリ濃度が１N未満の場合，表中にAaAと記載する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では１Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後，超純水で中性になるまで希釈し，90℃で乾燥する。希釈の際には，遠心分離機を使用する。

⑶　試料を酸化銅と石英管に詰め，真空下で封じ切り，500℃で30分，850℃で２時間加熱する。

⑷　液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し，真空ラインで二酸化炭素（CO_2）を精製する。

⑸　精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し，グラファイトを作製する。

⑹　グラファイトを内径１㎜のカソードに詰め，それをホイールにはめ込み，加速器に装着する。

測定方法

測定機器は，加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置を使用する。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx　）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

算出方法

⑴　年代値の算出には，Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polash 1977）。

⑵　^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は，過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され，1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。この値は，^{13}Cによって補正された値である。^{14}C年代と誤差は，１桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また，^{14}C年代の誤差（　1　）は，試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

⑶　^{13}Cは，試料炭素の^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し，基準試料からのずれを示した値である。同位体比は，いずれも基準値からのずれを千分偏差（　）で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により^{13}C/^{12}Cを測定した場合，表中に（AMS）と注記する。

⑷　pMC（percent Modern Carbon）は，標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。

⑸　暦年較正年代とは，年代が既知の試料の^{14}C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ，過去の^{14}C濃度変化などを補正し，実年代に近づけた値である。暦年較正年代は，^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり，１標準偏差（1　=68.2%）あるいは２標準偏差（2　=95.4%）で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は，下一桁を四捨五入しない^{14}C年代値である。なお，較正曲線および較正プログラムは，データの蓄積によって更新される。また，プログラムの種類によっても結果が異なるため，年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは，暦年較正年代の計算に，IntCal04データベース（Reimer et al 2004）を用い，OxCalv4.0較正プログラム（Bronk Ransey 1995 Bronk Ransey 2001 Bronk Ramsey，van der Plicht and Weninger 2001）を使用した。

第37表　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果(3)

測定番号	試料番号	試料	試料採取地点	層位	炭素含有率	年代(BP)±標準偏差	較正年代(cal AD)
[illegible]	昭 [illegible]	喫倪炉嘆撞 訝鴇炉嘆晴	友祜咨	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	昭 [illegible]	訝鴇炉嘆	友祜咨	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]

測定番号	年代(BP)±標準偏差		較正方法	較正年代(cal AD)	
	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]

[　2368][参考値]

^{14}C年代は，畝跡出土の炭化物（　1）が100　30yrBP，　b層出土の炭化物（　2）が1200　30yrBPである。　1の暦年較正年代（1　）は江戸時代前期末から明治時代の前半であるが，安永ボラ層の下位から出土であることを考慮すると，江戸前期末から中期初に年代を絞り込むことが可能である。　2は平安時代前期前半頃に該当する。試料の炭素含有率は共に67%程であり，十分な値であった。化学処理および測定内容に問題は無く，妥当な年代と考えられる。

参考文献

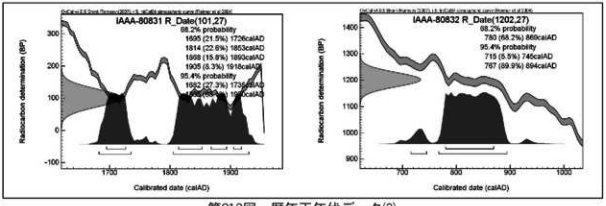
Stuiver M．and Polash H．A．1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data，*Radiocarbon*　19，355-363

Bronk Ramsey C．1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program，*Radiocarbon*　37(2)，425-430

Bronk Ramsey C．2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal，*Radiocarbon*　43(2A)，355-363

Bronk Ramsey C．，van der Plicht J．and Weninger B．2001　Wiggle Matching　radiocarbon dates，*Radiocarbon*　43(2A)，381-389

Reimer，P J．et al．2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration，0-26cal kyr BP，*Radiocarbon*　46，1029-1058



第213図　暦年正年代データ(2)

4 ㈱加速器分析研究所測定結果４（平成21年度実施）

測定対象試料

狩俣遺跡は，鹿児島県曽於市大隅町（北緯31　37　40　，東経130　56　35　）に所在し，標高約290mの台地上に位置する。測定対象試料は，土坑２出土炭化物（　11：IAAA-90896），竪穴住居跡出土炭化物（　12：IAAA-90897），合計２点である。

測定の意義　　遺構の年代を明らかにする。

化学処理工程

⑴　メス・ピンセットを使い，根・土等の表面的な不純物を取り除く。

⑵　酸処理，アルカリ処理，酸処理（AAA：Acid Alkali Acid）により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では１Ｎの塩酸(80℃)を用いて数時間処理する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では１Ｎの水酸化ナトリウム水溶液(80℃)を用いて数時間処理する。なお，AAA処理において，アルカリ濃度が１Ｎ未満の場合，表中にAaAと記載する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では１Ｎの塩酸(80℃)を用いて数時間処理した後，超純水で中性になるまで希釈し，90℃で乾燥する。希釈の際には，遠心分離機を使用する。

⑶　試料を酸化銅と共に石英管に詰め，真空下で封じ切り，500℃で30分，850℃で２時間加熱する。

⑷　液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し，真空ラインで二酸化炭素(CO_2)を精製する。

⑸　精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し，グラファイトを作製する。

⑹　グラファイトを内径１㎜のカソードに詰め，それをホイールにはめ込み，加速器に装着する。

測定方法

測定機器は，３MVタンデム加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx　）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

算出方法

⑴　年代値の算出には，Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polash 1977）。

⑵　^{14}C年代（Libby Age:yrBP）は，過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され，1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。この値は，　^{13}Cによって補正された値である。^{14}C年代と誤差は，１桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また，^{14}C年代の誤差(　1　)は，試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

(3) ^{13}Cは，試料炭素の^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し，基準試料からのずれを示した値である。同位体比はいずれも基準値からのずれを千分偏差（　）で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により^{13}C/^{12}Cを測定した場合には表中に（AMS）と注記する。

(4) pMC（percent Modern Carbon）は，標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。

(5) 暦年較正年代とは，年代が既知の試料の^{14}C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ，過去の^{14}C濃度変化などを補正し，実年代に近づけた値である。暦年較正年代は，^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり，1標準偏差（1　＝68.2%）あるいは2標準偏差（2　＝95.4%）で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は，下一桁を四捨五入しない^{14}C年代値である。なお，較正曲線および較正プログラムは，データの蓄積によって更新される。また，プログラムの種類によっても結果が異なるため，年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは，暦年較正年代の計算に，IntCal04データベース（Reimer et al 2004）を用い，OxCalv4.1較正プログラム（Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey，van der Plicht and Weninger 2001）を使用した。

^{14}C年代は，　11，　12とも9530　50yrBPである。これらが採取された遺構は薩摩火山灰層上面で検出された。

炭素含有率は60%を超える十分な値で，化学処理，測定上の問題は認められない。

第38表　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果(4)

測定番号	試料番号	試料の種類	試料の処理	炭素含有率	炭素^{13}C (‰) (AMS)	炭素年代測定値		
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)	
IAAA-90896	№.11	焼成炭化材	酸・アルカリ・酸洗浄	良好	AAA	**-21.87 ± 0.50**	**9,530 ± 50**	**30.55 ± 0.17**
IAAA-90897	№.12	焼成炭化材（広葉樹）	酸・アルカリ・酸洗浄	良好	AAA	**-25.79 ± 0.59**	**9,530 ± 50**	**30.52 ± 0.18**

3067

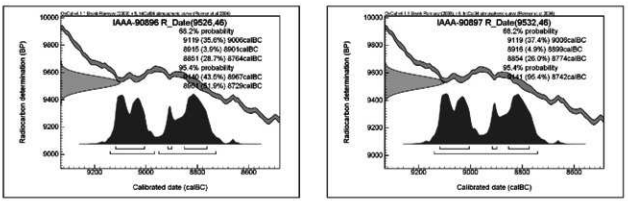
測定番号	炭素^{13}C 補正値		暦年較正年代	1σ 暦年較正年代	2σ 暦年較正年代
	Age (yrBP)	pMC (%)	(yrBP)		
IAAA-90896	9,480 ± 50	30.74 ± 0.17	9,526 ± 46	9119BC - 9006BC (35.6%) 8915BC - 8901BC (3.9%) 8851BC - 8764BC (28.7%)	9140BC - 8967BC (43.5%) 8951BC - 8729BC (51.9%)
IAAA-90897	9,550 ± 50	30.47 ± 0.17	9,532 ± 46	9119BC - 9006BC (37.4%) 8916BC - 8899BC (4.9%) 8854BC - 8774BC (26.0%)	9141BC 8742BC (95.4%)

参考値

参考文献

Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19, 355-363
Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program,

Radiocarbon 37(2), 425-430
Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43(2A), 355-363
Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 Wiggle Matching radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43(2A), 381-389
Reimer, P. J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029-1058



第214図　暦年正年代データ(3)

5　パレオ・ラボ測定結果（平成20年度実施）

鹿児島県に位置する狩俣遺跡から検出された試料について，加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。試料の調製は廣田，瀬谷，Lomtatidze，Jorjoliani，測定は伊藤，丹生，小林が行い，報告文は伊藤，中村が作成した。

試料と方法

測定試料の情報，調製データは第39表のとおりである。試料は狩俣遺跡の炭化材２点である。

試料は調製後，加速器質量分析計（パレオ・ラボ，コンパクトAMS：NEC製　1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後，^{14}C年代，暦年代を算出した。

第39表　測定試料及び処理

測定番号	試料	前処理	調製	測定
[illegible]	[illegible]	酸・アルカリ・酸処理	試料炭素[illegible]回収	加速器質量分析法（AMS）
[illegible]	[illegible]	酸・アルカリ・酸処理	試料炭素[illegible]回収	加速器質量分析法（AMS）

結果

第40表に，同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（^{13}C），同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値，慣用に従って年代値，誤差を丸めて表示した^{14}C年代，^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲を示す。暦年較正に用いた年代値は年代値，誤差を丸めていな

い値であり，今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（yrBP）の算出には，^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また，付記した^{14}C年代誤差（　1　）は，測定の統計誤差，標準偏差等に基づいて算出され，試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。

なお，暦年較正の詳細は以下の通りである。

暦年較正

暦年較正とは，大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C年代に対し，過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動，及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5730　40年）を較正することで，より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C年代の暦年較正にはOxCal4.0（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお，1　暦年代範囲は，OxCalの確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり，同様に2　暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は，その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し，二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち，その確率が最も高い年代範囲については，表中に下線で示してある。

第40表　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果(5)

剥片番号	年代値	較正方法	較正年代	較正年代	較正方法	較正年代
				1σ		2σ
捐鰐可燁	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
捐鰐可燁	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]

考察

試料について，同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。2　暦年代範囲（95.4%の確率でこの範囲に暦年代が収まることを意味する）に着目して結果を整理する。年代値と考古学編年との対応について，縄文時代はキーリ・武藤1982と小林2008，弥生時代は春成・今村編2004，西本編2006，西本編2007を参照した。

狩俣遺跡の試料　5（PLD-11049）は7946-7636calBC（94.1%）および7623-7614calBC（1.3%）で，縄文時代早期中葉に相当する。試料　6（PLD-11050）は1113-1099calBC（2.8%）および1089-923calBC（92.6%）で，縄文時代晩期から弥生時代にかけての時期に相当する。

参考文献

Bronk Ramsey, C（1995）Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy : The OxCal Program.

Radiocarbon , 37 , 425-430 .
Bronk Ramsey , C (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal . Radiocarbon , 43 , 355-363 .
キーリ C .T .・武藤康弘 (1982) 縄文時代の年代 . 縄文文化の研究第 1 巻 , 雄山閣 , 246-275 .
小林謙一 (2008) 縄文時代の暦年代 . 縄文時代の考古学 2 歴史のものさし 縄文時代研究の編年体系 , 同成社 , 257-269 .
中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎 . 日本先史時代の^{14}C年代 . 3-20 .
西本豊弘編 (2006) 新弥生時代のはじまり第 1 巻 弥生時代の新年代 , 雄山閣 , p .143 .
西本豊弘編 (2007) 新弥生時代のはじまり第 2 巻 縄文時代から弥生時代へ , 雄山閣 , p .185 .
春成秀爾・今村峯雄編 (2004) 弥生時代の実年代 , 学生社 , p .253 .
Reimer , P J ., Baillie , M .G .L ., Bard , E ., Bayliss , A ., Beck , J .W ., Bertrand , C J .H ., Blackwell , P .G ., Buck , C .E ., Burr , G .S ., Cutler , K .B ., Damon , P .E ., Edwards , R .L ., Fairbanks , R .G ., Friedrich , M ., Guilderson , T .P ., Hogg , A .G ., Hughen , K .A ., Kromer , B ., McCormac , G ., Manning , S ., Bronk Ramsey , C ., Reimer , R .W ., Remmele , S ., Southon , J .R ., Stuiver , M ., Talamo , S ., Taylor , F .W ., van der Plicht , J . and Weyhenmeyer , C .E .(2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration , 0-26 cal kyr BP . Radiocarbon , 46 , 1029-1058 .

第 2 節　種実同定

1　㈱加速器分析研究所測定結果 1

はじめに

鹿児島県に所在する狩俣遺跡では，植物遺体が出土している。これについてその種類を同定したので，以下にその結果を示す。

調査方法

0 5㎜メッシュの篩を用いて試料　5 ～ 9 の土壌サンプルを水洗し，検出された植物遺体を実体顕微鏡にて観察し，その形態から種の同定を試みた。(すでに種実のみが検出された　4 ，試料　7 以外は検出されなかった。) その際，石川茂雄 (1994年) ，大井 (1978年) ，北村・村田 (1979年) ，中山・井之口・南谷 (2000年) を参照した。

結果

木本 1 種と不明 1 種が認められた。写真を示し，同定結果を第41表に記す。学名は北村・村田 (1979年) によった。

第41表　種実同定結果(1)

試料	出土地点	和　名	科　名	学　　名	種類	部位	写真
4	G - 7 区 , 土坑94号内	モモ	バラ	*Prunus Persica Batsch*	木本	核	1 ~ 3
5	I - 8 区 , 敷状遺構内	-	-	-	土壌サンプル中に植物遺体を含まず	-	-
6	D -21区 , 敷状遺構内	-	-	-	土壌サンプル中に植物遺体を含まず	-	-

7	K-33区，畝状遺構内	不明	不明	不明	不明	種子	4
8	H-51区，畝状遺構内	-	-	-	土壌サンプル中に植物遺体を含まず	-	-
9	H-53区，畝状遺構内	-	-	-	土壌サンプル中に植物遺体を含まず	-	-

観察結果

1）モモの核である。全体は広楕円形を呈し，縁は稜をなす。また全面に短い溝が並ぶ。長径約2.0㎝～2.3㎝。

2）不明の種子である。表面には多数のへこみがある。直径約1.0㎜。

［参考文献］

石川茂雄（1994年）『原色日本植物種子写真図鑑』，石川茂雄図鑑刊行委員会

大井次三郎（1978年）『改訂増補新版日本植物誌　顕花編』，至文堂

北村四郎・村田　源（1964年）『原色日本植物図鑑　草本編』上，中，下保育社

北村四郎・村田　源（1979年）『原色日本植物図鑑　木本編』，　保育社

中山至大・井之口希秀・南谷忠志（2000年）『日本植物種子図鑑』，東北大学出版会

牧野富太郎（1989年）『改訂増補牧野新日本植物圖鑑』，北隆社

）本測定は，当社協力会社・㈱吉田生物研究所にて実施した。




1．モモの核（　1）　2．モモの核（　1）　3．モモの核（　1）　4．不明種皮（　10）

図版4　狩俣遺跡出土の植物遺体(1)

2　㈱加速器分析研究所測定結果2

はじめに

鹿児島県曽於市大隅町狩俣遺跡では，縄文時代早期の住居跡・土坑，近世の畑の畝跡・溝・古道などが検出されており，それらの遺構から種実が出土している。今回の自然科学分析調査では，種実の同定を実施し，植物利用等の状況を知る。

試料

試料は，23トレンチの住居跡内埋土（試料番号1～3）と土坑2号内埋土（試料番号4），I-64区の　b層（試料番号5），H-51区の畝間内埋土（試料番号6～8），集石24号の焼土内（試料番号9，10）より出土した種実10点である。

分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し，ピンセットを用いて同定が可能な種実遺体を抽出する。現生標本および石川（1994），中山ほか（2000）等との比較から，種実遺体の種類と部位を同定し，

個数を数えて表示する。

結果

結果を第42表に示す。木本３分類群31個，草本８分類群26個，計57個の種実が検出されたほか，炭化した鱗茎（おそらくユリ科ネギ属やヒガンバナ科の類）や炭化材，菌類の菌核などが確認された。

種実の保存状態は，破片，摩耗，表面に土が付着しているなど，不良である。栽培種は，Ⅰ-64区の　ｂ層より，モモの核の破片26個（合計１個体未満），H-51区の畝間内埋土よりオオムギの胚乳７個，コムギの胚乳４個，ムギ類（オオムギとコムギの判断が困難なもの）の胚乳２個が確認され，炭化している。

栽培種以外は，木本は，23トレンチの住居跡内埋土や土坑２号内埋土より落葉高木のキハダ，クマノミズキが確認され，炭化している。草本は，H-51区の畝間内埋土よりオヒシバ，カヤツリグサ科，サナエタデ近似種，ヒユ科，キランソウ属，アキノノゲシなどの明るく開けた場所に

第42表　種実同定結果⑵

試料番号	備考	分類群	部位	状態		個数	備考
1	23トレンチ　住居跡内埋土	種実確認されず	-	-	-	-	炭化鱗茎（破片２；接合？），長さ12㎜，径９㎜
2	23トレンチ　住居跡内埋土	種実確認されず	-	-	-	-	炭化材１）
3	23トレンチ　住居跡内埋土	クマノミズキ	核	炭化	破片	3	
4	23トレンチ　　土坑２号内埋土	キハダ	核	炭化	破片	1	
		クマノミズキ	核	炭化	破片	1	
5	Ⅰ-64区　ｂ層　6953	モモ	核	炭化	破片	26	合計１個体未満，最大12㎜
6	H-51区　畝間内埋土　サンプル４	オオムギ	胚乳	炭化	完形	5	
					破片	2	
		コムギ	胚乳	炭化	完形	4	
		ムギ類	胚乳	炭化	完形	2	オオムギまたはコムギ
		オヒシバ	種子	-	完形	2	
		カヤツリグサ科	果実	-	完形	1	
		ヒユ科	果胞	-	完形	2	
		キランソウ属	果実	-	完形	3	
7	H-51区　畝間内埋土　サンプル４	サナエタデ近似種	果実	-	完形	4	１個花被付着
		アキノノゲシ	果実	-	完形	1	
8	H-51区　畝間内埋土　サンプル４	種実確認されず	-	-	-	-	菌類の菌核
9	集石24号　焼土内	種実確認されず	-	-	-	-	炭化材１），不明炭化物
10	集石24号　焼土内	種実確認されず	-	-	-	-	菌類の菌核，不明炭化物

生育する，いわゆる人里植物に属する分類群が確認され，炭化していない。以下に，各分類群の形態的特徴等を記す。

＜木本＞

・モモ（*Prunus persica*　Batsch）　バラ科サクラ属

核（内果皮）の破片が検出された。炭化しており黒色。完形ならば長さ1.5～2.5㎝，幅1.2～2㎝，厚さ1.2～1.5㎝程度のやや偏平な広楕円体で，基部は切形で中央部に湾入した臍がある。１本の明瞭な縦の縫合線上が発達し，背面正中線上に細い縦隆条が，腹面正中線には浅い縦溝とその両側に幅の狭い帯状部がある。破片は最大で1.2㎝程度。内果皮は厚く硬く，表面は縦に流れる不規則な線状の深い窪みがあり，全体として粗いしわ状にみえる。核の内側表面は平滑。

・キハダ（*Phellodendron amurense*　Rupr.）　ミカン科キハダ属

核（内果皮）の破片が検出された。炭化しており黒色，長さ3.3㎜以上，幅2.7㎜，厚さ1.3㎜程

度のやや偏平な半広倒卵体。内果皮は硬く，表面には浅く微細な縦長の網目模様が配列する。

・クマノミズキ（*Swida macrophylla*（Wall.）Sojak） ミズキ科ミズキ属

核（内果皮）の破片が検出された。炭化しており黒色，完形ならば径3.5〜4.5㎜程度の偏球体で基部に小さく浅い凹みがある。破片は，表面に一周する1本のやや幅広く浅い縦溝と2室に分割する隔壁に沿って割れた半分以下で，長さ2.9㎜，径3.7㎜程度。内果皮は硬い。炭化し表面の状態が悪いため，数本の細く浅い縦溝の配列は不明瞭。

＜草本＞

・オオムギ（*Hordeum vulgare* L.） イネ科オオムギ属

胚乳が検出された。炭化しており黒色，長さ6.3㎜，径2.7㎜程度のやや偏平な紡錘状長楕円体で両端は尖る。腹面は正中線上にやや太く深い縦溝がある。背面は，基部正中線上に胚の痕跡があり，径1.5㎜程度の楕円状に窪む。胚乳表面には微細な縦筋がある。

・コムギ（*Triticum aestivum* L.） イネ科コムギ属

胚乳が検出された。炭化しており黒色，長さ4.3㎜，径3㎜程度の楕円体。腹面は正中線上にやや太く深い縦溝がある。背面は，基部正中線上に胚の痕跡があり，径1.5㎜程度の円状に窪む。胚乳表面には微細な縦筋がある。なお，頂部を欠損するなど遺存状態が悪く，オオムギとの判別が難しい個体をムギ類としている。

・オヒシバ（*Eleusine indica*（L.）Gaertn.） イネ科オヒシバ属

種子が検出された。黒褐色，長さ1.5㎜，径0.8㎜程度の三稜状狭倒卵体。20数個の細い隆条が基部の臍から放射状に配列する。

・カヤツリグサ科（Cyperaceae）

果実が検出された。灰褐色，長さ1.3㎜，径0.5㎜程度の三稜状狭倒卵体。頂部はやや伸び，基部は切形。果皮表面には微細な網目模様がある。

・サナエタデ近似種（*Polygonum* cf. *lapathifolium* L.） タデ科タデ属

果実が検出された。黒色，長さ2.1㎜，幅1.5㎜程度の偏平な円状二面体。頂部は尖り，2花柱を欠損する。基部は切形で灰褐色の萼がある。果皮表面は平滑で光沢がある。表面に花被が付着する個体もみられる。萼から長さ2㎜程度の線状の花被が数本伸び，先が2つに分かれ反り返る。

・ヒユ科（Amaranthaceae）

種子1個を包む果胞が検出された。種子は黒色，径1.3㎜程度の偏平な円盤状。縁は稜状で，基部は凹み臍がある。種皮表面には臍を取り囲むように微細な網目模様が配列し，光沢がある。果胞は種皮と別組織で灰褐色，径1.7㎜程度。表面は粗面。

・キランソウ属（*Ajuga*） シソ科

果実が検出された。淡灰褐色，長さ1.7㎜，径1.1㎜程度の楕円体。腹面基部に長さ1㎜程度の大きな楕円形で表面は粗面，小突起が密生する着点痕がある。果皮表面には深い凹みによる網目模様が分布する。

・アキノノゲシ（*Lactuca indica* L.） キク科アキノノゲシ属

果実が検出された。黒灰黒色，長さ4㎜，幅2.3㎜程度の偏平な非対称倒卵形。頂部は尖り，白色の冠毛を欠損する。背腹両面の正中線上に1個の縦隆条があり，両縁は翼状。果皮表面には微細

な網目模様と短い伏毛状体が横に多数並び，鱗状模様をなす。

考察

モモ，オオムギ，コムギは，栽培のために大陸より持ち込まれた渡来種とされる。I-64区のｂ層より確認されたモモは，観賞用の他，果実や核の中にある種子（仁）などが食用，薬用，祭祀等に広く利用され，弥生～古墳時代以降多数の遺跡出土例がある。H-51区の畝間内埋土より確認されたオオムギ，コムギなどのムギ類は，胚乳が食用される植物質食糧である。これらの栽培種の可食部である種実が，炭化した状態で出土したことから，本遺跡周辺域における利用と，火熱を受けたことが推定される。

栽培種以外の分類群では，木本類は，23トレンチの住居跡内埋土や土坑２号内埋土より，キハダ，クマノミズキが確認された。これらは，山地の沢沿いの林内などに生育する落葉高木であることから，本遺跡周辺域の森林に生育していたものに由来することが考えられる。また，炭化していることから，火を受けたことが推定される。

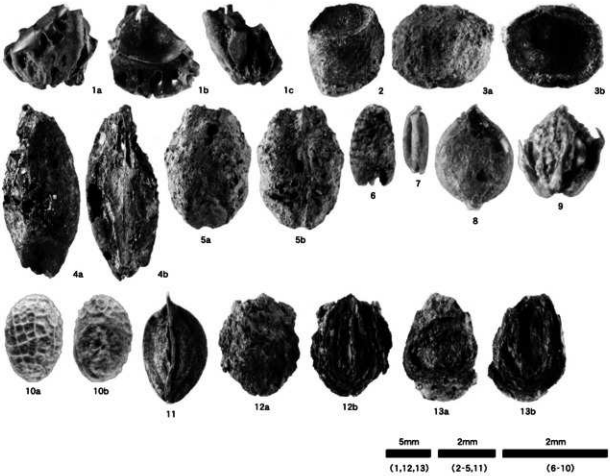
草本類は，H-51区の畝間内埋土より，オヒシバ，カヤツリグサ科，サナエタデ近似種，ヒユ科，キランソウ属，アキノノゲシなどの人里植物が確認された。これらは，道ばたや畑などの明るく開けた場所に普通に生育する分類群であることから，調査区周辺域の草地環境に由来するものと考えられる。ただし，保存状態が良好で炭化していないことから，土壌の撹乱などにより後代のものが混入した可能性がある。なおこの点に関しては，遺跡から出土する種実のうち，低湿地以外から出土した炭化していない種実は，炭化物と同様に扱うには問題があるとの指摘がある（吉崎，1992など）。

以上，確認された種実の種類について検討したが，今回受領した添付資料等には各試料の時代時期等に関する情報がなく，この点に関する検討は今後の課題として残された。

引用文献

石川　茂雄，1994，原色日本植物種子写真図鑑．石川茂雄図鑑刊行委員会，328p．
中山　至大・井之口希秀・南谷　忠志，2000，日本植物種子図鑑．東北大学出版会，642p．
吉崎　昌一，1992，古代雑穀の検出．月刊考古学ジャーナル，　355，2-14．

）本測定は，当社協力会社　パリノ・サーヴェイ株式会社にて実施した。



図版５　狩俣遺跡出土の植物遺体(2)

１ モモ 核（ -64 H層 6953 試料番号５)
２ キハダ 核（23T 2号 試料番号４)
３ クマノミズキ 核（23T 住居跡 南東１４床部埋土 試料番号３)
４ オオムギ 胚乳（H-51 畝間内埋土 サンプル４試料番号６)
５ コムギ 胚乳（H-51 畝間内埋土 サンプル４試料番号６)
６ オヒシバ 種子（H-51 畝間内埋土 サンプル４試料番号６)
７ カヤツリグサ科 果実（H-51 畝間内埋土 サンプル４試料番号６)
８ サナエタデ近似種 果実（H-51 畝間内埋土 サンプル４試料番号７)
９ ヒユ科 果胞（H-51 畝間内埋土 サンプル４試料番号６)
10 キランソウ属 果実（H-51 畝間内埋土 サンプル４試料番号６)
11 アキノノゲシ 果実（H-51 畝間内埋土 サンプル４試料番号７)
12 鱗茎（23T 住居跡 北西側１４埋土 試料番号１)
13 鱗茎（23T 住居跡 北西側１４埋土 試料番号１)

第Ⅷ章　まとめ

狩俣遺跡の調査の結果，　a層から古代～中世，　b層から縄文時代晩期～古代，　層から縄文時代後期～晩期，　～　層から縄文時代早期の遺物が出土した。このことから，本遺跡は縄文時代早期から近世まで続く複合遺跡であることが明らかとなった。また，各時代の包含層からは，集石遺構，落とし穴，古道，溝状遺構，畝状遺構など多種な遺構も検出された。

古墳時代の土器は，谷部と中央部で出土した成川式土器のみである。口縁部や底部など良好に残存するものであるが，縄文時代，古代の遺物量と比べると極端に少なく，遺構も発見されていないことから，弥生時代～古墳時代は本遺跡の空白の時代と想定される。

以下，縄文時代，古代～中世を中心に検出遺構，出土土器，出土石器について考察を行う。また，本遺跡のほぼ全域から検出された畝状遺構についても考察を加える。

第１節　検出遺構

１　縄文時代

集石遺構は全てが北部または中央部の台地上で検出され，23トレンチの２基を加えて，総数25基である。未調査部分も多く残されているが，検出範囲が広範囲であり，本遺跡の台地上全体に多くの集石遺構が広がっていると想定される。集石遺構の形態で最も多いのは，掘り込みを持たず礫が一定範囲に散在するタイプで11基である。次いで，掘り込みを持たず礫が集中するものが６基，集石内に集中部と散礫部を併せ持つものが５基，掘り込みを持ち散礫状に広がるものが２基，掘り込みを持ち礫が集中するものが１基である。集石下位に掘り込み部や炭化物の確認はされていないものがあっても，構成礫の多くが赤化したり，熱によると判断される破砕が認められることから，集石遺構使用後の残骸として取り扱っている。

25基中３基が黄褐色軽石層（桜島火山灰Ｐ11）直下の　層のもので，それ以外は　層黒色土からの検出である。縄文時代早期の遺物出土点数は，　層が420点，　層が364点と大きく分かれているので，縄文時代早期は少なくとも２つの文化層が存在したと想定される。両時期とも尾根状に伸びる台地の縁辺部に集石遺構の集中が見られる。（第94図，第10，11表参照）

２　古代～中世

北部調査区では，古代～中世のものと思われる古道や溝状遺構が集中して検出された。北側の台地から本遺跡中央の台地へ向かって野首状に狭まる地点であり，両側は急峻な崖に挟まれている。

古道の硬化面は時間差を持ちながら，現在の市道とほぼ同じようなルートで数条が重なるようにして検出している。台地部は中世～近世にかけての削平のため遺構，遺物の発見は少ないが，南部では，斜面が緩やかになる地点の台地部からの流れ込みと想定される８世紀後半～10世紀代の土師器や須恵器の坏や埦，皿，甕などの生活雑器が土器溜りとなって大量に出土している。さらに，古代の掘立柱建物跡，畝状遺構，大型土坑が隣接してセットで検出されていることから，同じような集落活動が台地部全体で行われていた可能性が高い。これらの古道は，集落での生活のため人々の往来や物流が頻繁に行われていたことを物語る。（付図：古代～中世参照）

その後，11世紀代からは集落としての機能は失われ，15世紀代以降は畠作地帯へと変化していく。畝状遺構の変遷や栽培品目等については第４節にてまとめる。

第２節　出土土器

１　縄文時代

本遺跡の縄文時代の土器については，早期から晩期まで　類から　類までの17種類に分類される。　類からⅫ類土器までが縄文時代早期の土器であり，遺物量の大半を占める。　類から　類土器が縄文時代前期，　類土器が縄文時代後期，　類土器が縄文時代晩期である。

類土器は貝殻条痕文を主とする円筒土器で，前平式土器に比定されるものである。口唇部形態及び貝殻条痕の施文により２種類に細分される。　－ａ類土器は口唇部が鋭角で，貝殻条痕が斜行するもの，　－ｂ類土器は，口唇部が平坦で貝殻条痕が横位に施されるものである。

類土器は，貝殻条痕文の上に沈線文等を施文する二重施文土器で，志風頭式土器に比定されるものである。志風頭式土器には，円筒式土器と角筒式土器があるが，本遺跡では角筒式土器のみが出土している。

類土器は１点のみの出土である。貝殻刺突文を施す円筒土器で，加栗山式土器に比定される。

類土器も出土量が少なく，２点のみの出土である。横位の貝殻押引文が施文される円筒土器で，吉田式土器に比定される。

類土器は，口縁部に貝殻刺突文を施し，胴部には貝殻条痕文横位・綾杉状等に施文するもので，石坂式土器に比定される。

類土器は，貝殻刺突文を主体とするもので，下剥峰式土器に比定される。

類土器は，口縁部に横位の貝殻条痕文を施すもので，中原式土器に比定される。

類土器は１点のみの出土である。ヘラ状工具による斜格子状の文様が施されるものであるが，型式の不明なものである。

類土器は押型文土器であるが，１個だけ押型文と貝殻条痕文の２種類を施文するものがある。

－ａ類土器は，山形押型文及び楕円押型文を施すものである。特殊なものとして，「いちご」と称されるものがある。松の木などの突起物を持つ枝による回転施文がなされたと考えられるもので，－ｂ類土器は口縁部から胴部中位に山形押型文，胴部中位から底部に貝殻押型文を施すものである。

類土器は，完形土器１点と破片１点で，手向山式土器に比定される。完形土器は縄文原体を巻き付けた棒を回転施文したと考えられる特殊な施文であり，胴部の屈曲部もなだらかなものである。

Ⅺ類土器は２点のみの出土である。外反する口縁部で，連続刺突と沈線文が施されるものであり，平栫式土器に比定される。

Ⅻ類土器は，微隆起突帯を巡らす壺型土器で，塞ノ神式土器に比定される。

類土器は，みみず腫れ突帯を巡らし，胴部は貝殻条痕が施されるもので轟式土器に比定される。

類土器は，短沈線文を主とするもので曽畑式土器に比定される。

類土器は，胴部に貝殻復縁による連点文が施されるもので，深浦式土器に比定される。

類土器は，胴部に沈線文を施すもので宮ヶ迫式土器に比定される。沈線のやや太いものと細いものに分けられる。

類土器は，深鉢形土器（　Ａ類），浅鉢形土器（　Ｂ類），鉢形土器（　Ｃ類）の３種類の器種に分けられる。鉢形土器には，底部に組織痕が認められるものもある。縄文時代晩期の最終末段階に位置するものと思われる。

2　古代

土師器を中心とした古代の遺物は，中央部の台地南側から南部斜面にかけて多量に出土した。大部分が坏や埦，皿など供膳具と，甕などの貯蔵具で占められ，出土遺物の口径，底径，器高，器形などの形態により時期的な変遷がうかがえる。土師器についてはこれまでの研究により口径や底径が大きなものから小さなものへ，体部が直線的なものから丸みをもつものへ変化していくことが知られ，鹿児島県内出土の土師器については中村和美により編年が提示されている。（中村1994・1997）

本遺跡出土の坏は，　類の直線的な体部を持つものと，　類の丸みのある体部を持つものに分けられる。数量的には　類がやや多く，口径約12㎝，底径約６㎝，器高５㎝前後と底径が大きく深さもあり，須恵器模倣形態を残すものも含まれる。　類も器高が約４㎝と低くなるが大型の坏であり，小皿のような器高の低い坏はほとんど見られない。また，底部切り離しは全てヘラ切り離しである。これらの特徴から，８世紀中頃から９世紀代が主体であり，10世紀中頃まで続くと思われる。

内黒土師器の出土点数も多量であり，　類の直線的に開く器形のものが多い。埦は器壁が厚く広めの底部に「ハ」の字状に開く短めのしっかりした高台が付くものが主流である。全てが埦ではなく坏も見られることから坏の年代とほぼ同じであり，11世紀までは下らないと思われる。

須恵器の出土点数は少ないが，坏，埦，高坏，鉢，壺，甕など多種である。作りもしっかりしており甕など実用的なものも多いことから，他の地域との出入りが多い人々によってもたらされたと想定される。遺物は８世紀後半から９世紀代のものがほとんどである。

墨書，線刻土器は計10点で，墨書が８点，線刻が２点である。記載部位は，底部外面が２点，体部外面８点であり，判別できたものはわずかである。記載などから本遺跡の性格を知ることは難しいが，特徴としては墨書８点中３点が内黒土師器であった点である。多くの遺跡では，墨書される器は土師器が圧倒的に多く内黒土師器は割合は少ない中で，記載率37 5%はかなり高いと言える。

焼塩土器は中央部の南側から南部を中心に，小破片も含め439個出土している。全て広口の小鉢形を呈したもので，内面に布圧痕，外面に指頭圧痕の多数残る簡素なものである。周辺の他遺跡と比べても出土量が膨大であることから，海から遠く離れた本遺跡でなぜこれだけの焼塩土器が見つかったのか疑問である。畠作に従事する人々が取り寄せたと考えるよりも，生産地から大量の塩が組織的に運ばれてきたと想定されることから，出土した土師器や須恵器の形態変化と同じように，他の地方との活発な交流を感じさせる遺物である。

また，本遺跡出土の土師器埦には，特徴的な形態が認められる。それは，欠損した埦の高台に残る調整痕である。高台の一部が欠損した後も，周りを打ち欠いて高さを調節し，刀子などの刃物で削りながら短い高台に再び仕上げている。ヤスリや砥石等で磨りながら調整したものも見られ，仕上げ後は食器として再び利用したと想定される。当時の人々がものを大事にし，破損後も再利用できるものは補修を重ねながら長く使用していた実態を感じることができる。

これらの古代の遺物の特徴から，地域によって異なる様相を示すこともあるので一概には言えないが，本遺跡には少なくとも８世紀中頃から10世紀代までの集落が存在したと考えられる。ただし，７世紀以前や11世紀以降については不確定である。律令制度が全国に定着した時期と重なることから，物資の移動に伴う人々の交流を官衙施設との関係も視野に入れた観点から考える必要があろう。

今回の調査は遺跡全体から見れば狭い面積であるので，これからの調査結果に期待したい。

3　中世～近世

中世～近世の遺物の全体量に対する割合は非常に少なく，図化した遺物総点数929点中32点でわずか3.4%である。前述の通り，本遺跡では8～10世紀を中心に盛んに人々の生産活動が営まれていたと思われるが，1471年の桜島の大噴火により大隅半島北部には大量の噴出物（文明ボラ）が厚く堆積し，生産活動はほぼ壊滅したと想定される。その後，しばらくの間は放置され荒れ地であったと思われるが，台地部では大量なボラの除去，耕作地の基盤整地などに多くの時間を費やし，再び生産活動が軌道に乗るには長い年月が必要であったと推測される。その過程で居住域と生産域が分けられ，本遺跡は大規模な畠作を中心とした生産域に限定されたことを遺物量が示している。また，1779年の安永の大噴火でも，大量の噴出物が本遺跡に降り注ぎ大きな被害が出たと想定され，中世～近世の苦難の時期を乗り越えて現在に至っている。

第3節　出土石器

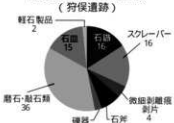
1　縄文時代早期

縄文時代早期該当の石器は　・　層から出土している。

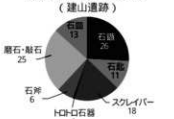
本報告書では石器と認定したものは全て掲載しており，その石器の組成が右の表である。狩俣遺跡とすぐ北側に位置する建山遺跡の石器組成をあげてみた。2つの遺跡の石器組成を比べながら考察してみよう。縄文時代早期の石器組成の特徴としては，どちらの遺跡も，木の実の製粉具として使用されたと考えられる磨石・敲石・石皿の割合がいずれも高いということがあげられる。

石器の分布については，特にこれといった特徴を見いだすことはできなかった。ただ，狩俣遺跡のスクレイパーについては，13年度の確認調査で住居跡が検出されている23トレンチからのみ出土しているのが興味深い。このことからも，生活の中心は23トレンチ付近であったことが推定できる。

縄文時代早期の石器組成
（狩俣遺跡）



縄文時代早期の石器組成
（建山遺跡）

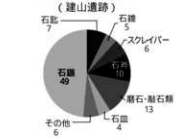


2　縄文時代晩期

縄文時代晩期該当の石器は　・　層から出土している。早期と比べると，両遺跡ともに石鏃の割合が半分近くを占めている。その一方で，磨石・石皿の割合がかなり減っている。このことから，縄文時代晩期には，この遺跡の周辺が生活の場というよりも，狩猟の場へと変遷していったことが推定される。

縄文時代晩期の石器組成
（狩俣遺跡）

縄文時代晩期の石器組成
（建山遺跡）



3　古代

古代の遺物としては，軽石製品が出土している。破損が激しく用途を特定する事は難しいが，熱を受けているものがみられる。このことから，加工のしやすさを活かし，軽石で炉を組んだことも想定できるのではないだろうか。

第４節　畝状遺構

本遺跡の畝状遺構は，遺構の特徴から19群が発見された。これら19群を検出された層位や状況，埋土などから分類し，畝状遺構の変遷を以下のようにまとめた。（第215図参照）

ここでは，畝状遺構の変遷，栽培作物，調査方法についてまとめる。

新旧	時代	検出面	谷　部	北　部	中　央　部	南　部
（旧）	古代					畝13
	中世	a	畝２	畝１	畝11	畝14 ,15 ,16 ,17 ,18
	文明ボラ（Ｐ３・1471年）					
	中世～近世	～		畝３ 畝４Ａ～Ｃ	畝５ ,6 ,8 畝10Ａ～10Ｃ 畝９Ａ～９Ｃ 畝７	
	近世	c			畝12	畝19
	安永ボラ（Ｐ２・1779年）					
	大正３年（Ｐ１・1914年）					
（新）	現　代　の　耕　作　土					

第215図　狩俣遺跡　畝状遺構変遷図

１　変遷について（第215図，第29表）

第２節で述べたように，律令制度が定着した８世紀中頃から本遺跡台地部には集落が形成されていたと想定されるが，大規模な集団ではなく各戸別単位で，しかも斜面は利用されず平地の狭い面積を耕作していたと考えられる。（畝状遺構13）

その後，地名にもあるような在地領主の演習場である「狩場・狩倉」として利用されていた可能性もあるが，10世紀後半から荘園整備が本格化し大規模な畠地利用の時代へと変化していくと，集落は住居域を近隣の便利な場所へ移し，本遺跡周辺は集団により管理された畠地に利用されていく。しかし，生産性向上のため平地のみならず谷間の斜面域まで開墾して畠地にしているが，人目につきにくい谷部の畠地部分が実際の租税対象の耕作地として認識されていたかは疑問であり，この地方の支配者が隠し畠として私財を増やしてきた可能性は否定できない。（畝状遺構１，２，14～18）

1471年の厚く降り積もった桜島噴出物（文明ボラ）により生産活動は途絶え，しばらくの間荒廃したと想定される。その後，再び畠地として利用するために，以前の土地利用をさらに向上させ，台地部を中心に大規模なボラ抜き作業を行い，より生産効率を高めるため削平を行いながら平坦化し，耕作面積を広げていった。そして，境界溝などにより区画整理を行いながら畠地の大規模化を進めたことが，牛馬などの道具を利用した規則的に整然と並ぶ大型の畝状遺構から推測される。（畝状遺構４，５，６，８，10）また，畠形態を変えることで生産品目の多種化にも取り組み，生産性は飛躍的に向上したと思われる。

中世～近世にかけては台地部が生産の中心であり，一部を除いて（畝状遺構３）斜面については文明の大噴火以来利用されていない。しかし，斜面に流れ込んだ堆積物が長期間の自然堆積により平坦に近い緩斜面が形成された。1779年の桜島噴出物（安永ボラ）が本遺跡に降り注いだ頃には，台地部だけではなく，斜面も再び利用されていた痕跡も確認されている。（畝状遺構12，19）

２　栽培作物について（第215図，第41，42表，図版４，５）

本遺跡の畝状遺構で栽培されていた作物は何であるか，特に斜面の等高線に合わせるようにして作られた小型の楕円形を呈するものについては最大の疑問である。ここでは，文明ボラを埋土の主体とする中世の畝状遺構について，科学分析の結果や指導助言の内容を含めて考える。

埋土の主体は軽石層であり，埋土中より有力な植物遺体は検出されなかった。そこで，畝間底面の土壌サンプルを計５ヶ所採取し種実同定を行ったが，植物遺体は発見されなかった。（第41表）その後，採取したサンプルより植物遺体らしき個体を抽出し同じく種実同定を行った結果，炭化した大麦または小麦が発見された。（第42表）しかし，個体数が非常に少なく炭化しているので，流れ込みの可能性も捨てきれない結果となり確証を得られなかった。

次に，畝状遺構の立地や形状から考えてみるといくつかの特徴がある。畝状遺構16，17で分かるように，楕円形を呈する畝状遺構は斜面のみであり，同じ時代であっても平地では現在と同じような小溝状を呈し，麦などの穀類を栽培していたと考えられる。（第196図参照）

続いて斜面に作られた畝状遺構が水田か畠かと考えると，シラス台地上に厚いテフラが堆積してできた黒色土に作られているため，慢性的水不足，排水過良，降雨時の水食，乾燥時の風食，塩基やリンなど栄養分の欠乏など決して耕作条件が良いとは言えない。このような条件の他に，標高200m前後に湧水点がありそこから田頭となる水田が広がっていることから，水田である可能性は低い。（斜面の標高は230～270m程度）

畠地である斜面に作られた畝状遺構の特徴としては，　ほぼ等高線に沿っている，　南側の日当たりの良い斜面，　畝間の間隔が非常に狭く隣接している，　畝間の底部に掘り込んだ小さな凹みがあることが言える。　については上方からの水分が溜まりやすく，作物残渣や落ち葉，課程からの廃棄物やし尿などを投入して養分補給がしやすい，　については冬でも日射を受けやすく，桑や果樹などの栽培に適している。　については畝を作り作物を栽培したとすると畝部分が非常に狭くなり移動の際に使用する畦幅の確保も難しく作物を栽培する状況ではなくなる。　については整地や盛土を均一にする必要のあるイネ科やマメ科などの穀類の可能性は低い。

これらの特徴から考えると，平地に見られるような畝を作る方法ではなく，楕円形を呈する畝間単位で作物は栽培され，作物としては穀類ではなく種物すなわち里芋などの栄養繁殖植物の栽培痕と考えるのが妥当である。「入来院文書」の15世紀末の資料では，畠物として麦，麻芋，芋などの貢納物として見え，その他にも養蚕のための桑が広く植えられていたことが分かっていることから，本遺跡でも平地では麦などの穀類，斜面では芋類などを栽培していたのではないかと想定される。

３　調査方法について

本遺跡の畝状遺構は，遺跡全体に広がりを持ち，時代の経過による変遷が立地や形態に強く表われている貴重な資料となった。しかし，発掘調査の方法や科学分析の有効的な活用などで多くの課題も残った。遺構内遺物がほとんど見られない状況では，畝状遺構の検出が非常に重要な情報となる。検出面からあるがままの露出作業に入る際，掘り込んだ農具痕や作物の痕跡，人や牛馬の足跡などの情報を見逃さないためにも，自らの足跡や一輪車の轍などが加わらないように注意する必要がある。また，検出後の風化や劣化が急激に進行するため，実測や所見，記録写真は露出した範囲を当日中に処理し，正確な情報の時間経過による変形や変質を防ぐことが大事である。

Ⅲ　建山遺跡

第Ⅰ章　調査の経緯

第１節　調査に至るまでの経緯

東九州自動車道建設に伴い，埋蔵文化財の取り扱いについて交わされた鹿児島県教育委員会と各開発関係機関との協議等の経緯については，　- 第１章に記されたとおりである。その経緯を受けて建山遺跡は平成17・18年度に用地買収済みであった部分の確認調査・本調査を行った。

第１図に建山遺跡における各年度の調査範囲図を示す。

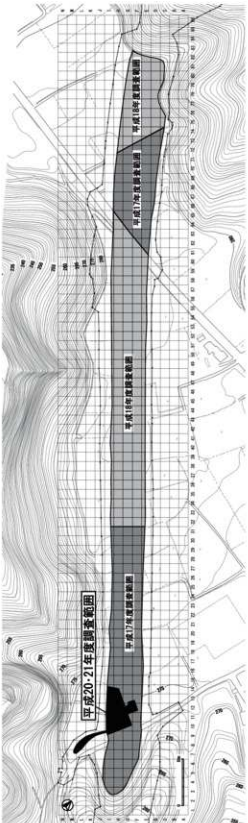
平成17年度の確認調査の結果，遺跡は全域に広がることが明らかとなり，引き続き遺跡の南端部及び県道63号線の北側部分（一部）の本調査を実施した。また，平成18年度は遺跡の北端部及び中央部の本調査を実施した。

調査の結果，シラス直上の　層を中心とするナイフ形石器文化や　層を中心とする細石刃文化の遺物，縄文時代早期の竪穴住居跡２軒，竪穴状遺構２基，連穴土坑１基，土坑10基，集石遺構30基，落とし穴13基等の遺構の他，多数の土器や石器などの遺物が出土した。また，　ａ層から縄文時代前・中期の遺構・遺物が出土している。

上記の調査成果については，平成20年度に整理作業と報告書作成作業を行い，「鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（139）建山遺跡　西原段　遺跡　野鹿倉遺跡」として報告書を刊行した。

さらに平成21年３月，用地問題の解決に伴い，急遽，未調査部分について発掘調査を実施することとなった。調査は年度内の完了を目指して行ったが，縄文時代早期の竪穴住居跡が発見されたこと，また，隣接する用地内の掘削された断面において，薩摩火山灰に黒色土の落ち込みが認められ，竪穴住居跡の可能性が高く調査が必要と判断されたことなどから，平成21年４月まで調査を延長することとなった。

調査は平成20年度が２月23日から３月19日の実働16日間，平成21年度が４月13日から４月24日の実働10日間行った。



第１図　建山遺跡調査範囲図

第２節　調査の組織

1　平成20年度（本調査）

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所，鹿児島県土木部高速道対策室		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	宮原　景信
調査企画	〃	次長兼総務課長	平山　章
	〃	次長兼南の縄文調査室長	池畑　耕一
	〃	調査第一課長	彌榮　久志
	〃	主任文化財主事兼	
	〃	調査第二課第一調査係長	中村　耕治
調査担当	〃	文化財主事	遠矢　勝幸
	〃	文化財主事	木内　敬生
事務担当	〃	総務係長	紙屋　伸一
	〃	主査	五百路　真

2　平成21年度（本調査・報告書作成）

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所，鹿児島県土木部高速道対策室		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	山下　吉美
調査企画	〃	次長兼総務課長	齊藤　守重
	〃	次長兼南の縄文調査室長	青崎　和憲
	〃	調査第二課長	彌榮　久志
	〃	主任文化財主事兼	
	〃	調査第二課第一調査係長	長野　眞一
調査担当	〃	文化財主事	池畑　耕一
	〃	文化財主事	長崎慎太郎
作成担当	〃	文化財主事	大久保浩二
	〃	文化財研究員	藤島伸一郎
事務担当	〃	総務係長	紙屋　伸一
	〃	主査	髙崎　智博
企画委員	〃	文化財主事	永濵　功治

報告書作成検討委員会　平成21年12月11日　山下所長ほか　９名

報告書作成指導委員会　平成21年12月２日　青崎次長ほか　２名

遺物指導	鹿児島大学法文学部	准教授	本田　道輝

第３節　調査の経過

調査の経過は，日誌抄により週単位で略述する。

１　平成20年度

平成21年２月18日（水）～20日（金）

環境整備，Ｇ～Ｍ－７～14区重機による表土剥ぎ。Ｇ～Ｍ－11～14区　層調査。

平成21年２月23日（月）～25日（水）

環境整備，Ｇ～Ｍ－７～10区重機による表土剥ぎ。Ｇ～Ｉ－11～14区　層調査。

平成21年３月２日（月）～６日（金）

Ｇ～Ｉ－11～14区　層調査，重機による表土剥ぎ。　土坑１号検出・写真撮影・掘り下げ。

グリッド杭打ち。

平成21年３月９日（月）～13日（金）

Ｈ～Ｉ－11～14区下層確認トレンチ　層掘り下げ・Ｈ～Ｉ－11～14区　層遺物取り上げ。

Ｈ～Ｉ-12～14区　層上面検出・　層遺物取り上げ・コンター図作成。Ｈ-12区１号落とし穴実測。

Ｉ－10区２号落とし穴検出状況写真撮影。Ｉ－12～14区土層断面図実測。

平成21年３月16日（月）～19日（木）

Ｇ～Ｉ－11区　層上面検出。Ｇ～Ｉ－９～10区　層上面検出・　～　層調査・遺物取り上げ。

層上面検出。Ｈ－12区１号落とし穴実測。Ｉ－10区２号落とし穴実測・配置図作成。

Ｉ－11区１号住居跡検出状況写真撮影。Ｉ－10～11区土層断面図作成。

Ｈ～Ｉ－10～12区　層上面コンター図作成。Ｇ～Ｉ－10～14区調査範囲図作成。

１号住居跡配置図作成。

２　平成21年度

平成21年４月13日（月）～17日（金）

調査区全景清掃・写真撮影。付け替え道トレンチ設定・掘り下げ。

３号住居跡検出・周辺調査・遺構掘り下げ・遺物取り上げ。

４号住居跡周辺調査・遺構検出・遺物取り上げ・写真撮影・遺構掘り下げ。

３号落とし穴状遺構実測・写真撮影。付け替え道路敷き部分（調査時の呼称は「枝道」）内のトレンチ掘り下げ。調査範囲図作成。

平成21年４月20日（月）～24日（金）

１号住居跡掘り下げ。出土状況写真撮影・平面実測・遺物取り上げ。

断面写真撮影・遠景写真撮影。

２号住居遺物出土状況写真撮影・取り上げ・実測完了。

付け替え道路敷き部分掘り下げ・遺物出土状況実測・遺物取り上げ。

層上面コンター図作成。

ａ層調査・遺物取り上げ。遺跡全景写真撮影，

調査終了。

第Ⅱ章　調査の概要

第１節　調査の方法及び層位

調査はＧ〜Ｉ－９〜14区の本線敷及びＩ〜Ｍ－７〜10区の付け替え道路敷き部分の1120㎡を対象として実施した。それに加えて，当初は調査対象としていなかったＦ・Ｇ－12・13区（平成18年の調査終了後，引き渡しを行った部分の法面）において竪穴住居跡らしきものが見つかったため調査対象に加えた。調査対象面積は1304㎡となった。第２図に今回の調査区グリッド図を示す。

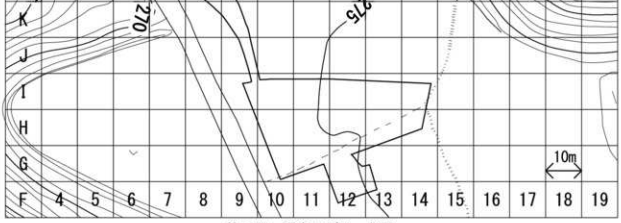
　層（現表土層）及び造成土層（天地返し）と無遺物層と確認された　ｂ層については重機により掘削し，遺物包含層及びその可能性のある層については，人力による掘り下げを行った。

グリッドの設定は平成18年度までのものを踏襲し，西日本高速道路株式会社により設定された高速道路センター基準杭のＳＴＡ243とＳＴＡ243＋80の２点を結ぶ直線を基準軸として，東から西側に向かって１，２，３・・・，北から南側に向かってＡ，Ｂ，Ｃ・・・とする10m間隔のグリッドを設定した。

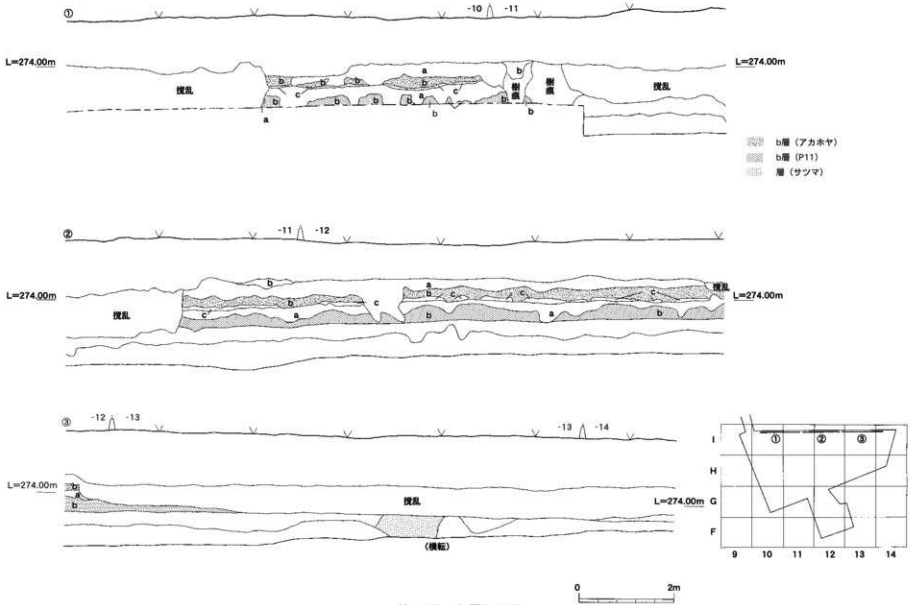
基本的な層位については，　－第　章層位の項（９頁参照）に記されている通りである。

Ｖ層はアカホヤ火山灰で，ａ層の二次堆積層とｂ層の火砕流一次堆積層とに分かれる。ａ層は縄文時代前期の包含層である。　層は軽石を多く含んだ青灰色のａ層と，桜島起源の火山噴出物であるＰ11軽石からなる黄褐色軽石層のｂ層に分けられる。　層の明黄褐色土層と　層の黒色土層が縄文時代早期前半の包含層にあたる。　層がいわゆる薩摩火山灰層で，　層上面が縄文時代早期前半の住居跡検出面となる。

今回の調査では，縄文時代早期の竪穴住居跡２軒と同時期の包含層，縄文時代前期の包含層，縄文時代中期の落とし穴３基を発見している。



第２図　調査区グリッド図


①
-10
-11
L=274.00m
L=274.00m
撹乱
撹乱
樹痕
b層（アカホヤ）
b層（P11）
層（サツマ）
②
-11
-12
L=274.00m
L=274.00m
撹乱
撹乱
③
-12
-13
-13
-14
L=274.00m
L=274.00m
撹乱
（横転）
I
H
G
F
9
10
11
12
13
14
0
2m

第３図　土層断面図

第２節　縄文時代早期の調査

１　調査の概要

ａ層から　層までを縄文時代早期該当層として調査したが，　ａ層の堆積状況は薄く不安定で，遺物も全く出土しなかった。遺物の出土は　・　層に限られ，主体は　層である。

遺構としては　層の薩摩火山灰上面で竪穴住居跡２軒を検出した。平成18年度の調査でもＦ・Ｇ-80・81区から竪穴住居跡（１号，２号）が検出されているため，今回の遺構は３号，４号として報告する。

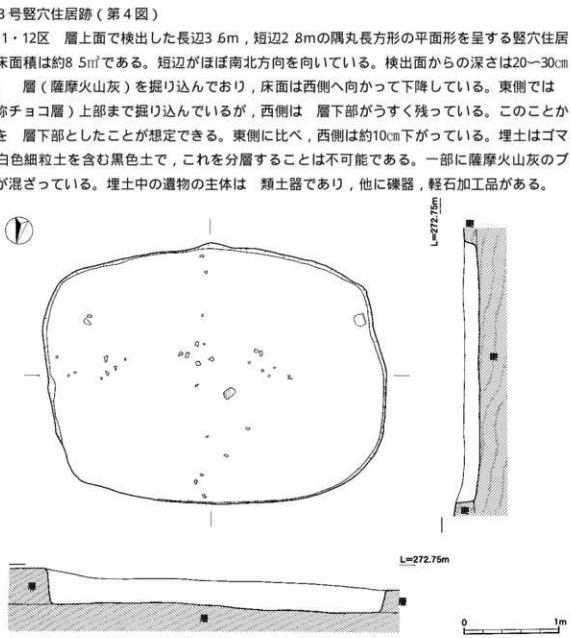
遺物は早期前半の　・　・　類土器と，石器は打製石鏃・石匙・削器・磨製石斧・礫器・石核・剥片・磨石・石皿等で構成される。　類土器は加栗山式土器であり，出土土器の大部分を占めている。　類土器は下剥峯式土器，　類土器は手向山式土器である。

第７図に遺構配置と　類土器・石器出土状況図，第19図に　・　類土器出土状況図を示す。

２　遺構

⑴　３号竪穴住居跡（第４図）

-11・12区　層上面で検出した長辺3.6m，短辺2.8mの隅丸長方形の平面形を呈する竪穴住居跡で，床面積は約8.5㎡である。短辺がほぼ南北方向を向いている。検出面からの深さは20～30㎝である。　層（薩摩火山灰）を掘り込んでおり，床面は西側へ向かって下降している。東側では　層（通称チョコ層）上部まで掘り込んでいるが，西側は　層下部がうすく残っている。このことから床面を　層下部としたことが想定できる。東側に比べ，西側は約10㎝下がっている。埋土はゴマ状の黄白色細粒土を含む黒色土で，これを分層することは不可能である。一部に薩摩火山灰のブロックが混ざっている。埋土中の遺物の主体は　類土器であり，他に礫器，軽石加工品がある。



第４図　３号竪穴住居跡

第５図が３号竪穴住居跡を中心とした水平・垂直方向の遺物出土状況である。垂直分布を見ると検出面より20～30㎝高いレベルまで遺物が集中して出土していることが確認できる。土器の接合検証では，この間で接合が確認できることから，検出面より20～30㎝高い位置で竪穴住居の掘り込みが開始されたと推定される。そのレベルは周囲に出土している土器の下限ともほぼ一致しており，そこが当時の地表面（掘り込み面）に近いと推測される。第５図中に掘り込み面推定ラインを示す。

ア　遺構内遺物の接合（第６図１，53，28，39）

上記を裏付ける土器の接合状況については，あまりに煩雑でわかりにくいため，第６図に代表的な土器ごとの出土状況を示した。

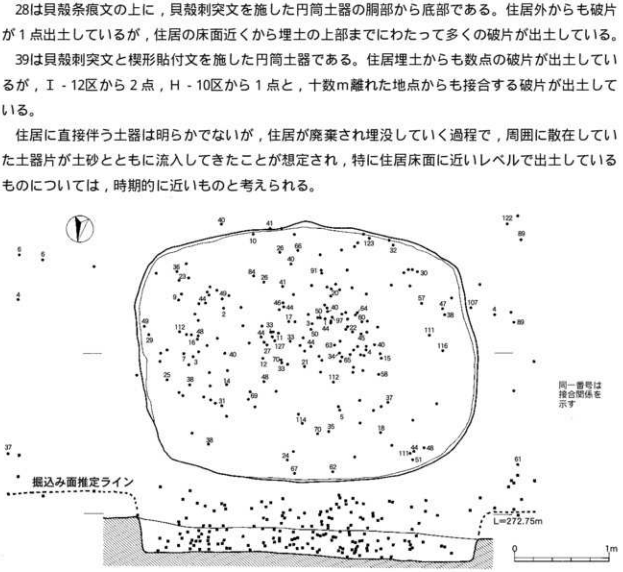
１は口縁部上面観がレモン形を呈する土器で，完形に復元できたものである。破片は住居の範囲内からのみ出土しており，床面に近いレベルからも多くの破片が出土していることから，住居に極めて近い時期のものと考えられる。

53は楔形貼付文と縦位の貝殻刺突文（方形の凹点状）を施した角筒土器である。住居外から破片が１点出土しているが，ほとんどの破片は住居埋土内にまとまって出土している。

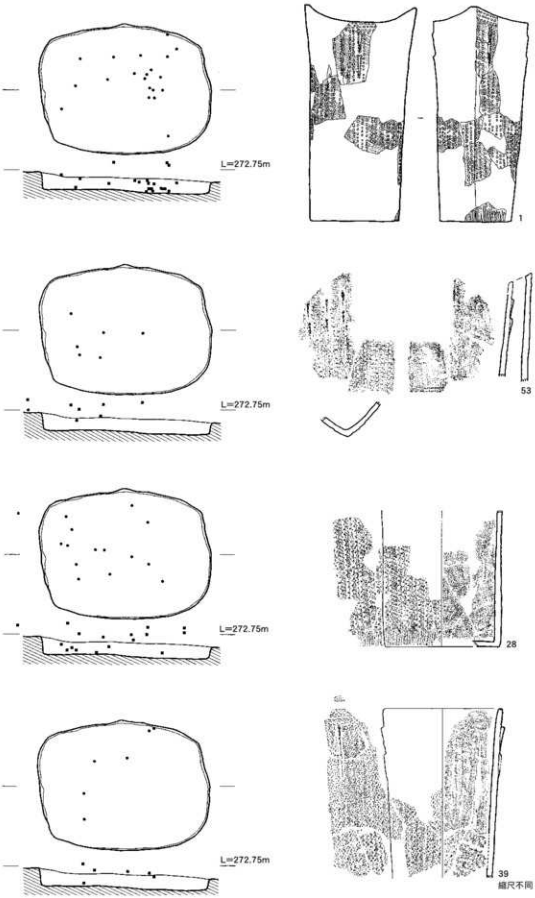
28は貝殻条痕文の上に，貝殻刺突文を施した円筒土器の胴部から底部である。住居外からも破片が１点出土しているが，住居の床面近くから埋土の上部までにわたって多くの破片が出土している。

39は貝殻刺突文と楔形貼付文を施した円筒土器である。住居埋土からも数点の破片が出土しているが，Ⅰ-12区から２点，Ｈ-10区から１点と，十数ｍ離れた地点からも接合する破片が出土している。

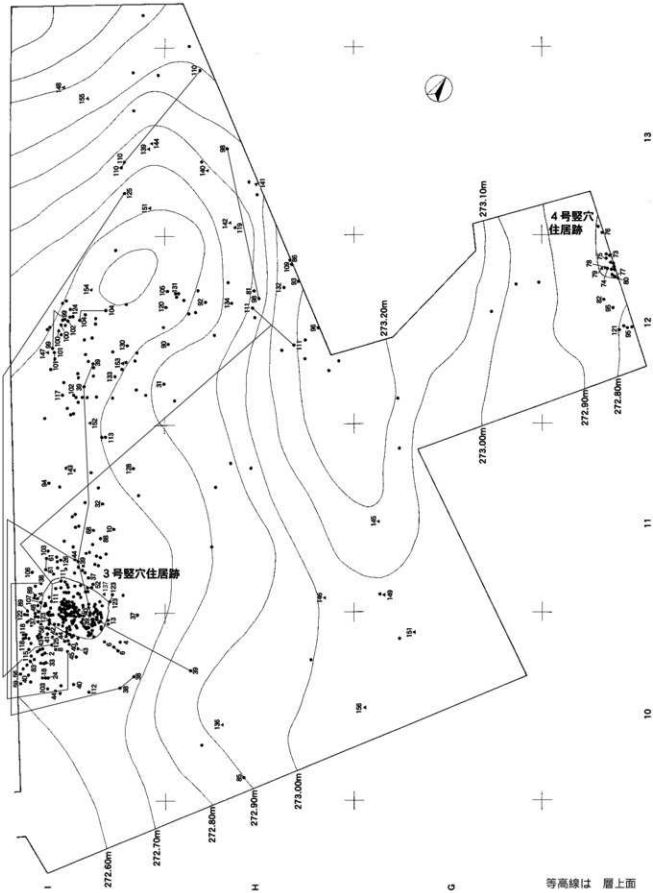
住居に直接伴う土器は明らかでないが，住居が廃棄され埋没していく過程で，周囲に散在していた土器片が土砂とともに流入してきたことが想定され，特に住居床面に近いレベルで出土しているものについては，時期的に近いものと考えられる。



第５図　３号竪穴住居跡内遺物出土状況図



第６図　３号竪穴住居跡内土器別出土状況図



第７図　Ⅰ類土器・石器出土状況図（10mグリッド）

イ　遺構内遺物（第８～12図１～72）

１から72は３号竪穴住居跡内の出土遺物である。１から70は　類土器，71，72は石器である。

１から24は，横位または斜位の貝殻条痕文を施した上に，縦位または斜位の貝殻刺突文を施したものである。

１は口縁部上面観がいわゆるレモン形を呈する土器である。底部付近を一部欠くが，全体のバランスやフォルムを元に完形復元したものである。高さ23㎝，長口径11.7㎝，短口径10㎝を測る。底部から口縁部にかけてレモン形のように対になる２か所の頂部（角）をもち，やや外反しながら立ち上がる器形である。口縁部は２か所の頂部だけが船の舳先のように伸び上がり強調されている。器面全体に浅い貝殻条痕文をやや斜位に施し，その上から口縁部には横位に４条の貝殻刺突文を巡らし，胴部には二本単位の縦位の貝殻刺突文を施している。刺突文は方形の凹点状を呈するものである。口縁部下には縦位の楔形の粘土紐（以下，クサビ）を二段に貼り付けている。クサビの両側には細かな刺突が施されている。口唇部は平坦に仕上げ，縦位の刻みを密に施している。また底部側面にもやや長めの縦位の刻みを密に施している。内面はケズリの後，丁寧なナデで仕上げられている。器壁は５㎜弱と薄く均一で精緻な作りである。胴部には縦長の補修孔が開けられており，口縁部付近の表面には一部ススの付着が認められる。

２，３もレモン形を呈する可能性があるものである。横位の貝殻条痕文を施した上に，口縁部には横位の貝殻刺突文を３条巡らし，胴部には刺突文を斜位に交錯させてＸ字状に施している。それに重ねてクサビを２段に貼り付けている。クサビの両側には細かな刺突が施されている。口唇部は平坦に仕上げ，縦位の連続した刻みを施している。内面はケズリの後，丁寧なナデで仕上げられている。器壁も薄く精緻な作りである。１のレモン形を呈する土器とよく類似しているが，相違点は貝殻刺突文が方形の凹点状を呈するものではなく，波線状を呈している点である。器壁は５㎜弱と薄く均一で，精緻な作りである。２には縦長の補修孔が開けられている。３には表面にススの付着が観察される。

４，５，７は円筒土器の口縁部で，同一個体と思われる。文様の構成は２，３と同じであるが，胎土がやや赤みを帯び，焼成は非常に堅致である。６も同様な施文が施されているが，表面の剥落が激しい。８には２段のクサビが貼り付けられている。９，11，12は斜位の貝殻条痕文を施した後に器面を軽くナデて仕上げている。10は器面が風化により荒れているが，同様な施文が観察される。13は縦位の刺突文が４条密に施されている。14から24も，横または斜位の貝殻条痕文を施した上に，貝殻腹縁を用いた波線状の刺突文を縦位または斜位に施す文様構成は同じである。

25は底径12.3㎝の円筒土器の底部である。底部側面には縦位の浅い刻みを密に施し，その上を軽くナデている。底面の仕上げはミガキである。底部内面には指押さえ，指ナデの後が観察される。底面の中心から１㎝ほどずれた所には，径７㎜・深さ３㎜の円形の凹みが作られている。これは焼成後二次的に作られているもので，同時期の円筒土器底部にいくらかの類例があるものである。胴部の立ち上がり部分できれいに割れて円盤状を呈しており，意図的に打ち欠いたのかもしれない。凹みとの関連も考えられ興味深い。

26，27は底部から胴部の立ち上がり部分である。27は底径7.2㎝の小型の円筒土器である。貝殻条痕文をナデ消した後，縦位の刺突文，縦の刻みを施している。28は斜位の貝殻条痕文の上に，3

〜４本を単位とした貝殻刺突文を間隔を空けて施したものである。円盤形の底部を巻くようにして胴部が立ち上がっており，土器製作の状況が分かるものである。

29から44は，地文となる貝殻条痕文が施されず，器面調整はケズリの後，丁寧なナデで仕上げられ，その上から縦位もしくは斜位の貝殻刺突文を施すものである。

29は縦位の貝殻刺突文とクサビが２段貼り付けられている。30，31，32，34，35，36，37は同一個体と考えられ，胴部径約12㎝の円筒土器である。器面は丁寧にナデられており，その上から縦位の貝殻刺突文を密に施し，クサビを貼り付けている。内面も掻き上げるような縦方向のケズリの後，ナデられている。33の外面には，ほぼ全面にススが付着している。38，39も同一個体の円筒土器である。地文の貝殻条痕文が施されないというだけで，文様構成は前述の１〜10などと同じである。口縁部に横位の貝殻刺突文を３条巡らし，胴部には縦位の貝殻刺突文を底部まで施す。クサビを２段貼り付け，クサビの両側には先端の鋭い工具による細かな刺突文が並んでいる。クサビとクサビの間には縦位の貝殻刺突文に斜位の貝殻刺突文を重ね，Ｘ字状を呈している。

39には縦長の補修孔が途中まで開けられている。貫通はしていない。40〜44も同一個体と考えられるものである。胴部径は約21㎝で，口縁部と底部を欠くが，文様や器壁の厚みから，41が口縁付近，44が胴部，40が底部付近であると思われる。土器の大きさに見合った厚みのあるクサビを２段貼り付け，貝殻刺突文は一部Ｘ字状を呈する部分もある。また，外面にはススの付着も観察される。

45から52は，縦位の貝殻刺突文が方形の凹点状を呈する円筒土器である。

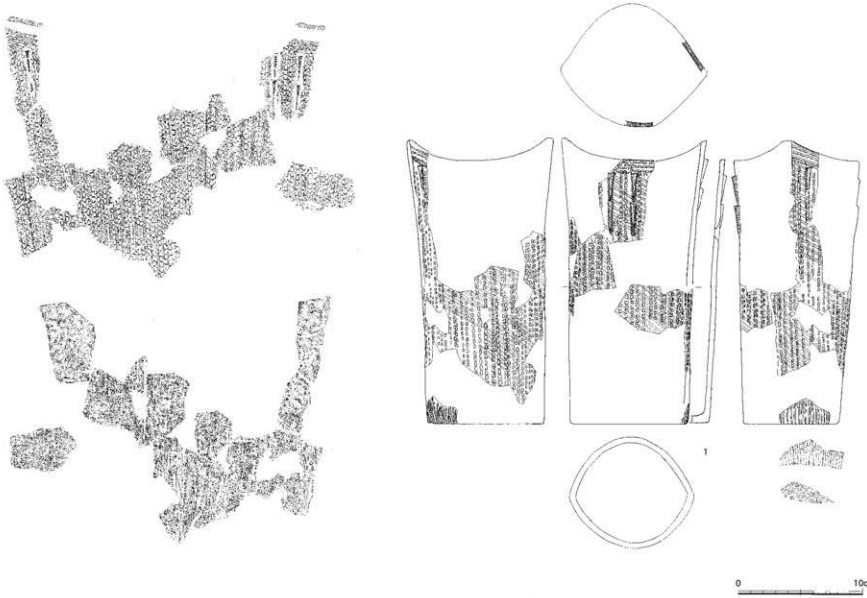
45は縦位の刺突文が密に施されており，ひとつひとつの刺突は４㎜　３㎜ほどの長方形の凹点である。２段のクサビを貼り付けている。地文の貝殻条痕文はナデ消されているようである。胎土には砂粒とともに金雲母が含まれており特徴的である。47には斜位の浅い貝殻条痕文が残る。48は横位の貝殻条痕文が間隔を空けて施されているように観察されるが部分的である。49はクサビの間に縦位と斜位の貝殻刺突文を重ねてＶ字状を呈している。52は斜位の貝殻条痕文がナデ消された上に，方形の刺突文を密に施している。

53から70は，角筒土器と考えられる一群である。いずれも文様構成は円筒形土器とほぼ同じであるが，角筒土器に分類したものには縦位の刺突文は方形の凹点状を呈するものがほとんどである。

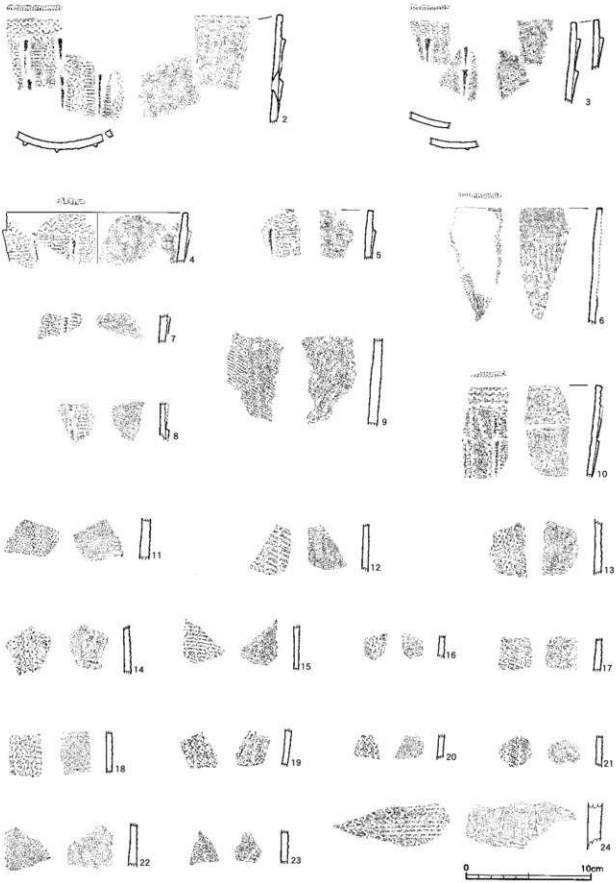
53，54は同一個体の角筒土器である。口唇部は平坦に仕上げ，縦の刻みを施している。口縁部には横位の貝殻刺突文（波線状）を３条巡らし，その下に２段のクサビを貼り付けている。縦位の刺突文は方形の凹点状を呈するもので，１個体の中で２通りの刺突文を観察できるものである。55，56は角筒の角の辺に沿って刺突文が施されている。57〜68は角筒土器の胴部，69，70は角筒土器の底部である。胴部の立ち上がり部分には縦の刻みを施している。

71，72は３号竪穴住居跡床面から出土した石器である。

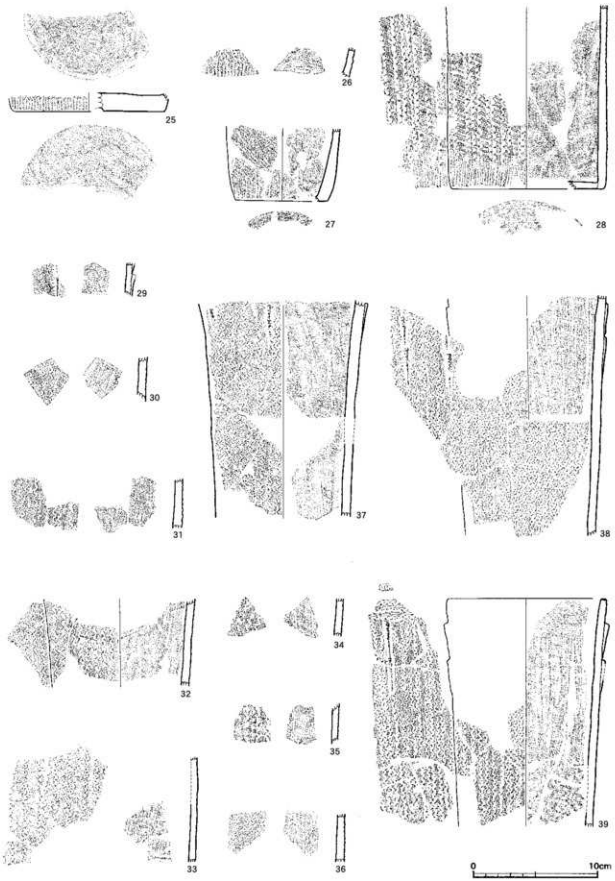
71は先端が鋭い扁平な礫を利用した礫器である。刃部には使用による刃こぼれと考えられる細かな欠損が認められる。72は軽石加工品である。粗く長方形に加工され，裏面はゆるい曲面となっている。片手で持ちやすい形状である。



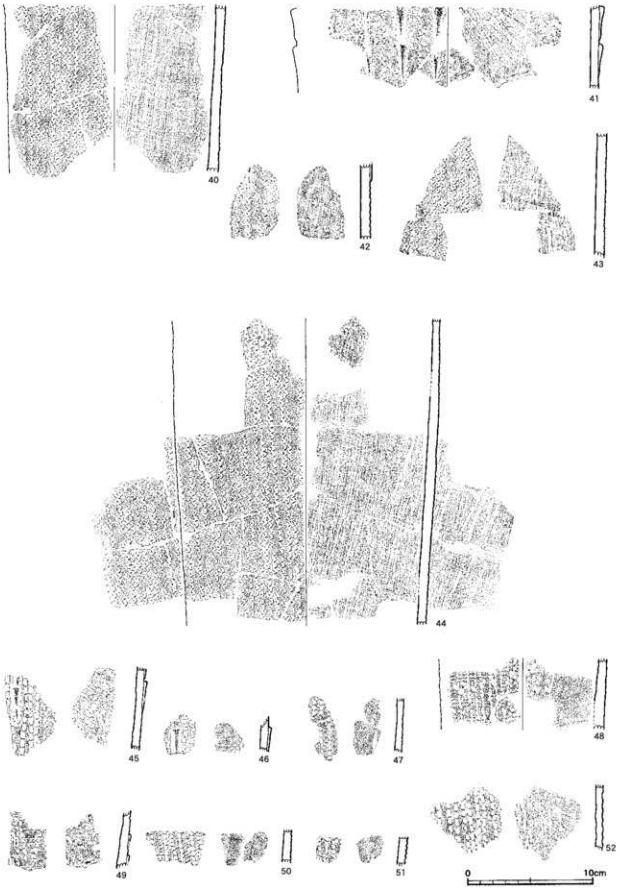
第８図　３号竪穴住居跡内遺物①



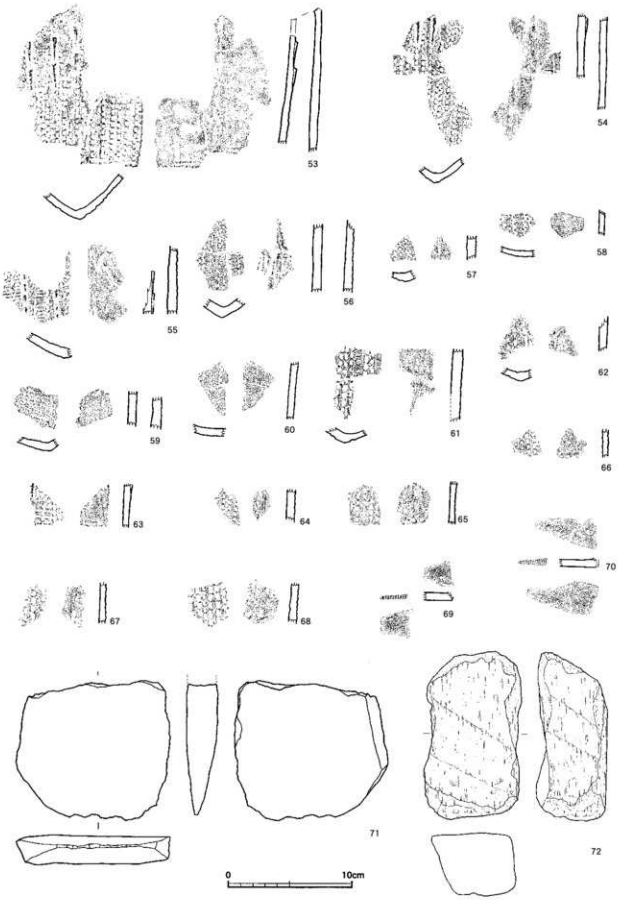
第９図　３号竪穴住居跡内遺物②



第10図　3号竪穴住居跡内遺物③



第11図　3号竪穴住居跡内遺物④



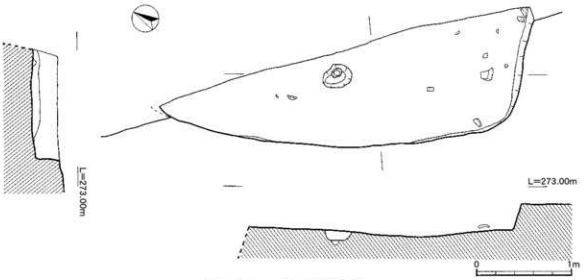
第12図　3号竪穴住居跡内遺物⑤

⑵　４号竪穴住居跡（第13図）

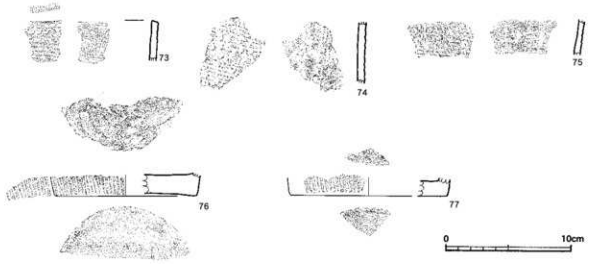
Ｆ－12・13区で，道路建設のためにすでに掘削されていた壁面に見えていたものである。　層（薩摩火山灰）への掘り込みは明らかであったので，上層の　層で平面的に掘り込み面を検出すべく慎重に掘り下げを進めたが，結果的に　層上面に至るまでプランを捉えることはできなかった。

検出できたのは住居跡の南西隅のコーナーを含む，長辺3 8m，短辺1 4mの三角形状であった。残存していた部分の床面積は約3 5㎡で，３号と同様に隅丸長方形のプランであったと考えられる。長軸はＮ－30　－Ｗである。検出面からの深さは約30㎝で　層を掘り込んでおり，床面の多くはチョコ層に達しているが，一部に薩摩層が残っていることから，薩摩層の下部を床面としていた可能性が強い。壁面にはでこぼこがあり，こん棒状の工具で掘削したと想起できる状況が読み取れる。中央西側よりに浅いくぼみ状のピットが１基検出された。住居跡の埋土はゴマ状の黄白色細粒土を含む黒色土で，　層の黒色土と区別できない。下部にはややＸ層が混ざる。

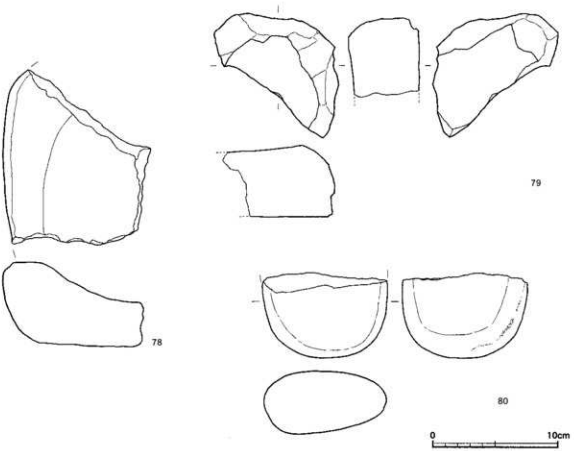
埋土中から　類土器５点（第14図73～77）のほか，磨石，石皿（第15図78～80）が出土している。



第13図　４号竪穴住居跡



第14図　４号竪穴住居跡内遺物①



第15図　４号竪穴住居跡内遺物②

第14・15図の73から80は，4号竪穴住居跡内から出土した遺物である。73から77は　類土器である。78から80は石器である。

73は円筒土器の口縁部である。口唇部は平坦に仕上げ，連続した縦の刻みを施す。器面には横位の貝殻条痕文が浅く施され，口縁部には横位の貝殻刺突文を３条巡らしている。その下に同じ貝殻腹縁による波線状の刺突文が縦位に施されているが，その周囲には別の貝殻腹縁による爪形文状の刺突文が施されている。内面は横方向のケズリの後ナデられている。75はその胴部片と思われる。74は斜位の貝殻条痕文の上に縦位の刺突文を密に施している。内面には縦方向のケズリが観察される。76は復元径11㎝の円筒土器底部である。底面はミガキで仕上げ，胴部の立ち上がり部分には縦の刻みが密に施されている。77も同じ底部と考えられる。73，75，76，77は砂粒を多く含む胎土も類似しており，同一個体ではないかと考えられる。

78は成形された石皿の破片である。周囲を敲打で整えた後，研磨により成形している。底面も平坦に仕上げている。作業面は大きく凹み，表面はよく磨滅している。石材は安山岩である。敲打成形やその形態的特徴から，この時期特有の台形状の「定型石皿」の可能性が高い。79も表面が磨滅しており，石皿の破片と考えられる。80は磨石の半欠品である。周囲には若干敲打の跡が観察される。

3　遺物

⑴　土器（第16～20図）

81から135は包含層（　層主体）出土の土器であり，54点を図化した。

81から129　は　類土器である。81から98は，地文に横位または斜位の貝殻条痕文を施した後に，貝殻腹縁による波線状の刺突文を施したものである。

81は口唇部を平坦に仕上げ，連続した縦位の刻みを施している。口縁部には横位の貝殻腹縁による刺突文を三条巡らす。その下にやや斜めに貝殻刺突文を施し，クサビを二段貼り付けている。器面が１～２㎜の厚さで剥落しており，内面側の砂粒を多く含んだ粗い胎土に対し，表面にはより細かな粘土を貼り付けて土器を製作している様子がうかがえる。82は斜位の貝殻条痕文を施した後，二本単位の縦位の貝殻刺突文の上に斜位の貝殻刺突文をＸ字状に重ねたものである。83は口唇部に斜めの刻みを施している。口縁部に貝殻刺突文を横に三条巡らし，高さ４㎜，幅２～４㎜，長さ30㎜のクサビを貼り付けている。クサビの両側は先の鋭い工具で刺突文が施されている。この施文はクサビ（楔形の粘土紐）を器面に貼り付け，よくなじませるためのものとも考えられる。器壁の厚さは４～５㎜で，薄く精緻な作りの土器である。86もクサビの残る胴部片である。クサビの長さは土器によりまちまちであるが，おおよそ２～３㎝の長さである。

84から98は胴部片である。87，88，95のように器壁の厚さが５㎜程度の薄いタイプと，85，92，98のように10㎜程度の厚いタイプがある。

99～102，104は，地文の貝殻条痕文が縦位に施されているものである。

99，100，101は同一個体と考えられる。条痕が縦方向に途切れることなく一気に施されている。その上から縦位の貝殻腹縁による刺突文が二条密接して施されている。部分的には刺突を深く差し込み，二条の貝殻刺突の間を盛り上げるように施して，そこが楔状に見えるところもある。横並びの位置が揃っているので，楔形貼付文を意図した施文と考えられる。102は胴部から底部にかけての破片で，復元径は18㎝の円筒形である。縦位の条痕文の上に，二条の刺突文を密接して施している。底部には約４㎝の縦の刻みが，間隔は不規則であるが連続して施されている。

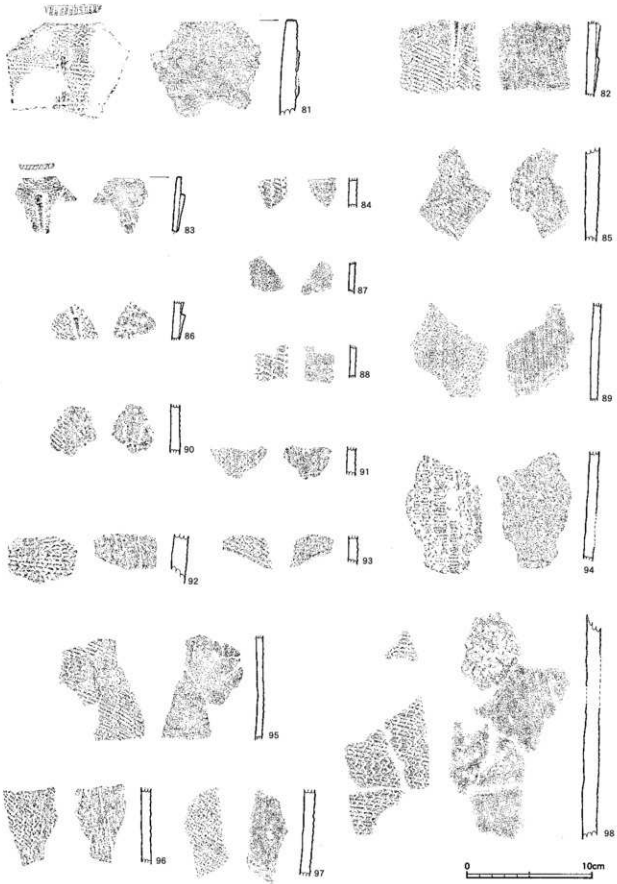
103，105～111は縦位の貝殻刺突文のみ観察されるものである。地文の貝殻条痕はナデ消されたものと考えられる。

111は復元径11㎝を測る円筒土器の底部である。底部には縦の浅い刻みが施された後，その上から軽くナデている。112は復元径18.5㎝の円筒土器の胴部である。ナデにより器面調整された後，貝殻腹縁による縦位の刺突をほぼ等間隔に施している。

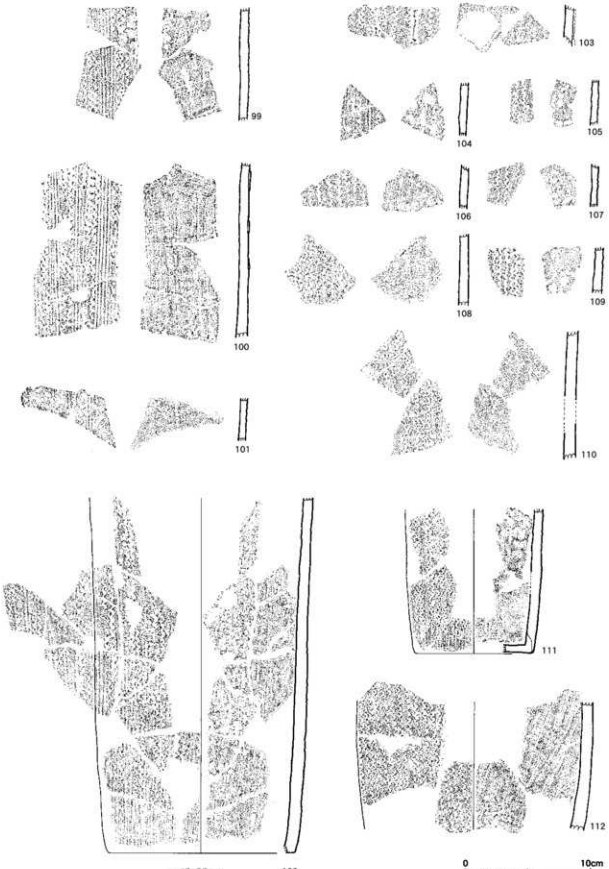
113から123は角筒土器である。

113と114は縦位の貝殻刺突文が方形の凹点状を呈するものである。同様な施文は119や123にも観察される。115，116，118は，横～斜位の貝殻条痕文の上に細い波線状の貝殻腹縁による縦位の刺突文を施すものである。117は角筒土器のコーナーの部分である。122と123は角筒土器の底部である。どちらも底部外面に縦位の刻みを施している。123は底部の一辺が5.5㎝で，四辺がややふくれた方形をした角筒土器の底部である。

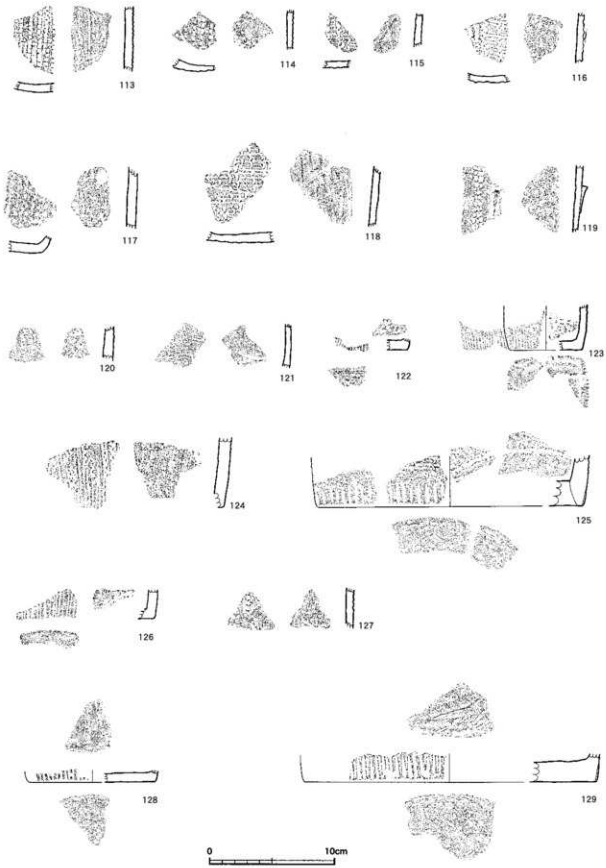
120，121，124～129は円筒土器の底部とその付近の胴部片である。いずれも側面には縦の刻みが施されている。124は縦の密接した二条の貝殻刺突文に，底部側面には縦の刻みが施されている。



第16図　縄文時代早期の土器①（Ⅰ類）



第17図　縄文時代早期の土器②（Ⅰ類）

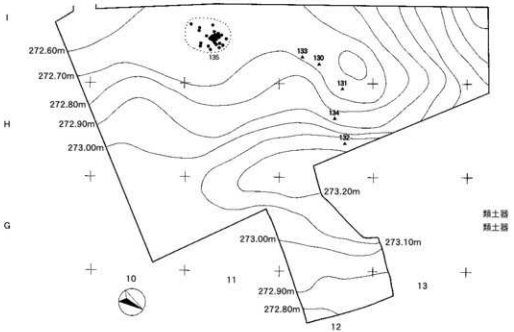


第18図　縄文時代早期の土器③（Ⅰ類）

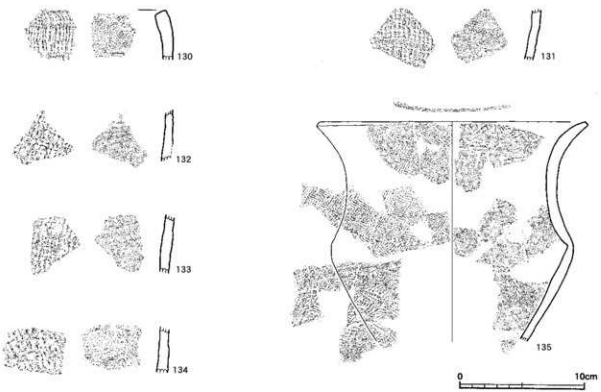
102と同一個体と思われる。127は縦位の刺突文が方形の凹点状を呈するタイプである。125と129は厚手でやや大型の円筒土器の底部である。125は復元径22㎝，129は復元径24㎝である。

130から134は　類土器，135は　類土器である。出土状況を第19図に示す。

130は内湾した口縁部である。器面が風化しており判別しにくいが，貝殻腹縁による縦位の刺突を横方向に連続して施している。短い腹縁を用いた３段の刺突帯が観察される。口縁部にかけてや



第19図　Ⅱ・Ⅲ類土器出土状況図（10mグリッド）



第20図　縄文時代早期の土器④（Ⅱ・Ⅲ類）

や肥厚しながら内湾し，内傾した口唇部は平坦に仕上げている。131から134は胴部片である。器形や貝殻刺突による施文の状況から，　類土器は下剥峯式土器の範疇に入るものと考えられる。

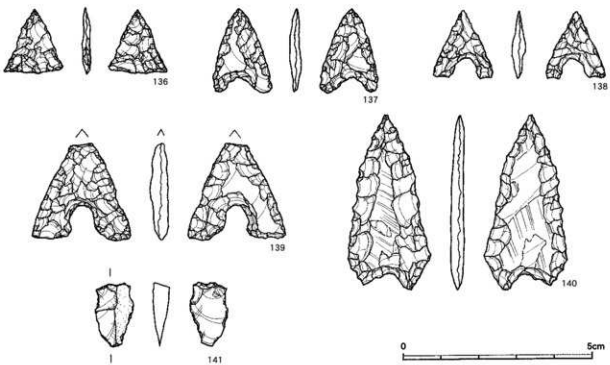
135は　類土器で，Ⅰ - 11区で集中して出土した。１個体が割れて散在している状況で，約２分の１が復元できたが底部を欠く。復元口径約22㎝，器高17㎝以上である。口縁部が大きくアサガオ状に外反し，締まった頸部から胴部で屈曲し，膨らみをもって底部に収束する器形を呈している。外面には間延びした山形押型文が縦方向に密に施され，その上を軽くナデで仕上げている。内面はナデ調整が施され，口縁部内面にも横方向に山形押型文を巡らしている。外面にはススが付着している部分がある。　類土器は手向山式土器であると考えられる。

⑵　石器

石器は打製石鏃・石匙・削器・磨製石斧・礫器・石核・剥片などが出土した。いずれも縄文早期包含層の　・　層から出土したものである。22点を図化した。

打製石鏃（第21図136〜140）

136は平基の三角形鏃で，石材は透明感のある黒曜石である。137，138は基部に抉りを入れた二等辺三角形状を呈する。137の両側辺はやや内湾している。石材は137はチャート，138は安山岩である。139はやや大型の三角形状で，U字状の深い抉りを施したものである。石材はチャートである。140は最大長4 6㎝を測る長身の二等辺三角形鏃で，両側辺は鋸歯状の剥離を施し，両脚は逆三角形状に加工している。また，表裏面ともに研磨して平滑にした跡が観察される。横：縦の比率は１：2 2である。



第21図　縄文時代早期の石器①

石匙（第22図142，143）

142，143はチャート製の石匙である。142は身部に対してつまみ部が大きく，刃部は丸みを帯びて仕上げている。143は刃部を大きく欠損しており全体の形状は明らかでないが，143と類似した形状が復元できる。

削器（第22図144，145，146）

144は自然面を残す剥片を用い，周縁に表裏から刃部加工を行っている。表面に残る凸部分は製作過程でうまく剥離できなかったもので，ヒンジフラクチャーをおこしている。石材はガラス質が少なく，透明感のない灰黒色の黒曜石である。145，146は灰色に黒い筋が入るチャートを用いている。145は上辺から右側辺にかけて細かな剥離を施して刃部を作出している。右側辺を底面に配置すると，石匙的な機能を強く感じられる。146は横広剥片を素材とした削器である。主要剥離面側からの剥離により刃部を作出している。左半分は欠損したとみられる。

磨製石斧（第23図150）

150は小型の磨製石斧である。側面や基部には剥離痕を残したまま，刃部と表裏面を研磨で仕上げている。石材は南九州の縄文早期で多用されるホルンフェルスで，直刃の形状など該期の特徴を備えているが，最大長5 2㎝，最大幅2 8㎝という非常に小型の形状は類例が少なく特筆される資料である。

礫器（第24図152，154）

152は扁平な礫を用いて周囲に加工を施し，刃部は片側からの剥離によって作出されている。基部近くには若干の抉りも認められるので，棒状のものに装着して使用されたことも推定される。154は扁平な礫素材の左側面に，背面方向から刃部加工を行っている。石材は安山岩である。

石核（第24図151，153）

151は砂岩の石核である。亜円礫の平坦面を打面として，弧状の不定形剥片を剥出している。不定形剥片の大きさは縦横 4 ㎝程である。153は剥片素材の石核である。分割面をそのまま打面としている。縦長の剥片を剥ぎ取っている。

剥片（第21図141・第23図147，149）

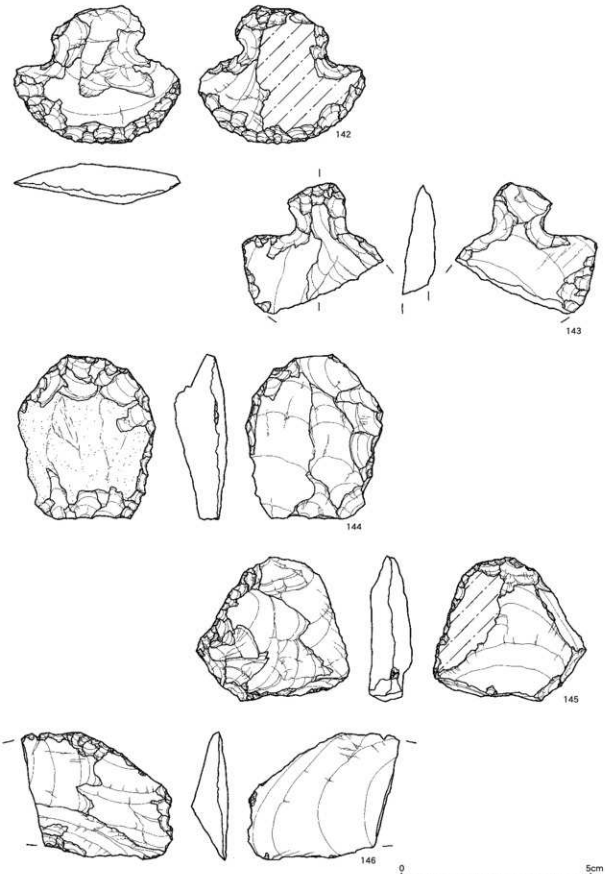
141は黒曜石製の小型剥片である。縦長の側辺に微細な使用痕が観察される。一部自然面が残るが，サンドペーパー状のざらついた感じの自然面である。147はチャート製の横長剥片である。149は剥片として図化したが，磨製石斧の刃部の欠損品の可能性も考えられる。その場合は図の天地が逆になる。

磨石・敲石（第25図155）

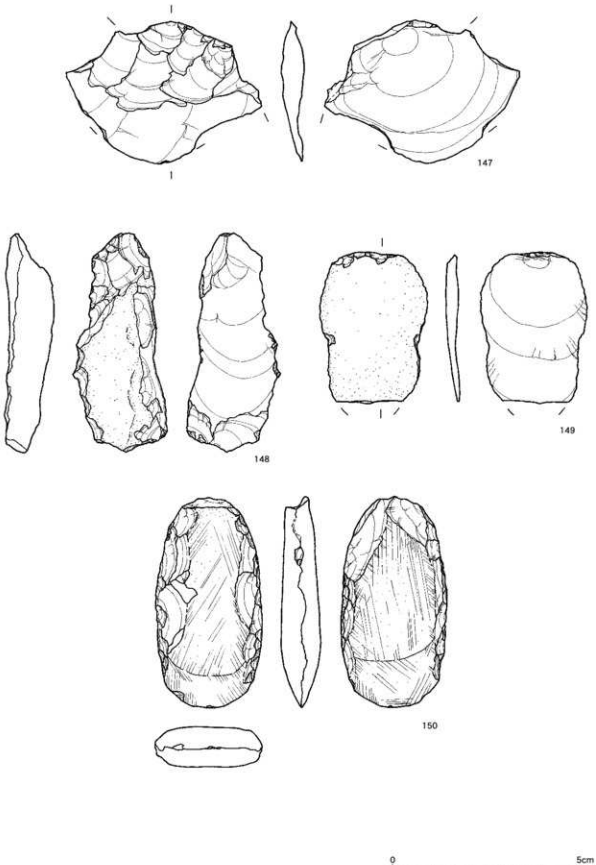
155は砂岩の円礫を用いた磨石・敲石である。磨石としてより敲石としての用途が主だったようで，表裏面と側面全周に敲打痕が巡る。表面のやや上部には敲打痕が集中している部分があり，用途を考える上で興味深い。

石皿・台石（第25図156）

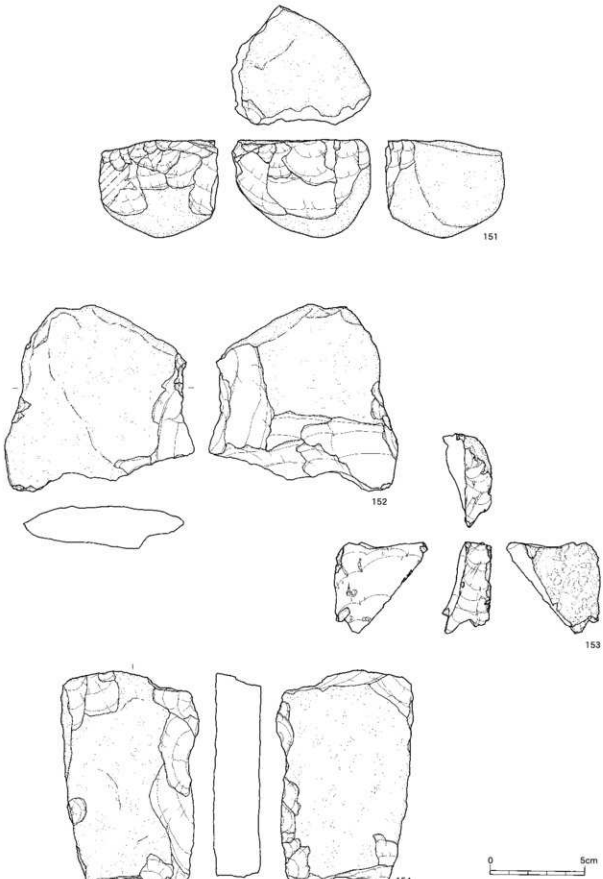
156は安山岩の扁平な円礫を用いた石皿・台石である。表裏面ともに磨滅した面が観察されるが，あまり使い込まれた様子はうかがえない。敲打によるものと思われる凹みもあり，台石としての用途もあったものと思われる。



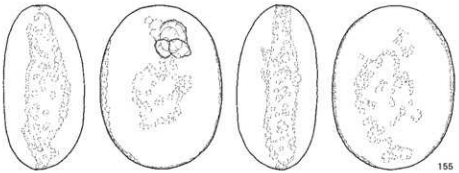
第22図　縄文時代早期の石器②

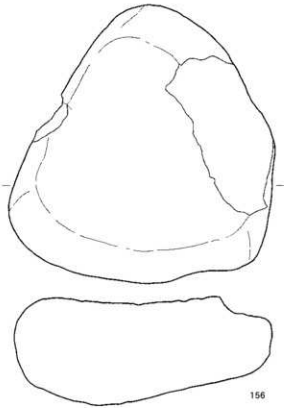


第23図　縄文時代早期の石器③



第24図　縄文時代早期の石器④





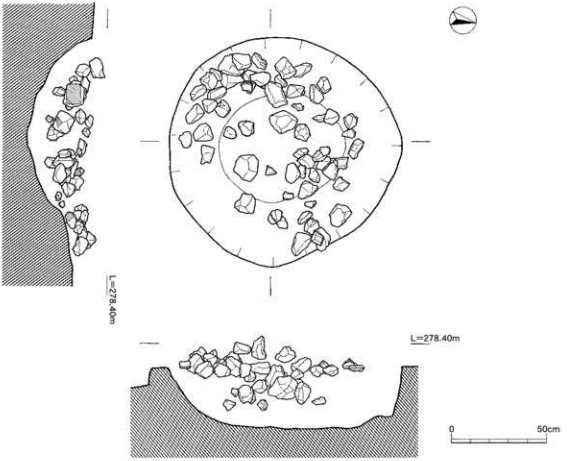
第25図　縄文時代早期の石器⑤

4　その他（平成17年度調査分追加資料　縄文時代早期　集石31号）

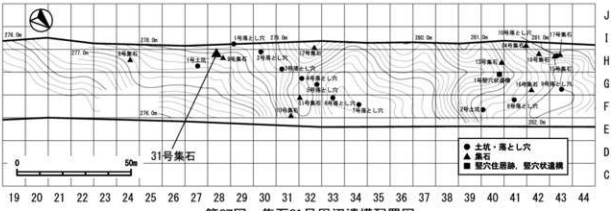
建山遺跡において，平成17年度の本調査で検出した集石遺構であるが，平成20年度刊行の報告書（鹿埋文報139）から記載漏れした資料である。平成17・18年度の調査で集石遺構は合計30基報告されているので，31号集石として報告する。

31号集石はH－28区　層下部から検出された。直径約120㎝のほぼ円形のプランで，深さ34㎝の深皿状の掘り込みを持つものである。掘り込みの埋土下部には炭化物を多く含む黒色土が堆積しており，その上に礫がまとまって入れられている状況である。礫は拳大のものが多く，被熱により赤化したものやひびが入っているものが多い。礫の総数は65個で，石材は安山岩が主体である。

平成17年度調査区の遺構配置を含めた集石31号の位置図を下に示す。



第26図　集石31号



第27図　集石31号周辺遺構配置図

第３節　縄文時代前期の調査

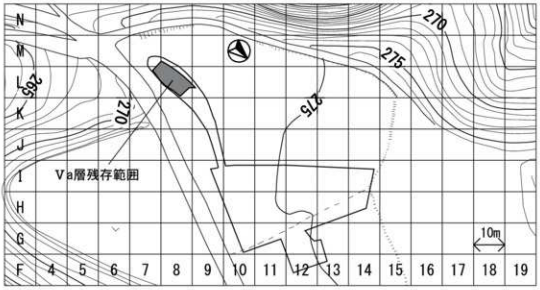
１　調査の概要

遺跡地内はボラ抜き　や天地返し等の造成により深く攪乱されており，包含層の残りはよくなかったが，付け替え道路部分の南端近くで縄文時代前期の包含層（　ａ層）が残存しており，そこから轟式土器，曽畑式土器が出土した。第28図に　ａ層残存範囲を示す。

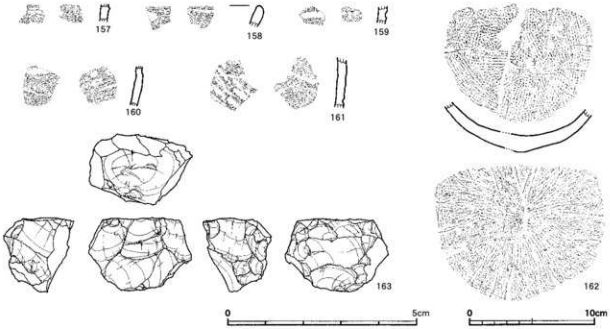
ボラ抜き　文明年間に降下した桜島起源の軽石が厚く堆積する地域で，営農に不利益を及ぼすこの軽石層を除去する作業のこと。

２　遺物（土器：第29図157～162，石器：第29図163）

157は微隆突帯を貼り付けている。158は口唇部を丸く収めた口縁部，159～161は横位や斜位の凹線が施されたものである。162は尖底状の底部で，内外面ともに貝殻条痕が施されている。157，162は轟式土器，その他は曽畑式土器であると考えられる。163は黒曜石製の小型の石核である。



第28図　Ｖａ層残存範囲



第29図　縄文時代前期の土器

第４節　縄文時代中期の調査

１　調査の概要

縄文時代中期の遺物は出土しなかったが，　層上面で３基の落とし穴が検出された。埋土に御池火山灰を含むことから，縄文時代中期の遺構と判断した。落とし穴の形状は長方形から隅丸長方形で，底面にはいずれの落とし穴からも小ピットが３か所ずつ検出された。

第30図に周辺地形と落とし穴配置図を示す。

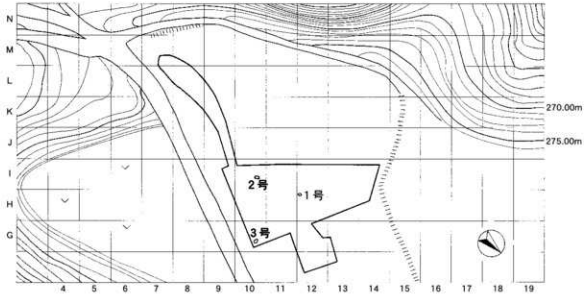
２　遺構

⑴　１号落とし穴（第31図上）

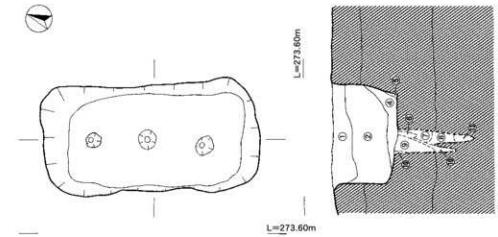
Ｈ－12区の　層上面で検出された。平面プランは長径114㎝，短径58㎝の隅丸長方形で，長軸方向はＮ－20　－Ｗである。掘り込みはユニットパスのような形状で，検出面からの深さは36㎝である。底面からは長軸に並んで３か所の小ピットが検出された。小ピットの大きさは北側から直径８㎝，深さ34㎝，中央が直径９㎝，深さ44㎝，南側が直径12㎝，深さ30㎝である。先端に向かって尖っていく形状で，硬質の　層（薩摩火山灰層）まで達している。埋土の主体はパミスを含んだ黄橙色土で，　ｂ層（御池火山灰）を含んでいる。小ピット内にはＰ11やＰ13を含む黒褐色・茶褐色土が含まれる。遺物は含まれていなかった。

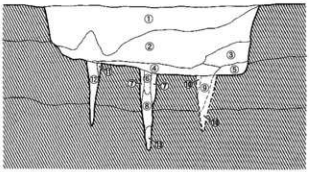
⑵　２号落とし穴（第31図下）

Ｉ－10区の　層上面で検出された。平面プランは長径120㎝，短径61㎝の長方形で，長軸方向は１号落とし穴と同じＮ－20　－Ｗである。検出面からの深さは46㎝で，ほぼ垂直に掘り込まれている。底面は平坦面をなし，３か所の小ピットが検出された。大きさは北側から直径８㎝，深さ42㎝，中央が直径９㎝，深さ46㎝，南側が直径６㎝，深さ40㎝である。１号の小ピットより細身で，まさに杭を突き刺したような形状である。硬質の　層を掘り抜き，先端は　層に達している。主体となる埋土は黄褐色火山灰土で，下部にはそれに由来すると思われるパミス層が入っている。小ピット内には暗褐色土が含まれる。遺物は含まれていなかった。



第30図　周辺地形と落とし穴配置図（10ｍグリッド）



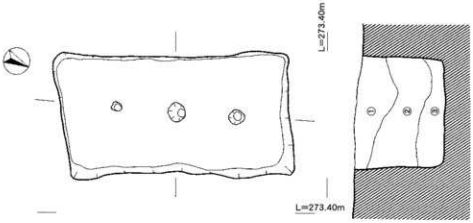


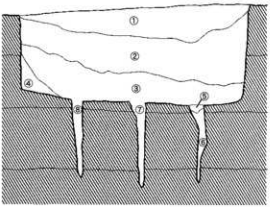
1号落とし穴

黄橙色粘質土（パミス混じり）
黄橙色弱粘質土
　にやや黒ぶが混ざる
黒色土と黄橙色土の混土
黒色土
P11を含む黄橙色土　パサパサ感
黒褐色弱粘質土
茶褐色土（黄色の粒混じり）
P13を含む茶褐色土
やわらかく粘り気有り
　に同じ
　に同じ
　に同じ
明黄橙色細粒土　硬質

0　50cm

1号





2号落とし穴

黄橙色火山灰（御池火山灰相当）
黄色パミス（御池由来？）
黄褐色土
茶褐色土（パミス混じり）
黒褐色土
暗褐色土
暗褐色土
暗褐色土（P11を多く含む）

0　50cm

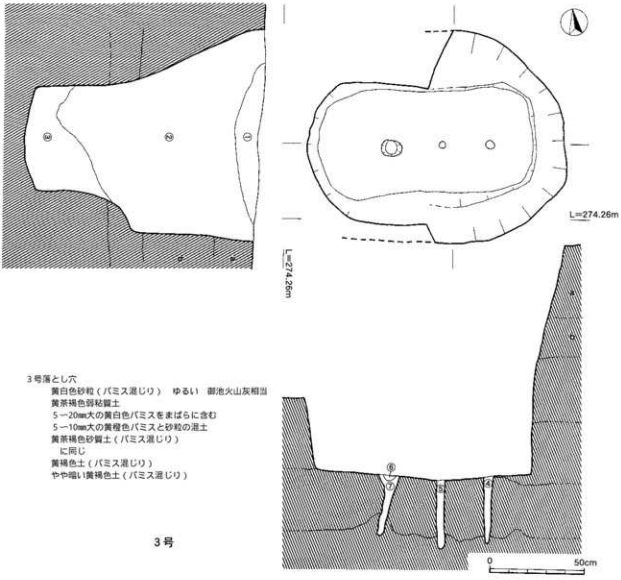
2号

第31図　1・2号落とし穴

⑶　３号落とし穴（第32図）

Ｇ－10区で検出されたが，西側半分が削平されているために形状・規模がはっきりしない。残存部でみると，平面プランは長径138㎝，短径112㎝の隅丸長方形を呈し，深さは122㎝あり，ほぼ垂直に掘り込まれている。長軸方向はＮ－80　－Ｗであり，１号・２号とは並びを異にする。埋土はＰ11パミスをまばらに含む黄茶褐色土が主であり，下部には崩落したＰ11パミスが堆積していた。最上面のくぼみには御池パミスが堆積している。底が　層に達している小ピットが３か所みられる。大きさは東側が直径５㎝，深さ36㎝，中央が直径５㎝，深さ38㎝，西側が直径10㎝，深さ30㎝で，西側のピットは入り口が広い形状になっている。先端は尖っており，各１本の細い木を使ったものと思われる。ピット内には，パミス混じりの黄茶褐色砂質土が埋もれている。

平成17・18年度の調査では，29区から49区あたりで縄文時代早期の落とし穴が13基検出されているが，前期から中期にかけての落とし穴は検出されていない。



第32図　３号落とし穴

第１表　出土土器観察表①

挿図番号	遺物番号	取上番号	レベル	地区	層位	部位	調整（外）	調整（内）	色調（外）	色調（内）	胎土 石英	長石	角閃	輝石	他	焼成	備考
8	1	266 ,237外21	272 27	I・10-11	,	口縁一胴部	貝殻条痕 ナデ	ナデ	暗褐色	暗褐色						良	外面スス付着
	2	434 ,379	272 46	I・10		口縁	貝殻条痕	ケズリ ナデ	灰褐色	茶褐色						良	補修孔あり
	3	549 ,599	272 35	3 号住	埋土	口縁	貝殻条痕	ケズリ ナデ	灰褐色	灰褐色						良	
	4	293 ,389 ,595	272 36	I・10-11		口縁	貝殻条痕	ケズリ ナデ	暗赤茶褐色	暗赤茶褐色						良	
	5	235	272 81	I・11		口縁	貝殻条痕	ケズリ ナデ	暗赤茶褐色	暗赤茶褐色						良	
	6	291 ,292	272 94	I・10	,	口縁	貝殻条痕	ケズリ ナデ	茶褐色	茶褐色					赤岩片	普	
	7	262	272 82	I・11		胴部	斜位貝殻条痕	ナデ	暗褐色	暗赤褐色						良	
	8	283	273 18	I・10		胴部	貝殻条痕	ケズリ ナデ	灰褐色	灰褐色						普	
	9	609	272 39	3 号住	埋土	胴部	斜位貝殻条痕	ケズリ ナデ	茶褐色	暗褐色						良	
	10	6 ,282 ,74	273 16	I・10-11		口縁	貝殻条痕	ケズリ ナデ	茶褐色	茶褐色						普	
	11	438	272 56	3 号住	埋土	胴部	斜位貝殻条痕	ケズリ	赤褐色	暗褐色						良	
	12	245	272 86	I・11		胴部	斜位貝殻条痕	ケズリ	褐色	茶褐色						良	
9	13	279	272 75	I・10		胴部	貝殻条痕	ケズリ ナデ	茶褐色	暗茶褐色						良	
	14	478	272 57	3 号住	埋土	胴部	斜位貝殻条痕	ナデ	黄褐色	灰褐色						良	外面スス付着
	15	597	272 28	3 号住	埋土	胴部	横位貝殻条痕	ナデ	暗褐色	暗褐色						良	
	16	578	272 56	3 号住	埋土	胴部	貝殻条痕	ケズリ ナデ	暗褐色	灰褐色						良	
	17	601	272 38	3 号住	埋土	胴部	斜位貝殻条痕	ナデ	黒褐色	暗褐色						良	
	18	238	272 70	I・11		胴部	貝殻条痕	ケズリ ナデ	暗褐色	茶褐色						良	
	19	284	273 18	I・10		胴部	斜位貝殻条痕	ケズリ ナデ	褐色	暗褐色						普	
	20	250	272 79	I・11		胴部	貝殻条痕	ケズリ	茶褐色	暗褐色						良	
	21	303	272 60	I・11		胴部	貝殻条痕	ケズリ ナデ	暗褐色	灰褐色						普	スス付着
	22	606	272 35	3 号住	埋土	胴部	貝殻条痕	ケズリ ナデ	黒褐色	茶褐色						良	
	23	491	272 58	3 号住	埋土	胴部	斜位貝殻条痕	ナデ	黒褐色	灰褐色						良	
	24	608	272 39	3 号住	埋土	胴部	貝殻条痕	ケズリ ナデ	茶褐色	赤褐色						普	
	25	488	272 38	3 号住	埋土	底部	ナデ	ナデ	褐色	褐色					火山ガラス	良	内外スス付着
	26	440 ,442	272 55	3 号住	埋土	胴部	斜位貝殻条痕 ナデ	ケズリ ナデ	灰褐色	黒褐色						良	
	27	437 ,9	272 67	I・11		胴一底部	貝殻条痕	ケズリ ナデ	茶褐色	灰褐色						良	
	28	248 ,562外19	272 42	I・10-11	,	胴一底部	貝殻条痕	ケズリ ナデ	黄橙	黄橙						良	
	29	574	272 08	3 号住	埋土	胴部	ナデ	ケズリ ナデ	暗褐色	暗褐色						良	
	30	460	272 58	3 号住	埋土	胴部	ナデ	ケズリ	明茶褐色	暗褐色					火山ガラス	良	
	31	258 ,206	272 85	I・11-12		胴部	ナデ	ケズリ ナデ	明茶褐色	暗茶褐色						良	
10	32	207 ,464	272 42	I・11	下	胴部	ナデ	ケズリ ナデ	茶褐色	茶一暗茶褐色						良	
	33	602 ,561外2	272 41	I・10-11		胴部	ナデ	ケズリ	褐色	茶褐色					赤岩片	普	スス付着
	34	471	272 37	3 号住	埋土	胴部	ナデ	ケズリ 工具ナデ	茶褐色	茶褐色						良	
	35	234	272 69	I・11		胴部	ナデ	ケズリ ナデ	明茶褐色	褐色						良	
	36	428	272 65	3 号住	埋土	胴部	ナデ	ケズリ ナデ	赤褐色	黒褐色						良	
	37	294 ,240外2	273 10	I・10-11		胴部	ナデ	ケズリ ナデ	茶褐色一褐色	茶褐色一褐色					火山ガラス赤岩片	良	
	38	486 ,484外4	272 36	I・10-11	,	胴部	ナデ	ケズリ ナデ	暗褐色	褐色					赤岩片	良	外面スス付着
	39	342 ,457外8	272 52	I・10-11	,	口縁一胴部	ナデ	ケズリ ナデ	褐色一茶褐色	褐色一茶褐色					赤岩片	良	外面スス付着
11	40	270 ,260外7	272 60	I・10-11	,	胴部	ナデ	ケズリ ナデ	茶褐色	茶褐色					赤岩片	良	
	41	271 ,273外2	272 91	I・10-11	,	胴部	ナデ	ケズリ	暗茶褐色	茶褐色						良	
	42	272	272 89	I・10	下	胴部	ナデ	ケズリ ナデ	暗茶褐色	茶褐色						良	
	43	336 ,269	272 93	I・10		胴部	ナデ	ケズリ ナデ	褐色	茶褐色					赤岩片	良	
	44	11 ,251外9	272 49	I・10-11		胴部	ナデ	ケズリ ナデ	褐色一茶褐色	赤茶褐色					赤岩片	良	スス付着
	45	546	272 39	3 号住	埋土	胴部	貝殻条痕	ケズリ	暗褐色	茶褐色					金雲母	良	
	46	304	272 69	I・11		胴部	斜位貝殻条痕	ナデ	茶褐色	茶褐色					金雲母	良	
	47	462 ,27	272 40	I・11		胴部	貝殻条痕	ケズリ ナデ	明茶褐色	明茶褐色						普	
	48	255 ,391外3	272 49	I・11	,	胴部	貝殻条痕	ケズリ ナデ	明茶褐色	暗茶褐色						良	
	49	432 ,564	272 46	3 号住	埋土	胴部	貝殻条痕	ケズリ	茶褐色	茶褐色					金雲母	良	
	50	448 ,449	272 49	3 号住	埋土	胴部	貝殻条痕	ケズリ ナデ	灰褐色	灰褐色						良	
	51	236	272 80	I・11		胴部	貝殻条痕	ケズリ ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色						良	
	52	232	272 85	I・11		胴部	貝殻条痕	ケズリ ナデ	茶褐色	暗茶褐色					金雲母	普	
53		295 ,298外2	272 56	I・11		胴部	貝殻条痕	ケズリ ナデ	黒褐色	黄橙					赤岩片	良	
12	54	480 ,277外2	272 55	I・10-11	,	胴部	貝殻条痕	ナデ	赤褐色	黄橙					赤岩片	良	
	55	318	272 71	I・11		胴部	貝殻条痕	ケズリ	灰褐色	明茶褐色					赤岩片	普	

第２表　出土土器観察表②

挿図番号	遺物番号	取上番号	レベル	地区	層位	部位	調整（外）	調整（内）	色調（外）	色調（内）	胎土 石英	長石	角閃	輝石	他	焼成	備考
12	56	1 ,267 ,288	273 .21	I･10･11	,	胴部	貝殻条痕	ケズリ	明茶褐色	灰褐色						普	
	57	244	272 .66	I･11		胴部	ナデ	ケズリ	灰褐色	灰黒色						普	
	58	241	272 .47	I･11		胴部	貝殻条痕	ナデ	暗褐色	明茶褐色						良	
	59	289	273 .19	I･10		胴部	貝殻条痕	ケズリ	明茶褐色	灰黒色						普	
	60	454	272 .41	3 号住	埋土	胴部	斜位貝殻条痕	ケズリ	黒褐色	暗褐色						良	
	61	63 ,225	273 .14	I･11		胴部	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色					金雲母	良	
	62	233	272 .69	I･11		胴部	ナデ	ケズリ ナデ	茶褐色	灰黒色					金雲母	良	
	63	472	272 .48	3 号住	埋土	胴部	貝殻条痕	ケズリ	灰褐色	明茶褐色					赤岩片	良	
	64	455	272 .39	3 号住	埋土	胴部	ナデ	ケズリ	褐色	灰黒色						普	
	65	247	272 .94	I･11		胴部	ナデ	ケズリ	明茶褐色	明茶褐色					赤岩片	普	
	66	585	272 .48	3 号住	埋土	胴部	ナデ	ケズリ	明茶褐色	灰褐色						良	
	67	589	272 .45	3 号住	埋土	胴部	貝殻条痕	ケズリ ナデ	褐色	褐色					金雲母	良	
	68	212	272 .87	I･11		胴部	ナデ	ケズリ	茶褐色	褐色					金雲母	良	
	69	500	272 .41	3 号住	埋土	底部	ミガキ	ナデ	茶褐色	茶褐色						良	
	70	590 ,475	272 .35	3 号住	埋土	底部	ミガキ	ナデ	茶褐色	茶褐色						良	
14	73	402	272 .74	4 号住	埋土	口縁	貝殻条痕	ケズリ ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色					赤岩片	良	
	74	405	272 .60	4 号住	埋土	胴部	斜位貝殻条痕	ケズリ ナデ	茶褐色	赤褐色					赤岩片	良	
	75	401	272 .58	4 号住	埋土	胴部	横位貝殻条痕	ケズリ(横)	明赤褐色	明赤褐色					角閃不･火山ガラス	良	
	76	399	272 .69	4 号住	埋土	底部	ナデ	ナデ	赤茶褐色	明茶褐色						良	
	77	406	272 .62	4 号住	埋土	底部	ナデ	ナデ	赤茶褐色	明茶褐色						良	
16	81	155	273 .29	H･12	下	口縁	貝殻条痕	ケズリ ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色						良	胎土が三層
	82	407	273 .02	F･12		胴部	貝殻条痕	ケズリ ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色						良	
	83	378	272 .78	I･10		口縁	貝殻条痕	ケズリ ナデ	暗茶褐色	茶褐色						良	
	84	397	272 .69	I･10		胴部	貝殻条痕	ケズリ	暗茶褐色	茶褐色						良	
	85	320	273 .35	H･10	下	胴部	貝殻条痕	ケズリ	赤褐色	赤茶褐色					赤岩片	良	
	86	152	273 .50	H･12		胴部	斜位貝殻条痕	ナデ	茶褐色	黄褐色						良	
	87	347	272 .94	I･10		胴部	貝殻条痕	ナデ	黒褐色	褐色						良	
	88	73	273 .29	I･11	攪乱	胴部	斜位貝殻条痕	ナデ	黄褐色	橙色						良	
	89	356 ,360	272 .79	I･11	攪乱	胴部	横位貝殻条痕 ナデ	ケズリ ナデ	暗褐色	茶褐色						良	
	90	134	273 .38	I･12		胴部	斜位貝殻条痕	ケズリ ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色					赤岩片	普	
	91	5	273 .24	I･11		胴部	斜位貝殻条痕	ケズリ ナデ	黄橙色	灰褐色						良	
	92	145	273 .24	H･12	下	胴部	貝殻条痕	ケズリ ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色					赤岩片	良	
	93	150	273 .64	H･12		胴部	斜位貝殻条痕	ナデ	灰褐色	灰褐色						良	
	94	85	273 .00	I･11		胴部	貝殻条痕	ケズリ	赤茶褐色	茶褐色					赤岩片	普	表面剥離多し
	95	408 ,409	273 .21	F･12		胴部	貝殻条痕	ケズリ ナデ	茶褐色	茶褐色					赤岩片	普	
	96	148	273 .59	H･12		胴部	貝殻条痕	ケズリ ナデ	明赤褐色	明赤褐色					赤岩片	良	
	97	392	272 .69	I･11		胴部	斜位貝殻条痕	ケズリ ナデ	暗褐色	明茶褐色					赤岩片	良	
	98	164 ,153 外･3	273 .45	H･12･13		胴部	ナデ	ナデ	に ぶい 橙	に ぶい 橙					赤岩片	良	
17	99	110 ,117	273 .36	I･12		胴部	縦位貝殻条痕	ケズリ	暗褐色	赤茶褐色					赤岩片	良	
	100	182 ,191 ,192	273 .06	I･12		胴部	縦位貝殻条痕	ケズリ	褐色	赤茶褐色						普	
	101	107 ,109	273 .23	I･12		胴部	縦位貝殻条痕	ケズリ ナデ	明茶褐色	赤茶褐色						良	
	102	93 ,193 外･12	272 .81	H･I･12	,	胴部	縦位貝殻条痕 ナデ	ケズリ	明茶褐色	赤茶褐色					赤岩片	良	
	103	64 ,376	272 .69	I･10･11	,	胴部	斜位貝殻条痕	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色						良	
	104	116 ,133	273 .27	I･12		胴部	縦位貝殻条痕	ケズリ	赤茶褐色	赤茶褐色					赤岩片	普	
	105	139	273 .33	H･12		胴部	ナデ	ケズリ	赤茶褐色	暗褐色						普	
	106	358	273 .16	I･11		胴部	ナデ	ケズリ	赤茶褐色	暗茶褐色						良	
	107	361	272 .78	I･11		胴部	ナデ	ケズリ ナデ	茶褐色	褐色						普	
	108	204	273 .39	H･11	下	胴部	不明	ケズリ	灰褐色	明茶褐色						普	
	109	151	273 .62	H･12		胴部	ナデ	ケズリ ナデ	赤茶褐色	茶褐色					赤岩片	普	
	110	168 ,169 ,185	273 .46	H･I･13	下	胴部	ナデ	ケズリ ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色					赤岩片	良	
	111	14 ,25 外･2	273 .41	I･11 ,H･12		胴部～底部	ナデ	ケズリ	赤茶褐色	茶褐色						普	
18	112	17 ,331	273 .02	I･10･11		胴部	ナデ	ケズリ	明茶褐色	明茶褐色					角閃不･火山ガラス	良	
	113	83	273 .09	I･11		胴部	貝殻条痕	ケズリ ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色						良	
	114	26	273 .23	I･11		胴部	ナデ	ケズリ	明茶褐色	明茶褐色						普	

第３表　出土土器観察表③

挿図番号	遺物番号	取上番号	レベル	地区	層位	部位	調整（外）	調整（内）	色調（外）	色調（内）	胎土 石英	長石	角閃	輝石	他	焼成	備考
18	115	345	273.12	I-10		胴部	横位貝殻条痕	ケズリ	灰褐色	灰褐色						普	
	116	18	272.91	I-11	下	胴部	斜位貝殻条痕	ケズリ	暗褐色	暗褐色						良	
	117	91	273.32	I-12		胴部	不明	ケズリ	明茶褐色	茶褐色						普	
	118	349 ,384外2	272.88	I-10		胴部	貝殻条痕	ケズリ ナデ	灰褐色	灰褐色						良	
	119	158	273.41	H-13		胴部	ナデ	ケズリ	明茶褐色	明茶褐色					金雲母 赤紫片	普	
	120	136	273.36	H-12		底部	ナデ	ケズリ	赤茶褐色	赤茶褐色					赤岩片	普	
	121	410	273.10	F-12		胴部	貝殻条痕	ケズリ ナデ	明黄褐色	に ぶい黄褐色						普	
	122	355	273.03	I-11		底部	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色						普	
	123	3 ,34 ,35	272.98	I-11		胴～底部	ナデ	ナデ	赤褐色	黄橙					赤岩片	良	
	124	118	272.23	I-12		底部	縦位貝殻条痕	ケズリ	赤茶褐色	赤茶褐色					赤岩片	良	
	125	167 ,372	272.69	I-10-13	,	底部	横位貝殻条痕 ナデ	ケズリ ナデ	明茶褐色	明茶褐色					赤岩片	良	
	126	57	273.10	I-11		底部	ナデ	ケズリ	赤茶褐色	赤茶褐色						普	
	127	393	272.64	I-11		底部側面	ナデ	ケズリ	茶褐色	茶褐色						良	
	128	188	273.05	I-11	下	底部	ナデ	ケズリ ナデ	茶褐色	茶褐色					赤岩片	良	
	129	205	273.29	H-11	下	底部	ナデ	ケズリ ナデ	暗茶褐色	暗茶褐色						良	
20	130	131	273.37	I-12		口縁	ナデ	ナデ	褐色	茶褐色						普	
	131	141	273.34	H-12		胴部	不明	ナデ	褐色	褐色						不	
	132	149	273.50	H-12		胴部	ナデ	ナデ	茶褐色	暗茶褐色						良	
	133	126	273.21	I-12		胴部	ナデ	ケズリ ナデ	茶褐色	褐色						普	
	134	146	273.32	H-12		胴部	ナデ	ケズリ ナデ	茶褐色	暗褐色						普	
	135	219 ,213外31	272.90	I-11	攪乱	口縁～胴部	ナデ	ナデ	明褐色	明褐色						良	外面スス付着
29	157	568	271.94	M-8	a	胴部	ナデ	ナデ	灰褐色	灰褐色						良	薄くスス付着
	158	532	272.36	M-8	a	口縁	ナデ	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色						良	
	159	531	272.11	L-8	a	胴部	ナデ	ナデ	明茶褐色	明茶褐色					火山ガラス	良	
	160	528	272.16	L-8	a	胴部	ナデ	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色					岩片	普	
	161	570 ,542	272.14	M・L-8	a下	胴部	ナデ	ナデ	明茶褐色	明茶褐色						普	
	162	503 ,504 ,507	271.82	L-8	a	底部	貝殻条痕	貝殻条痕	明茶褐色	明茶褐色						良	

第４表　出土石器観察表

挿図番号	遺物番号	取上番号	地区	層位	器種	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	石材	備考
12	71	607	3号住	埋土	磨器	11.2	12.3	2.5	488.0	ホルンヘルス	
	72	604	3号住	埋土	軽石加工品	12.9	7.6	4.9	145.0	軽石	
15	78	404	4号住	埋土	石皿	13.5	11.6	6.4	1090.0	安山岩	
	79	422	4号住	埋土	石皿	9.8	9.8	5.6	620.0	安山岩	
	80	426	4号住	埋土	磨石	9.9	6.7	5.0	495.0	砂岩	
21	136	310	H-10		打製石鏃	1.7	1.6	0.2	0.4	黒曜石	
	137	33	I-11		打製石鏃	2.2	1.6	0.3	0.7	チャート	
	138	170	I-13	下	打製石鏃	1.8	1.6	0.4	0.6	安山岩	
	139	10	I-11		打製石鏃	2.6	2.6	0.5	2.5	チャート	先端部欠損
	140	162	H-13		打製石鏃	4.6	2.2	0.4	3.6	頁岩	磨面あり
	141	161	H-13		剥片	1.7	1.0	0.5	0.6	黒曜石	
22	142	159	H-13		石匙	3.7	4.4	1.1	15.7	チャート	
	143	79	I-11		石匙	3.5	3.7	0.9	8.7	チャート	約1/3欠損
	144	171	I-13	下	スクレイパー	4.4	3.6	1.4	17.0	黒曜石	
	145	307	G-11		スクレイパー	3.8	4.1	1.2	17.2	チャート	
	146	306	H-11		スクレイパー	3.4	4.0	1.0	10.8	チャート	
23	147	108	I-12		剥片	3.8	5.2	0.6	11.3	チャート	一部欠損あり
	148	177	I-13		スクレイパー	5.8	2.5	1.3	16.2	チャート	
	149	308	G-11		剥片	4.0	2.8	0.4	4.9	砂岩	一部欠損あり
	150	166	I-13		磨製石斧	5.6	2.8	1.1	24.7	頁岩	つぶれ・摩耗あり
24	151	314	G-10	下	石核	5.2	7.4	6.3	310.0	砂岩	
	152	88	I-12		磨器	9.9	10.0	2.3	230.0	頁岩	
	153	128	I-12		剥片	4.8	2.6	4.9	41.2	黒曜石	
	154	121	I-12	下	磨器	11.5	7.3	2.5	390.0	花崗岩	
25	155	175	I-13		磨石	8.7	6.5	4.3	370.0	砂岩	
	156	321	H-10	下	石皿	22.0	20.9	8.2	4500.0	安山岩	
29	163	543	L-8	a	コア	2.7	1.9	1.7	9.5	黒曜石	

第Ⅲ章　まとめ

今回の調査をもって，東九州自動車道建設に伴う建山遺跡の発掘調査は終了した。ここではこれまでの調査の成果も踏まえつつ，竪穴住居跡が出土した縄文時代早期前葉の建山遺跡についてまとめてみたい。

1　竪穴住居跡について

今回の調査では縄文時代早期前葉と考えられる2軒の竪穴住居跡を検出した。平成18年度の調査でも2軒検出されているので計4軒となる。平面プランは1号・2号が隅丸方形，3号は隅丸長方形を呈し，いずれも竪穴内外に柱穴は検出されなかった。4号は竪穴の一部の調査であり，竪穴内に浅い窪み状のピットを1基検出したが，柱穴であるかは判断できなかった。

隅丸方形や隅丸長方形の平面プランはこの時期の竪穴住居跡によく見られる形状であり，柱穴が検出されない例も多い。しかしながら竪穴外部に柱穴が存在する可能性は否定できず，竪穴の掘り込み面の問題から後述する。

竪穴住居跡の床面積については，1号が5.1㎡，2号が3.4㎡，3号が8.5㎡である。ほぼ同時期の竪穴住居跡が多数発見されている南九州の遺跡例を見ると，加栗山遺跡（鹿児島市）が8.47㎡，前原遺跡（鹿児島市）が6.01㎡，上野原遺跡（霧島市）が7.3㎡，定塚遺跡（曽於市）が5.34㎡であることから，ほぼ同規模の住居サイズであると言えよう。なお，1号竪穴住居跡から出土した炭化物を測定した暦年較正用年代は，8961±40yrBPと報告されている。

2　竪穴住居跡の掘り込み面について

南九州では縄文時代早期の集落跡が各地で発見されているが，竪穴住居跡の大方が薩摩火山灰層上面で検出されているのが現状である。その原因は薩摩火山灰層の上を黒色土が覆っており，住居跡内の埋土と違いが見出せないことに起因する。しかし，その掘り込み面が薩摩火山灰上位の黒色土中にあることは，遺物の出土状況や集石遺構の検出状況からも明らかであると考えられている。

こうした様相の中，今回は4号住居跡が工事によって地表から検出面まで地層を見れること，3号住居跡は多くの土器が住居の周辺に集中していることなどから掘り込み面を深るべく慎重に調査を進めたが，今回もその検出はできなかった。黒色土内の石粒などの違いなどもこまかく比較したものの，その違いを見出すことはできなかった。

そこで，遺物の出土状況からその掘り込み面を推定することとし，竪穴住居跡検出前の包含層出土として取り上げた遺物も含めた垂直方向の出土状況を検討した（第5図参照）。結果は第Ⅲ章第2節2遺構の項（P313）に記した通りである。住居内の上下で接合する遺物の上限と，周囲の遺物の下限のレベルがほぼ同じ（検出面より20～30㎝高いレベル）であり，そのあたりに竪穴住居の掘り込み面（当時の地表面）が推定できそうである。図面を提示していないが，短軸方向の断面に投影した垂直分布でも同様な結果が認められた。このことから当時の竪穴の深さを復元すると，検出面からの深さが20～30㎝である3号住居跡の場合は，40～60㎝程の深さがあったものと考えられる。

また，このことは竪穴外部に柱穴が掘られていた場合，柱穴の深さが20～30㎝の範囲内であれば気づかずに掘り下げてしまっていることになる。そのような状況での調査方法を含め，竪穴外部に柱穴が存在する可能性については今後の検討課題としたい。

3　遺物について

縄文時代早期前葉の土器は　類とした。　類土器は貝殻条痕文の上に貝殻刺突文を施すもので，

加栗山式土器に比定される。本遺跡で出土している　類土器の口縁部には，すべて楔形の粘土紐貼付文（クサビ）が施されている。器形は円筒形・角筒形の他に，口縁部上面観がレモン形を呈するものとがある。数量的には円筒形が大部分を占めており，角筒形・レモン形は少ない。

地文となる貝殻条痕文は器面調整の結果が文様効果も表していると考えられるが，中には貝殻条痕が観察されず，器面をナデ調整した上に貝殻刺突文を施したものもある。よって加栗山式土器の器面調整には，貝殻条痕によるものとナデによるもの両方が存在すると言える。貝殻条痕文は横または斜位に施されるものがほとんどであるが，99～102のように縦方向に長いストロークで貝殻条痕文が施されているものがあり特筆される。

図版１　方形押引刺突文の施文法

貝殻刺突文については，細い波線状を呈する刺突文と，方形の凹点状の刺突文が見られる。波線状の刺突文については貝殻腹縁を立てて刺突することにより施文できるが，方形の凹点状刺突文については施文具・施文方法がはっきりしていなかった。今回，鹿児島大学の本田道輝先生の御教示により，波線状の刺突文に使用するものと同様な貝殻を用いて，類似した文様を再現することができたのでその方法を以下に述べる。施文具とするのは凹凸のはっきりした貝殻腹縁を持つアナダラ属などの貝殻である。

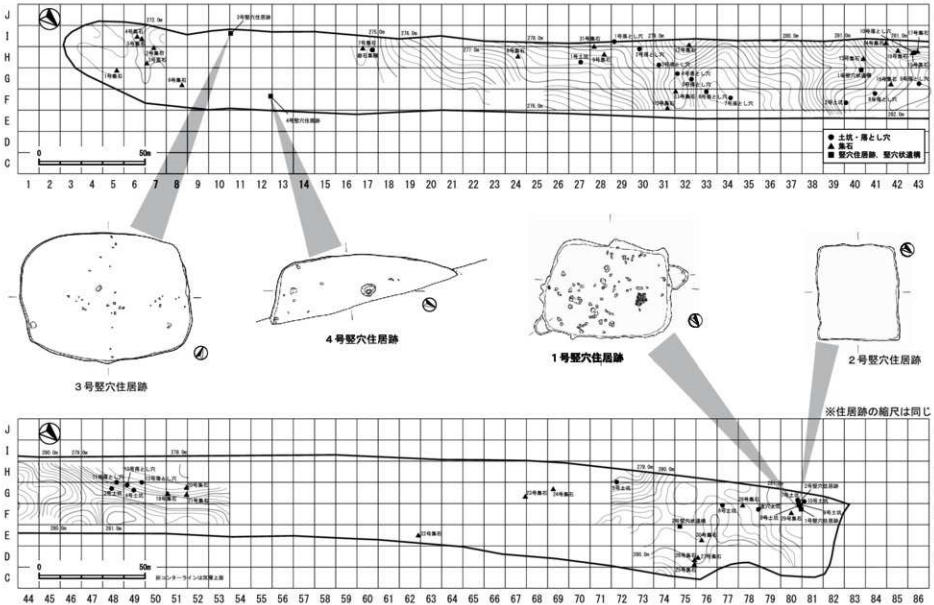
貝殻の外側（肋がある側）を自分の方に向けて縦位に持ち，少し斜めにして腹縁を器面に押し当てる。軽く刺突してそのまま横にわずかに引き，貝殻を器面から離すと方形の凹点状の文様が施文できる（図版１）。これを縦方向に移動しながら直線的に繰り返すことで，縦位の貝殻刺突文を施していると思われる。実験に用いた貝殻の大きさでは，腹縁のカーブにより直線的に施せるのは肋が３～４本分であるが，実際の土器では肋５～６本分のものもあり，貝殻の大きさや種類などまだ検討すべき課題も残している。

石器について特筆されるものは，４号竪穴住居跡から出土した石皿である。周辺を加工した定型的な石皿は，草創期から出土し早期前半で終わるものであるが，早期前半のものは指宿市岩本遺跡などのように使い込んで深く窪んでいる傾向があり，ここの石皿も同様の様相を示している。

４　全体を通して

当該時期の集落は縄文時代の他の時期の集落に比べて多様な遺構から成っている。つまり，竪穴住居・土坑・連穴土坑・集石遺構・道などである。建山遺跡では前の調査を加えて，竪穴住居跡４軒，竪穴状遺構２基，集石遺構31基，連穴土坑１基，土坑13基から成る。遺跡はさらに東西に広がる可能性はあるが，その中核部を高速道路は抜けていると思われる。

第33図に全体の遺構配置図を示したが，竪穴住居跡は遺跡のほぼ北端と南端に２軒ずつ位置し，直線距離で約650m離れている。この距離は同じ集落と考えるには無理があり，同時期に併存していた別々の集落か，どちらかに移動してきたのか，加栗山式土器を使用していた時間幅の中で考えていく必要があろう。また，集石遺構や土坑，落とし穴はその中間の30区～40区あたりに集中しており，集落の在り方や空間利用の在り方として今後の検討課題としたい。



第33図　全体遺構配置図（縄文時代早期）

Ⅳ　西原段Ⅰ遺跡

第Ⅰ章　調査の経緯

第１節　調査に至るまでの経緯

東九州自動車道建設に伴い，埋蔵文化財の取り扱いについて交わされた鹿児島県教育委員会と各開発関係機関との協議の経緯については，　の第１章に記されたとおりである。その経緯を受けて西原段　遺跡は，平成18・19年度に未買収地を除いた部分の確認調査・本調査を実施した。

平成18年度は遺跡の南側（Ａ地点）と北側（Ｂ地点），平成19年度は遺跡の南端（Ｃ地点）を調査した（第１図参照）。調査の結果，旧石器時代から縄文時代の早期，中・後期，古代～中世と長期に及ぶ遺構や遺物が発見された。特に注目される遺構は，縄文時代早期の集石遺構，古代～中世の硬化面を伴う道路状遺構，畑の畝跡，落とし穴などが挙げられる。遺物については組織痕文土器，中津野式土器，土師器，石鏃，磨石，石皿等が出土した。その調査成果については平成20年度に「鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（139）建山遺跡　西原段　遺跡　野鹿倉遺跡」として刊行されている。

平成21年３月には用地取得できたＡ地点に隣接する部分（中央の市道より南側）の確認調査を行った。その結果，遺構・遺物ともに発見されなかった。

残りの未調査部分（中央の市道より北側）については，平成21年４・５月に確認・本調査を並行して実施することとなった。

調査は平成21年４月13日から５月26日の実働27日間行った。

第２節　調査の組織

１　平成21年度（本調査・報告書）

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所，鹿児島県土木部高速道対策室		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	山下　吉美
調査企画	〃	次長兼総務課長	齊藤　守重
	〃	次長兼南の縄文調査室長	青崎　和憲
	〃	調査第二課長	彌榮　久志
	〃	主任文化財主事兼	
	〃	調査第二課第一調査係長	長野　眞一
調査担当	〃	文化財主事	大久保浩二
	〃	文化財研究員	藤島伸一郎
	〃	文化財調査員	岩下　直樹
作成担当	〃	文化財主事	大久保浩二
	〃	文化財研究員	藤島伸一郎
事務担当	〃	総務係長	紙屋　伸一

	鹿児島県立埋蔵文化財センター	主　　査	髙崎　智博
企画委員	〃	文化財主事	永濱　功治
報告書作成検討委員会	平成21年12月11日	山下所長ほか　９名	
報告書作成指導委員会	平成21年12月２日	青崎次長ほか　２名	
遺物指導	鹿児島大学法文学部	准教授	本田　道輝

第３節　調査の経過

調査の経過は，日誌抄により週単位で略述する。

平成21年４月13日（月）～４月17日（金）

調査機材搬入，ベルトコンベア設置。Ｂ～Ｄ－19～22区　・　層調査，土坑１号・２号検出。

平成21年４月20日（月）～４月24日（金）

Ｂ～Ｄ－19～22区　・　層調査。土坑１・２号調査。Ｅ－27区周辺の表土処理。約１ｍの造成土の下に文明ボラ層あり。土坑１号半掘・写真・埋土観察。土坑２号は横転と判断，写真撮影。１～４トレンチ設定。Ｂ～Ｄ－19～22区　層まで調査終了。旧石器確認トレンチＡ～Ｃトレ設定。Ｂ・Ｃ－19区南側土層断面写真・断面実測。１トレンチ，　層まで終了。Ｃ－20区，Ｃ－19区，Ｂ－21区旧石器確認トレンチ設定，　・Ⅺ層調査。土坑１号完掘，写真，平面・断面図作成。１トレンチ拡張，　・Ⅺ層調査。Ｂ～Ｅ－27・28区表土剥ぎ。

平成21年４月27日（月）～５月１日（金）

Ｂ・Ｃトレンチシラス上面まで掘り下げ終了，完掘状況撮影。Ｃトレンチ土層断面図作成。１トレンチ清掃，写真，土層柱状図作成。Ｂ～Ｅ－27・28区　層～　ｂ層掘り下げ。一部　層掘り下げ。

Ｂ～Ｄ－19～22区　層（サツマ）上面まで清掃，完掘状況撮影。遺物取り上げ（平板測量）。

平成21年５月７日（木）～５月８日（金）

Ｂ～Ｅ－27・28区　ａ層～　ｂ層掘り下げ，範囲図作成。５・６トレンチ　ａ層～　ｂ層掘り下げ。２トレンチ　ａ層～Ⅻ層掘り下げ。

平成21年５月11日（月）～５月15日（金）

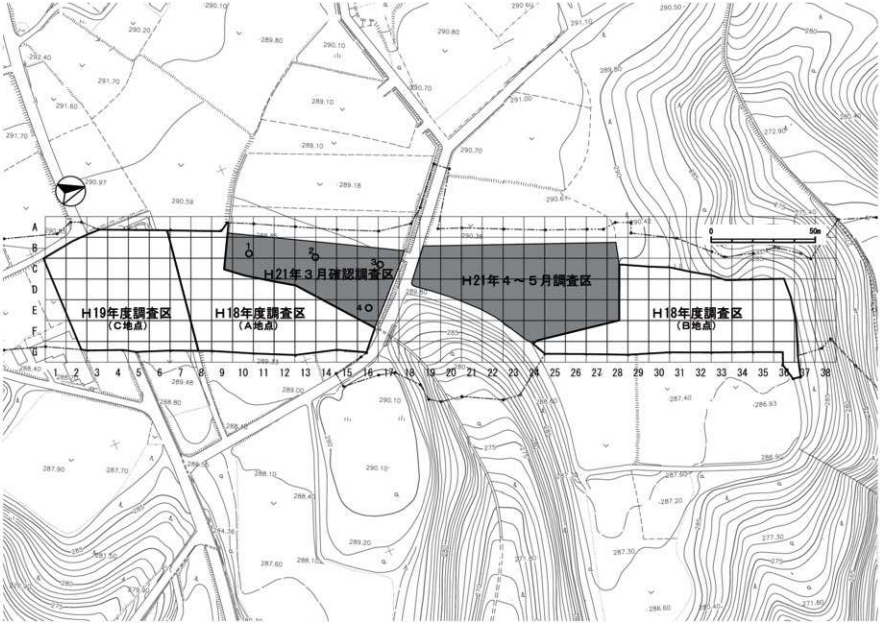
Ｃ・Ｄ－28区先行トレンチ２ヶ所　ａ層掘り下げ。２トレンチ拡張区　層上面写真撮影及び　層～Ⅻ層掘り下げ。Ⅻ層・　層写真撮影及び土層断面図作成。Ｃ－22・23区７トレンチ　層～　層掘り下げ。範囲図作成（１・２・４・６・７トレンチ）。

平成21年５月18日（月）～５月22日（金）

Ｃ－22・23区７トレンチ　～　層掘り下げ，完掘状況写真撮影及び柱状図作成。Ｃ－Ｄ－27・28区８トレンチ　～Ⅻ層掘り下げ，上面検出状況写真撮影。10トレンチ　・　層掘り下げ。Ｄ・Ｅ－28区９トレンチ　～　層掘り下げ。　層上面検出写真撮影。Ｄ・Ｅ－27区10トレンチ　～　層掘り下げ，　層上面検出。11トレンチ　層掘り下げ。Ｃ－27区６トレンチ　～　層掘り下げ，シラス検出状況写真撮影及び柱状図作成。Ｄ－27区11トレンチ　層掘り下げ。Ｃ～Ｄ－28区北壁土層断面清掃写真撮影。

平成21年５月25日（月）～５月26日（火）

Ｄ・Ｅ－27区10トレンチ　層完掘状況写真撮影，　層掘り下げ。Ｄ－27区11トレンチ　層掘り下げ　層上面検出。Ｃ～Ｅ－27・28区の清掃及び全体の写真撮影，現場終了。



第１図　西原段Ⅰ遺跡全体図

○１～４は確認調査トレンチ

第Ⅱ章　調査の概要

第１節　調査の方法・概要及び層位

調査区域は10m　10mのグリッドを設定して調査を行った。グリッドの設定は，平成18・19年度本調査のものを踏襲し，工事用基準杭ＳＴＡ262＋60とＳＴＡ262＋80の２点を結ぶ直線を基準軸とし，西側から東側に向かってＡ・Ｂ・Ｃ・・・，南側から北側に向かって１・２・３・・・とした。第２図に調査区のグリッド図を示す。

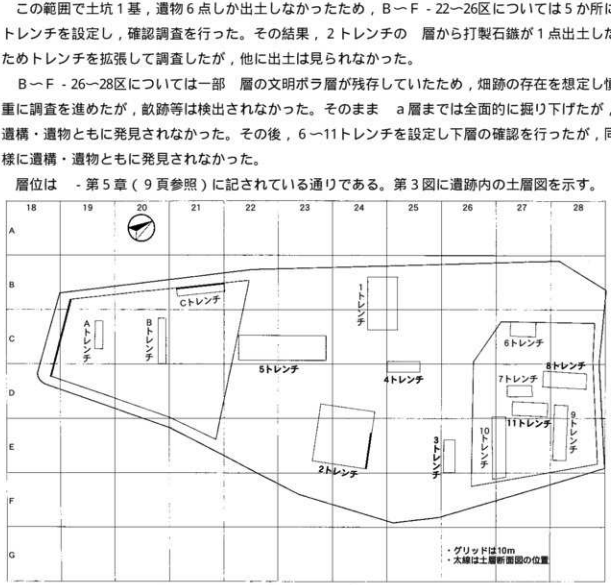
調査地は植栽が行われていたため，上部を伐採・撤去後調査に入った。樹根及び表土については，立ち会いの下，重機により除去したが，大部分が圃場整備による天地返しのため地表から３ｍ近くまで撹乱を受けていた。

橋脚工事の関係で，Ｂ～Ｅ－21区から調査に入った。天地返しによる撹乱が深いため，　ｂ層（Ｐ11火山灰）まで重機で除去し，　層から人力で掘削を行った。またＡ・Ｂ・Ｃの３か所にトレンチを設定し下層確認をおこなったが，遺構・遺物ともに発見されなかった。

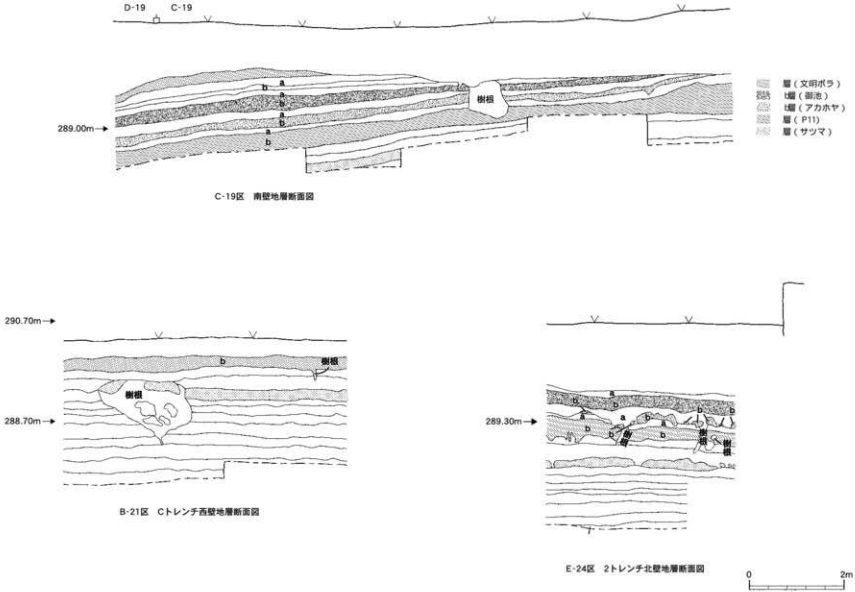
この範囲で土坑１基，遺物６点しか出土しなかったため，Ｂ～Ｆ－22～26区については５か所にトレンチを設定し，確認調査を行った。その結果，２トレンチの　層から打製石鏃が１点出土したためトレンチを拡張して調査したが，他に出土は見られなかった。

Ｂ～Ｆ－26～28区については一部　層の文明ボラ層が残存していたため，畑跡の存在を想定し慎重に調査を進めたが，畝跡等は検出されなかった。そのまま　ａ層までは全面的に掘り下げたが，遺構・遺物ともに発見されなかった。その後，６～11トレンチを設定し下層の確認を行ったが，同様に遺構・遺物ともに発見されなかった。

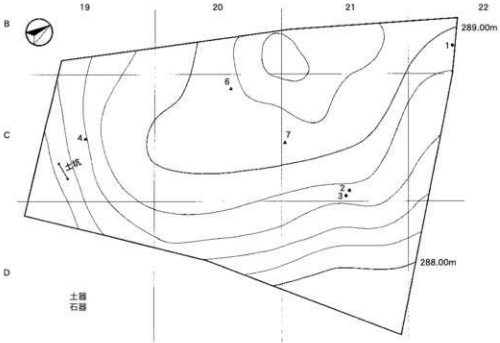
層位は　－第５章（９頁参照）に記されている通りである。第３図に遺跡内の土層図を示す。



第２図　調査区グリッド図及びトレンチ配置図


D-19
C-19
289.00m
樹根
層（文明ボラ）
層（御池）
層（アカホヤ）
層（P11）
層（サツマ）
C-19区　南壁地層断面図
290.70m
288.70m
樹根
B-21区　Cトレンチ西壁地層断面図
289.30m
樹根
E-24区　2トレンチ北壁地層断面図
0
2m

第３図　土層断面図

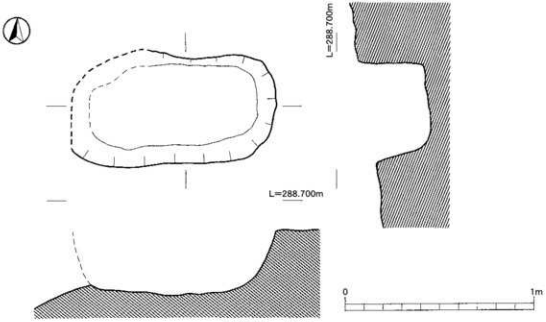


第４図　Ⅸ層上面コンタ図と土坑位置図・遺物出土地点

第２節　遺構

１　土坑（第５図）

Ｃ－19区の　層（薩摩火山灰層）上面で検出された土坑である。検出面でのプランは長軸が108㎝，短軸は55㎝の隅丸長方形で，軸線はＮ－100　－Ｗである。東側から延びる谷へ下る傾斜面に掘られている。検出面からの深さは約25㎝であるが，上部はかなり削平されているので，当初はある程度の深さがあった可能性もある。埋土は黄褐色砂粒土の単一で，白い砂粒を多く含み，５～10㎜程度の黄色パミスが混ざっている。これは　ｂ層（霧島御池火山灰層）に相当するもので，よって土坑は縄文時代前期から中期の遺構と考えられる。底面の断ち割りも行ったが，小ピットの痕跡は検出されなかった。



第５図　土坑

第３節　遺物

遺物は縄文時代早期前半の包含層である　層・　層から出土した。土器３点，打製石鏃２点，磨石・敲石１点，石皿１点である。５の打製石鏃のみが２トレンチ　層からの出土で，他はすべてＢ〜Ｅ－21区の　・　層からの出土である。

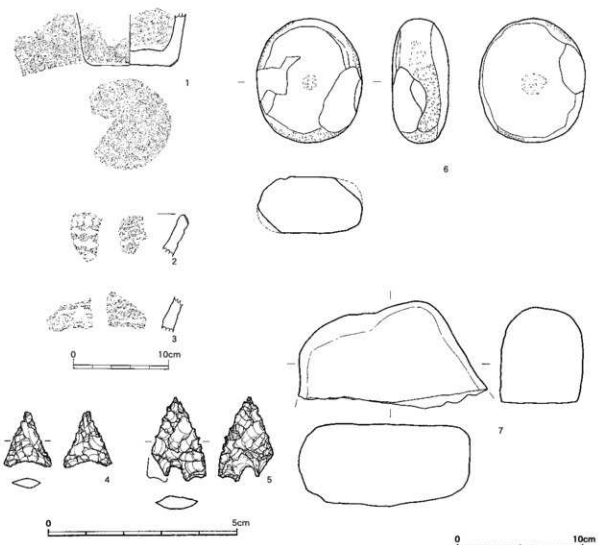
１　土器（第６図１〜３）

１は底径５㎝を測る小型土器の底部である。高さ３㎝ほどしか残存していないが，外面は丁寧なミガキで仕上げられており，底部から胴部の立ち上がり部分に，短い縦の刻みを等間隔に施している。内面には指ナデの痕が観察される。

２，３は楕円押型文土器の小片である。　層から出土した。

２は口縁部の小片で，口唇部には縦の刻みを施し，胴部外面には楕円押型文が横方向に施されている。内面にも浅く楕円押型文が観察されるが，施文後にナデ調整されている。

３は胴部の屈曲部分である。外面は米粒状の楕円押型文が施されたのちにナデられている。内面は屈曲部より上位には浅い楕円押型文が観察されるが，下位にはケズリ痕のみである。



第６図　出土遺物

2　石器（第６図４～７）

４は正三角形状を呈する小型の打製石鏃で，基部はやや内湾している。石材は透明感のある黒曜石である。　層から出土した。

５は２トレンチの　層から出土したもので，二等辺三角形状を呈する打製石鏃である。両端はやや鋸歯状に剥離を施し，基部には深い抉りを施し脚部を作り出している。石材は黒みを帯びたチャートである。

６は磨石・敲石である。表・裏面に磨り面が観察され，両面とも中央には凹石状のごく浅い敲打痕が残る。全周には敲打痕が巡り，一部は敲打により欠損したと見られる。石材は砂岩である。

７は石皿の破片である。やや肉厚で扁平な安山岩の転石を利用し，表面には明瞭な磨滅面が観察される。６の磨石とは約６ｍ離れて出土している。

第１表　出土土器観察表

挿図番号	遺物番号	地区	層位	部位	調整		色調		胎土				焼成	備考
					（外）	（内）	（外）	（内）	石英	長石	角閃	他		
6	1	B-22		底部	ミガキ	指ナデ	明茶褐色	明茶褐色					良	
	2	D-21		口縁部	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色					良	
	3	D-21		頸部	ナデ	ナデ	茶褐色	暗茶褐色					良	

第２表　出土石器観察表

挿図番号	遺物番号	地区	層位	器種	最大幅(㎝)	最大厚(㎝)	重量(ｇ)	石材	備考
6	4	C-19		打製石鏃	1.5	0.2	0.5	黒曜石	
	5	2T E-24		打製石鏃	2.2	0.4	1.0	チャート	
	6	C-20		磨石	9.9	4.4	530.0	砂岩	
	7	C-20		石皿	15.1	6.6	970.0	安山岩	

第Ⅲ章　まとめ

今回の調査地は平成18・19年度に行われた調査地のほぼ中央にあたるため，これまで以上の調査成果が期待されたが，天地返し等の撹乱が多かったことや，東側からの谷が大きく入り込んでいる傾斜地形であったことなどから，わずかな遺構・遺物の発見にとどまった。

しかしながら，西原段　遺跡の所在する台地全体の空間利用としてみた場合，平成18年度の調査で縄文時代早期の集石遺構や縄文時代晩期の土器等が多く発見された台地北側は住の空間，今回の調査地は谷頭を利用した狩り場的な空間として捉えることもできる。Ｃ－19区で検出された土坑も底面の小ピットこそ検出されなかったが，谷頭の等高線に沿う形で掘られており，落とし穴の可能性が考えられる。また，平成18年度の調査では集石遺構に伴う　・　層の土器が検出されていなかったが，今回該当する層から小型土器底部，押型文土器が発見されたことは，集石遺構の時期を考える上でひとつの指標になろう。

その　層出土の小型土器については，底部に丁寧なミガキがかけられており，側面の上部にも貝殻条痕の上からミガキで仕上げた形跡がある。底部の立ち上がり部分には短い縦の刻みが等間隔に連続して施されている。底部にミガキを施す手法は吉田式土器にみられるものであるが，縦の刻みは石坂式土器にみられるものである。両者を併せ持つ土器については詳細不明であり，今後の資料の増加を待ちたい。

写　真　図　版

図版６　狩俣遺跡遠景（北側より）

図版７　狩俣遺跡遠景（確認トレンチ）

作業風景

作業風景

落とし穴１号

落とし穴１号

落とし穴１号

図版８　13年度確認調査１（落とし穴１号ほか）